

# 服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ

—滋賀県守山市服部町所在—

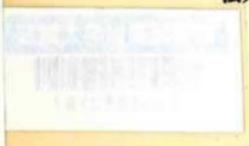
〈本文編〉

1985

滋賀県教育委員会

守山市教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会



# 服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ

—滋賀県守山市服部町所在—

〈本文編〉

1985

滋賀県教育委員会

守山市教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 序

野洲川改修事業に伴う、服部遺跡の発掘調査は、昭和49年11月から昭和54年3月まで約5ケ年を要して実施し、大きな成果を上げたところがあります。調査対象面積が12平方メートルと広大であるばかりでなく、野洲川の長年にわたる沖積作用により、各時代の遺構が、地表下3メートルまで、何層にも重複していることもあり、空前絶後の大規模な調査となりました。ここに改めて調査を御支援いただいた関係各位に、御礼を申し上げるとともに、本書が、文化財の保存と普及、啓蒙に活用されることを希望するものであります。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教育長 南 光 雄

## 例 言

1. 本書は、滋賀県守山市服部町地先に所在する服部遺跡について、昭和49年から昭和54年まで、IV次にわたって実施した発掘調査の正報告書である。報告書は全6冊の予定で本書はその第2冊である。
2. 本調査は、建設省近畿地方建設局琵琶湖工事事務所の所管する、野洲川改修放水路工事に伴うもので、同事務所の依頼にもとずき滋賀県教育委員会・守山市教育委員会が、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施したものである。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
4. 本事業の事務局は次のとおりである。

### 滋賀県教育委員会

文化財保護課長	市原 浩	課長補佐	中正 輝彦
埋蔵文化財係長	林 博通	管理係主任主事	山本 徳樹

### 財団法人 滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄	事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤 滋	調査三係長	大橋 信弥
総務課長	山下 弘	総務課主任主事	松本 暢弘

5. 本書の編集・執筆には、主として大橋と守山市教育委員会社会教育課主任山崎秀二があたり、彦根城博物館学芸員谷口徹氏、大阪府教育委員会藤沢真依氏、財団法人大阪文化財センター赤木克規氏、加古川市教育委員会岡本一士氏、栗東町文化体育振興事業団技師平井寿一氏のほか、大橋美和子氏の助言と協力を得た。なお執筆分担は文末に明記した。
6. 出土遺物や写真・図面については守山市埋蔵文化財センターで保管している。

# 目 次

序	
例 言	
I. はじめに	1
II. 調査の経過	2
III. 検出した遺構	11
IV. 出土した遺物	
1. はじめに	165
2. 形態の分類	165
3. 系譜と地域的特徴	174
4. 紋様の変遷	207
5. 器種構成	211
6. 小 結	
(1) 供献土器における二者	214
(2) 地域性の特質	215
(3) 周溝墓出土土器と集落出土土器	217
V. 服部遺跡の方形周溝墓をめぐる問題	
1. 規模と形態	223
2. 群の構成について	226
3. 群構成の性格と変遷	233
4. 近江における方形周溝墓の発生と展開	236
出土遺物観察表	241

# 插 图 目 次

第1图	位置图 .....	1
第2图	地区设定图 (IV次調査) .....	3
第3图	遺構全图 .....	7~8
第4图	A地区平面图 .....	13
第5图	M001・M004~M006・M009 供献土器出土状況実測图 .....	14
第6图	M010~M014・M019 供献土器出土状況実測图 .....	16
第7图	B・C地区平面图 .....	18
第8图	M015・M020・M023-M029~M031 供献土器出土状況実測图 .....	20
第9图	M021・M028・M033~M035・M037 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	22
第10图	M032・M038・M048・M050・M051・M053・M055 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	26
第11图	M017・M030・M031・M035・M059・M061・M065・M073 主体部断面実測图 .....	31
第12图	M052・M063・M064・M069・M070・M101・M105 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	33
第13图	M074・M079~M081・M069・M071・M100・M110・M102・M112・M121・M123 主体部断面実測图 .....	39
第14图	C地区平面图 .....	45
第15图	M108・M110・M119・M138・M147 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	47
第16图	M123・M130・M150 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	50
第17图	M126・M142・M145・M154 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	53
第18图	M126・M137・M138・M139・M150・M157 主体部断面実測图 .....	55~56
第19图	M150 第2主体部平面・断面実測图 .....	59
第20图	M150・M151・M156 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	61
第21图	M150 第2主体部平面・断面実測图 .....	63
第22图	M163・M167・M179・M186・M199 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	66
第23图	M158・M162・M170 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	68
第24图	M167・M170・M291・M310・M317・M319 主体部断面実測图 .....	73~74
第25图	M256・M263・M272・M275・M324 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	88
第26图	M266・M267・M313・M329・M330 供献土器・主体部検出状況実測图 .....	92
第27图	M273 第1主体部平面・断面実測图 .....	93
第28图	M275・M312 主体部平面・断面実測图 .....	94
第29图	M326 主体部検出状況実測图 .....	105~106
第30图	M326 主体部平面・断面実測图 .....	107
第31图	M326 主体部木棺実測图 .....	108
第32图	M332 第1主体部・M334 第2主体部平面実測图 .....	109

第33図	D地区平面図	112
第34図	M337・M342 供献土器・主体部検出状況実測図	114
第35図	M343 第1主体部平面・断面実測図	117
第36図	M340・M341・M349 供献土器・主体部検出状況実測図	118
第37図	M343・M356・M367・M392 供献土器・主体部検出状況実測図	120
第38図	M349・M351・M366・M369 供献土器・主体部検出状況実測図	122
第39図	M379・M420・M422 主体部断面実測図	128
第40図	M350・M398 供献土器・検出状況実測図	132
第41図	M387・M400・M402・M403 供献土器出土状況実測図	134
第42図	M405・M407・M410・M415 供献土器検出状況実測図	137
第43図	M409・M420・M421 供献土器・主体部検出状況実測図	139
第44図	M416・M417・M423 供献土器検出状況実測図	142
第45図	M422・M424・M427 供献土器・主体部検出状況実測図	145
第46図	M426・M428 供献土器検出状況実測図	147
第47図	M432 供献土器検出状況実測図	148
第48図	方形周溝墓出土土器の型式編年(1)	201~202
第49図	方形周溝墓出土土器の型式編年(2)	203~204
第50図	方形周溝墓出土土器の型式編年(3)	205~206
第51図	服部遺跡中期後半の弥生土器	219~220
第52図	服部遺跡方形周溝墓の群構成	227~228
第53図	朝日遺跡弥生時代中期遺構全図(1:6,000)	237
第54図	瓜生堂遺跡遺構全図	238

## 表 目 次

第1表	中期前半壺形土器口縁部文様	208
第2表	中期前半壺形土器頸腹部文様	208
第3表	中期後半壺形土器口縁部文様	210
第4表	中期後半壺形土器頸腹部文様	210
第5表	時期別器種構成比較表	211
第6表-1	服部遺跡方形周溝墓(Ⅲ-Ⅳ・Ⅳ)・服部遺跡SD152(Ⅳ)器種構成の比較	212
-2	服部遺跡方形周溝墓(Ⅲ-Ⅳ・Ⅳ)・服部遺跡SD152(Ⅳ)器種構成の比較	212
第7表-1	服部遺跡・瓜生堂遺跡供献土器器種構成の比較	213
-2	服部遺跡・瓜生堂遺跡供献土器器種構成の比率	213
第8表	服部遺跡・瓜生堂遺跡出土土器器種構成の比較	213
第9表	埋葬施設数の構成	225

第10表	台状部規模の比較	225
第11表	ブロック別規模の比較表	225
第12表	方形周溝墓時期別築造数の比較	234
第13表	方形周溝墓総数に占める時期別周溝墓築造数の比率	234

## 図 版 目 次

図版 1	遺	構 A地区 方形周溝群全景 (上空より)
図版 2	遺	構 M001・M002近景 (上空より)
図版 3	遺	構 M004・M008～M010・M013近景 (上空より)
図版 4	遺	構 M006～M008・M014・M012近景 (上空より)
図版 5	遺	構 B・C地区 方形周溝群全景 (上空より)
図版 6	遺	構 M018～M023・M031～M037近景 (上空より)
図版 7	遺	構 M020・M029～M031・M035・M051近景 (上空より)
図版 8	遺	構 M015～M017・M024・M026～M028・M041～M044近景 (上空より)
図版 9	遺	構 M038～M040近景 (上空より)
図版10	遺	構 M048～M056・M059～M066・M152～M169近景 (上空より)
図版11	遺	構 M046～M049・M115・M116・M119～M125・M150～M158近景 (上空より)
図版12	遺	構 M070～M081・M086・M089・M093～M123近景 (上空より)
図版13	遺	構 M221～M231近景 (上空より)
図版14	遺	構 M053・M055・M056・M062～M066・M152～M169近景 (上空より)
図版15	遺	構 M115・M116・M119～M125・M150～M152近景 (上空より)
図版16	遺	構 M069～M071・M076・M090・M094～M101・M111～M118近景 (上空より)
図版17	遺	構 M141～M149・M155・M156・M167・M170・M171近景 (上空より)
図版18	遺	構 M121・M122・M126・M128～M140近景 (上空より)
図版19	遺	構 M082・M087～M112・M126近景 (上空より)
図版20	遺	構 C地区 方形周溝群遠景 (上空より)
図版21	遺	構 M149・M238～M251・M256～M258・M278～M284近景 (上空より)
図版22	遺	構 M254～M258・M276～M287・M292～M298近景 (上空より)
図版23	遺	構 M129・M186・M187・M190・M324・M326近景 (上空より)
図版24	遺	構 M082・M107・M108・M126～M128・M174～M207近景 (上空より)
図版25	遺	構 M252～M255・M260～M269・M272～M276・M305・M338近景 (上空より)
図版26	遺	構 M273～M277・M281～M292・M296・M297・M301・M305～M208近景 (上空より)
図版27	遺	構 M299・M310～M326近景 (上空より)
図版28	遺	構 M198～M216・M326近景 (上空より)
図版29	遺	構 D地区 方形周溝群遠景 (上空より)
図版30	遺	構 M307・M333～M337・M341・M342近景 (上空より)
図版31	遺	構 M317・M319・M325・M327・M328～M331・M334・M336近景 (上空より)
図版32	遺	構 M325・M392近景 (上空より)
図版33	遺	構 M360～M372・M375近景 (上空より)
図版34	遺	構 M334～M336・M341～M343・M347・M350・M355近景 (上空より)
図版35	遺	構 M328・M329・M334・M335・M344～M346・M399～M404近景 (上空より)
図版36	遺	構 M392～M394・M397近景 (上空より)

図版37	遺	構	M355・M359・M361・M362・M369～M373・M379・M380・M382・M385近景(上空より)
図版38	遺	構	M343・M347・M349・M350・M352・M353・M355～M359・M424近景(上空より)
図版39	遺	構	M399～M409・M416～M422近景(上空より)
図版40	遺	構	M394・M397～M398・M407・M408近景(上空より)
図版41	遺	構	M379～M386近景(上空より)
図版42	遺	構	M378・M379・M425～M434近景(上空より)
図版43	遺	構	M407～M420・M428近景(上空より)
図版44	遺	構	1. M001・M002近景(南より) 2. M003～M005・M008・M009近景(東より)
図版45	遺	構	1. M002北溝、供献土器(E004・E005)出土状況(東より) 2. M002北溝、供献土器(E004・E005)出土状況(西より)
図版46	遺	構	1. M002北溝、水差型土器(E005)出土状況 2. M004南溝、広口壺(E006)、高坪(E008)出土状況
図版47	遺	構	1. M007東溝、細頸壺(E012)出土状況(東より) 2. M012北溝、広口壺(E024)出土状況(東より)
図版48	遺	構	1. B・C地区(ハ・ニ区)全景(東上空より) 2. ハ-I区、M019・M021～E023・M031～M037遠景(東上空より)
図版49	遺	構	1. M033・M034近景(東より) 2. M023近景(東より)
図版50	遺	構	1. M035近景(北より) 2. M037近景(西より)
図版51	遺	構	1. M036近景(北より) 2. M038・M039遠景(北より)
図版52	遺	構	1. B地区(ハ-I)全景(北より) 2. M035北東溝、細頸壺(E058)出土状況(北東より)
図版53	遺	構	1. M035北東溝、細頸壺(E058)出土状況(北東より) 2. M032北溝、細頸壺(E052・E053)出土状況(東より)
図版54	遺	構	1. M033南西溝、細頸壺(E056)出土状況(北より) 2. M033南西溝、細頸壺(M056)出土状況(西より)
図版55	遺	構	1. M035北溝、広口壺(E058)出土状況(東より) 2. M032南東コーナー、広口壺(E054)出土状況(東より)
図版56	遺	構	1. C地区 全景(北上空より) 2. C地区 西半(ニ・ホ-III・IV)全景(西上空より)
図版57	遺	構	1. C地区(ト-I・II)全景(東上空より) 2. C地区(ト-III・IV)全景(北より)
図版58	遺	構	1. C地区(ホ-I・II)全景(南より) 2. C地区(ホ-I・II)近景(東より)
図版59	遺	構	1. M065・M144・M155～M163・M167・M170近景(南より) 2. M150・M151・M123・M122近景(南より)

図版60	遺	構	1. M110・M119・M121~M123・M125近景(南より) 2. M050近景(西より)
図版61	遺	構	1. M192近景(西より) 2. M349近景(西より)
図版62	遺	構	1. M066盛土断面 2. M066盛土断面
図版63	遺	構	1. M154主体部近景(西より) 2. M150主体部検出状況(北東より)
図版64	遺	構	1. M137近景(南東より) 2. M313主体部検出状況(北より)
図版65	遺	構	1. M319主体部検出状況(西より) 2. M324主体部検出状況(西より)
図版66	遺	構	1. M326主体部木棺南半断面(西より) 2. M326主体部木棺検出状況(南より)
図版67	遺	構	1. M326主体部木棺第二次掘り方検出状況(東より) 2. M326主体部木棺第一次掘り方検出状況(北より)
図版68	遺	構	1. M326主体部木棺底板検出状況(北より) 2. M326主体部掘り方全景-木棺取り上げ後(北より)
図版69	遺	構	1. M163西溝、広口壺(E137)出土状況(南より) 2. M143西溝、広口壺(E117)出土状況(北より)
図版70	遺	構	1. M167西溝鉢(E141)、壺(E142)出土状況(南より) 2. M156西溝、広口壺(E128・E136)出土状況(東より)
図版71	遺	構	1. M126東溝、広口壺(E105)出土状況(北より) 2. M121南西溝、広口壺(E100)出土状況(西溝)
図版72	遺	構	1. M186南溝、広口壺(E111)出土状況(東より) 2. M256東溝、細頸壺(E182)出土状況(北より)
図版73	遺	構	1. M324北溝、細頸壺(E214)出土状況(東より) 2. M273南溝、広口壺(E192)出土状況(東より)
図版74	遺	構	1. D地区 全景(北東上空より) 2. M341・M340・M339・M338近景(西より)
図版75	遺	構	1. M341・M342・M349・M350・M343・M334・M345近景(東より) 2. M362~M367・M369近景(東より)
図版76	遺	構	1. M350近景(東より) 2. M333・M335近景(北東より)
図版77	遺	構	1. M334主体部検出状況(南より) 2. M317主体部検出状況(南西より)
図版78	遺	構	1. M343主体部検出状況(南西より) 2. M356主体部検出状況(北西より)
図版79	遺	構	1. M334南溝、広口壺(E219)、鉢(E221)出土状況(西より) 2. M329北溝、広口壺(E216)出土状況(西より)

図版80	遺構	1. M356南西溝、広口壺 (E251・E252) 出土状況 (東より) 2. M405南溝、細頸壺 (E295)、高坏 (E301) 出土状況 (西より)
図版81	遺構	1. M405南溝、細頸壺 (E295)、高坏 (E301)、甕 (E300) 出土状況 (東より) 2. M432北東コーナー 広口壺 (E350)、甕 (E352) 出土状況 (西より)
図版82	遺構	1. M422北溝、甕 (E335) 出土状況 (東より) 2. M421北溝、細頸壺 (E331)、高坏 (E332) 出土状況 (東より)
図版83	遺物	E001 (M001)、E002~E005 (M002)、E006 (M004)
図版84	遺物	E007・E008 (M004)、E009・E010 (M005)、E013 (M007)、E014 (M008)
図版85	遺物	E011 (M005)、E012 (M006)、E015~E017 (M008)、E018 (M009)
図版86	遺物	E019~E021 (M010)、E022~E024 (M011)、E028 (M013)
図版87	遺物	E026・E027 (M012)、E028~E030 (M013)、E039 (M018)、E044 (M020)
図版88	遺物	E031~E033・E035 (M015)、E037 (M017)、E049 (M023)
図版89	遺物	E034・E036 (M015)、E038 (M017)、E048 (M021)、E055 (M032)
図版90	遺物	E041 (M019)、E042・E043 (M020)、E045・E047 (M021)、E016 (M051)
図版91	遺物	E046 (M021)、E050 (M028)、E051 (M029)、E052 (M032)、E057 (M034)、E067 (M052)
図版92	遺物	E053・E054 (M032)、E056 (M033)、E059 (M036)、E064・E065 (M052)
図版93	遺物	E058 (M035)、E060 (M038)、E062・E063・E066 (M052)、E075 (M083)
図版94	遺物	E068 (M055)、E069 (M063)、E070 (M064)、E071 (M065)、E072 (M069)、E077 (M083)
図版95	遺物	E073・E074 (M083)、E078・E079 (M084)、E080 (M085)、E081 (M089)
図版96	遺物	E082 (M089)、E083 (M094)、E085・E086 (M101)、E087 (M105)、E088 (M106)、E089 (M107)、E093 (M108)、E110 (M126)
図版97	遺物	E091・E092 (M108)、E094 (M110)、E098 (M113)、E100 (M121)、E103 (M123)
図版98	遺物	E101 (M121)、E104 (M123)、E105~E109 (M126)、E113 (M138)、E124 (M150)
図版99	遺物	E111 (M186)、E112 (M136)、E114 (M138)、E115 (M143)、E116 (M142)、E117・E119・E120 (M143)
図版100	遺物	E118 (M142)、E121 (M143)、E122 (M150)、E123 (M154)、E125・E126 (M152)、E248 (M352)、E250 (M363)
図版101	遺物	E127~E131、E134 (M156)、E132 (M158)、E135 (M162)
図版102	遺物	E133 (M158)、E136 (M156)、E137 (M163)、E139・E140・E142 (M167)、E143・E145 (M169)
図版103	遺物	E138・E141 (M167)、E146・E147・E149~E151 (M170)、E360 (出土地点不明)
図版104	遺物	E148 (M170)、E152 (M179)、E153 (M182)、E154 (M188)、E156~E158 (M192)
図版105	遺物	E159 (M192)、E160・E161 (M199)、E162 (M200)、E163 (M222)、E164 (M223)、E169 (M238)、E183 (M256)
図版106	遺物	E182 (M256)、E184・E187・E188 (M263)、E186 (M259)、E191 (M267)
図版107	遺物	E189 (M266)、E192 (M273)、E193 (M263)、E194 (M274)、E195 (M275)、E200 (M290)
図版108	遺物	E197 (M276)、E201・E202 (M290)、E203~E205 (M291)、E206 (M310)、E207・E208 (M301)、E209 (M314)、E218 (M330)
図版109	遺物	E210 (M317)、E211・E212 (M320)、E213 (M322)、E215 (M329)、E222 (M337)
図版110	遺物	E214 (M324)、E216・E217 (M329)、E219・E220 (M334)、E228 (M342)

图版111	遺物	E 221 (M334), E 223 (M340), E 224~E 226 (M341), E 227 · E 229 · E 230 (M342)
图版112	遺物	E 231 · E 232 · E 234 (M343), E 233 · E 235 (M342), E 239 (M347), E 243 (M349)
图版113	遺物	E 240~E 242 (M349), E 246 · E 247 (M350), E 249 (M354)
图版114	遺物	E 251 · E 252 (M356), E 253 · E 254 (M363), E 255 (M264), E 256~E 258 (M366)
图版115	遺物	E 259 · E 263~E 266 (M367), E 260~E 262 (M366), E 270 (M386)
图版116	遺物	E 267 · E 268 (M375), E 269 (M386), E 271 · E 272 (M387), E 274 (M391), E 279 (M392)
图版117	遺物	E 281 · E 282 (M396), E 283~E 285 (M396), E 286 (M400), E 302 (M406)
图版118	遺物	E 280 (M396), E 287~E 290 (M400), E 295 (M405)
图版119	遺物	E 291 (M400), E 292 (M403), E 293 (M404), E 294 · E 296 · E 297 (M405)
图版120	遺物	E 298~E 301 (M405), E 304 · E 306 (M407), E 305 (M402)
图版121	遺物	E 303 (M406), E 307 · E 308 (M407), E 309~E 312 (M409)
图版122	遺物	E 313~E 315 (M409), E 316~E 318 (M410), E 320 (M412)
图版123	遺物	E 319 (M411), E 321 · E 322 (M413), E 323 (M414), E 324 · E 325 (M415), E 327 (M416), E 329 (M420)
图版124	遺物	E 326 · E 328 (M416), E 330 (M420), E 331 · E 332 (M421), E 333 · E 335 (M422)
图版125	遺物	E 337 (M423), E 338 · E 340 (M424), E 341~E 343 (M426)
图版126	遺物	E 339 (M424), E 344~E 346 (M426), E 347 (M427), E 348 (M430), E 349 (M436), E 350 (M342)
图版127	遺物	E 351~E 354 (M432), E 355 (M433), E 357 · E 358 (M435)
图版128	遺物	E 356 (M435), E 359 · E 361 · E 362 (出土地点不明)
图版129	遺物	1. E 084 (M100), E 095 · E 097 · E 099 (M118), E 096 (M114) 2. E 090 (M107), E 102 (M122), E 144 (M169), E 154 (M188), E 198 (M290)
图版130	遺物	1. E 076 (M083), M165 (M223), E 167 · E 170 · E 174 (M219), E 178 (M242), E 179~E 181 (M243) 2. E 168 · E 171~E 173 · E 175~E 177 (M239)
图版131	遺物	1. E 185 (M259), E 190 (M267), E 199 (M290), E 273 (M388), E 275~E 278 (M391) 2. E 237 · E 238 (M347)
图版132	平面実測図	(1-3-4)
图版133	平面実測図	(2-1)
图版134	平面実測図	(2-2)
图版135	平面実測図	(2-3)
图版136	平面実測図	(2-4)
图版137	平面実測図	(4-4)
图版138	平面実測図	(5-2)
图版139	平面実測図	(5-3)
图版140	平面実測図	(5-4)
图版141	平面実測図	(5-4)
图版142	平面実測図	(5-5)
图版143	平面実測図	(6-1)
图版144	平面実測図	(6-2)

圖版145	平面実測図	(6-3)
圖版146	平面実測図	(6-4)
圖版147	平面実測図	(6-5)
圖版148	平面実測図	(6-6)
圖版149	平面実測図	(7-1)
圖版150	平面実測図	(7-2)
圖版151	平面実測図	(7-3)
圖版152	平面実測図	(7-4)
圖版153	平面実測図	(7-5)
圖版154	平面実測図	(7-6)
圖版155	平面実測図	(8-1)
圖版156	平面実測図	(8-2)
圖版157	平面実測図	(8-3)
圖版158	平面実測図	(8-4)
圖版159	平面実測図	(8-5)
圖版160	平面実測図	(8-6)
圖版161	平面実測図	(9-1)
圖版162	平面実測図	(9-2)
圖版163	平面実測図	(9-3)
圖版164	平面実測図	(9-4)
圖版165	平面実測図	(9-5)
圖版166	平面実測図	(9-6)
圖版167	平面実測図	(10-1)
圖版168	平面実測図	(10-2)
圖版169	平面実測図	(10-3)
圖版170	平面実測図	(10-4)
圖版171	平面実測図	(10-5)
圖版172	平面実測図	(10-6)
圖版173	平面実測図	(11-1)
圖版174	平面実測図	(11-2)
圖版175	平面実測図	(11-3)
圖版176	平面実測図	(11-4)
圖版177	平面実測図	(11-5)
圖版178	平面実測図	(12-1)
圖版179	平面実測図	(12-2)
圖版180	平面実測図	(12-3)
圖版181	平面実測図	(12-4・5)
圖版182	平面実測図	(12-6)
圖版183	断面実測図	(2・3)
圖版184	断面実測図	(3・4)

图版185	断面实测图	(4~7)
图版186	断面实测图	(7)
图版187	断面实测图	(7·8)
图版188	断面实测图	(8)
图版189	断面实测图	(8~10)
图版190	断面实测图	(10~13)
图版191	断面实测图	(13·14)
图版192	断面实测图	(14·15)
图版193	断面实测图	(15·16)
图版194	断面实测图	(16)
图版195	断面实测图	(17~20)
图版196	断面实测图	(20·21)
图版197	断面实测图	(21·22)
图版198	断面实测图	(22~24)
图版199	断面实测图	(24·25)
图版200	断面实测图	(25·26)
图版201	断面实测图	(26~28)
图版202	断面实测图	(28)
图版203	断面实测图	(29·30)
图版204	断面实测图	(31)
图版205	断面实测图	(32·33)
图版206	断面实测图	(33~35)
图版207	断面实测图	(36~38)
图版208	断面实测图	(38·39)
图版209	断面实测图	(40·41)
图版210	断面实测图	(42·43)
图版211	断面实测图	(43·44)
图版212	断面实测图	(44~47)
图版213	断面实测图	(47~49)
图版214	断面实测图	(49·50)
图版215	出土土器实测图	E 001 (M001) E 002~E 005 (M002)
图版216	出土土器实测图	E 006~E 007 (M004) E 009·E 010 (M005)
图版217	出土土器实测图	E 010 (M005) E 012 (M006) E 013 (M007) E 014~E 017 (M008)
图版218	出土土器实测图	E 018 (M009) E 019~E 021 (M010) E 022~E 025 (M011)
图版219	出土土器实测图	E 026·E 027 (M012) E 028~E 030 (M013)
图版220	出土土器实测图	E 031~E 036 (M015) E 037·E 038 (M017)
图版221	出土土器实测图	E 039 (M018) E 040·E 041 (M019) E 042~E 044 (M020) E 047 (M021)
图版222	出土土器实测图	E 045·E 046·E 048 (M021) E 049 (M023) E 050 (M028) E 051 (M029)
图版223	出土土器实测图	E 052~E 055 (M032) E 056 (M033) E 057 (M034) E 058 (M035) E 059 (M036) E 060 (M038)

- 图版224 出土石器实测图 E 061 (M051) E 062~E 067 (M052) E 068 (M055)  
 图版225 出土石器实测图 E 069 (M063) · E 070 (M064) E 071 (M065) E 072 (M069) E 073 · E 074 (M083)  
 图版226 出土石器实测图 E 075~E 077 (M083) E 078 · E 079 (M084) E 080 (M085) E 081 · E 082 (M089) E 083 (M094) E 084 (M100)  
 图版227 出土石器实测图 E 085 · E 086 (M101) E 087 (M105) E 088 (M106) E 089 · E 090 (M107) E 091 (M108)  
 图版228 出土石器实测图 E 092 · E 093 (M108) E 094 (M110) E 098 (M113) E 095 (M114) E 096 · E 097 · E 099 (M118) E 100 (M121) E 102 (M122)  
 图版229 出土石器实测图 E 101 (M121) E 103 · E 104 (M123) E 105~E 110 (M126)  
 图版230 出土石器实测图 E 112 (M136) E 113 · E 114 (M138) E 115 (M143) E 116 · E 118 (M142) E 119~E 121 (M143) E 122 · E 124 (M150) E 123 (M154)  
 图版231 出土石器实测图 E 117 (M143) E 125 · E 126 (M152) E 127~E 131 (M156)  
 图版232 出土石器实测图 E 132 · E 133 (M158) E 134 · E 136 (M156) E 135 (M162) E 137 (M163)  
 图版233 出土石器实测图 E 138~E 142 (M167) E 143~E 145 (M169) E 146~E 151 (M170)  
 图版234 出土石器实测图 E 111 (M186) E 152 (M179) E 153 (M182) E 154 (M188) E 155 (M190) E 156~E 159 (M192)  
 图版235 出土石器实测图 E 160 · E 161 (M199) E 162 (M200) E 182 · E 183 (M256) E 185 · E 186 (M259) E 184 · E 187 · E 188 · E 193 (M263)  
 图版236 出土石器实测图 E 163 (M222) E 164 · E 165 (M223) E 166 (M231) E 167~E 177 (M238)  
 图版237 出土石器实测图 E 169 · E 170 · E 174 (M239) E 178 (M242) E 179~E 181 (M243)  
 图版238 出土石器实测图 E 189 (M266) E 190 · E 191 (M267) E 192 (M273) E 194 (M274) E 195 (M275) E 196 · E 197 (M276) E 198~E 202 (M290)  
 图版239 出土石器实测图 E 203~E 205 (M291) E 206 (M310) E 207 · E 208 (M301) E 209 (M314) E 210 (M317) E 211 (M320)  
 图版240 出土石器实测图 E 212 (M320) E 213 (M322) E 214 (M324) E 215~E 217 (M329) E 218 (M330) E 219 · E 220 (M334)  
 图版241 出土石器实测图 E 221 (M334) E 222 (M337) E 223 (M340) E 224~E 226 (M341) E 227~E 230 (M342)  
 图版242 出土石器实测图 E 231 · E 232 · E 234 (M343) E 233 · E 235 (M342)  
 图版243 出土石器实测图 E 236 (M345) E 237~E 239 (M347) E 240~E 245 (M349) E 246 (M250)  
 图版244 出土石器实测图 E 247 (M350) E 248 (M352) E 249 (M354) E 250 (M363) E 251 (M356)  
 图版245 出土石器实测图 E 252 (M356) E 253 (M363) E 255 (M364) E 256~E 258 (M366) E 259 · E 264 (M367)  
 图版246 出土石器实测图 E 254 (M363) E 260~E 262 (M366) E 263 · E 265 · E 266 (M367) E 267 · E 268 (M375) E 269 · E 270 (M386)  
 图版247 出土石器实测图 E 271 · E 272 (M387) E 273 (M388) E 274~E 278 (M391) E 279 (M392) E 280 (M396)  
 图版248 出土石器实测图 E 281 · E 282 (M396) E 283 · E 284 (M398) E 286 (M400)  
 图版249 出土石器实测图 E 287~E 291 (M400) E 292 (M403) E 293 (M404) E 297 · E 298 (M405)  
 图版250 出土石器实测图 E 294~E 300 (M405)  
 图版251 出土石器实测图 E 301 (M405) E 302 · E 303 (M406) E 305 (M402) E 304 · E 306~E 308 (M407) E 309 (M409)  
 图版252 出土石器实测图 E 310~E 315 (M409) E 316 · E 317 (M410)  
 图版253 出土石器实测图 E 318 (M410) E 319 (M411) E 320 (M412) E 321 · E 322 (M413) E 323 (M414) E 324 · E 325 (M415)

- 図版254 出土土器実測図 E 326~E 328 (M416) E 329・E 330 (M420) E 331・E 332 (M421) E 334・E 335 (M 422)
- 図版255 出土土器実測図 E 333・E 336 (M422) E 337 (M423) E 338・E 339 (M424) E 342 (M426)
- 図版256 出土土器実測図 E 340 (M424) E 341~E 346 (M426) E 347 (M427) E 348 (M430) E 349 (M436) E 350・E 352 (M432)
- 図版257 出土土器実測図 E 351~E 354 (M432) E 355 (M433) E 356~E 358 (M435)

## I. はじめに

服部遺跡において検出された、遺構・遺物は、その調査面積が広大であったこともあって、県下のみならず、全国的にも注目される、新しい知見を提供することになった。その中で、特に大きな意義をもつとみられるのが、弥生時代中期前半から後半にわたって、連続と築造された、360基以上にのぼる方形周溝墓群の発見であった。

方形周溝墓群は、調査対象地12万平方メートルのうち、旧河道により削平された部分を除き、ほぼ全域において検出され、調査区外や、削平されたものを加えれば、さらに倍加する可能性も考えられる。かかる多数の方形周溝墓が、一遺跡から、しかも短期間において検出・調査された例は皆無であった。我が国の弥生時代の墓制を考える上で、重要な資料を提供することになったのである。

調査は、昭和51年度に実施した3次調査において、一部実施したが、大半は、昭和52、53年度において実施した4次調査においてなされたものであり、本書においては、4次調査を中心に報告するとし、3次調査の資料を含めて報告する。



第1図 位置図

## Ⅱ. 調査の経過

### —日誌抄—

調査は、昭和51年7月2日から10月31日まで実施したⅢ次調査と、昭和53年3月10日から昭和54年3月31日まで実施したⅣ次調査の二次にわたるが、Ⅲ次調査においては、その最終段階において、方形周溝墓群の存在が明らかとなったため、一部を除いて、部分的な調査となった。このためⅣ次調査において、再調査しており、本書においては、紙幅上、Ⅲ次調査の成果は、部分的にしか収載できなかったが、発見の経緯ともかかわるため、Ⅲ次調査の経過も一部収載した。

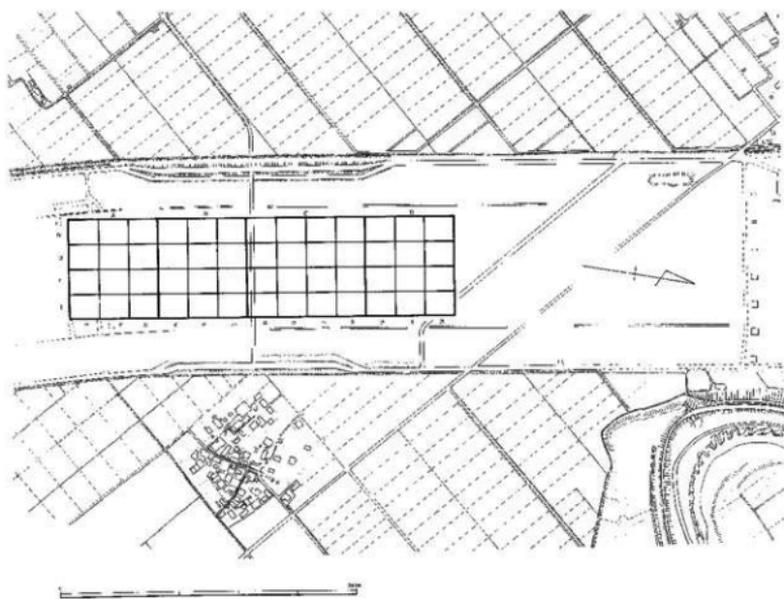
#### 1. Ⅲ次調査

- 7月2日 Ⅲ次調査開始。
- 9月25日 下流西部で方形周溝墓数基発見。
- 10月7日 下流東部でも方形周溝墓数基発見。
- 10月15日 方形周溝墓の溝内より供飯土器出土。周溝はかなり深いV字溝で墳丘の残存も予想される。ただし主体部は不明。
- 10月19日 下流部中央・下流部北半でも方形周溝墓検出。弥生時代中期（一部前期の可能性）とみられる。
- 10月22日 下流東部で、方形周溝墓の上面で、弥生中期後半の竪穴住居跡・土盛などを検出。
- 10月26日 下流東部で方形周溝墓の主体部をいくつか検出、掘り下げ。
- 10月30日 航空測量。
- 10月31日 第Ⅲ次調査終了（中断）。

#### 2. Ⅳ次調査

- 3月10日 調査再開 テトラポット地区の調査。
- 3月11日 CE1・2区で方形周溝墓検出。
- 3月17日 CW1・2区でも、方形周溝墓数基検出。マウンドはなく、主体部は未検出。
- 3月24日 CE2・3区で方形周溝墓の上面で中期後半の竪穴住居跡検出。
- 3月29日 DE1・2・3区の下層でも方形周溝墓検出。
- 4月3日 CW2・3、方形周溝墓主体部検出作業。D地区の掘り下げ開始。
- 4月6日 DE3・4、CW2、周溝・主体部掘り下げ、立ち割り、D地区では、奈良時代の遺構面の検出作業。
- 4月10日 DE3・4、方形周溝墓主体部掘り下げ続行。
- 4月14日 DE3・4、遺構写真、断面実測、D地区チーⅡ・Ⅲの第1遺構面の遺構検出完了、掘り下げ。
- 4月17日 DE1、DE2、平面図完了。レベル記入。
- 4月21日 DE1、DE2、DE3、下層遺構の確認・検出。
- 4月25日 テトラポット地区の補足調査完了。遺構の実測、写真。D地区チーⅠ・Ⅱ、第1遺構面の掘り下げ完了、実測。リーⅡ・Ⅲ、ヌーⅡ・Ⅲの遺構検出。

- 4月27日 チーⅡ・Ⅲ、下層遺構の掘り下げ。リーⅢの奈良時代の溝より「□野家五人 末一人」と読める木簡と和銅開帳が出土。
- 5月2日 チーⅡ、リーⅡ、ヌーⅡで方形周溝墓を検出し、掘り下げ、ヌーⅡで奈良時代の溝の延長部から木簡数点が出土。
- 5月6日 チーⅡ、リーⅢ、方形周溝墓検出続行。ヌーⅡ・Ⅲ、第1遺構面調査完了。
- 5月10日 チーⅡ、リーⅡ、ヌーⅡ 方形周溝墓の掘り下げ、並行して断面実測、平面実測を進める。溝内より供献とみられる土器が出土。
- 5月13日 チーⅡ、リーⅡ、ヌーⅡで方形周溝墓の調査続行、ヌーⅡで弥生後期の溝より朱塗飾り掘り出し。
- 5月15日 チーⅡ、掘り下げ完了。リーⅡ、ヌーⅢ続行。
- 5月20日 チーⅡ、平面実測、リーⅡ、写真撮影、ヌーⅡ、旧河道の掘り下げ、リーⅢ、遺構の検出。
- 5月22日 ヌーⅡ、リーⅢ、チーⅢ掘り下げ続行、ヌーⅡの方形周溝墓の台状部から弥生前期の土器片が多数出土。
- 5月27日 チーⅡ、ヌーⅡマウンドのたち割り、黒色粘土より、縄文晩期、弥生前期の土器片大量出土。リーⅡ、平面実測、リーⅢ、チーⅢ、ヌーⅢ、掘り下げ。
- 6月2日 チーⅠ、リーⅠ掘り下げ開始。リーⅡ、ヌーⅡ、調査完了、チーⅢ、リーⅢ、ヌーⅢ、掘り下げほぼ完了、写真、実測開始。



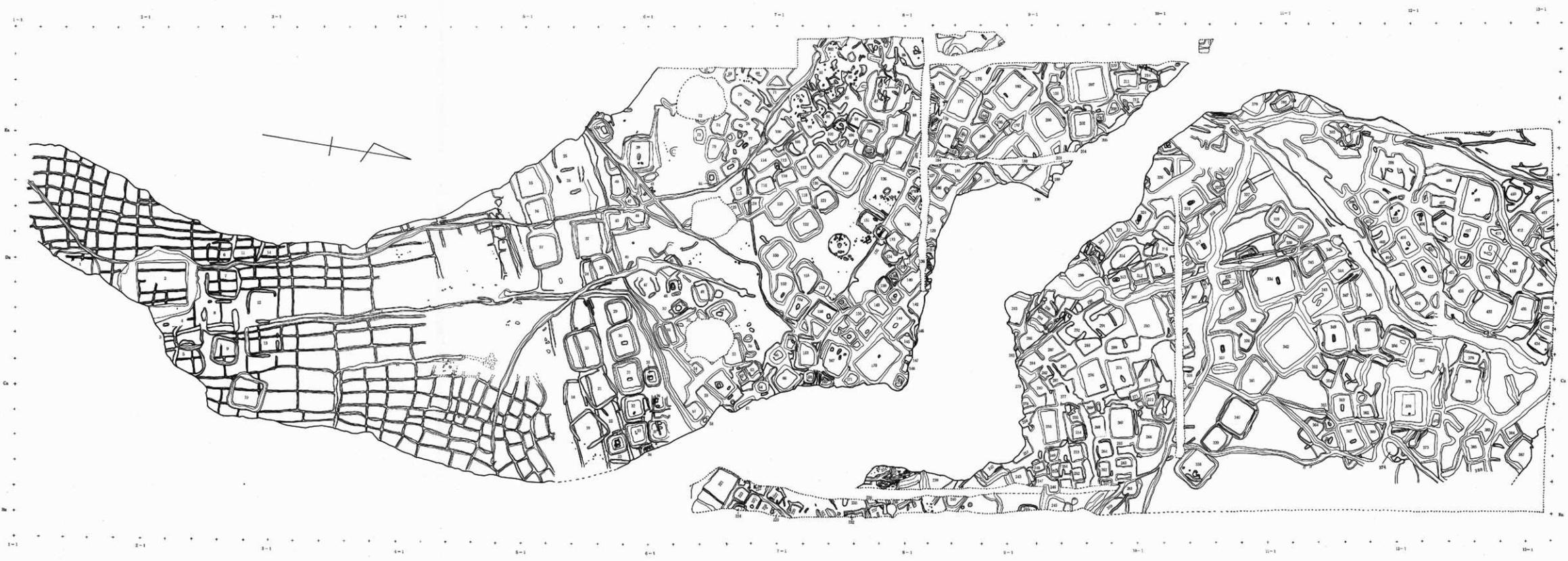
第2図 地区設定図 (IV次調査)

- 6月6日 チーⅠ、リーⅠ掘り下げ、新たにチーⅣの掘り下げ、チーⅢ、リーⅢ、ヌーⅢ、平面実測。
- 6月9日 チーⅠ、リーⅠ、第1遺構面完了、下層遺構の調査開始、ヌーⅠ掘り下げ後、チーⅣ、掘り下げ。  
(リーⅣ、ヌーⅣのみ未着手)
- 6月12日 チーⅠで、中期後半の竪穴住居跡群を検出。リーⅠ、ヌーⅠ、チーⅣ、掘り下げ続行。  
(文化庁水野調査官来訪)
- 6月15日 リーⅣにも着手。チーⅠ、リーⅠ、ヌーⅠ、チーⅣ、調査続行。
- 6月17日 ヌーⅣ着手 チーⅠ、リーⅠ、ヌーⅠ、チーⅣ、調査続行。
- 6月17日 ヌーⅣ着手 チ・リーⅠ、チ・リーⅣ 掘り下げ続行。
- 6月24日 雨天が続き、排水難行、チーⅠ、リーⅠ、ヌーⅣ、チーⅣ、掘り下げ。
- 6月28日 チーⅠ、リーⅠ、ヌーⅠ、リーⅣ、ヌーⅣ、掘り下げ続行。
- 6月30日 D地区の調査、一部を残して完了、B地区への主力移動準備。
- 7月1日 D地区の補足調査、B地区の地区設定、基準点の設定。
- 7月2日 イーⅡ・Ⅲ、ローⅡ・Ⅲの第1遺構面の検出。
- 7月6日 ハーⅡ・Ⅲの掘り下げも開始。弥生末～古墳前期の竪穴住居跡を多数検出。
- 7月11日 イ・ロのⅡ・Ⅲの第1遺構面ほぼ完了、ハーⅡ・Ⅲ、調査続行。
- 7月16日 イ・ロのⅡ・Ⅲ、第2遺構面。隅丸方形の竪穴住居跡を検検出、第1遺構面で未検出のものとみられる。  
ハーⅡ・Ⅲ、第1遺構面ほぼ完了、写真撮影・実測。
- 7月23日 イ・ロ、第2遺構面の掘り下げ完了、写真、実測、ハーⅡ・Ⅲでは、方形周溝墓検出。
- 7月27日 D地区の航空測量、この間での準備のため、B区の調査一時中断。
- 7月28日 B区の調査再開、イ・ロでは弥生中期末～後期初頭の竪穴住居跡(円形プラン)を多数検出、ハでは方形周溝墓の掘り下げ。
- 8月1日 B区の調査続行。
- 8月5日 イーⅢ、沼沢池の掘り下げ、ローⅡ、ローⅢの円形住居跡の掘り下げ開始、ハーⅢの方形周溝墓の掘り下げ続行。
- 8月10日 イーⅡ、イーⅢ、溝跡、土竈、隅丸方形住居跡の掘り下げ、並行して平面実測。写真撮影、ハーⅢ弥生後期溝の掘り下げ。
- 8月14日 ローⅢ、ローⅡ円形住居跡の掘り下げ、中央に円形の深い土竈をもつ。ハーⅢ・ハーⅣ、溝跡の掘り下げと並行して、方形周溝墓の調査。
- 8月18日 イーⅡ、イーⅢ、ローⅣの住居跡、土竈、溝跡等の調査続行、円形住居跡の中央土竈には、炭化物が充填されている。ハーⅣ調査続行。
- 8月22日 イーⅢ、イーⅡ調査続行、ローⅢ、SD201の掘り下げ、明確なV字溝で、出土土器は少ない。ハーⅣ、方形周溝墓掘り下げ続行。
- 8月28日 ローⅢ、ハーⅢ、SD201の掘り下げ続行。イーⅡ、イーⅢ、イーⅣ、続行。ハーⅣ、方形周溝墓の溝内より供献土器若干出土。
- 9月4日 イーⅠ、イーⅡの第2遺構面の掘り下げ、円形プランの住居跡検出、ハーⅡ、ハーⅣ、方形周溝墓の掘り下げ。
- 9月7日 イーⅠ、イーⅡ、イーⅢ続行、ハーⅣ、沼沢池の掘り下げ、方形周溝墓の掘り下げ完了、平面実測、写真

撮影。

- 9月11日 イーⅠ、イーⅡ、住居跡、遺構、溝跡等掘り下げ、イーⅢ、ハーⅣ、沼沢池の掘り下げ、落ち際に多数の土器、木器が検出された。
- 9月14日 ハーⅡ、ハーⅢ、方形周溝墓の掘り下げ、この地区では、二列に連続した状態で検出されている。供献土器も比較的豊富である。
- 9月18日 ハーⅡ、ハーⅢ、方形周溝墓掘り下げ続行、ローⅣ、ハーⅣ、沼沢池の掘り下げ、断面図の作成、写真撮影などを行う。
- 9月21日 イーⅠ、イーⅡ、ローⅢ、円形住居跡の実測、下層に方形周溝墓の存在が予想されるため、実測完了後、掘り下げの予定。
- 9月25日 イーⅠ・Ⅱ、ローⅡ・Ⅲ、平面実測続行、ハーⅣ、ローⅣ、沼沢池断面図の作成、ハーⅣ、ハーⅡ、方形周溝墓掘り下げ完了。
- 9月30日 B地区の調査が、一部の区画と掘り下げを残し一段落したため、C地区の遺構検出を開始する。ホーⅡ・Ⅲ、ニーⅡ・Ⅲ、ヘーⅡ・Ⅲを分担して開始。
- 10月6日 ニーⅡ、ホーⅡ、ホーⅢ、ヘーⅢで、方形周溝墓群を検出。順次掘り下げにかかる。B地区では、下層より水田跡とみられる畦畔遺構を検出。
- 10月11日 ローⅠ、イーⅡ、ハーⅡで水田跡の検出をすすめる。弥生中期の遺構面より、約60cm下層で、青灰色粘土の汚水堆積物を除去した段階で、畦畔を検出した。
- 10月16日 ホーⅡ、ホーⅢ、ヘーⅢ、ニーⅡで、方形周溝墓の掘り下げ、ホーⅡで、比較的供献土器が多いが、他では検出率がわるい。
- 10月19日 ホーⅡ、ホーⅢ、ニーⅡ、ヘーⅡの掘り下げ続行、順次断面図・平面図を作成。水田跡調査続行。ローⅡでは、畦畔が明確ではない。
- 10月23日 方形周溝墓の調査続行、水田跡については、奈文研の佐原真氏の紹介により、立命館大学の原禎頼氏に花粉分析を依頼、現地調査を実施。
- 10月31日 ホーⅡ、ホーⅢ、ほぼ完了、ニーⅡ・Ⅲ、ホーⅣ、ヘーⅡの調査をすすめる。なおホーⅠ、ヘーⅠなどで、旧河道の輪郭が徐々に明らかになる。
- 11月4日 ニーⅡ・Ⅲ、ホーⅣ、ヘーⅡで、方形周溝墓の調査続行。B・C地区の、ローⅣの間に残っていた畦をはずし、方形周溝墓の調査。供献土器多い。
- 11月9日 ニーⅡ・Ⅲ、ヘーⅡ、ローⅣの方形周溝墓の掘り下げ、これらと並行して、B・C地区の航測の準備をすすめる。
- 11月11日 B・C地区航空測量 ほぼ調査の完了した、B地区とC地区について航測を実施、航測の完了後、水田跡の調査をハーⅢなどに広げる。
- 11月17日 日本考古学協会で、弥生水田のシンポジウムが三重県津市であり、その帰途、多くの研究者の見学が相づく、調査は、ト地区にも及び、C地区の完了に集中する。
- 11月22日 ヘーⅢ、ローⅡ、ホーⅠの遺構掘り下げ、この地区の方形周溝墓は、供献土器が少ない、ローⅡでは、黒色粘土を充填した、中期前半の溝を検出、ホーⅢ、第3遺構面掘り下げ。
- 11月27日 ヘーⅢ、ローⅡ、ホーⅠ等の調査続行、ローⅠの掘り下げ、SD151、SD152より、大量の中期後半の土器が出土、連接する方形周溝墓4基検出、掘り下げ。

- 12月1日 チーⅠ、掘り下げ続行、へーⅣ、トーⅢ、へーⅡ、などの遺構掘り下げ続行、チーⅠで方形周溝墓からも  
 供献土器出土、ホーⅢ・Ⅳ、ニーⅣ第3遺構面の調査（縄文晩期、弥生前期）。
- 12月6日 へーⅣ、トーⅢ、チーⅠの遺構掘り下げ、へーⅡ平板測量、ニーⅢ・Ⅳ、ホーⅢ・Ⅳ、写真撮影、周溝断  
 面実測。
- 12月13日 チーⅠ掘り下げ完了、全体写真、旧河道のたち割断面の実測開始、湯水がかなり激しい、ホーⅢ、ホーⅣ、  
 第3遺構面で未確認の周溝墓主体部と前期の遺構を検出掘り下げ。
- 12月19日 トーⅢ・Ⅳ、へーⅣ 掘り下げ続行、二本の旧河道や、それに関連する溝より、大量の土器が出土したほ  
 か、全域に周溝墓が広がる。
- 12月25日 トーⅢ・Ⅳ、トーⅠで、方形周溝墓の掘り下げ続行、トーⅠではやや小規模なものが主流を占め、供献土  
 器も比較的多い、ホーⅢ・Ⅳ、ニーⅡ・Ⅲ第3遺構面調査続行。
- 12月28日 本日で御用納めであるが、トーⅢにおいて、残りの良い木棺の埋置されていることが判明、これまで棺材  
 の一部の検出はあるが、良好なものは初めて、充存が期待される。一部埋めもどして完了。
- 1月5日 調査開始、トーⅠ・Ⅲ、ホーⅡの第3遺構面、橋下部分の遺構検出。
- 1月9日 へーⅠ、トーⅠ、トーⅢ、方形周溝墓の調査、トーⅢ326号墓木棺の調査すすむ。蓋板・底板・側板・小口  
 板等、残存良好。
- 1月13日 トーⅢ、トーⅣ全景写真、へーⅠ、へーⅣ、トーⅢ、トーⅣ、方形周溝墓の調査、ニーⅡ、ホーⅡ、第3  
 遺構面の調査、土盛、ピット検出。
- 1月17日 トーⅠ、トーⅡの周溝墓掘り下げ、A地区、B地区の掘り下げ、水田跡の上層に、豊富な供献土器をもつ  
 周溝墓検出（カーⅡ、カーⅢ）。
- 1月22日 B地区の畦部分の調査、A地区方形周溝墓の調査続行、トーⅢの木棺がほぼ検出をみたため、連日マスコ  
 ミの取材。
- 1月26日 トーⅠ、トーⅣ、C地区畦の調査、ニーⅡ、ホーⅡの第3遺構面の調査、ホーⅡはほぼ完了、ピット、土  
 盛等多数検出、明確な遺構なし。
- 1月31日 トーⅠ、トーⅣの方形周溝墓の調査、B地区畦の調査、ホーⅢ、ニーⅡ第3遺構面の遺構掘り下げ、カー  
 Ⅱ、ワーⅢ方形周溝墓の掘り下げ。
- 2月5日 ワーⅡ・Ⅲ、カーⅡ・Ⅲの方形周溝墓の調査、SD201の掘り下げ、B地区の畦の調査続行、トーⅠ、トー  
 Ⅲ、方形周溝墓の調査。
- 2月10日 カーⅠ、カーⅡ旧河道の掘り下げ開始、ニーⅡ橋下部分の調査、奈文研町田章氏来訪。
- 2月15日 ワ・カの方形周溝墓、掘り下げ完了、写真撮影、平面実測、引きついで、第3遺構面の水田跡の検出、  
 並行して旧河道の掘り下げ。
- 2月20日 C地区、第3遺構面の掘り下げ完了、D地区畦部分の調査続行、A地区水田跡の調査、ワ・カについては、  
 大きく旧河道により東西をえぐられている。
- 2月27日 B・C地区の航空測量、航測の後、個別写真撮影。 A地区水田跡の調査続行、A地区河道より、木製品  
 多数出土。
- 3月1日 D地区畦部分の調査で、方形周溝墓の主体部がかなり明瞭に検出されている。水田の中央水路は、南に  
 まっすぐ伸び、地形が平坦化するため、区画はやや広い。
- 3月5日 トーⅢで検出した木棺、ほぼ全容を調査、平面図が完了次第、蓋板をはずして棺内の調査をすすめる段階



第3図 遺構全図

となる。A区水田跡調査続行。

3月12日 D地区の畦部分の調査、A地区水田跡および旧河道の調査続行、トーⅢの木棺開棺、人骨、副葬品検出されず、底板に朱がわずかに残存していた。マスコミ取材激化。

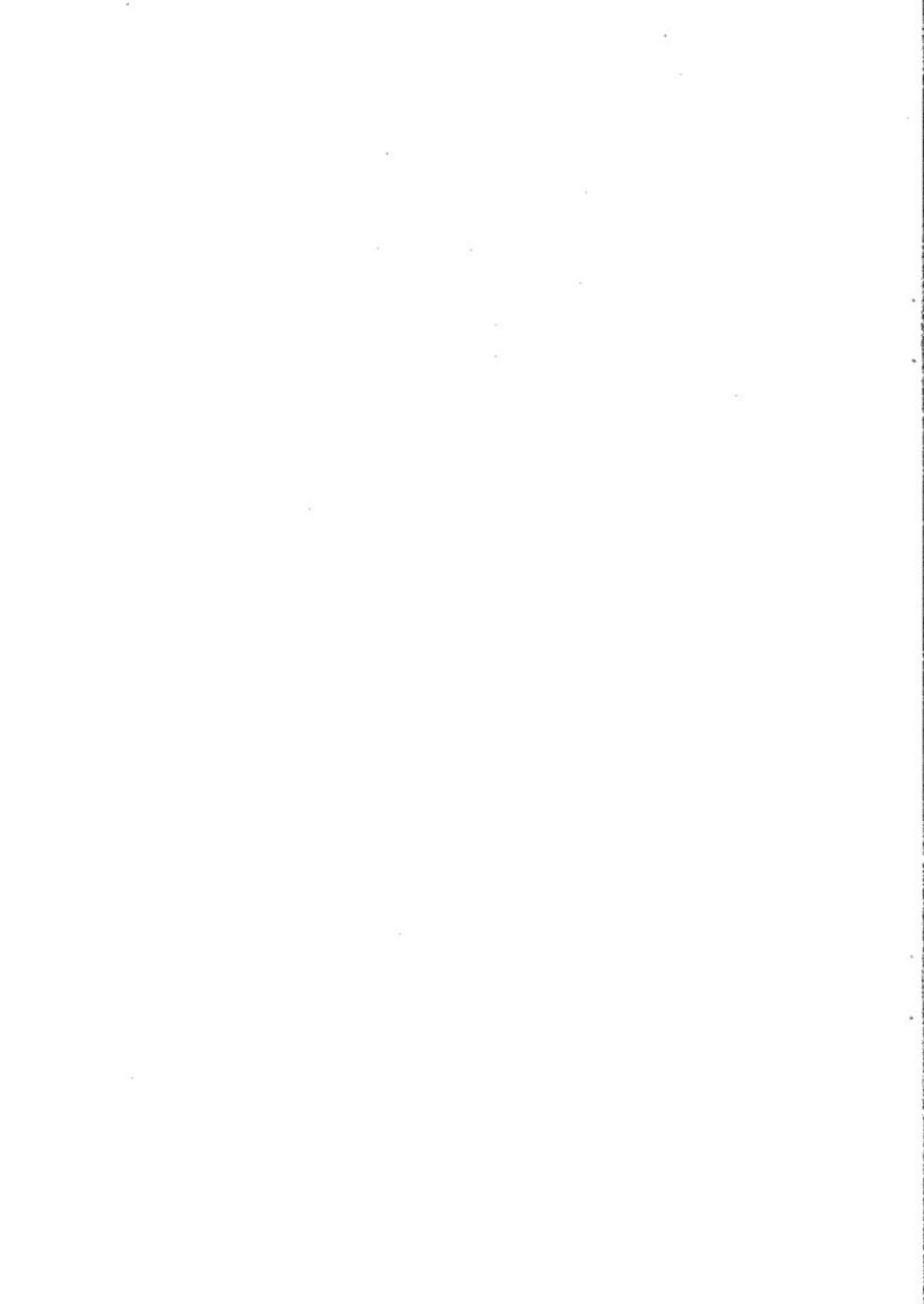
3月17日 調査完了を目前にし、調査と並行して、最後の航空測量の準備に入る。水田跡の調査はほぼ完了。全範囲を確認するため、調査区を南へ拡張、旧河道A・Bの分岐点を検出、平面実測完了。

3月20日 A・B区を中心に、最終の航空測量、これと並行して、出土遺物の搬出開始、航測後、個別の最終写真。

3月27日 水田跡のプラント・オパール調査（宮崎大学、藤原宏志氏）、並行して調査機材（ベルコン、電気設備等）の撤去開始。

3月31日 調査完了、プレハブ撤収、埋めもどし等終了。

（大橋 信弥）



### Ⅲ. 検出した遺構

今回の調査で検出した方形周溝墓は総数360基にのぼり、ほぼ調査対象地の全域に分布する。ただそれらは、時期別、集団別いくつかのグループをなしており、弥生時代中期の集団関係を反映しているとみられる。ただ、大部分の方形周溝墓がマウンドを消失し、主体部を失っていることや、必ずしも供献土器を、すべての周溝墓が保持していないため、それらの問題を十分解明することはできないが、周溝墓の群集形態や、残った供献土器を手がかりに、予備的な考察をすすめたいと考える。そこでまず本節では、各遺構の概要を述べることにしたい。

#### M001

**位置** A地区で検出した方形周溝墓群中、最南端のワーⅢ区に位置している。

**周溝** 周溝は単独に廻り、他周溝と切り合い関係をもたない。周溝の平面形は、内側線が方形、外側線が円形を意図した特異な形態を呈し、そのために四隅が陸橋部状に狭くなる。周溝の断面形は、次のM002と同様、底部は比較的平坦で幅広く、肩部は下半がやや急勾配だが、中位で角度を変え、ゆるやかに立ちあがる傾向が認められる。

**墳丘（平面形）** 墳丘の東南側過半が、後世（弥生時代後期後半から古墳時代初葉）の旧河道Bによって削平されているため、全容は定かでないが、遺存する北西側から推してM002同様、周溝の内側線に即して方形プランを呈していたものと考えられる。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 西溝中央の底部付近より、細頸壺（E001）1点が出土している。口縁部が欠損しており、下腹部に焼成後の大きな穿孔が認められる。

#### M002

**位置** A地区で検出した方形周溝墓群の中心的な位置を占め、南に若干の残地を隔てて振する規模・形態のM001が存在する他北や東側一体には、中・小の方形周溝墓が散在している。

**周溝** 遺構検出レベルでは、周溝は単独に廻っている。周溝の平面形は、内側線が方形、外側線が円形を意図した特異な形態を示す。周溝の断面形は底部は平坦で幅広く、肩部は下半がやや急勾配だが、中位で角度を変えてゆるやかに立ちあがる傾向にある。周溝の最大幅は各辺の中央にあり9m余、深さ1.3mを計る。覆土は灰色のグライ層を基調とする6層が識別される。

**墳丘（平面形）** 墳丘の平面形は、周溝の内側線に即して方形プランを呈している。19×16mを計る。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 北溝中央の4層より受口状口縁の大型広口壺（E004）、やや墳丘側の5層より小型の水差し（E005）が、又、南溝中央の4層と東溝中央の3層中より受口状口縁の広口壺（E002、E003）がそれぞれ出土している。E002とE003は胴部下半以下が欠損している。

#### M003

**位置** M002のすぐ東側に位置している。

**周溝** 深さわずかに20m余りを残す浅い碗状の周溝で、東・西溝のみ確認している。南溝は旧河道Bにより削平を受け

て遺存せず、北溝は消失して遺存しないのか、あるいは次のM004の南溝と完全共有の状態にあるのか判然としない。

墳丘（平面形） 方形プランを意図するものであったと予測される。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M004

位置 M002の北東にあり、北にM008やM009が、また、南にはM003、東にはM005が隣接する。

周溝 単独に周溝を廻る形態のもので、北溝はM008の南溝に切られている。南溝は既述のように、M003の北溝と完全共有あるいは包括状態にあるということも考えられるが、覆土の詳細な観察結果でも、結論を得ることは出来なかった。周溝は東溝が最も深く、60cm余を計るが、断面の形状は一定せず、椀状ないし逆台形状を呈す。覆土は灰色を基調とする4層が識別される。

墳丘（平面形） 平面形は、北東コーナーで一部みだれを生じているものの方形を呈す。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 南溝中央の窪地の3層より受口状口縁の大型広口壺（E006）と高杯（E008）がセットで、また、北溝中央の3層中からは広口壺（E007）が出土している。

#### M005

位置 M004の東に位置する。

周溝 単独に周溝を廻る形態を有する。東溝の南半は、旧河道Bにより削平を受け遺存しない。西溝は、調査当初、M004の東溝と共有しているのではないかと考えたが、地山と比べてわずかに黒色が強く、炭火物片の混入する溝状遺構がM004の台状部に認められ、当周溝に連なる事が明らかとなった。周溝の断面は、北溝のみ椀状でやや深い、他は皿状を呈し、深さ20m前後を計るに過ぎない。覆土は灰色を基調とする3層が識別される。なお、M003及びM004の両周溝との溝の切り合い関係については、覆土の色調が類似しており、判別できなかった。

墳丘（平面形） 外側に凹んだ等脚台形状を呈しており、いささか特異な例である。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 北溝中央の最下層（3層）より大型の直口壺（E011）と広口壺（E010）が、また、西溝北よりの最下層（3層）からも広口壺（E009）がそれぞれ出土している。

#### M006

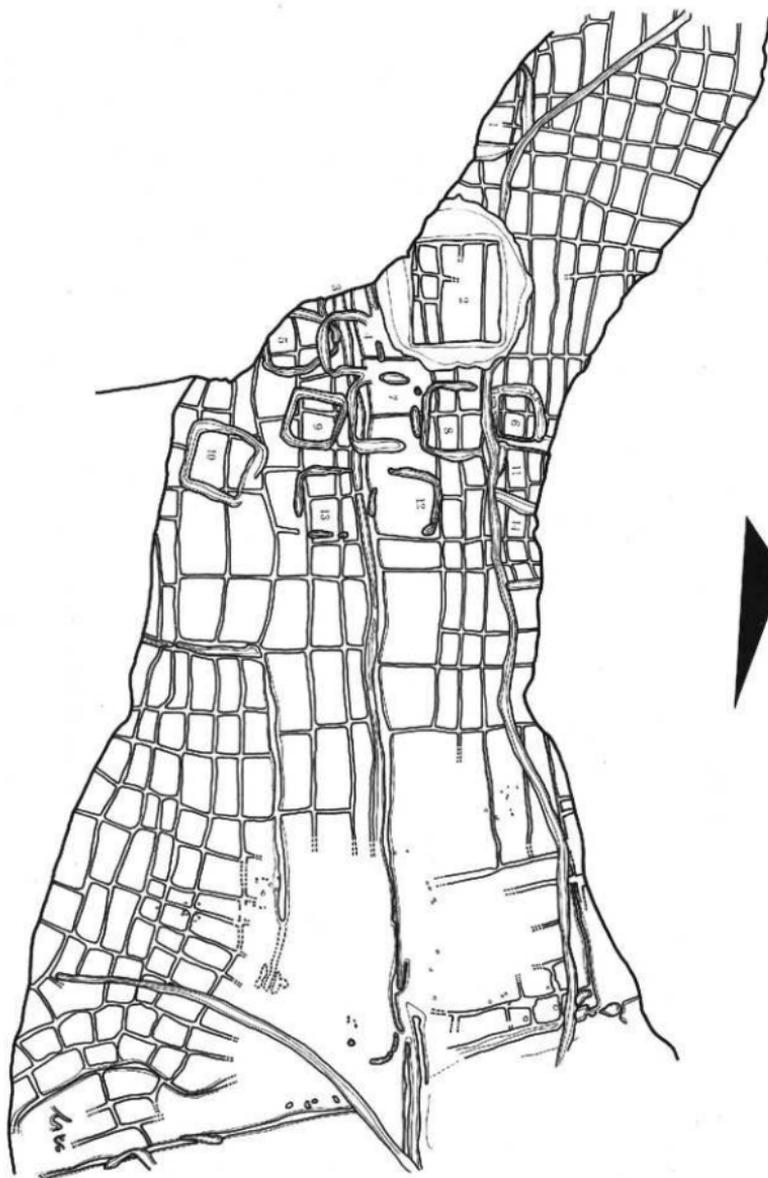
位置 M002と若干の残地を隔てた北西にあたり、北のM011とは一辺の周溝が接する形で存在している。

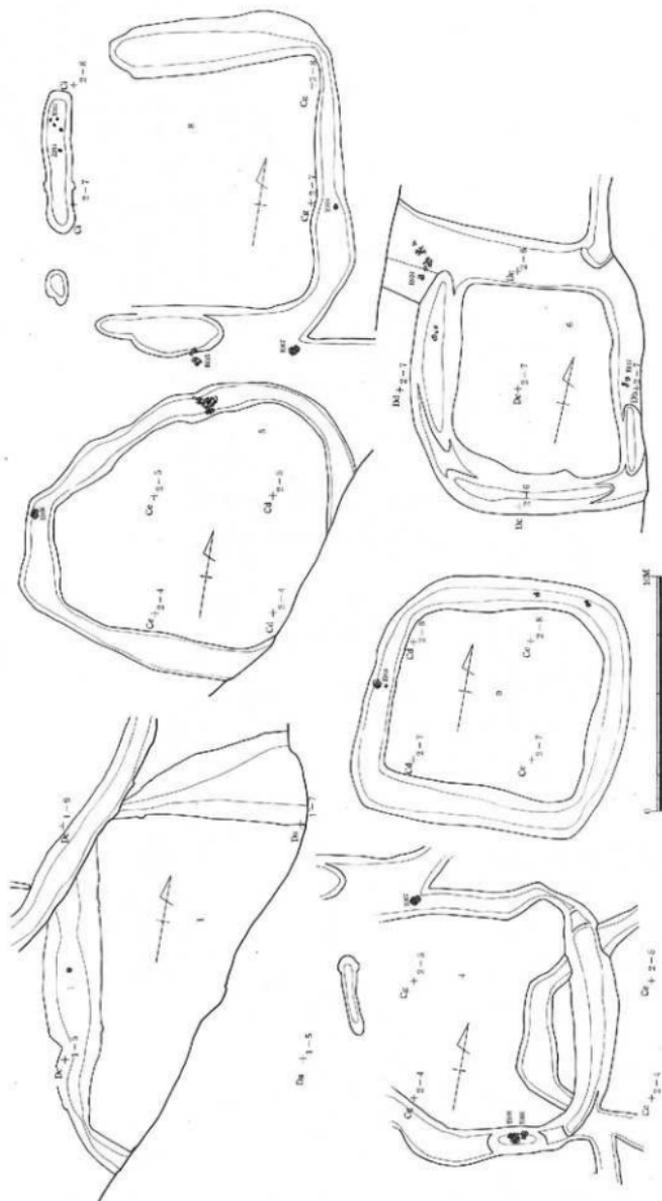
周溝 深さ300m余りの浅い椀状の周溝で、当初は周溝の単独に廻る形態のものであったと考えられるが、その後構築されたM011により北溝が包括されて遺存しない。四隅は施橋部状にやや浅くなる傾向が認められる。覆土は灰色を基調とする3層が識別される。

墳丘（平面形） 方形プランを意図するものである。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 東溝中央への中層より細頸壺（E012）1点が出土している。





第5图 M001·M004~M006·M009 供献土器出土状况实例图

#### M007

位置 M002とわずかな残地を隔てた北側にあり、西にM006、東にM008が存在する。

周溝 幅2～3m、深さ80cm前後の輪状を呈する比較的残りの良い周溝である。西溝は後世の溝（弥生時代後期前半）により削平を受けており、遺存しない。各コーナーが陸橋部状にやや浅くなる傾向が認められる。覆土は灰色を基調とする4層が識別される。

墳丘（平面形） 明確な方形プランを呈する。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 東溝中央や南側の3層中より大型の水差し（E013）1点が出土している。下腹部に焼成後の穿孔が1つ穿たれている。

#### M008

位置 小型の周溝墓群のほぼ中央に位置し、東にM009、西にM007、南にM004、北にわずかな残地を挟んでM012が存在する。

周溝 単独に周溝を廻る形態のもので、南溝は既述のようにM004の北溝を切っている。西溝を除く他の周溝は、地山の比較的上部で検出可能であったため残り具合も良く、幅4m弱、深さ50cm程度の断面が上方に大きく開く輪状の溝である。溝底は比較的平面に収めている。各コーナーが陸橋部状にやや狭く、かつ浅くなる傾向にある。覆土は灰色を基調とする4層が識別される。

墳丘（平面形） 明確な方形プランを呈する。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 西溝中央の3層中より細頸壺（E014）と胴下半部（E017）が散在する形で出土している。また、東溝中央の2層中より小型の広口壺（E016）が、また、南溝中央の3層中より、直口壺（E015）が底部を欠損する形で出土している。

#### M009

位置 M008の東に位置し、残地を隔てて北にM013、南にM004、M005が存在する。

周溝 単独に周溝を廻る形態を有し、幅1.6m前後、深さ60cm余の輪状をなす。覆土は灰色を基調とする4層が識別される。

墳丘（平面形） 方形プランを呈し、これまでの周溝墓の軸線とはやや異なる傾向にある。類する方位の周溝群として他にM010、M011が存在する。

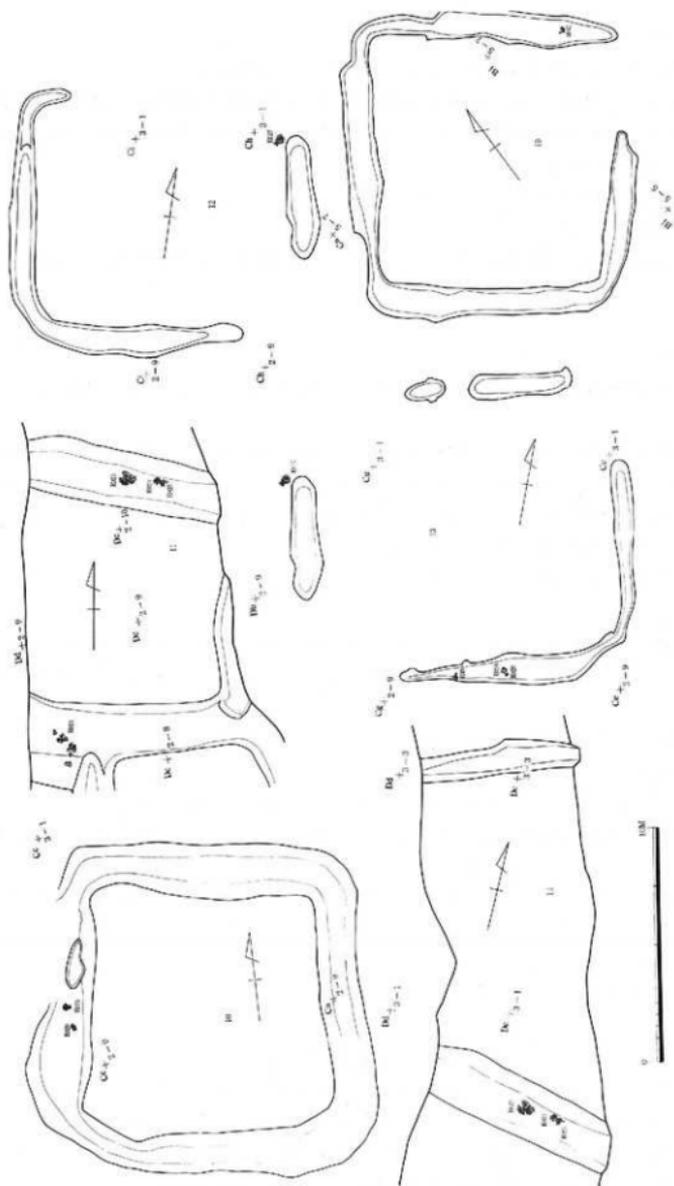
主体部 痕跡が認められない。

遺物 西溝中央の2層より広口壺（E018）が1点、底部を欠損する形で出土している。

#### M010

位置 旧河道Bに近い東端に位置している。周辺には若干の残土が広がっている。

周溝 単独に周溝の廻る形態を呈する。周溝は幅1.0～2.6m、深さ20～40cmを計り、断面は輪状を基本とするが、北溝及び南溝の断面は比較的平坦な底部に、下半のみ急勾配で、上半のゆるやかに立ち上がる肩部がつく形状を示している。覆土は灰色を基調とする4層が識別される。



第6图 M010~M014・M019 供献土器出土状况实测图

墳丘(平面形) 方形プランを呈し、M009と同様、これまでの周溝墓とは軸線がやや異なる。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 西溝中央の3層中より直口壺(E019、E020)が1点が出土している。

#### M011

位置 南のM006の一辺と周溝が接する形で存在している。

周溝 M006の北溝を包括しながら単独にめぐらせる形態を有する。東端の一部をSD201により、また、西溝を旧河道Aにより削平され、遺存しない。周溝は1.2m、深さ30cm余の浅い椀状を呈している。覆土は灰色を基調とする3層が識別される。

墳丘(平面形) 方形プランを呈し、これまでの周溝墓とは軸線がやや異なるタイプのものである。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 北溝中央部の1層中より受口状口縁の広口壺(E025、E024)2点、3層中より直口壺(E023)1点が出土している。また、南溝西底より3層中より壺の底部分が出土した。

#### M012

位置 次のM013とともに、A地区に構築された方形周溝墓の北を限る位置にある。

周溝 遺構を確認したレベルが低かったため、北溝の大半と南東コーナーが遺存していないが、当初は単独に周溝をめぐらせるタイプであったと予想される。溝の断面は、比較的浅い椀状を呈し、覆土は灰色を基調とする2層が識別される。

墳丘(平面形) 当初方形プランを呈していたと考えられる。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 東溝の中央北側周辺部より、受口状口縁の広口壺(E027)が1点出土されている。

#### M013

位置 M012の東にあって、A地区方形周溝墓群の北端に位置している。

周溝 遺構の確認レベルが低かったため、西溝と北溝の中央部及び北東コーナーが遺失しているが、当初は単独に周溝の廻るタイプであったと予想される。溝の断面は、比較的浅い椀状を呈し、覆土は灰色を基調とする層が識別される。

墳丘(平面形) 当初、方形プランを呈していたものと考えられる。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 南溝中央の1層中より、広口壺(E028)と直口壺(E029)がセットとして、また、同じく南溝の中央より、やや西側の1層中より、縄頸壺(E030)が出土している。

#### M014(残地)

#### M015

位置 ローⅢの北西端に位置し、西端と旧河道Bにより削平し、南側に残地が広がる。東にM016、北にM025、M026が所在する。



**周溝** 単独に周溝の廻る形態で、東溝のみM016の西溝と共有する。東溝はM016の西溝を横切っており、M015—M016という序列が判明する。溝内の層序は第1層が暗灰青色粘土、第2層が青灰色粘土、第3層が青灰色粘土に黒色粘土入、第4層が青灰色粘土、第5層が青灰色粘土と黒色粘土の互層であった。

**墳丘（平面形）** マウンドはすでに消失し、平面形はほぼ方形を呈する。

**主体部** 検出されなかった。

**遺物** 北溝より広口壺5点（E035、E033、E034、E032、E031）、細頸壺1点（E036）が出土した。

#### M016

**位置** ローⅢの中央北端に位置し、東にM017、西にM015が所在する。南と北は残地で周溝墓はとぎれている。

**周溝** 単独に廻る周溝の形態であるが、東溝・西溝は隣接の周溝と切り合いが見られる。東溝はM017の西溝に切られ、西溝はM015の東溝を切っており、M015—M016—M017という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が灰褐色粘土と青灰色粘土、第2層が青灰色粘土、第3層が暗灰色粘土、第4層が暗青灰色粘土に黒色粘土であった。

**墳丘（平面形）** マウンドは削平され、平面形は均正な長方形であった。

**主体部** 検出されなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M017

**位置** ローⅢとハーⅢにまたがり、その東端に位置し、東と南に残地が広がっている。西にM016、北にM027が所在する。

**周溝** 周溝が単独でめぐる形態をとるが、西溝のみM016の東溝と切り合いが認められる。そして西溝がM016の東溝を切っており、M016—M017という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が黒灰色粘土であった。

**墳丘（平面形）** マウンドはすでに消失し、均正な正方形の平面形を呈する。

**主体部** 中央よりやや西より東西1.5m、南北0.9m、深さ30cmの長方形の土盛が検出されている。主体部掘り方の一部か。

**遺物** 東溝中央より広口壺1点（E037）、西溝中央より細頸壺1点（E038）出土している。

#### M018

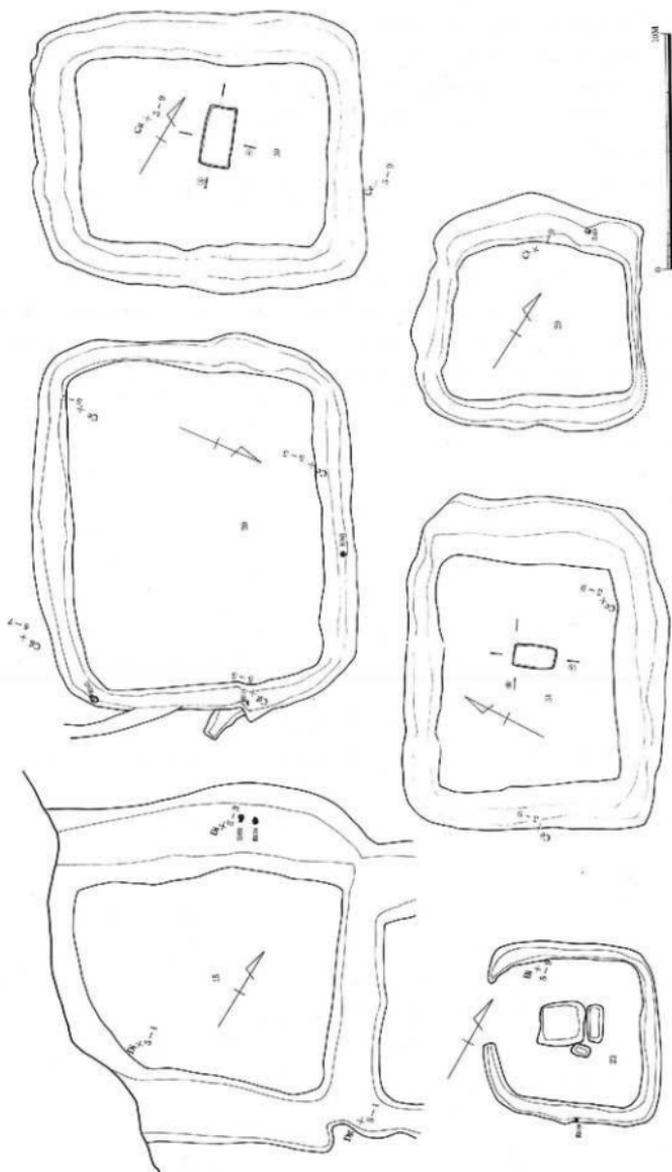
**位置** ハーⅠとハーⅡにまたがり、その南端に位置し、南と西には残地が広がる。最南端のA群を除けば、墓地群の南の端となる。東にM019、北にM021が所在する。

**周溝** 単独に廻る周溝の形態であるが、北溝はM021の南溝と共有し切られており、M018—M021という序列が判明する。溝内の層序は第1層が灰青色粘質土、第2層が黒色粘土層（灰青色粘土含有）であった。

**墳丘（平面形）** マウンドはすでに消失し、平面形はややいびつで長方形を呈する。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 西溝中央より壺底部1点（E039）が出土した。



第8图 M015·M020·M023-M029~M031 供献土器出土状况实测图

#### M019

位置 ハーⅠの南端に位置し、東と南に残地が広がっている。西にM018、北に残地をはさんでM032が、東にM023が所在する。

周溝 単独に廻る周溝の形態をとり、南東コーナー付近に陸橋部が認められるが、削平の結果による可能性もある。隣接の周溝の切り合いはなくて、溝内の層序は第1層が暗灰青色砂質粘土、第2層が明灰青色砂質粘土、第3層が灰青色粘土中に黒色粘土混入、第4層が灰青色粘土に黒色粘土ブロックであった。

墳丘（平面形） マウンドは削平され、平面形はほぼ方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 東溝の南端で、細頸壺2点（E041、E040）が重なり出土した。

#### M020

位置 ハーⅡの南端に位置し、南に残地が広がり、東にM021をはさんでM017が、北にM030が所在する。

周溝 周溝が単独でめぐる形態をとるが、東溝のみM021の西溝と共有関係にあり、不明瞭ではあるが、M021の西溝に切られている模様で、M020—M021という序列が判明する。溝内の層序は第1層が灰青色粘土に灰色粘土が介入、第2層は灰青色粘土、第3層が灰青色粘土に黒色粘土（弱）を含む、第4層が灰青色粘土に黒色粘土（強）を含む。

墳丘（平面形） マウンドは洪水により削平された模様で平面形は、ほぼ方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 南溝中央に、小型の短頸壺（E043）、西溝中央に小型広口壺（E044）が各1点出土した。

#### M021

位置 ハーⅠとハーⅡにまたがって、その中央に位置する。東に残地、西にM020、南にM018、北にM031が所在する。

周溝 単独に廻る周溝の形態で、西溝がM020の東端を切り、南溝がM018の北溝を切っているところから、M020—M021、M018—M021という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色粘土、第2層が灰青色粘土に黒色粘土、第3層黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形はややいびつな長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 南溝中央部より広口壺（E046）、北東溝コーナーより、広口壺（E045）、北溝中央より壺底部（E048）南面溝コーナーより広口壺（E047）が出土した。

#### M022（残地）

#### M023

位置 ハーⅠの中央東よりに位置し、東側と南側は残地が広がり、西には、残地をはさんでM021、北側にM033が所在する。

周溝 単独に廻る周溝の形態で、北溝がM033の南溝に切られており、M023—M033の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が、灰青（白）色砂質粘土、第2層が黒色粘土を一部含んだ灰青色粘土、第3層が灰青色砂質粘土、第4層が黒色粘土であった。



墳丘（平面形） マウンドは約30cm残存しており、平面形はほぼ方形を呈する。

主体部 主体部は中央の東よりで2箇所検出された。第1主体は東西1.6m×南北1.6mの掘り方で深さ65cmをはかる。埋葬施設は木棺とみられるが、詳細は不明、主体部埋置後約30cm以上の盛土が全体になされている。第2主体はこの盛土の上面から切り込まれており、東西1.5m×南北0.3m深さ19cmをはかる。第3主体部は東西0.2m×南北0.35mの掘り方で深さ11cmをはかる

遺物 南溝中央より広口壺（E049）1点が出土している。

#### M024

位置 ハーⅢ東端に位置し、東に残地をはさんでM020、西にM027、北に残地をはさんでM045が、南に残地が広がる。M028とは重複して所在する。

周溝 周溝が単独にめぐる形態であるが、M028とは西溝、北溝と、M027とは西溝が共有関係にある。ただし、西溝、北溝ともM028に切られており、M028の西溝がM027の東溝を切っているから、M027—M028、M024—M028という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色粘土、第2層が黒色粘土、第3層が青灰色砂質土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は長方形とみられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M025

位置 B地区方形周溝墓群の南西端にあり、M015の北側、M025の西側に位置する。西側は旧河道で切られる。

周溝 M026と同じく、遺構の検出が黒色土面であったので、溝だけを検出した。M026の西辺溝が本周溝墓と共有するものであれば、2辺を確認したということになる。ただし、M026の西辺溝の埋土断面図をみると、西側については、旧河道があるため、周溝が存在したかどうかは明らかではない。

墳丘（平面形） 現状では、周溝が2辺しか認められないので、平面形は、方形に残るものと考えられる。やはり、青灰色土から切り込んで周溝墓としたものであろうが、盛土はうまく検出できなかった。

主体部 盛土及び青灰色土をはずしたので、主体部は検出されなかった。

遺物 周溝及び台状部からの遺物の出土はない。

#### M026

位置 B地区方形周溝墓群の南西端部にあり、M015の北側に存在する。南辺溝からM015北辺溝までの距離は、約2mである。

周溝 本周溝墓は、周溝の検出面が黒色土であったので、周溝各辺は分析され、それぞれ独立している。各辺の周溝はそれぞれ規模が異なる。おそらく盛土をもって、青灰色土面から掘り込んだものであろうと思われるが、各辺溝の間が広いので、4ヶ所コーナー部分に陸橋部をもつ構造と思われる。

墳丘（平面形） 各コーナーに陸橋部をもつ形で、台状部の平面形は、東西8.1m、南北8.0mとやや東西が長く、長方形状である。もともとは、青灰色土から溝を掘り込んで周溝墓としたものであろうが、台状部頂上が削平されているのか、盛土らしいものを検出しなかった。

主体部 盛土あるいは青灰色土を除去したために、主体部を確認することができなかった。

遺物 周溝内、台状部からの遺物の出土はない。

#### M027

位置 ハーⅢの中央に位置し、東にM024、M028、西に残地をはさんでM026、南にM017、北にM043が存在する。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、東溝がM028の西溝に切られており、M027—M028という序列が明らかになる。北溝がM043の南溝と切り合いは不明、溝内の層序は、第1層が黒色粘土、第2層は灰青色粘土、第3層は灰青色粘質砂土、第4層が灰青色砂質粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は均正な方形を呈す。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M028

位置 ハーⅢの東端に位置し、東に残地をはさんでM020、西にM027、北に残地をはさんでM045、南に残地が広がる。そしてM024とは完全に重複して所在する。

周溝 単独に周溝の廻る形態で、東溝は弥生後期の環濠（SD202）により切れ、西溝と北溝がM024の西溝と北溝と共有する。西溝はM027の東溝を切っており、M027—M028の序列が判明する。北溝は切り合いなく、溝内の層序は第1層が灰青色砂質粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が灰青色砂質粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は長方形を呈する。

主体部 検出されなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M029

位置 ハーⅡ中央西端に位置し、南北に残地、西に残地をはさんでM024、M028、東にM030が存在する。

周溝 周溝が単独に廻る形態で、東溝のみM030の西溝と共有し、東溝がM030の西溝を切っており、M030—M029という序列が判明する。溝内の層序は第1層が暗青灰色粘質土、第2層が暗青灰色粘質土に黒色粘土を含む。第3層が暗青灰色粘質土に黒色粘土を多く含むものである。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 北溝東より広口壺（E051）を検出した。

#### M030

位置 ハーⅡの中央に位置し、東にM031、西にM029、南にM020、北にM051が存在する。

周溝 周溝が単独に廻る形態で、東溝のみM029の東溝と共有関係にある。西溝をM029の東溝が切っており、M030—M029の序列が判明する。

墳丘（平面形） マウンドは約10cm余残存し、4層に分層される。第1層が黒色粘土と青灰色粘土の互層、第2層が青灰色砂質土、第3層が黒色粘土に青灰色粘土のブロック、第4層が灰黒色粘土であった。平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 ほぼ中央に東西1.1m、南北2.5m、深さ29cmの浅い落ち込みがあり主体部掘り方の基底部とみられる。

遺物 出土しなかった。

#### M031

位置 ハーII中央東よりに位置し、東にM032、西にM030、南にM021、北にM035が所在する。

周溝 周溝が単独に廻る形態で、東溝と北溝のみ隣接と切り合いがみられる。北溝はM035の南溝を切り、東溝はM032の西溝を切っており、M035—M031、M032—M031の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色粘質土、第2層が青灰色粘質土に黒色粘土、第3層は青灰色粘土に黒色粘土のブロックであった。

墳丘(平面形) マウンドは約10cm余残存し、およそ4層に分層される。第1層は黒色砂質粘土、第2層は黒色粘土と青灰色粘土のブロック、第3層は灰青色砂質土と黒色粘土混入、第4層が青灰色砂質粘土中に黒色粘土ブロックであった。平面形は均正な方形を呈する。

主体部 マウンド中央部に東西1.0m、南北1.6m、深さ23cmのやや小形の掘り方が検出され、主体部の基底部とみられる。

遺物 出土しなかった。

#### M032

位置 ハーIの中央西よりに位置し、東にM032、西にM031、南に残地をはさんでM019、北にM036が所在する。

周溝 単独に周溝の廻る形態であるが、東溝がM033の西溝を切り、西溝がM031の東溝に切られ、北溝がM036の南溝を切っており、M033—032、M032—M031、M036—M032の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が灰青色砂質粘土、第2層、第3層が灰青色砂質土に黄褐色砂質土混入、第4層が灰青色粘土、第5層が灰青色砂質土に黒色粘土のブロック、第6層が黒色粘土、第7層が黒色粘土に青灰色粘土混入であった。

墳丘(平面形) マウンドは約15cm残存しており、大きく3層に類別される。第1層は黒色粘土に青灰色粘土ブロック、第2層は灰青色粘土に黒色粘土のブロック、第3層は、灰青色粘土と黒色粘土がブロックとして混在していた。平面形はほぼ均正な方形を呈する。

主体部 マウンド中央北よりに東西1.25m、南北2.15m、深さ27cmと東西1.1m南北55cm、深さ22cmをはかる長方形の落ち込みが確検出された。主体部掘り方の基底部とみられる。

遺物 西溝中央より高環(E055)、北溝中央および北東コーナーより細頸壺各1点(E051)(E052)、南東溝コーナーより広口壺(E054)が出土した。

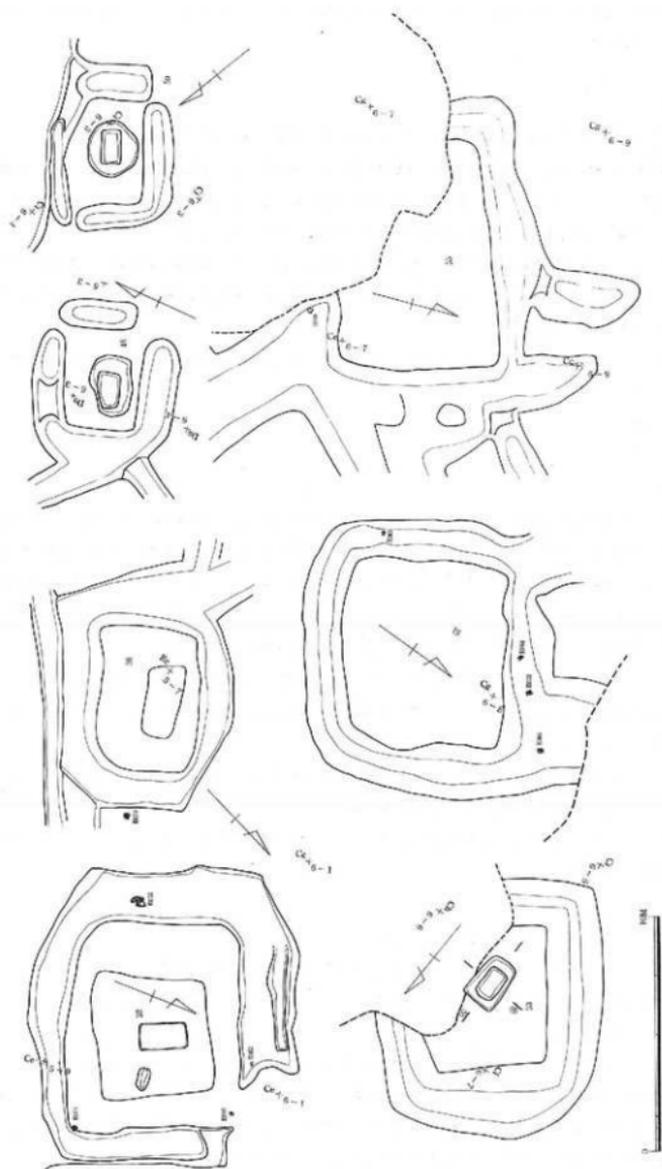
#### M033

位置 ハーIの中央に位置し、東にM034、西にM032、南にM023、北にM037が所在する。

周溝 周溝の単独にめぐる形態で、東溝はM023の西溝と一部切り合うが、その関係は不明、ただしM034—M033、M037—M033の序列が判明する。

墳丘(平面形) マウンドは約15cm残存し、青灰色粘土がブロック状に堆積している。平面形は均正な方形を呈する。

主体部 マウンドは中央よりやや西より東西1.25m×南北、0.85cmの掘り込みがあり、深さ13cmをはかる。わずかに木棺の痕跡が認められるが、土室内の堆積は第1層が、黒色粘土ブロックと灰青色粘土ブロック、第2層が灰青色粘土と黒色粘土の互層をなす。第3層が灰青色粘土に黒色粘土の混入したものであった。



第10图 M032·M038·M048·M050·M051·M053·M055 供献土器·主体部検出状況実測図

遺物 北西溝コーナーから小型細頸壺1点(E056)が出土している。

#### M034

位置 ハーIの東端に位置し、東半を旧河道により削平され、西にM033、南と北は残地が広がるとみられる。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、西溝がM033の東溝と共有するが、切り合いは不明である。溝内の層序は第1層が暗緑色粘土、第2層が灰青色粘土に黒色粘土ブロック、第3層が灰青色粘土に黒色粘土粒が含有されていた。

墳丘(平面形) 盛土は約10cm残存し、灰青色粘土と黒色粘土がブロックとして互層で堆積する。平面形は小型の方形を呈する。

主体部 東半が旧河道で消失し、東西1.2m以上、南北0.8mをはかる、深さ10cmの土窟が、マウンド中央で検出された。主体部掘り方とみられる。断面を観察すると木棺の痕跡が認められる。土窟内の堆積は3層でその上に2層の盛土がマウンド全体に盛られている。

遺物 北溝中央西よりに広口壺1点(E057)が出土した。

#### M035

位置 ハーIIの東端に位置し、東にM036、南にM031が所在し、西、北には残地が広がる。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、南溝がM031の北溝と切り合い、南溝とM031の北溝が切っており、M035—M031の序列が判明する。溝内の層序は第1層が灰青色砂質土、第2層が暗灰色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) マウンドは約10cm残存し、平面形は均正な方形を呈する。

主体部 中央より南よりに東西1.45m、南北1.45m、深さ16cmの長方形の土窟が検出された。主体部掘り方と考えられるが内部施設は不明。

遺物 北溝中央より細頸壺1点(E058)が出土した。

#### M036

位置 ハーIの北西端に位置し、東にM037、西にM035、南にM032、北に残地が広がる。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、北溝がM032の南溝に切られており、M036—M032の序列が判明する。溝内の層序は第1層が灰青色粘土、第2層が黒色粘土、第3層が黒色粘土に灰青色粘土ブロックであった。

墳丘(平面形) マウンドが約10cm残存し、灰青色粘土と黒色粘土がブロック状に順次堆積していた。平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 マウンドほぼ中央に東西1.8m、南北0.8m、深さ8cmの長方形の土窟が、中央より東よりに東西0.75m、南北1.3m、深さ9cmの土窟が検出され、主体部掘り方と考えられる。第2主体には木棺の痕跡が認められ、いづれも木棺を使用したものとみられる。

遺物 北東溝コーナーより細頸壺1点(E059)が1点出土している。

#### M037

位置 ハーIの中央北よりに位置し、東側は旧河道がえぐり、西にM036、南にM033、北に残地をはさんでM057が所在する。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、南溝がM033の北溝に切られており、M037—M033の序列が判明する。溝内の層序は

第1層が灰青色砂質粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が灰青色粘土に若干黒色粘土混入、第4層が灰青色粘土と黒色粘土の互層、第5層が灰青色粘土に黒色粘土ブロックであった。

墳丘（平面形） マウンドは約12cm残存し、灰青色粘土と黒色粘土が互層で堆積していた。平面形は均正な方形を呈する。

主体部 マウンド中央より北よりに東西1.2m、南北1.6m以上m、深さ15cmと東西0.98m、南北1.3m、深さ20cmの長方形の土塚を2基検出した。主体部掘り方とみられる。

遺物 出土しなかった。

#### M038

位置 ハーⅢの中央に位置し、南西辺を旧河道が削平し、北東3mにM039が所在するほか周りに残地が広がる。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、南溝が弥生後期の溝により再利用されている。溝内の層序は第1層が青灰色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は長方形を呈する。

主体部 中央より北よりに東西3.2m、南北1.2m、深さ8cmの土塚を検出した。主体部掘り方とみられる。

遺物 出土しなかった。

#### M039

位置 ハーⅣの北東端に位置し、東にM041が所在し南、西、北に残地が広がる。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、東南コーナーを弥生後期の溝が切っている。溝内の層序は、第1層が青灰色粘質土、第2層が暗青灰色粘質土、第3層が黒灰色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 マウンド中央に東西2.4m、南北1.3m、深さ23cmの土塚を検出した。主体部の掘り方とみられる。

遺物 出土しなかった。

#### M040

位置 ハーⅢの西よりに位置し、東にM042、西に残地をはさんでM038、南に残地をはさんでM026、北にM041が所在する。中央より北よりを弥生時代末の溝（S D205）が斜めに横切り遺構を寸断している。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、東溝はM042の西溝を、北溝はM041の南溝を共有しており、北溝をM041の南溝が切っており、M040—M041という序列が判明する。溝内の層序は第1層が緑青灰色粘土、第2層が黒色粘土と青灰色粘土の互層、第3層が黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は復元するなら均正な長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M041

位置 ハーⅢの西端に位置し、東と北に残地が、西にM039、南にM040が所在する。南西から北東に向け、弥生後期末の溝が（S D204）斜めに切って横切っている。

周溝 単独にめぐる形態で、東溝北溝が検出されず、南溝はM040の北溝と共有関係にある。溝内の層序は第1層が黒灰褐色粘土、第2層が黒灰色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は方形を呈するとみられる。

主体部 中央に東西1.2m、南北1.4m、深さ13cm、長方形の土竈と東西0.8m、南北1.4m以上、深さ10cm、そして東西0.7m、南北1.5m以上深さ12cmの土竈が3基検出された。いづれも上述の溝によって、中央・南端を削平されており内容は不明であるが、主体部の掘り方の可能性が高い。

遺物 出土しなかった。

#### M042

位置 ハーⅢの西よりに位置し、東にM044、西にM040が所在し、南と北に残地が広がる。東に弥生中期末の溝（SD-201）が切り込んでいる。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、東溝がM044の西溝、西溝がM040の東溝と共有関係にあたる。溝内の層序は、第1層が青灰色粘土、第2層が青灰色粘土に黒色粘土含有、第3層が黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに削平され、平面形はいびつな方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M043

位置 ハーⅢの南端に位置し、東に残地、西に残地をはさんでM040、南にM027、北にM044が所在する。西溝の西端を弥生中期末の溝（SD201）が切っている。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、南溝がM027の北溝と、北溝がM044の南溝と共有する。溝内の層序は第1層が暗灰色粘土、第2層が黒色粘土に青灰色粘土混入、第3層が青灰色粘土に粒状の黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形はややいびつな方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M044

位置 ハーⅢの中央に位置し、東と北に残地、西にM042、南にM043が所在する。西溝と弥生後期初頭の溝（SD-201）が切っていた。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、西溝がM042の東溝と南溝がM043の北溝と共有関係にある。溝内の層序は第1層が青灰色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が暗青灰色粘土を粒子状に含んでいた。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失していたが、平面形はいびつな方形であった。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M045

位置 B地区のほぼ中央に位置し、M028の北側、M047の南西に存在する。

周溝 南辺及び西辺の一部分しか検出されなかった。南辺溝幅は、1.1m西辺溝は、幅1.0mである。ほぼ中央部を、弥生末から古墳時代前期の環濠によって切られている。周辺の状況から、四辺に溝がめぐるものではなく、2辺あるいは3辺溝と思われる。

墳丘（平面形） 1コーナーしか残存してないので、不明瞭である。

主体部 環濠によって切られているので検出されなかった。

遺物 周溝内及び台状部から遺物の出土はない。

#### M046

位置 B地区のほぼ中央に位置し、M047の北西に存在する。

周溝 M048の一部と共有し、「コ」の字形の周溝と一辺の溝からなる。北西、南東部分に陸橋部がみられる。北東辺溝がやや広く、他は細い。やはり、周溝墓のほぼ中央部を弥生時代から古墳時代の環濠が通り、周溝が切り込まれている。

墳丘（平面形） やや長方形に近い形で、2ヶ所に陸橋部をもつ。環濠によって中央部が切られており、台状部の様子は不明。

主体部 中央部の環濠のため主体部は不明。

遺物 各辺周溝、台状部から遺物の出土はない。

#### M047

位置 B地区のほぼ中央に位置、水田跡用排水路が折れる部分の西側に存在し、M046、M048の南側にある。

周溝 「コ」の字型の溝と一辺の溝とからなり、2箇所に陸橋部をみる。各辺溝の埋土は、B地区南半の各周溝墓の周溝埋土と異なる。

墳丘（平面形） 2コーナーに陸橋部をもつ形で、ほぼ長方形である。台状部の盛土の有無は不明である。

主体部 台状部を精査したが、明瞭な主体部はなかった。

遺物 周溝内及び台状部からの遺物の出土はない。

#### M048

位置 M047の北、M046の東に位置する。

周溝 東辺溝が切れ、「コ」字型の周溝と一辺からなる形である。西辺溝は、第46号墓と共有している他は、単独である。

墳丘（平面形） ほぼ正方形で、2コーナーに陸橋部がある。台状部の規模は4.2m×3.3mで小規模である。

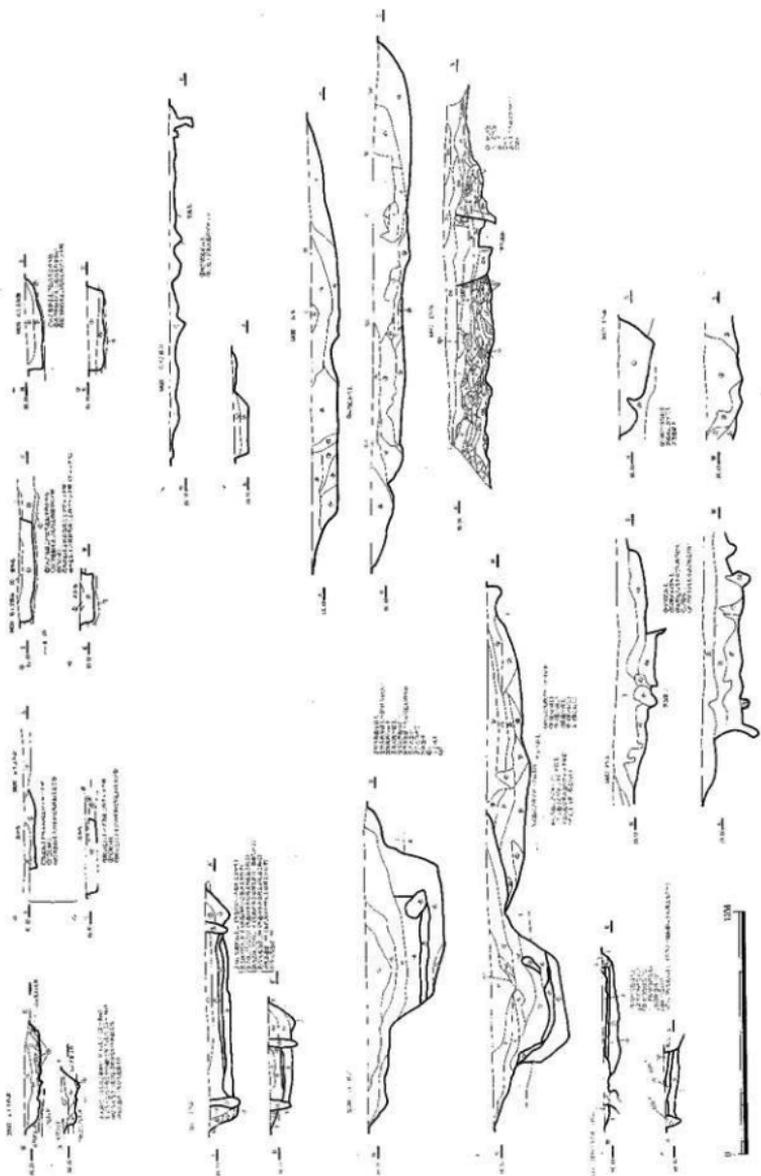
主体部 中央部やや南よりに墓趾がみられる。掘り方、長辺2.6m、短辺1.8mのほぼ長方形の木棺墓である。棺材は遺存しておらず、棺材からの痕跡で、組合わせ木棺と考えられる。棺内、掘り方内とも副葬品など、遺物の出土はない。

遺物 周溝内及び台状部からは、周溝墓に伴う遺物の出土はない。

#### M049

位置 M048の北側、M053の南西に存在する。

周溝 南西コーナーにわずかな陸橋部を見る形で、ほぼ四辺ともしっかりした周溝がめぐる。ただし、北東コーナーも



第11图 M017 · M030 · M031 · M035 · M059 · M061 · M065 · M073 主体部断面实测图

溝が入り込んでいる。

墳丘（平面形） 四角形状であるが、西辺側がやや広い形である。南西コーナーに陸橋部をみる。

主体部 台状部を精査したが、主体部と思われるものは不明であった。

遺物 周溝内及び台状部からの遺物の出土はない。

#### M050

位置 ハ・ニの境界近くに位置し、橋脚の工事の掘り方のすぐ南西に位置し、東にM051、西にM048、北にM049が隣接する。

周溝 南コーナーと北コーナーに陸橋部をもつ。北西辺は単独でL字状につながり、南は単独で、東はM052と一部重複する。U字状の周溝で、堆積層は大きく3層に分けられる。

墳丘（平面形） 台状部の長軸は、南北から西に約40度ふった方向で、長辺4.3m、短辺3.4mの比較的小型の台状部である。

主体部 主体部と思われるものとして、台状部の中央やや南寄りに1基が検出された。円形状の浅い落ち込みの中央に方形のプランで深く掘り込みがみられた。木棺墓と思われるが、その様子は不明瞭である。

遺物 周溝内、台状部とも特に遺物は出土してしない。

#### M051

位置 ハーIIのほぼ中央に位置し、東に残地をはさんで、M030が、西に接してM052が、北に残地をはさんでM054が、南に残地をはさんでM047が所在する。

周溝 単独に周溝のめぐる形態で、西溝のみ共有関係をもつ。西溝はM052の東溝に切られている模様でM051-M052の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が淡青灰褐色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が黒灰色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに削平され、平面形は端正な正方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 西溝中央部より広口壺1点（E061）が出土している。

#### M052

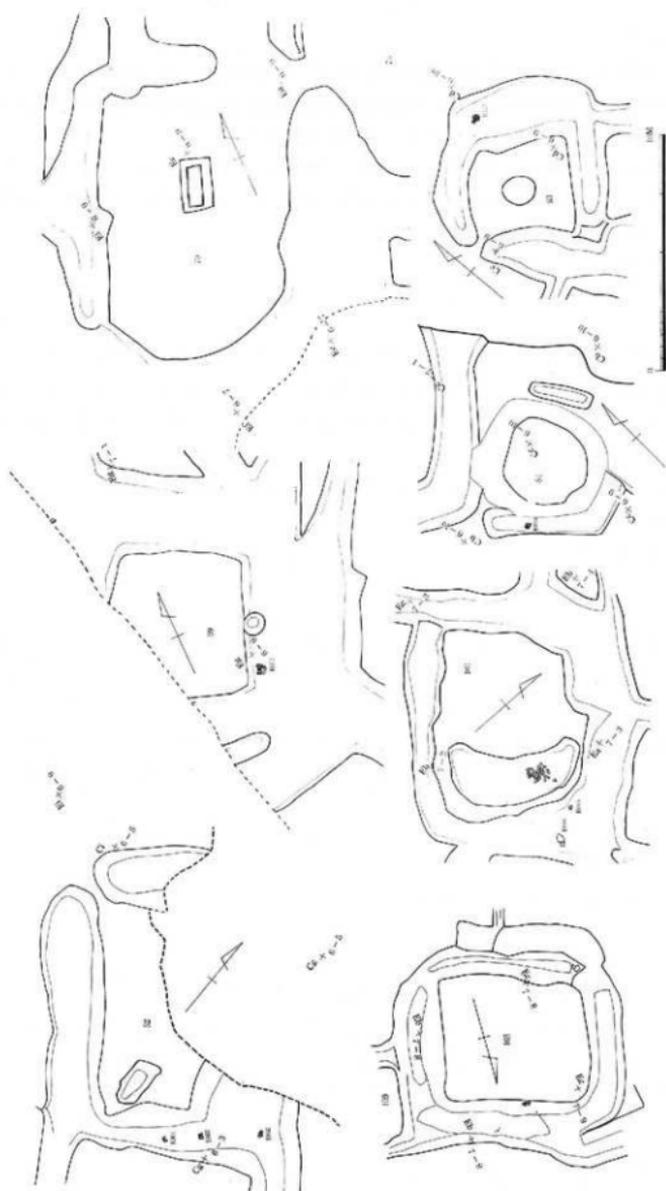
位置 ハーIIの中央に位置し、東にM051、西にM053、南にM050が位置し、北側は、農道2号橋の橋梁により削平されていた。

周溝 周溝が単独にめぐる形態であるが東溝と南溝のみ共有関係にある。このうち南溝はM050の北溝、北溝もM054の南溝を切っており、M052-M054という序列が判明する。ただし東溝の切り合いは不明であるが、M051の埋め土に近似しており、M051-M052という序列も推定される。溝内の層序は、第1層が青灰褐色粘質土、第2層が黒灰色砂質粘土、第3層が黒色粘質土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすべて消失していたが、平面形は、やや長い長方形であった。

主体部 台状部の南東コーナー付近に、長辺2.1m、短辺1.1m、深さ34cmの掘り方が検出され、主体部の可能性も考えられる。

遺物 東溝の中央部および北東コーナーから、広口壺1点（E062）、細頸壺1点（E063）、鉢1点（E064）、底部2点（E065、E066）、高坏脚部1点（E067）の計6点が出土している。



第12図 M052・M063・M064・M069・M070・M101・M105 供献土器・主体部検出状況実測図

#### M053

- 位置** ハーII地区の北端で、谷状低地に面する微高地端に築かれ、西にM049、南・北は橋脚の掘り方で攪乱されている。
- 周溝** 南東コーナーを攪乱で失っている他は、四辺をめぐる周溝が確認された。周溝内の堆積土は、3層に区分可能である。最下層に前期の遺物片がみられる。周溝は、各辺とも単独に巡る。
- 墳丘** (平面形) M050と同一方位の長軸をもつ。長軸6.0m、短辺5.2mの長方形状をなす。
- 主体部** 台状部のほぼ中央に墓蓋と考えられる落ち込みがみられた。長辺2.2m、短辺1.5mの掘り方で、木棺蓋と考えられる。
- 遺物** 特に出土をみない。

#### M054

- 位置** ハーIIの北東コーナー付近に位置し、東にM059、北にM055が所在し、西および南には残地が広がる。
- 周溝** 東溝を除き周溝は単独にめぐるので、東溝はM059の西溝を切っており、M059→M054という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色粘質土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が黒灰色粘質土、第4層が黒色粘土であった。
- 墳丘** (平面形) マウンドはすでに削平され、やや小型の正方形を呈する。
- 主体部** 検出できなかった。
- 遺物** 全く出土していない。

#### M055

- 位置** ハーIIの北端に位置し、東にM062・M059、西に残地をはさんでM053、南に残地をはさんでM054が、北に接してM056が所在していた。
- 周溝** 北溝、東溝のみ完存し、西溝と南溝の大半は、橋脚工事のために削平されている。周溝が単独にめぐるとみられるが、北溝はM056の南溝と共有し、東溝もM052・M062・M063の西溝と共有関係になっており、東溝はM062の西溝を切っており、M062→M055の序列が判明した。溝内の層序は、第1層が暗青灰色粘土、第2層が青灰色粘土、第3層が黒灰色粘質土であった。
- 墳丘** (平面形) マウンドはすでに削平され、西南部が橋脚工事で失われているが、平面形は端正な長方形とみられる。
- 主体部** 検出できなかった。
- 遺物** 南溝、東よりから広口壺1点(E068)が出土した。

#### M056

- 位置** ニーIIの中央に位置し、南に大型のM055が所在するほか残地(低平地)が広がる。
- 周溝** 単独にめぐるとみられる形態をとり、各コーナーに陸橋をもつタイプであるが、東溝と南溝が、M055の北溝と切り合っており、連続している。切り合いは明確でないが、M056がM055を切って築造されている可能性が高い。
- 墳丘** (平面形) ややいびつな方形を呈するとみられるが、マウンドはすでに削平され確認できなかった。
- 主体部** 確認できなかった。
- 遺物** 出土しなかった。

#### M057

**位置** ハーIの西北コーナーに位置し、北側にM058、西側にM059が隣接するが、東側を前期水田跡の主水路が走り、南側には残地が広がる。

**周溝** いちおう方形にめぐり、南東コーナーに陸橋部をおき、隣接の周溝と共有する形態をとっている。東溝は、水田の主水路(SD001)を切っており、西溝は切り合い不明で、北溝はM058の南溝を切っており、M058-M057の序列が判明する。溝内の層序は、第1層は青灰色粘質土、第2層は暗青灰色粘質土、第3層は黒灰色粘質土であった。

**墳丘(平面形)** マウンドは消失しているが、平面形は端正な方形を呈する。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M058

**位置** ハーIの北西コーナー付近に位置し、東北半は旧河道Cにより大きく削平され、東側には残地が、西側にはM061が、南にはM057が所在する。

**周溝** 全周し、隣接の周溝と共有関係をもつ形態と考えられるが、東溝は前期水田跡の主水路(SD001)を切って築造され、西溝はM059の東溝を切り、南溝はM057の北溝を切っており、M059-M058、M058-M057という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色粘質土、第2層が黒灰色粘質土であった。

**墳丘(平面形)** マウンドはすでに消失し、過半が削平されているため詳細は判明しないが、おそらく平面形はやや小型の方形を呈するものとみられる。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M059

**位置** ハーIの北西コーナーに位置し、東にM057、西にM055、M062、南にM054、北にM061が所在し、周溝の北東コーナーの一部を旧河道Cが削平している。

**周溝** 全周して隣接の周溝と共有関係をもつ形態で、必ずしも切り合いは明確でないが、隣接のものが切り込んでいる可能性が高い。

**墳丘(平面形)** マウンドはすでに消失し、北辺を旧河道Cにより若干えぐられているが、ほぼ均正な長方形の平面形を呈している。

**主体部** 中央よりやや北よりに不整形の土盛があり、長辺1.9m×短辺1.9mの掘り方に、長辺1.5m×短辺1.0m、深さ35cmの主体部の落ち込みと考えられるものが認められたほか、その北側に長辺1.6m、短辺0.8m、深さ13cmの長方形の落ち込みが検出された。

**遺物** 出土しなかった。

**その他** 中央付近を南から北へ、下層遺構のSD004が検出されている。

#### M060

**位置** ハーIVの東端に位置し東にM040、西にM038、北に残地、南にM039が所在する。

**周溝** 残地の可能性が高いが南溝のみ単独で検出され、東溝がM040の西溝と共有し、北溝が弥生後期の溝に切られるな

ら西溝は、欠くものの、周溝墓による可能性もある。東溝はM040の西溝を切っておりM042—M060の序列が判明する。溝内の層序は第1層が暗灰青色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が暗灰色粘土、第4層の黒色粘土と青灰色粘土のブロックであった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は方形とみられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M061

位置 ニーⅡの東端に位置し、東側を旧河道Cにより大半を削平されており、南側に大型のM059が所在する。

周溝 共有する形態をとるが、切り合い関係は明確でなかった。

墳丘（平面形） 大半が旧河道により削平されており不明。

主体部 確認できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M062

位置 ニーⅡの東端に位置し、南にM059、西にM055、北にM063が所在する。

周溝 共有する形態で、隣接の各周溝と連接する。切り合いは、必ずしも明らかでないが、周溝の形態などを考慮する  
なら、隣接の周溝を切って築造されているとみられる。

墳丘（平面形） 長方形を呈し、マウンドはすでに削平され確認できなかった。

主体部 確認されなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M063

位置 ニーⅡの東端に位置し、南にM062、西にM055、東にM064が所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、隣接の各周溝と共有関係にもある。ただ、その切り合い関係は明確でない。周溝の  
形態などからみて、M055—M063—M062—M064の序列を一応想定しておきたい。

墳丘（平面形） 比較的均正な方形を呈するが、マウンドはすでに削平され、確認できなかった。

主体部 確認できなかった。

遺物 東溝より細頸壺（E069）1点が出土した。

#### M064

位置 ニーⅡの東端に位置し、西にM063、南にM061、北にM066が所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、隣接する周溝と共有する形態で検出した。切り合いは必ずしも明確でないが、M064  
—M063、M066—M064という序列を一応想定しておきたい。

墳丘（平面形） 平面形は隅丸方形を呈し、やや変型している可能性がある。マウンドは削平され、確認されなかった。

主体部 確認されなかった。

遺物 西溝の中央から細頸壺（E070）1点が出土した。

#### M065

**位置** 南西に谷状の低平地をひかえた小規模な周溝墓である。

**周溝** 南西溝および南東溝は低平地をひかえて単独に周溝がめぐるが、北東溝はM066と完全共有の関係にある。M163とは切り合い関係は不明で、両周溝間に用途の明らかでない溝が2条走っている。1条は両周溝を切る浅くて広い溝で、他の1条は北東溝に切られる古い溝である。当周溝墓の周溝は、幅3.0~4.8m、深さ1m前後の比較的浅くて広い碗状の周溝である。なお、南西溝は、それを延長するかたちで南東へのびてM063の北東溝に接続している。

**墳丘（平面形）** 小規模ながら方形を意図したものであろう。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 南西溝内より壺の底部1点（E071）が出土している。

#### M066

**位置** M065の北東に位置し、すぐ東側を後世の旧河道が走るため北東溝と南東溝の一部を削平されている。

**周溝** 南西溝の一部が単独にめぐる以外は、各周溝ともM064・M065・M168とそれぞれ完全共有の関係にある。なお、M063とは切り合い関係は判明しなかったものの、両溝をつなぐ断面観察の結果、当周溝墓がM063と比較的近い時期に構築された可能性が推測された。各周溝は、幅4m前後、深さ1.1~1.3mの広くて浅いもので、断面は碗状を呈している。覆土は最高で9層が識別される。

**墳丘（平面形）** 比較的整然とした隅丸長方形を呈している。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 出土しなかった。

#### M067

**位置** ハーⅣの南北端に位置し、東側は橋脚により掘削され、南側は遺構がとぎれ残地（空閑地）となっている。西側も調査外で不明であるが、北側にはM068と接している。

**周溝** 東側が削平されているため形態は明らかにしがたいが、北溝はM068と共有関係にある。

**墳丘（平面形）** マウンドはすでに消失しているが、平面形はやや円形を呈している。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 出土していない。

#### M068

**位置** ハーⅣの西北コーナーに位置し、東にM070、南にM067、北にM069が所在し、西は攪乱により消失していた。

**周溝** 方形ないし円形に廻り、隣接の周溝と共有する形態をとっている。ただし、切り合い関係はなく、前後関係は不明である。西溝の層序は第1層が暗青灰色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が黒色粘土である。

**墳丘（平面形）** マウンドはすでに消失しており、平面形は方形とみられる。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 出土していない。

#### M069

位置 ニーⅣの東南コーナーに位置し、東にM070、M071、南にM068、北にM063が所在する。西側は攪乱により消失。

周溝 方形にめぐるとみられ、周溝を共有する形態と考えられる、ただし、隣接の周溝との切り合いは不明。

墳丘（平面形） マウンドは削平されており、平面形は方形であろう。

主体部 検出されていない。

遺物 南東コーナーの周溝内より、広口壺1点（E072）が出土している。

#### M070

位置 B地区西端よりで検出され、東にM076、北にM075、西にM069が位置する。

周溝 東南辺の一部、南西辺の一部が橋脚掘り方で壊されているが、他は残存している。北西辺の南端は浅く、また、北東辺の東端は終り、北東コーナーに陸橋部をもつ。

墳丘（平面形） ほぼ長方形状であるが、南部分が円弧をえがく形状である。

主体部 台状部ほぼ中央部に墓室掘り方、長辺2.2m、短辺1.3mの規模であった。

遺物 周溝に伴う遺物の出土はない。

#### M071

位置 B地区の北西端に位置する。南側にM070、西にM069などがみられる。

周溝 各辺とも周溝がめぐれる。ただし、南北端に攪乱があって、一部破壊されている。ただし、北東辺溝は、SD201によってほぼ全てが切られている。周溝は切り合いがみられ、M071が新しく切り込んでいる。

墳丘（平面形） 一部変形したり、中央に攪乱があるものの、もともと方形を呈するものと思われる。

主体部 精査したが、主体部と思われるものは残存していなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M072

位置 ハーⅣの北端に位置し、東にM073、西は橋脚で消失、南に残地、北にM074が所在する。

周溝 西側のほとんどが削平されており、形態は不明、周溝が単独にめぐれる形態とみられる。

墳丘（平面形） 不明。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M073

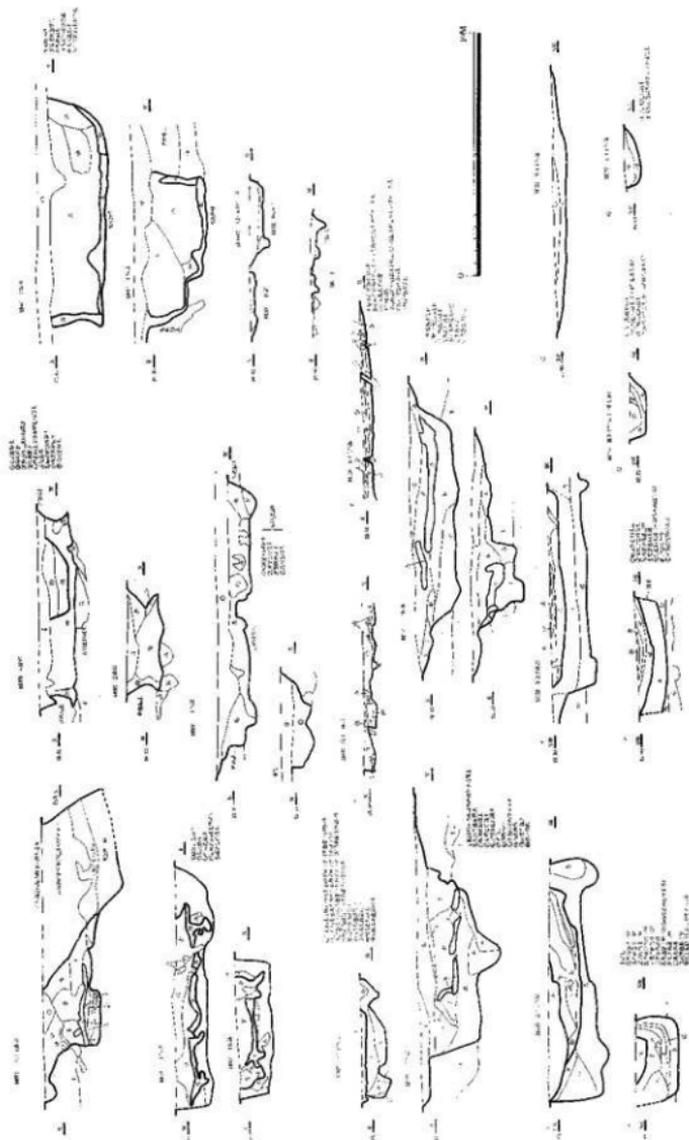
位置 ハーⅣの北端に位置し、東・南に残地、西にM072、北にM074、M079が所在する。

周溝 全周して単独にめぐれる形態であるが、北溝・西溝は隣接の周溝と共有関係をもつ。ただし切り合いはなく、第1層が暗青灰色粘質土、第2層が黒灰青色粘質土、第3層が暗紫色粘質土、第4層は黒灰灰色砂質粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形はややいびつな長方形である。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土していない。



第13图 M074 · M079~M081 · M069 · M071 · M100 · M110 · M102 · M112 · M121 · M123  
主体部断面实测图

#### M074

位置 ハーⅣの北端に位置し、西北コーナーは橋脚により削平を受けているが、東にM079、南にM072、M073、北にM076が所在する。

周溝 周溝を共有する形態をとり、東溝と南溝の切り合いは不明であるが、北溝はM075の南溝に切られ、西溝もM070の東溝を切っており、M074-M075、M074-M070の序列が判明する。周溝の層序は、第1層が青灰色粘質土、第2層が暗青灰色粘質土、第3層が黒色粘質土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに削平されており、平面形は長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 全く検出されていない。

#### M075（残地）

#### M076

位置 B地区の北西端近くにあり、南にM074、東にM077、北にM100、西にM070が位置する。

周溝 南辺溝は、M074と切り合い、西はM070と共有、M076とも共有、東辺はM077と共有する。ただし、北東部はM077と陸橋でつながり、北西はM070、M075と陸橋部でつながる。

墳丘（平面形） 陸橋部をのぞけば、ほぼ長方形状である。ただし、北辺は円弧をえがく。

主体部 ほぼ中央部で主体部が検出された。東西0.9m、南北1.3mの掘り方の中に、木棺が埋置された痕跡がみられた。

遺物 周溝基にともなう遺物の出土はない。

#### M077

位置 B地区、北西端近くに位置し、北にM100、西M076がみられる。

周溝 M076と共有した西辺溝と、M076と一連の北西辺溝、SD201に切られた東辺溝がある。

墳丘（平面形） かなり変形している台状部で、西部でM076と陸橋部でつながる。

主体部 台状部から主体部は、検出されなかった。

遺物 周溝基に伴う遺物の出土はない。

#### M078（残地）

#### M079

位置 ハーⅣの北より中央、2号橋直下に位置し、南側は残地になっており、遺構はなく東にM081、北にM080、西にM074、南にM073が所在する。

周溝 周溝を共有する形態で、西・南・北溝の切り合いは不明であるが、東溝はM081の西溝を切っており、M081-M079の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色粘質土、第2層が暗青灰色粘質土、第3層が黒色粘質土である。

墳丘（平面形） マウンドは削平されているが、平面形は長方形を呈し、北東コーナーが一部消失している。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M080

位置 B区の北端、西よりに位置し、北にM115、南にM079、東にM081が所在する。

周溝 すべて共有する形態で、東溝がSD201で一部破壊を受けている。M081と切り合う北溝はM081の南溝を切っており、東溝もM115の西溝を切っており、M080-M081、M115-M080という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色砂質土、第2層が暗青灰色粘質土、第3層が黒色粘質土であった。

墳丘(平面形) マウンドはすでに削平され、平面形は長方形を呈する。

主体部 長辺2.1m、短辺1.2mの長方形の掘り方が、ほぼ中央に長軸方位で検出されたが、明確な構造は不明。

遺物 出土しなかった。

#### M081

位置 ホーIV北端中央に位置し、東側にSD201が切り、北側にM080、西側にM079が接する。南・東には残地が広がる。

周溝 すべて共有する形で検出されており、南側には残地が広がり周溝そのものが検出できなかった。西溝はM079の東溝に切られ、北溝はM080の南溝を切っており、M081-M079、M080-M081の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色砂質粘土、第2層が暗青灰色砂質粘土、第3層が黒色粘質土であった。

墳丘(平面形) 東側をSD201により壊されているが、やや隅丸の長方形を呈す平面形をとり、マウンドはすでに削平されていた。

主体部 中央に東西2.3m、西北2.0mの土盛を検出した。

遺物 出土しなかった。

#### M082(残地)

#### M083

位置 ホーIVの西端に位置し、東に大型のM087が所在するほか、まわりには、南にM082、北にM084が所在する。

周溝 単独にめぐる形線をとり、各コーナーに陸橋部をもつタイプである。

墳丘(平面形) 方形を呈するとみられるが、マウンドはすでに削平され、確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

遺物 東溝より壺(E074)1点、甕(E076)1点、北溝より壺(E073)1点、高坏(E077)1点が出土したほか、溝内より壺底部(E075)1点が出土している。

#### M084

位置 ホーIVの西端に位置し、南にM083、北にM085、東にM087が所在する、後世の遺構との重複が著しく明確に検出できなかった。

周溝 単独にめぐり各コーナーに陸橋部をもつタイプとみられるが、北溝の一部がM085の東溝と重複する。ただし、後世の遺構との重複もあり、切り合いは明確でなかった。

墳丘(平面形) 必ずしも明確でないが、ほぼ平面プランを呈するとみられる。マウンドはすでに削平され確認されていない。

主体部 台状部中央で東西1.8m、南北1.1mと東西1.1m、南北3.1mの土盛を検出した。

遺物 北溝より長頸壺（E079）1点、溝内より高坏柱状部（E078）1点が検出しているが、やや後出的で、混入の可能性が高い。

#### M085

位置 ホーⅣの西北端に位置し、東に大型のM087、北にM174・M175、南にM083・M084が存在する。

周溝 共有する形態をとるが、いずれもかなり攪乱されており、明確にできなかった。

墳丘（平面形） 長方形を呈するとみられるが、マウンドはすでに削平され、確認できなかった。

主体部 中央に東西1.3m、南北2.1mと東西1.4m、南北3.1mの土感を検出した。

遺物 北溝より大細型の甕（E080）1点が出土した。

#### M086（残地）

#### M087

位置 ホーⅣの北西端に位置し、東にM105、西にM085が存在する。

周溝 単独にめぐる形態で、浅い輪状を呈する。

墳丘（平面形） ほぼ長方形を呈し、東西12.7m、南北9.5mをはかる。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M088（残地）

#### M089

位置 ホーⅣの西よりに位置し、北のM087に接続する。ただし、旧河道の影響も強く、残りはきわめて悪い。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、北溝、西溝はM087と重複しており、調査段階では切り合いや、平面での確認をできなかった。

墳丘（平面形） 方形を呈するとみられるが、マウンドはすでに削平され、確認できなかった。

主体部 検出できなかった

遺物 主体部掘り方内より壺底部（E082）1点と、北溝より壺（E081）1点が出土しているが、やや後出的なものあり、混入の可能性もある。

#### M090（残地）

#### M091（残地）

#### M092（残地）

#### M093（残地）

#### M094

位置 ニーⅣ地区の南西隅に位置し、南にM070、北にM063がある。

周溝 南辺溝は、一部SD201に切れ、西辺はほぼ全体が、同じくSD201に切り込まれている。北辺から西辺にかけて陸橋部をもつ、各辺とも明瞭な切り合いはない。

墳丘(平面形) 南北に少し長い方形をなし、長軸7.6m、短軸6.0mをはかる。

主体部 特になし。

遺物 南溝より、鉢(E083)1点が出土した。

#### M095(残地)

#### M096

位置 ニーⅣ地区のほぼ中央にあり、南にM099、西M093がある。

周溝 南コーナーに陸橋部をもつ以外は、各辺とも周溝がめぐる。周溝は各辺が浅く、切り合いもみられない。堆積は単純である。

墳丘(平面形) ほぼ方形プランで両北辺が丸味をもっている。盛土は確認されていない。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M097(残地)

#### M098

位置 ホーⅣの中央、M105の南に接して所在する。

周溝 連絡する形態をとり、北溝をM105と、東溝をM154と共有する。このうち北溝は、M105に切られており、M098ーM105の層列が判明する。東溝については切り合いは確認できなかった。

墳丘(平面形) ほぼ方形を呈し、墳丘はすでに削平されていた。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M099

位置 ニーⅣ地区の中央やや西よりに位置し、南にM101、北にM096、東にM111がある。

周溝 南～東辺はL字状に周溝が掘られ、西、北は独立した溝で、3方向に陸橋部をもつ。周溝埋土は単純で、深さも浅い。

墳丘(平面形) 長軸が東西方向にあり、3方向に陸橋部をもつ。

主体部 南コーナーの台状部内側に、南北2.1m、東西1.35mの略楕円形の土盛がみられた。木棺墓と思われるが、材等は残存していない。小口板の痕跡と思われる土が、断面で観察された。

遺物 出土しなかった。

#### M100

位置 ニーⅣ地区の中央やや南よりにあり、東にM101、北にM094がある。

周溝 南辺は、M114と共有、東・北は単独、西は一部をSD201に切られる。堆積層は、各辺とも単独で、青灰色土が上層に下層に台状部の黒色土が混入した粘土がみられる。北西コーナーに陸橋をもつ。

墳丘（平面形） 長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 北溝より壺底部（E084）1点の出土があった。

#### M101

位置 ホーⅣの中央東に位置し、西にM100、東にM112、北にM099がある。

周溝 南はM113、東はM112・M111、北はM099と、周溝を共有している。周溝の堆積土は単純である。

墳丘（平面形） 南辺がやや丸味をもつ、やや変形した四辺形である。

主体部 特に主体部と思われる遺構はない。中央の土盛は弥生前期の遺構である。

遺物 東溝より広口壺（E085）と壺底部（E086）が出土した。

#### M102（残地）

#### M103（残地）

#### M104（残地）

#### M105

位置 ホーⅣのほぼ中央部に位置し、西にM087、北にM108、更にM010がある。

周溝 四辺を周溝がめぐる。東辺周溝はM109と共存し、南辺はM098と共存関係にある。

墳丘（平面形） 長軸が東西にあり、長辺6.1m、短辺5.2mの台状部をもつ。

主体部 主体部と考えられる墓蓋の検出はない。

遺物 台状部及び、周溝内からは伴なう遺物として南辺の周溝内から壺（E087）が出土している。

#### M106

位置 ホーⅣの北辺近くで、更にM108、西にM087、南にM105が分布する。

周溝 北辺は残地に接し、東はM108と変則的に周溝を共有し、南辺は一部でM105を切り、南辺の西半はM087より先に周溝が掘られている。東辺は残地がつづくため、周溝が周回しない。

墳丘（平面形） やや変形した四辺形状で、東西に長軸14.9m、短軸6.4mの規模である。

主体部 主体部と考えられる墓蓋は検出されなかった。

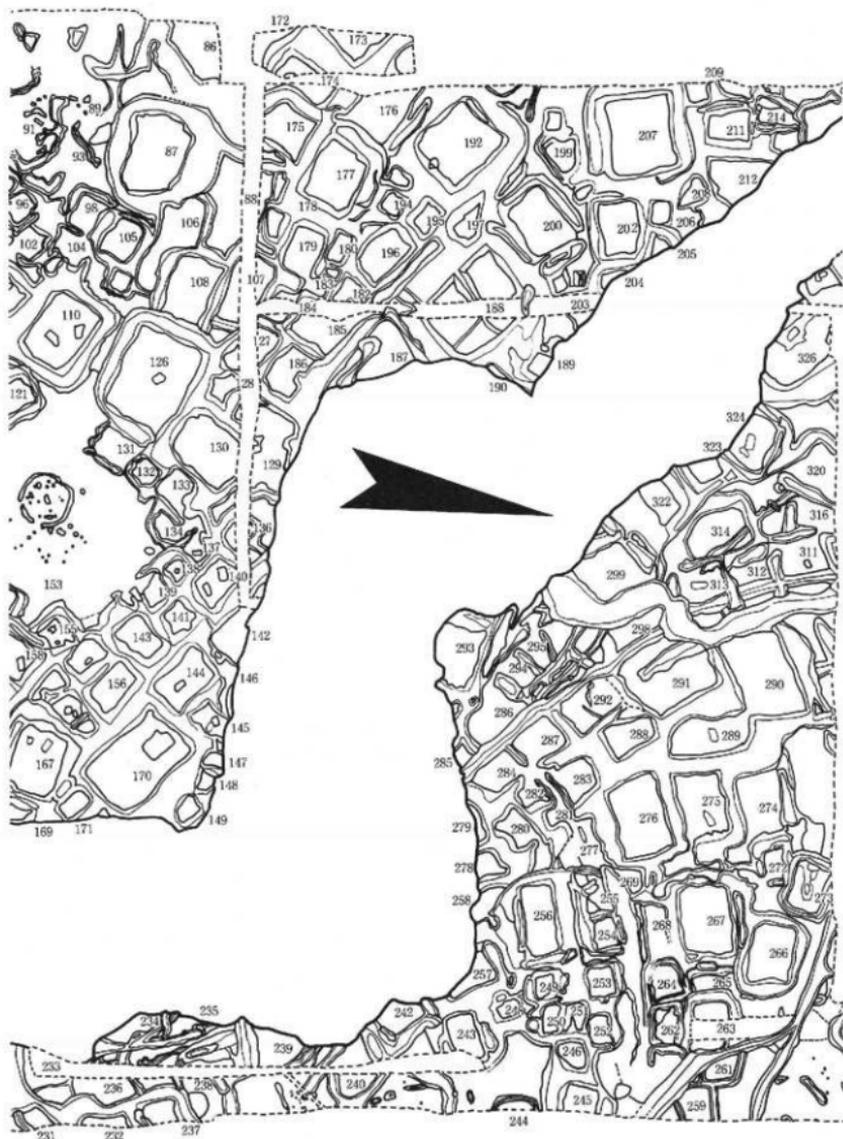
遺物 北辺溝から壺の体部（E088）が出土している。

#### M107

位置 ホーⅣとヘーⅣの境界付近、M108の北に接して所在する。

周溝 東溝、西溝は単独にめぐるが南溝、北溝は共有する形態をとる。このうち、南溝がM108の北溝を切っており、M108—M107の序列が判明する。

墳丘（平面形） 長方形を呈し、マウンドは削平され確認できなかった。



第14图 C地区平面图

主体部 中央を工事により掘削されているため確認できなかった。

遺物 南溝より広口壺（E089）1点と壺頸部片（E090）が出土している。

#### M108

位置 ホーⅣ地区の北端に位置し、周辺には更にM126、南にM105、M107、西には残地が分布する。

周溝 東辺はM126と共有し、南辺は残地があり単独である。西側はM106と周溝を共有する。

墳丘（平面形） 主軸はM126と同じく南東—北西にあるが、長軸10.7m、短軸7.2mを測り中型の規模である。

主体部 台状部には主体部と考えられる施設は検出されなかった。

遺物 本周溝墓に伴うと考えられる遺物は北辺溝から出土した壺（E091）と南溝から出土した壺（E092、E093）である。

#### M109

位置 ホーⅣの東半にあり、東にM110、西にM105、北にM104がある。

周溝 四辺を周溝がめぐる。M105との間は周溝を共有し、南辺はM108と共有する。他の2辺は単独である。

墳丘（平面形） 平面はほぼ方形で軸は南北に近く、一辺約3.1mを測る。小型の台状部である。

主体部 台状部からは特に主体部と考えられる施設は検出されなかった。

遺物 周溝内あるいは台状部からは関連する遺物は出土していない。

#### M110

位置 ホーⅣ地区の東端で、南東にM121、北にM126がある。

周溝 周溝は四辺を周回し、M121が、M110の南東辺を少し切り、他のM111、M103などは、周溝を共有すると考えられる。

墳丘（平面形） 規模は中型より少し大きく、長軸は南東—北西にあり、長軸12.0m、短軸9.1mを測る規模である。

主体部 台状部の中央やや東寄りに1基（第1）更に北辺近くに1基（第2）の長方形の土盛が検出された。第1主体部は木棺墓と考えられ、組合式と考えられる第2主体部は木棺墓とは断定し難い。

遺物 南辺溝内の溝底より少し浮いた状態で、鉢（E094）が出土した。出土状態から見て供獻土器と考えられる。

#### M111

位置 二—ホーⅣの境にあり、北に大型のM110、南にM112、西にM099がある。

周溝 北辺は、M110の周溝を切り、他は周囲の小型の周溝墓と共有する。M110側は深い、他は浅い。

墳丘（平面形） 略方形をなしており、盛土は残存していない。

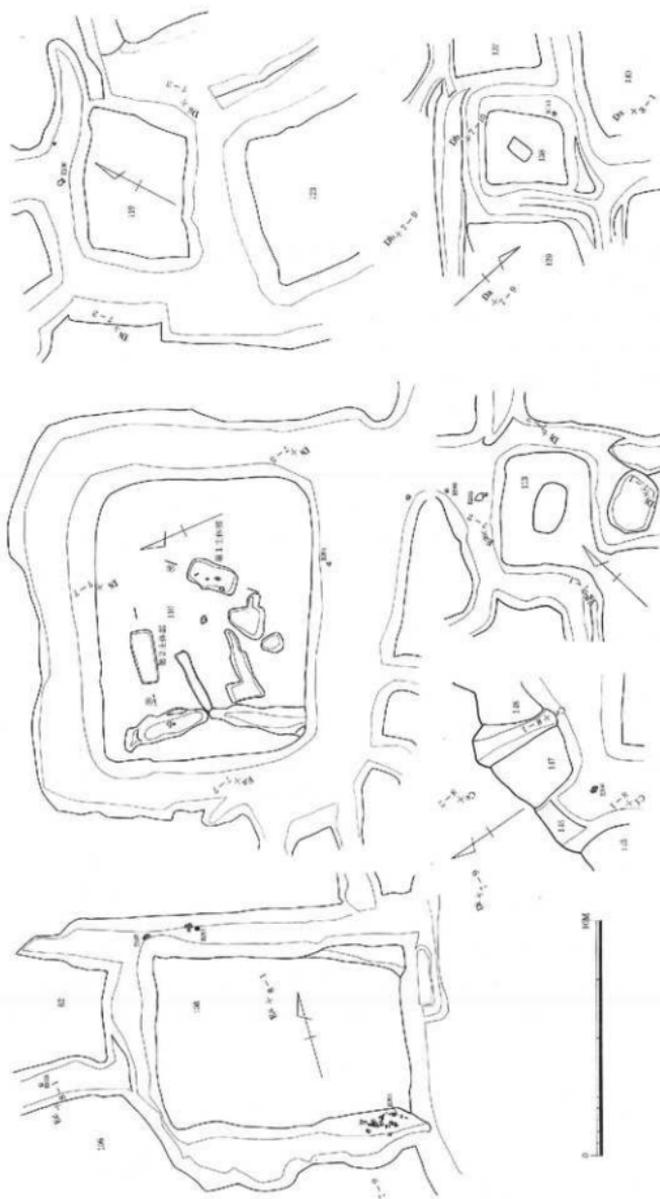
主体部 中央やや西側に長方形プランの土盛があり、木棺墓と思われる。

遺物 出土しなかった。

#### M112

位置 ホーⅢの西端にあり、北に中型のM111、南にM118、西にM101がある。

周溝 M111の間とM101の間は共有と考えられ、M118、M120との間は切られる関係にあると思われる。



第15图 M108・M110・M119・M138・M147 供献土器・主体部検出状況実測图

墳丘（平面形） 東西方向がやや長い長方形をなす。盛土は残存しない。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M113

位置 M100とM118との間にあり、M114とは陸橋部でつながる。

周溝 南隅でM114と陸橋部でつながっている以外は、各辺の周溝は周回しておりM101、M118、M117とは共有する。

西辺は単独でめぐる。

墳丘（平面形） M114と直交する長軸をもつ。長辺4.5m、短辺3.7mの台状部である。

主体部 明瞭な主体部は検出しなかったが、ほぼ中央部に隅丸方形の土盛がみられた。

遺物 北溝より壺底部（E098）1点が出土した。

#### M114

位置 S D201に切られ、M116の西、M113の南に位置する。

周溝 M116との間は共有、M115とも共有し、M077とは、S D201が切るので少々不明瞭である。

墳丘（平面形） N-30°-Wに長軸をもつ略長方形をなす。台状部は、長辺8.8m、短辺5.2mを測るが、北コーナーは、M113につながる陸橋部をもつ。

主体部 明瞭な主体部は検出されなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M115

位置 ハーⅣの北東コーナー付近に位置し、南には残地が広がるが、東にM124、西にM080、北にM116が所在する。

周溝 周溝を共有する形態をとるもので、北西コーナーに陸橋部があって残地と連なっている。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失しており、平面形は長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M116

位置 ニーⅢの南辺寄りに位置し、南にM115、東にM124、北にM118、西にM114がある。

周溝 西辺を周溝がめぐり、周辺の周溝と共有するようM123は、後に周溝を掘り込んでおり、M118とは共有である。

墳丘（平面形） 南半は、円弧状をなすが、北半は方形を呈す。軸は、M115と同一であり、長さ7.1m、幅5.3mの台状部である。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M117（残地）

#### M118

位置 ニーⅣ地区の東端にあり、南にM116、東にM123、西にM113が続く。

周溝 M116との間、M123との間、M113との間、全てを共有するものと考えられる。

墳丘（平面形） M116と基本的に同じ軸をもつ。長辺7.1m、短辺4.6mの台状部で、南部は少し細くなっている。

主体部 台状部、周溝内とも、主体部と思われるは検出されなかった。

遺物 南溝より、広口壺（E095）と壺底部2点（E097、E099）が出土した。

#### M119

位置 南にM123、東にM122、北にM121があり、ニーⅢ地区の南端よりに位置する。

周溝 M122の南西辺溝によって、東溝が切られているように見え、他は共有するとみられる。

墳丘（平面形） 東西に長軸をもつ長方形状だが、南西コーナーは少し突き出る。長軸は5.7m、短軸は4.2mを測る比較的小型の周溝墓である。

主体部 特に主体部と思われるものを検出することはなかった。

遺物 各辺の周溝内からは、供献土器と思われるものは検出しなかった。

#### M120

位置 ホーⅢ・ホーⅣの境界、M110の東、M121の南に位置する。

周溝 共有する形態をとり、隣接の周溝とすべて共有するが、切り合い関係は明確でない。

墳丘（平面形） 方形を呈するが、マウンドはすでに削平され確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M121

位置 南東にM122、南西にM125、北西にM110がある。東側は空白地である。

周溝 周溝の中で、南東コーナーだけ陸橋部がみられる。

墳丘（平面形） 南北から少し東にふった主軸をもつ長方形状で、長軸長さ8.0m、短軸5.8mの規模である。特に盛土はみられなかった。

主体部 台状部の中央やや東寄りには主体部の残存と考えられる土盛がみられた。主体部の掘り方の基底部と思われ、小口板を立てる2箇所的小ピットと墓底が認められた。

遺物 南溝より広口壺1点（E100）と壺底部1点（E101）が出土した。

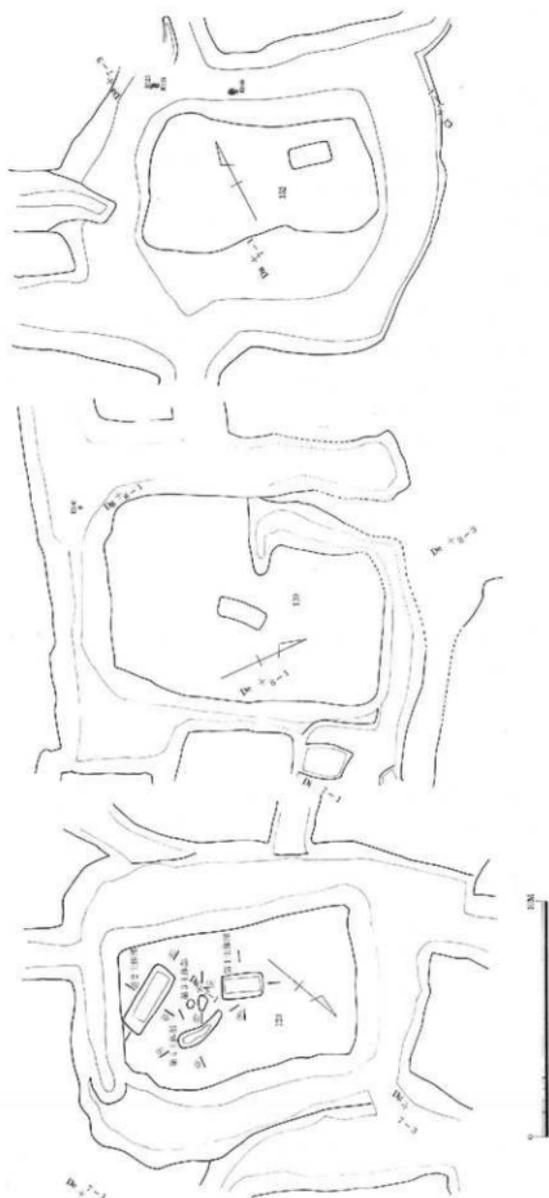
#### M122

位置 B地区の北端に近く、中央やや西よりに位置し、西にM119、M123、南にM150が存在する。

周溝 周溝は四辺をめぐり、南西辺で、M123、M119と溝が重複する。

墳丘（平面形） 長方形状で、台状部の東西辺6.5m、南北辺9.7mの規模である。台状部は、明瞭な盛土はみられず黒色土を検出した。

主体部 ほぼ中央に1、その南に1の主体部がみられた。中央主体部は掘り方をもった本棺墓である。2号主体部は、



第16图 M123・M130・M150 供献土器・主体部検出状況実測图

掘り方をもつ木棺墓と考えられる。なお、第2主体部の掘り方内から多量の土器が出土した。

**遺物** 周溝内および台状部からの遺物は北溝より鉢1点(E102)が出土したが、主体部掘り方内から弥生前期の土器が多量に出土した。

#### M123

**位置** B地区北端の中央やや西側に位置する周溝墓で、東にM122、M150が所在する。本周溝墓も南側で谷状部となっている。

**周溝** M122と境をなすようにわずかに稜を残して溝が接する北東辺から、四周をめぐらせている南西辺は、M124、M116、M118と共有するようであり、北西辺は、M119と共有しそうである。

**墳丘(平面形)** 長方形で、台状部は、東西辺6.5m、南北辺10.0mを測る。台状部は明瞭な盛土はみられなかったが、谷状部に近いので、あるいは、盛土のあった可能性が高い。

**主体部** 主体部として明瞭なものは3箇所、中央部のそれは、木棺墓と考えられる墓底がみられた。掘り方長2.7m幅1.1m、である。他の2基は、土盛墓と考えられるもので、第2号主体部は幅1.0m、長さ1.6m、深さ10cm、である。主体部から遺物(副葬品)の出土はない。

**遺物** 西溝より壺底部(E103)、南溝より壺底部片(E104)が各1点出土した。

#### M124

**位置** ニーⅢの南寄りにあり、南にM125、北にM123、西にM115がみられる。東は空白地で、距離をおいてM150がみられる。

**周溝** 南辺はM125と、北辺はM123と共有関係にある。西はM115の周溝に挟られたように重なる。北辺もややM123に偏する。

**墳丘(平面形)** 平面形は不整五角形状を呈す。

**主体部** 特に主体部と思われる墓底は検出できなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M125

**位置** 南東にM119、北東にM121、北にM110をひかえる位置にあり、ニーⅢの南端寄りにある。

**周溝** M121、M119、M112と本周溝の周辺の周溝墓の周溝墓と同溝を共有すると考えられる。ただし、北コーナーに残地があり、周溝は全周しない。

**墳丘(平面形)** 不明。

**主体部** 特に主体部と考えられる遺構は検出しなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M126

**位置** ホーⅢ地区とホーⅣ地区との境界に位置し、東にM131、西にM108があり、南にM110、北にM130がある。

**周溝** M131との間の周溝はM126が切っているとみられ、M130、M108とは、周溝を共有する。ただし、東北コーナーは、陸橋部のあった可能性が高い。

墳丘（平面形） 規模としては大型の部類に属し、長軸はM110と同じで、長軸15.0m、短軸11.6mを測る。

主体部 中央やや西寄りに長辺2.5m、短辺2.2mの方形の土盛が1基確認された。断面観察からは木棺蓋の可能性はあるが、棺の規模など明確ではない。

遺物 東溝より壺（E105、E107、E108）が、南溝より甕（E109）が出土したほか、溝内より壺（E106）と鉢（E110）が出土した。E109、E110を除き、前期の土器が多く、下層遺構に関連する可能性が高い。

#### M127

位置 ホーⅢとヘーⅢにまたがり検出されたもので、東にM128、西にM184、北にM186、南にM107が所在する。

周溝 隣接する周溝とすべて共有する。ただし、切り合いは明確でない。

墳丘（平面形） 中央部が工事により削平されており明確でないが、長方形を呈するとみられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M128（残地）

#### M129

位置 ホーⅢとヘーⅢにまたがり検出されたもので、M186の東に接して所在し、北側は旧河道によって消失する。南半は路工事によって掘削されている。

周溝 北溝は旧河道で消失。西溝はM186と共有する。南溝は工事のため削平され不明である。

墳丘（平面形） 平面形は、南半が消失しているため、不分明な点が多いが、長方形を呈するとみられるマウンドはすでに消失していた。

主体部 検出されなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M130

位置 ホーⅢの北端に位置し、M126に北接して所在する。

周溝 隣接する各周溝とすべて共有する。このうち、南溝はM126の北溝を切っており、M126-M130の羅列が判明するが、他については明確でない。

墳丘（平面形） 長方形を呈し、マウンドは削平され確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

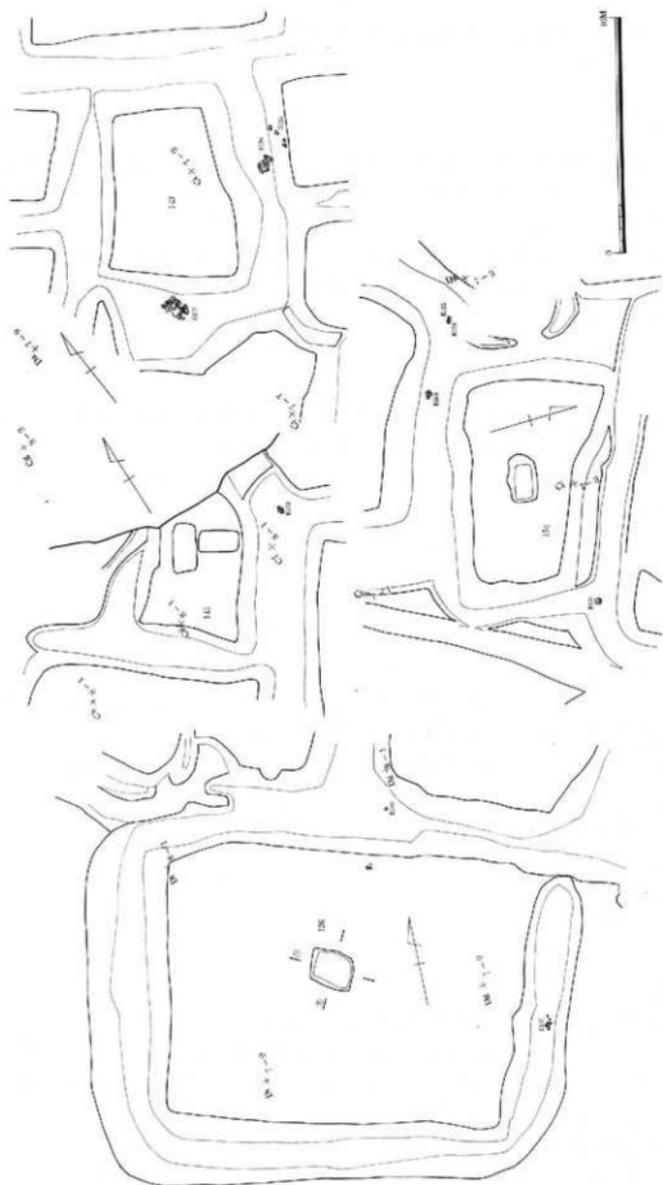
遺物 出土しなかった。

#### M131

位置 ホーⅢ地区の中央やや北寄りにあり、西に大型のM126、北にM132、M133がある。

周溝 西辺は、M126と共有し、北辺もM132と共有関係にある。南及び東は、単独で東コーナー部は随樋部がみられる。周溝は各辺ともU字状である。

墳丘（平面形） 長軸を南北から少し東に振った長方形状で、台状部、長辺7.0m、短辺5.5mの規模である。



第17图 M126・M142・M145・M154 供献土器・主体部検出状況実測図

主体部 台状部からは埋葬主体と思われるものは検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M132

位置 ホーⅢのほぼ中央北寄りにあり、南にM131、西にM126、M130、北にM133を控える。東は残地である。

周溝 南辺はM131と、西辺はM130と、北はM133と共有関係にあるものもみられる。東辺のみ単独と思われるが、東コーナーは、周溝が少し東にのびている。

墳丘(平面形) M131と共通の長軸をもった長方形状で、長辺4.0m、短辺3.4mを測る規模を有す。

主体部 台状部からは、特に埋葬主体と思われる遺構は、検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M133

位置 ホーⅢの中央やや北寄りに位置し、南にM132、西にM130、東にM134、北にM136が近接する。

周溝 M130と西辺、M132と南辺、M134と東辺を共有する。北は残地がある。

墳丘(平面形) 軸はM131、M132とほぼ同一である。台状部の北辺が、後世の擾乱をうけ、変形しているが、もともとは長辺5.5m、短辺4.8mの長方形状であったと思われる。

主体部 特に主体部と考えられるものは、検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M134

位置 ホーⅢの東北端近くで、西にM133、北にM137、東にM138があり、南は広い残地が接する。

周溝 西はM133と共有するが、他は独立している。なお、南から北にかけての東半分は、円弧状をなしている溝はほぼU字状をなす。北西コーナーには、残地につながる陸橋部をもつ。

墳丘(平面形) 長軸は南のM131からM133とほぼ同一である。ほぼ長方形状の南半に対して、残地をもつ北半は、円弧状をもつ。

主体部 主体部と思われる遺構は、把握されなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M135(残地)

#### M136

位置 ホーⅡとⅢの境界に位置し、南にM134、東にM140が位置する。

周溝 東辺溝は、M137、M140と共有関係にあり、南西辺は、残地と周溝で面している。

墳丘(平面形) M131～M133と軸は同じであるが、長軸は直角にずれる。短辺4.0m、長辺5.2mの小規模な台状部である。

主体部 中央部を擾乱溝が通り、主体部と考えられるものを検出できなかった。

遺物 供献土器と思われるものは、わずかに溝内より壺形土器(E112)の出土が知られる。



#### M137

位置 ホーII、Ⅲの境界に位置し、東南にM138、東北にM140、西にM134、M137を配する。

周溝 西隅に陸橋部をもつ以外は、周辺のM136、M140、M138と周溝を共通を共有するものと考えられる。

墳丘(平面形) 小型の周溝墓で長軸はM131などと基本的に同じである。短辺2.8m、長辺3.6mの規模で、残地を間に  
おいて、M134と続く。

主体部 東よりに東西1.0m、南北1.6mの土盛があり、主体部掘り方の残骸とみられる。

遺物 出土しなかった。

#### M138

位置 ホーII、Ⅲの境界下にあり、西にM134、東にM141、北に140があり、南は周溝をおいて、空地がひろがる。

周溝 西辺は、M137と共有するが、M134の一部を切り込む。北辺や東辺は、M140、M139と共存関係にある。

墳丘(平面形) 南北から約45度程、東に振った方向に長軸をもつ。短辺2.8m、長辺3.1mの台状部をもつ。小型であ  
る。

主体部 台状部中央に東西1.0m、南北0.5mの土盛が所在する。

遺物 北コーナーの周溝内から無頭壺(E113)が、東溝より壺底部(E114)が出土している。

#### M139

位置 空地の北東隅に接して構築された、小規模な周溝墓である。

周溝 周溝は、南西溝が空地を画するように存在し、南コーナーは陸橋部に掘り残している。他の周溝は、周辺の各  
周溝といづれも完全共有の関係にある。周溝幅は1.6~2.1m、深さ約1mを計る。周溝の断面は、通常碗状を呈する  
が、北東溝及び南東溝では、碗状の底部をさらにU字状に一段掘り窪めている。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色  
グライ粘土層を経て、青灰色グライ砂層中に底部を置く。

墳丘(平面形) やや変形しているが、方形を意図したものであろう。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M140

位置 M138の北に位置する方形周溝墓である。

周溝 周溝は、四周の周溝墓つまりM136・M137・M138・M141・M142のいづれとも完全共有の関係にある。周溝の幅  
は、2m前後、深さは北西溝で1.4mのU字状断面を示す以外は、1m前後の碗状を呈している。通常は、黒色粘土の  
地山を切り込み、青灰色砂層中に溝底を置くが、南西溝の一部ではさらに下層の地山である黄褐色砂層にまで達して  
いる。覆土は北西溝で最高の10層が識別され上部3層の厚い堆積が洪水等に起因する青灰色系のシルト層、以下が溝  
肩や盛土の崩落による細層と考えられる。

墳丘(平面形) 隅丸長方形を呈する。

主体部 墳丘の北西及び南東でそれぞれ1基検出している。南東の1基は、周溝と輪縁をほぼ同じくしているが、北西  
の1基は大きく異なる。両者とも遺存状態が不良であり、わずかに長方形プランを確認したにとどまる。

遺物 出土しなかった。

#### M141

位置 M139の北東に位置する小規模な周溝墓である。

周溝 周溝は、北東溝がM142と切り合い関係にあり、M141—M142が判明する。その他M139・M140・M143の各周溝墓とは完全共有の関係にある。溝幅は1.6~2.4m、深さ1m前後を計る。溝の断面は、いづれも腕状を呈するが、北西溝以外は、腕状の底部をさらにU字状に一段深く掘り窪めている。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色砂層中に底部を置く。

墳丘(平面形) 隅丸方形の小型の周溝墓である。

主体部 墳丘の中央で、周溝と軸線を同じくする1基(東西1.4m、南北1.1m、深さ10cm)を確認している。ただ、遺存の状態が不良で、長方形プランを確認したにとどまる。

遺物 出土しなかった。

#### M142

位置 M141の北に位置する周溝墓で、比較的規模の大きな周溝であったと予測されるが、後世の旧河道によって大きく切り取られ、現況では南コーナー付近を残すのみである。

周溝 大型の周溝墓の周溝に一般的に見られた傾向、つまり浅くて幅広い周溝がめぐっていたものと予測される。M144との関係では、M144—M142が考えられ、M144のU字状の比較的深い周溝が、その後掘開されたM142の浅くて幅広い周溝に切り入れ、わずかに北西側の一部でその痕跡を残している。この関係はM141でも同様であり、M141—M142が考えられる。M142の溝幅2.5~3.9m、深さ0.4~0.6m、断面は浅い腕状を呈している。

墳丘(平面形) 後世の旧河道に大きく切り取られているが、大型の隅丸長方形プランが推測される。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 南溝より広口壺(E116・E118)各1点が出土した。

#### M143

位置 空地に接し、その北東に位置している。

周溝 周溝は、南東溝がM156と切り合い関係にありM156—M143と推測される。南西溝は空地を面するように単独に廻り、その他の周溝は周辺の周溝と完全共有している。溝幅は2.1~2.5m、深さ1.0~1.2m、断面は腕状を基調とし、南東溝の南半以外では、さらに底部をU字状に一段掘り窪めている。土器片3個体が出土した北西溝の西側は、覆土4層が識別され、いづれもその3層中より炭化物片などとともに検出した。

墳丘(平面形) 不定形ながら長方形を意図して構築されたと考えられる。

主体部 中央に東西1.5m、南北0.7m、深さ5cmの浅い落ち込みを検出した。掘り方の残骸か。

遺物 北西溝の西側より、壺の口縁部破片1点(E115)と底部2点(E119、E120)と壺の口縁部(E121)が、又、南西溝の中央最下部より広口壺(E117)がそれぞれ出土している。

#### M144

位置 M143の北東に位置する周溝墓である。

周溝 周溝は、北西溝がM142と切り合い関係にあり、M144—M142が考えられる以外は、M145やM170と完全共有の関係にある。溝幅は、2.1~2.3m、深さ0.7~1.0m、断面は上部で開くU字状を呈している。溝は、黒色粘土を切り込



遺物 出土しなかった。

#### M145

位置 M144の北東にあり、北東側を後世の旧河道により削平されている。

周溝 周溝は、M144・M170とそれぞれ完全共有している。溝幅は2.3~2.5m、溝の深さは1m程度、断面は上部の開いたU字状又は楕円状を示している。覆土は南西溝の場合、4層が識別されるが、最上層のみ洪水等の一気に埋没した層位であり、他は溝屑や盛土の崩壊により再堆積した細層と考えられる。

墳丘(平面形) 一部、後世の旧河道によって削平されているが、長方形を意図していたと考えられる。

主体部 墳丘上で、軸線の直交する2基を検出した。西よりのものが東西1.0m、南北2.3m、深さ22cm、東よりのものが東西2.1m、南北1.0m、深さ10cmをはかるが、遺存状態が悪く、長方形プランを確認したにとどまる。

遺物 出土しなかった。

#### M146(残地)

#### M147

位置 M170の北に位置する小規模な周溝墓である。北側は、後世の旧河道によって削平され、遺存しない。

周溝 周溝は、他の周溝墓とそれぞれ完全共有の関係にある。M149と共有する東溝は、幅1.7m、深さ0.7mの断面U字状を呈している。

墳丘(平面形) 北側を旧河道に削平されて不明だが、方形を意図する小規模な周溝墓であったと考えられる。墳丘のほぼ中央を南北に浅い溝が走って、墳丘を二分している。この溝の掘削時期は分からない。2基の周溝墓という考え方も可能だが周溝の規模や溝が浅い事などを考慮して、ここでは一応、1基の周溝墓上を時期の異なる溝が他の用途で掘削されたかと判断しておきたい。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M148(残地)

#### M149

位置 M170の北に位置する小規模な周溝墓である。西コーナー部分を残して大半が後世の旧河道により削平されている。

周溝 M148、M170の両周溝墓と完全共有の関係にある。

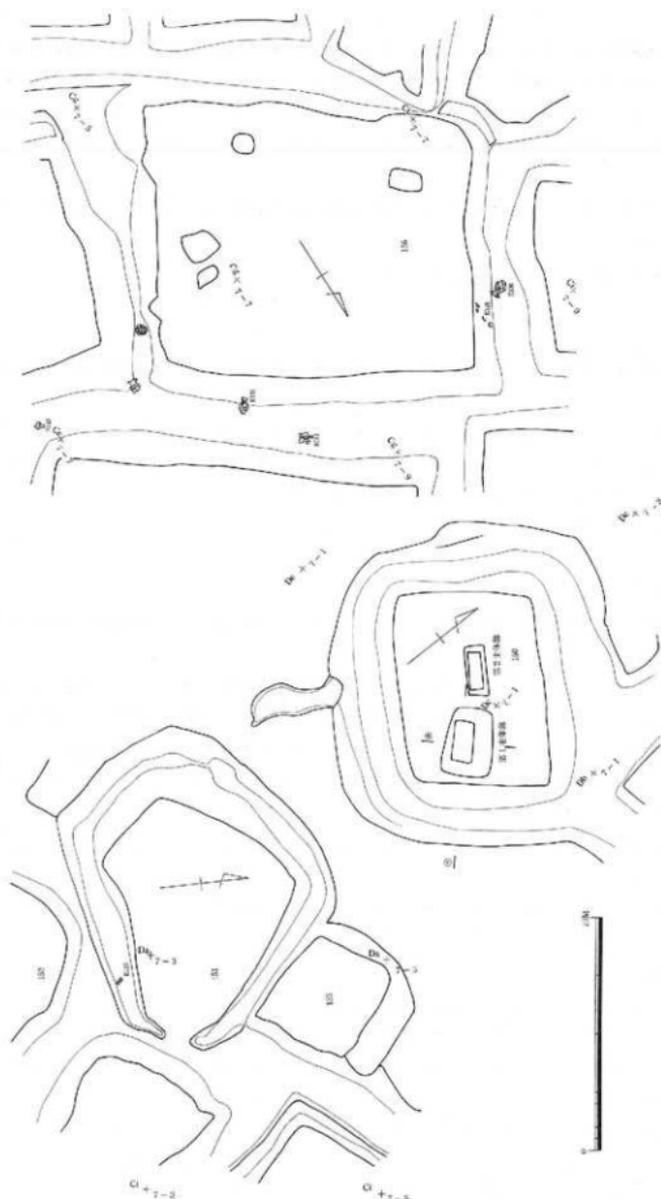
墳丘(平面形) 大半を後世の旧河道により削平されているが、遺存している西コーナーの状況から判断すると方形プランであったものと予想される。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M150

位置 B地区の北端、中央に位置し、谷状部の傾斜地に位置する。東には、M152、北東には、M151が存在する。



第20图 M150・M151・M156 供献土器・主体部検出状況実測図

周溝 溝の軸を南北からやや西に振り、掘られている。北西辺溝はM152と切り合い関係がみられる。南西辺溝は幅広く、浅いが、北西辺、北東辺溝は深い。各辺溝の規模は、南西幅2.5m、南東3.2m、北西3.0m、北東3.2mである。

墳丘（平面形） ほぼ長方形で南西辺が長い形である。本周溝墓は、盛土をもっており、墓蓋の黒色土の上に、青灰色土、黒色土の長さ10から15cm、厚み5cm程のブロックを積み上げており、平面的な広がりて積みあげているようすがわかる。これは、薄いものもある。

主体部 主体部は、台状部中央部に東西2.0m、南北0.7mの、東端に東西2.7m、南北2.0mの土盛があり、主体部の残骸とみられる。

遺物 東溝より細頸壺1点（E122）が出土している。

#### M151

位置 ニーⅡ、Ⅲの境界線にあり、南西にM150、南東にM152、北にM153がみられ、西には周溝をおいて、空白地がひろがる。

周溝 M150との間は単独、西辺も単独であり、北でM153と、西でM152と共有関係にある。

墳丘（平面形） やや変形した四辺形で、東コーナーが細くのびる。短辺5.7m、長辺10.0mの四辺形である。

主体部 中央やや東寄りに墓蓋が検出され、主体部と考られる。

遺物 出土しなかった。

#### M152

位置 B地区のほぼ中央の北端にあって、西にはM150、北にM151が位置している。本周溝墓は、谷状部の南向き緩傾斜面に造られている。

周溝 南東辺周溝は谷状部にあって、明瞭な溝とはならないが、他は微高地にあるので、明瞭な状態で検出できた。

墳丘（平面形） やや変形した形状を呈す。丁度 調査用トレンチの畦にあったため、盛土全容は不明であったが、周溝墓のベース土がゆるく南向きに傾斜している上に南に厚く、北に薄い状態で盛土が観察された。盛土は厚さ5～10cm、長さ15～20cmのレンズ状のブロックがみられ、平面的に積みあげた状態であった。なお、この盛土は、黄灰色、黒色土の互層になっているといえる。

主体部 台状部中央やや東よりに1基確認されたが、規模は、長辺2.1m、短辺0.8m、深さ24cmの墓域内に木棺を埋置したようである。

遺物 周溝に伴う遺物は北溝より広口壺（E125）、鉢（E126）の出土があった。

#### M153

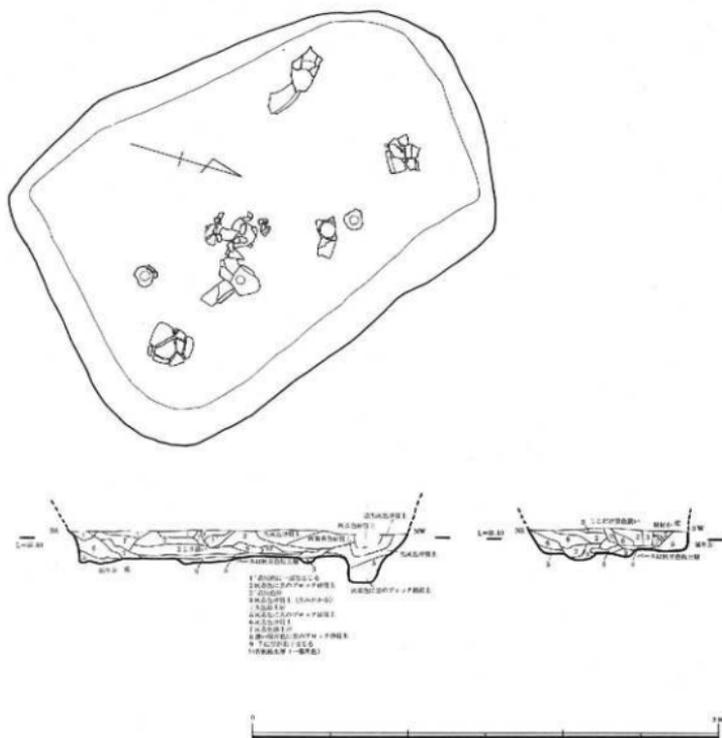
位置 M151の北に位置する小規模な周溝墓である。西側一帯には残地が広がっている。

周溝 空地の広がる北西溝及び北東溝は周溝が単独に廻るが、南西溝はM151と、南東溝はM158とそれぞれ完全共有の関係にある。周溝は幅2m余、深さ1m前後を計り、断面はやや開き気味のU字状を呈している。覆土は最高8層が識別される。

墳丘（平面形） 小規模な周溝墓で、正方形に近い形を示している。

主体部 痕跡が認められず。

遺物 出土しなかった。



第21図 M150 第2主体部平面・断面実測図

#### M154

**位置** M152の北東に位置し、南側一帯には谷状の低平地が広がっている。

**周溝** 谷状の低平地が広がる南東溝側は、周溝が単独に廻っているが、他の周溝は、隣接する各周溝基M151・M152・M158・M161とそれぞれ完全共有の関係にある。周溝は、南東溝及び南西溝が上部の大きく開いた断面J字状を呈しているのに対し、他は輪状となる。溝幅は1.6mから3.1mと個差に富み、深さは1m前後を計る。溝は、通常、黒色粘土の地山を切り込み、青灰色グライ粘土層を経て、青灰色グライ砂層中に低部を置くが、北東溝の一部のみ、さらに下部の灰白色砂層にまで達している。覆土も北東溝で最高10層が識別される。

**墳丘(平面形)** 北コーナーがやや突出しているが、隅丸長方形を意図したものである。

**主体部** 墳丘のほぼ中央で、墳丘の長辺に長軸線を平行させた1基(東西2.4m、南北1.3m、深さ5cm)を検出した。木棺蓋であったと思われるが、遺存状態が不良であるため詳細は不明である。

**遺物** 南東溝のやや上部より細頸蓋の口縁部(E123)、マウンド上より壘1点(E124)が出土した。

#### M155

位置 西側一帯に残地をひかえ、残地の東の一隅を切り込むように構築された方形周溝墓である。

周溝 北東溝、北西溝、南西溝とも幅1.5m前後、深さ1.0m程度のU字溝である。南西溝には一部で溝幅を狭めて急峻なV字溝に近い形状を示す箇所も認められる。南東溝は、碗状の比較的浅くて広い溝。M158に完全包括された溝であるのかもしれない。

墳丘（平面形） やや不定形となる箇所もあるが、方形周溝墓を意図して構築されたものである。

主体部 不定形な落ち込みを検出している。東西1.7m、南北1.5m、深さ46cmをはかる。

本周溝墓に伴う遺構かどうか不明である。

遺物 出土しなかった。

#### M156

位置 M158の北に位置する。

周溝 北溝及び西溝は、幅が4.2m、深さ1.1m程度の比較的広くて浅い碗状の溝である。対して、東溝及び南溝は、幅が4mに満たないU字形の溝である。いずれの周溝とも隣接する各周溝とそれぞれ完全共有の関係にある。切り合いは明確でないが、M170-M156、M156-M167、M156-M158、M156-M155の層序が推定される。

墳丘（平面形） 比較的整然とした長方形プランを呈している。

主体部 東西方向を長軸とする2基の主体部を検出した。両者は南北に併存し、南一北の切り合い関係が認められる。南のそれは墓蓋を2.5×1.1mに掘り込み、そこへ1.7×0.8mの組み合わせ式木棺を埋置する。黒灰色粘土に変様した木棺の痕跡が比較的良く残っている。北の墓蓋は、上部を不定形な皿状に大きく広げたもので、下部は1.3×1.2mの正方形に近い形状に掘り込んである。黒灰色粘土の棺材の痕跡が残っており、やはり組み合わせ式の木棺墓であったと考えられる。後者は小児用か。

遺物 西溝より広口壺（E128、E136）2点、南溝より蓋底部（E127）、甕口縁部1点（E134）が、北溝より広口壺（E129）、甕（E130）、細頸壺（E131）の各1点が出土した。

#### M157（M156と同一）

#### M158

位置 M153の東に位置する方形周溝墓である。

周溝 北西溝の一部が空地をひかえて単独に廻る以外は、いずれも四周の各周溝墓と完全共有の関係にある。周溝は幅2m～3m、深さ1mに満たない比較的浅くて広い溝で、断面は全体として逆台形に近い碗状を示している。北東溝では地山の隆起が著しく、溝底の一部が地山としては5層めの灰褐色砂層にまで達している。

墳丘（平面形） 比較的整然とした長方形を呈している。

主体部 墳丘の北東辺に亘って東西1.9m、南北1.3m、深さ28cmの長方形の落ち込みを1基確認したが、遺存状態が悪く、当周溝墓に伴うものか否か不明である。

遺物 北西溝内の中位より広口壺（E133）、最下層より蓋の胴部（E132）がそれぞれ出土した。

M159 (残地)

M160 (残地)

M161 (158と同一)

M162

位置 南に谷状の低平地をひかえた小規模な周溝墓である。

周溝 南溝と西溝は低平地をひかえて単独にめぐるが、東溝はM065と完全共有し、北溝はM163とM163-M162の切り合い関係にある。周溝の断面は、単独にめぐる南溝と西溝が比較的幅が広くて浅い桶状にあるのに対し、東溝と北溝は狭く深いU字状を呈している。特に北溝でその傾向が顕著となり、深さは優に1mを越えており、溝底は灰白色砂層の地山にまで達している。

墳丘 (平面形) 小規模ながら、東西を長軸とする隅丸長方形プランを呈している。

主体部 やや北に偏して、南北を長軸線とする1基を確認した。東西0.75m、南北1.4m、深さ3cmで遺存状態が悪く、詳しいことは不明ながら木棺墓であったと予想される。

遺物 M065と共有する東溝内より、わずかに溝底より浮くかたちで、壺の胴底部1個体 (E135) が出土している。

M163

位置 M162の北に位置する方形周溝墓である。

周溝 北溝および西溝は、後に掘開される痕跡により破壊されている。ただ痕跡は、両溝にほぼ沿うように掘開されており、おそらく固地としてその痕跡では、深さ0.7mのU字溝であったことが知られる。M168と接する東溝は、U字状の溝内に新しく掘開された上部の大きく開く急峻なU字溝がすっぽりとおさまっている。いずれの溝が本溝に伴なうのか判別し難いが、両周溝墓の他溝の一般的な形状から推測すると、M163-M168の新旧関係が予想される。南溝も、やはりおだやかなU字状を呈する溝で、西側では一部溝底が通常の青灰色砂層を越えて灰白色砂層にまで達している。M162とは切り合い関係にありM163-M162が判別する。又、M065とは、切り合い関係は不明だが、両周溝間に用途の明らかでない溝が2条走っている。その内1条は両周溝を切る浅く広い溝で、他の1条は、M065の北東溝に切られる古い溝である。

墳丘 (平面形) 周溝の肩を一部痕跡によって破壊されているが、隅丸方形プランを呈する。

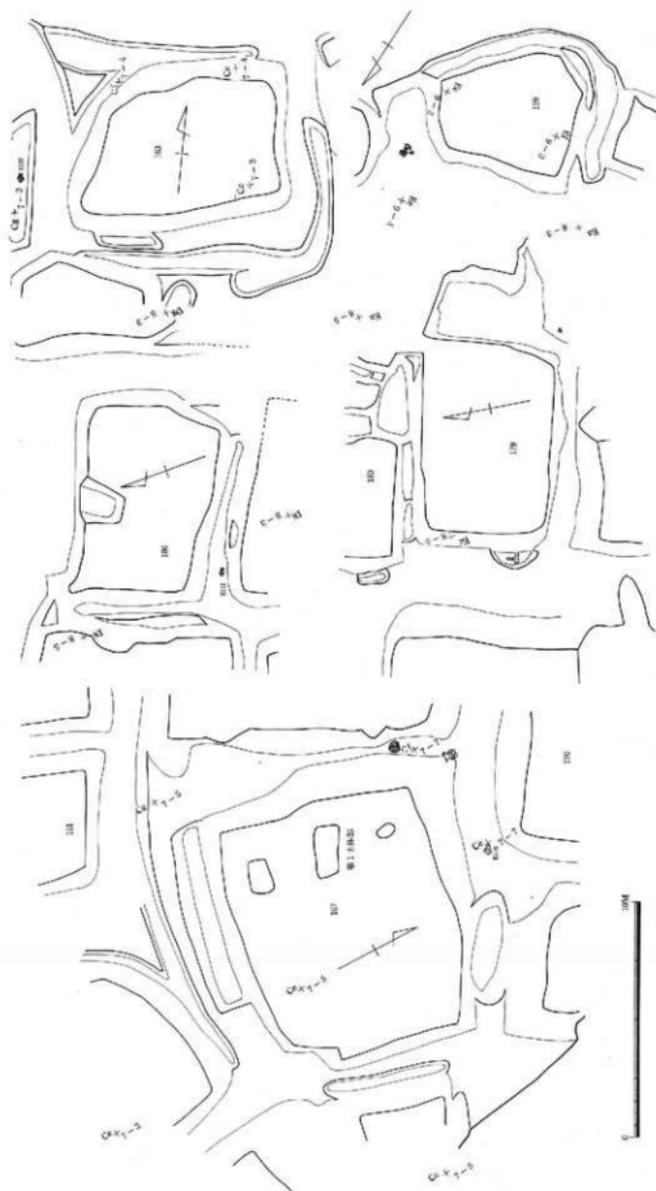
主体部 精査の結果2基検出した。1基は、遺存状態がおしなべて不良ながら、木棺墓であることが判明しており、板材が黒灰色粘土に変換しているものの、小口幅0.5mを計る。他の1基は、墓丘上部が大きく皿状に広がって不定形な平面形態を示すが、墓丘下部は、長軸1.8m、短軸0.7mの比較的正確な長方形を呈している。やはり木棺墓で、板材は黒灰色粘土に変換していた。

遺物 西溝内中位より壺 (E137) 1点が出土している。

M154 (M156と同一)

M155 (M156と同一)

M156 (M156と同一)



第22图 M163・M167・M179・M186・M199 供献土器・主体部検出状況実測図

#### M167

**位置** M163の北に位置する方形周溝墓で、両溝間には後世痕跡が掘開されることになる。

**周溝** 南溝は単独にめぐり、M169と接する東溝は切り合い関係にあってM167-M169が判別される。両溝とも幅1.5m、深さ1.0m前後、断面は上部の開いたU字状を呈している。北溝はM170とM171と完全共有関係にあり、幅2.4m、深さ1.0mの輪状の断面形を示す。南溝や東溝のように明らかに本溝の溝と比べると規模・形状が異なっており、北溝はM170とM171の南溝によって完全包括されてしまったと解釈した方が良いのかもしれない。

**墳丘（平面形）** 隅丸方形を意図したものである。

**主体部** 西溝側で3基を検出した。中でも中央の1基が比較的遺存状態が良好であった。中央のそれは、墓誌上部が大きく皿状に広がり不定形な平面形態を示しているが、墓誌下部は、長軸1.5m、短軸1.1mの長方形を呈している。棺材が黒灰色粘土に変様しているが、かつては、6枚の板材を組み合わせる組み合わせ式の木棺墓であったと思われる。

**遺物** 南溝内より広口壺の口縁部2点（E138、E139）、M171と共有する北溝内より広口壺の口縁部1点（E140）、M166と共有する西溝内上層より、鉢（E141）と甕の底部（E142）がそれぞれ出土している。

#### M168

**位置** M163の東に位置する小規模な方形周溝墓で、そのすぐ東は弥生時代後期の旧河道によって大きく削平を受けている。

**周溝** 北溝はM169の南溝とともに、両者が距離をおいてそれぞれ単独に溝を掘開しているが、その後、弥生時代後期に至り、両溝間に環濠が形成される。北溝は、上部が大きく開く急峻なU字溝である。M163と接する西溝はU字状の溝内に新しく掘開された溝がすっぽりおさまっている。いずれの溝が当周溝に伴うものか判別し難いが、新しい溝の形状は北溝と同様の上部が大きく開いた急峻なU字溝である。四周の溝が、同様の形状に掘開されることが多いという一般的傾向から判断すれば、M163-M168の新旧関係が成り立つ。南溝はM066と完全共有の関係にあるが、広くて比較的浅い輪状の溝であることを考慮すれば、西溝と同様の理由から、M168の溝がM066の溝によって完全包括された結果と考え、M168-M066の新旧関係を推測することも可能である。

**墳丘（平面形）** 小規模ながら、隅丸方形を意図したものである。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 出土しなかった。

#### M169

**位置** M168のすぐ北に位置し、M168と同様に小規模な周溝墓である。

**周溝** 南溝は、M168の北溝とともに両者が距離をおいてそれぞれ単独に溝を掘開する。断面は上部のやや開いたU字状を呈している。西溝は、M167と切り合い関係にあり、M167-M169が判別する。やはり上部の幾分開いたU字状の断面形態を示す。両溝とも覆土は黒色粘土を基調としたもので、最高4層が識別される。

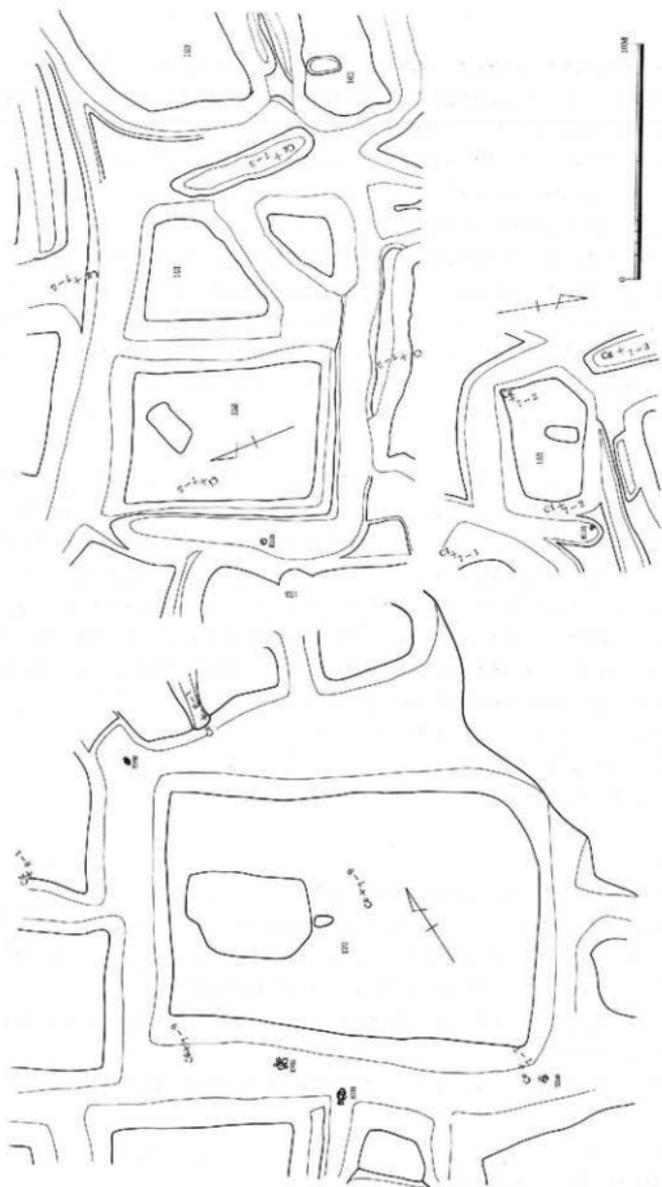
**墳丘（平面形）** 東側を後世の旧河道により一部削平されているが、隅丸方形を意図した小規模な周溝墓である。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 南溝内より受口状口縁壺の口縁部（E143）広口壺の口頸部（E144）各1点と底部（E145）が出土している。

#### M170

**位置** M167の北に位置する大型の周溝墓である。



第23图 M158・M162・M170 供献土器・主体部検出状況実測图

**周溝** 周溝は、四周の周溝墓とそれぞれ完全共有の関係にあり、大型の周溝墓に典型的な浅くて幅広い周溝である。極端な例では、M149との周溝幅4.7m、深さ0.9mの椀状を呈している。溝は、通常黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中にその底部を置くが、南西溝の一部では下層の地山である黄褐色砂層さらに灰褐色砂層に至って溝底を置く。覆土は、南西溝で最大10層が識別され、上位3層の厚い堆積層が洪水等に起因する青灰色系のシルト層、して下の細層が濃屑や盛土の崩落によって再堆積した各層位と考えられる。

**墳丘（平面形）** 大型の隅丸長方形プランを呈する。

**主体部** 墳丘の北西側で、周溝と軸線をほぼ同じくする1基を検出した。墓柱は長軸2.3m、短軸1.1mの長方形を呈し、木棺を埋置していたものと考えられる。断面観察の結果、木棺は組み合わせ式の木棺と考えられ、棺材そのものは腐植を帯びた黒色系の粘土に変質しており、長さ1.7m、幅0.6m程度を計る。覆土は黄灰色の砂層よりなる。墓柱の小口側両端はやや深くなる傾向が認められるが、それが小口板を落とし込んだことに起因するのかどうかについては所定し難い。

**遺物** 南西溝内の最深部より鉢（E151）や細頸壺（E146、E148）、北東溝内より壺の口縁（E149）北コーナー付近より壺（E147、E150）がそれぞれ出土している。

#### M171

**位置** M170の南東にある小規模な周溝墓である。この周溝墓のすぐ東側一帯は、後世の旧河道によって大きく削平され、周溝墓は遺存していない。

**周溝** 周溝は、隣接するM170、M167の各周溝墓と完全共有の関係にある。溝幅2.5m弱、深さ1m程度、断面は椀状を呈している。

**墳丘（平面形）** 小規模ながら長方形プランを意図している。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 出土しなかった。

#### M172

**位置** へーⅣの西端に位置し、M174の西、M173の南に所在する。

**周溝** 隣接する各周溝と共有関係にあるが、切り合いは明確でなかった。

**墳丘（平面形）** 方形を呈するとみられるがマウンドは削平され確認できなかった。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M173

**位置** へーⅣの西端に位置し、M172の北、M176の西に所在する。

**周溝** 隣接する各周溝と共有関係にあるとみられるが、調査が限定されていたため明確にできなかった。

**墳丘（平面形）** 方形を呈するとみられるが、明確でなくマウンドもすでに削平され、確認できなかった。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M174

位置 ヘーⅣの南西コーナーに位置し、東にM175、西にM172、北にM176と接する。北西コーナーから南東コーナーにかけて斜方向に工事により掘削を受ける。

周溝 周溝は全周するとみられるが、それぞれ隣接する周溝と共有関係にある。ただし南溝は隣接部が残地とみられ、単独溝と考えられる。東溝はM175の西溝と共有するが、切り合いは不明。北溝の場合はM176の南溝を切っており、M176-M174の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土（黒色粘土混入）、第3層が灰青色粘土、第4層が灰青色粘土（黒色粘土混入）、第5層が灰青色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドすべて消失し、やや南北に長い長方形を呈する。

主体部 南より長辺2.1m、短辺0.8m以上、深さ28cmの長方形の掘り込みがあり、木棺の掘り方の可能性があるが、その痕跡は検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M175

位置 ヘーⅣの西南コーナーに位置し、東にM088、西にM174、南にM085、北にM177が接する。南東コーナーが工事により消失している。

周溝 南溝が失われているほか、それぞれ隣接の周溝と共有関係をもつ。東溝は切り合い関係は不明で、西溝・北溝も切り合いは明確にできない。周溝内の層序は第1層が灰青色粘土、第2層も灰青色粘土に黒色粘土が混入、第3層が暗灰青色粘土に黒色粘土が混入、第4層が黒色粘土に暗灰青色粘土が混入する。

墳丘（平面形） マウンドは消失するが、平面形はほぼ方形である。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M176

位置 ヘーⅣの南西コーナー付近に位置し、東にM177、西にM173、南にM174、北にM192が所在、南西コーナーを狭く工事により覆われている。

周溝 全周するとみられ、いずれもコーナー付近が浅くなっている。各周溝は隣接する周溝と共有関係にある。南溝はM174の北溝に切られており、東溝・北溝とも切り合い関係は不明であった。これによりM176-M174の序列が判明する。溝内の層序は大きく4層に類別され、第1層は暗灰青色粘土、第2層は暗灰青緑色粘土、第3層は灰青色粘土、第4層は黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失しており、平面形は一部欠失するもののほぼ長方形を呈するとみられる。南東コーナーは、やや突起状に突出している点が注目される。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M177

位置 ヘーⅣの中央南より所在し、東にM179、M180、西にM176、南にM175、北にM193、M194、M196が接する。

周溝 全周して隣接の周溝といずれも共有関係にある。東溝はM179の西溝に切られ、西溝は切り合いは不明。南溝はM

082の北溝に切られ、北溝は切り合いが不明であった。これらにより、M177—M179、M177—M082という序列が判明した。溝内の層序は4層に類別され、第1層は灰青色粘土、第2層は暗灰青色粘土、第3層が暗灰青色粘土に黒色粘土が介入、第4層は黒色粘土に暗灰青色粘土が混入していた。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失しており、ややいびつな長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M178

位置 ヘーⅣの南端に位置し、北にM179、東にM107が所在する。

周溝 西溝が単独でめぐれるほか、各周溝は隣接の周溝と共有関係にある。切り合い関係は不明。

墳丘（平面形） 長方形を呈し、マウンドは削平にされ確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M179

位置 ヘーⅣの南西コーナー付近に位置し、西にM177、北にM180、M185、南にM178、東にM184が所在する。

周溝 周溝は北東コーナーに残地状の陰極部があるほか、全周して隣接の周溝と共有関係にある。まず、南溝はM178の北溝を切っており、西溝はM177の東溝を切られていた。東溝については、M184の西溝に切られており、北溝については切り合いは検出できなかった。これにより、M179—M178、M177—M179、M184—M179の序列が判明する。

墳丘（平面形） 平面形はいびつな長方形を呈し、マウンドは全て削平をうけている。

主体部 検出しなかった。

遺物 西溝より細頸壺1点（E152）の出土が知られる。

#### M180

位置 ヘーⅣの南西コーナー付近にあり、東にM185、西にM177、南にM179、北にM196が所在する。

周溝 周溝は全周し、隣接の周溝と共有関係にある。南溝・北溝の切り合いは不明であるが、東溝の場合はM185の西溝を切り、西溝の場合はM177の東溝を切っていた。これによりM185—M180、M177—M180という序列が判明する。周溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が黒灰色粘土、第3層が暗灰青色粘土、第4層が黒灰色粘土に暗灰青色粘土がまざる。

墳丘（平面形） マウンドは削平されているが平面形は長方形を呈する。小型の方形周溝墓である。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M181（残地）

#### M182

位置 ヘーⅣの東端縁に位置し、東にM185、西にM196、南にM183が所在する。

周溝 共有の形態をとり隣接の周溝と切り合うが、切り合い関係は明確でない。

墳丘（平面形） 方形を呈するとみられるが、マウンドは削平され確認できなかった。

主体部 中央に東西1.0mの楕円形の落ち込みがあり、主体部掘り方の一部とみられる。溝内よりミニチュアの算盤玉形の体部をもつ壺1点が出土している。

遺物 主体部掘り方より、ミニチュア壺（E153）1点が出土している。

#### M183

位置 へーⅣの南よりに位置し、南にM179、西にM180が所在する。

周溝 隣接の周溝と共有関係にあるが、切り合いは明確でない。

墳丘（平面形） 方形を呈し、マウンドは削平されて確認できなかった。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M184

位置 へーⅣ、ホーⅢ・Ⅳにまたがり所在するもので、南にM107、北にM185、西にM179、東にM127が所在する。東半は既工事により消失していた。

周溝 南溝を消失するほか、各周溝は隣接する周溝と共有関係にあり、北西コーナーに陸橋状の残地が残る。北溝・東溝の切り合いは不明であるが、西溝はM179の東溝を切って築造されておりM179～M184の序列が判明する。溝内の層序は3層に類別され、第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰色粘土、第3層が黒色粘土に暗灰色粘土が混入していた。

墳丘（平面形） 平面形は過半を掘削されているため不明瞭であるが、ほぼ方形とみられる。

主体部 全く検出できなかった。

遺物 供献土器は全く検出できなかった。

#### M185

位置 へーⅢ、へーⅣにまたがり所在するもので、東にM186、北にM187、南にM127、西にM180～M196が所在する。中央を斜め方向に後世の攪乱を受けている。

周溝 周溝は周囲のM186、M187、M196、M180、M185と共有し、M179との間は「陸橋部」が所在する。まず東溝はM186の西溝によって切られ、北溝はM187の南溝を切っていた。西溝はM196の東溝に切られていた。これによりM185～M186、M187～M185、M196～M185の序列が判明した。周溝内の層序はほぼ3層に分かれ、第1層は灰青色粘土、第2層は灰青色粘土（黒色粘土を含む）、第3層は黒色粘土層であった。

墳丘（平面形） 後世の攪乱でやや不明であるがほぼ長方形を呈し、南に一部陸橋状の残地が存在する。

主体部 主体部は不明であるが、東半・西半のそれぞれ中央に若干の落ち込みがあり、主体部掘り方の残骸の可能性もある。

遺物 出土しなかった。

#### M186

位置 へーⅢの南西コーナー付近に位置し、北はM187、西はM185、南はM127、東はM129に接する。



周溝 隣接する墓の周溝と共有関係にあり、南東コーナーの一部を除き全周する。南溝はM127の北溝が切っており、西溝はM186がM185の東溝を切っている。北溝はやや不明であるが、M187がM186を切っていた。これらにより、M187-M127、M185-M186、M186-M187という序列が判明する。溝内はおよそ3層に分類され、第1層は青灰色砂質粘土、第2層は黒色粘土、第3層は黒灰褐色粘土である。

墳丘（平面形） 平面形はややいびつな長方形で、マウンドは消失していた。

主体部 主体部は未検出。

遺物 南溝より広口壺（E111）の出土があった。

#### M187

位置 へーⅢ、へーⅣにまたがり所在するもので、北東部の過半は旧河道によりすでに消失していた。西にM188、南にM185が所在している。

周溝 南溝がM185の北溝と、西溝がM188の東溝と共有関係にあり、南溝はM186の北溝を切り、M185の北溝に切られていた。西溝はM188の東溝を切っていた。これによりM186-M187、M187-M185、M188-M187という序列が判明する。

墳丘（平面形） 北東部を欠失しているが、ほぼ長方形の平面形をとるものとみられる。

主体部 主体部は全く検出できなかった。

遺物 溝内の供献土器は皆無であった。

#### M188

位置 へーⅢ・Ⅳにまたがって所在し、東にM187、西にM200、南に残地をはさんでM195、M196、北にM189が所在する。

周溝 全周し、南溝を除いて隣接の周溝と共有関係にある。ただし西溝・北溝の切り合いは不明で、東溝のみM187の西溝に切られていることが判明し、M188-M187という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土（灰褐色のブロック）、第3層が黒色粘土、第4層が黒色粘土に青灰色粘土ブロック混入したものであった。

墳丘（平面形）すでに削平をうけ消失していたが、平面形は大規模な長方形を呈する。ただし、北西コーナーから南東コーナーにかけて幅2m前後の既掘削があり、かなり変形を受けていた。

主体部 明確な遺構の検出はなかったが、北西コーナーより不整長楕円形の掘り込みの一部が検出されており、埋葬施設の痕跡の可能性も考えられる。

遺物 北溝より壺1点（E154）が出土した。

その他 南中央から北に向け、黒色粘土を充填した幅1.8m、深さ60cmの溝が走る。下層遺構に伴うものである。

#### M189

位置 へーⅢの北西角に位置し、北半を旧河道によってえぐり取られている。東にM190、西にM204、南にM188が所在する。

周溝 全周するとみられるが、東溝と南溝が隣接の周溝と共有関係にある。西溝・南溝の切り合いは不明であるが、東溝は、M190の南溝を切っておりM190-M189という序列が判明する。周溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層

が灰青色粘土に黒色粘土が介入したものの、第3層が灰青色粘土に灰色粘土が介入したものの、第4層が暗灰青色粘土、第5層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) マウンドはすでに削平をうけ消失している。平面形は西辺を既掘削で、北辺を旧河道Cでえぐられ明確でないが、中規模の長方形を呈すると考えられる。

主体部 大半が旧河道により消失しているため不明。

遺物 出土しなかった。

#### M190

位置 へーⅢ中央に位置し、M188の北、M189の東に所在する。

周溝 隣接の同溝と共有関係にあるとみられるが、切り合いは明確でなかった。

墳丘(平面形) 大半を旧河道Cにより削平され不明。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M191

位置 へーⅣの西端に位置し、M192の西に所在する。

周溝 隣接の各周溝と共有関係にあるとみられるが、切り合いは確認できなかった。

墳丘(平面形) 大半が既掘削で消失しており確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

遺物 東溝より壺1点(E155)が出土した。

#### M192

位置 へーⅣ、中央西よりに位置し、東にM193、M195、南にM176、北にM200などが所在する。

周溝 南西コーナーの一部が欠失するが、ほぼ全周し隣接の周溝と共有関係にある。ただいずれの場合も、切り合いは不明確で、その先後を決定するに到らなかった。周溝内の層序は、第1層が暗灰青色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) マウンドは消失していたが平面形は比較的大型の方形を呈する。西辺の掘に浅い落ち込みが認められるが、性格は不明。

主体部 検出できなかった。

遺物 東溝より壺2点(E156、E157)、壺底部2点(E158、E159)が出土した。

#### M193(残地)

#### M194

位置 へーⅣの中央に位置し、M177の北、M195の南に所在する。

周溝 隣接の各周溝と共有関係にあるが、切り合い関係は明確でなかった。

墳丘(平面形) 方形を呈し、マウンドは削平され確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M195

位置 へーⅣのほぼ中央に位置し、東にM196、西にM192、南にM193、北にM188が所在する。なお北側M188との間には細長い残地がのぞいている。

周溝 全周し、隣接の周溝と共有関係にある。北溝のみがやや深く掘り込まれている。東溝・西溝・北溝については、切り合いは明確でないが、南溝はM194の北溝に切られていた。これによりM195-M194の序列が判明する。周溝の層序は、第1層が暗灰青色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘（平面形） すでに消失、やや東西に長い長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M196

位置 へーⅣのほぼ中央に位置し、東にM185、西にM193、M195、南にM180-M177が、北には残地をはさんでM188が所在する。

周溝 全周して、北溝を除き隣接する周溝と共有関係にある。西溝・南溝の切り合いは明確でないが、東溝についてはM185の西溝を切っており、M185-M196という序列が判明する。周溝の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が黒色粘土である。

墳丘（平面形） すでに削平消失しているが、平面形は中規模の長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった

#### M197（残地）

#### M198（残地）

#### M199

位置 トーⅣとへーⅣの境界に位置し、東にM200、南にM192、北にM202、M207が所在する。

周溝 全周するか、東溝・南溝が他より「L字」に深く掘られている。隣接の周溝と共有関係にあるが、北と西には残地があり、東溝のみがM200の西溝と切り合い関係にあるが不明である。層序は、第1層が暗灰青色粘土、第2層が暗灰色粘土、第3層は黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドは全て消失し、平面形はややいびつな長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 北溝より広口壺（E160）、壺底部1点（E161）が出土した。

#### M200

位置 チーⅣの北端に位置し、東にM188、西にM199、M202、南にM192、北に残地をはさんでM189、M204が所在する。

周溝 全周し、周辺の周溝と共有関係にあるが、南・西・北溝はそれぞれ深く掘削されていた。東溝・南溝の切り合いは確認できず。溝内の層序は、第1層が暗灰色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層は黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドは消失し、平面形はいびつな長方形を呈する。

主体部 全く検出できなかった。

遺物 西溝より細頸壺1点（E162）が出土した。

#### M201（残地）

#### M202

位置 トーⅣの南端に位置し、東にM204、西にM207、南にM200、北に残地をはさんでM212が所在する。

周溝 全周し、V字状に深く掘られている。周囲の周溝と共有関係にあり、溝内の層序は、第1層が暗灰色粘土、第2層が暗青色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失していたが、端正な長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M203（残地）

#### M204

位置 トーⅣの南東コーナーに位置し、西にM202、南に残地をはさんでM188が所在し、北東部に所在する旧河道Cにより、その過半を消失していた。

周溝 西溝と南溝の一部のみ残存するが、いずれも隣接の周溝と共有関係にあり、南溝の切り合いは不明であるが、西溝はM202の東溝に切られ、MM202-M204の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が暗灰色粘土、第2層が暗青色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドは削平され、平面形は明確でないが、方形とみられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M205（残地）

#### M206（残地）

#### M207

位置 へーⅣの南西コーナーに位置し、東にM202、南にM199、北にM209、M211が所在する。

周溝 全周し、隣接の周溝と共有関係にある。東溝を除き、深く掘り下げている。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失していたが、平面形は端正な方形に近い長方形で、比較的大型であった。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

M208 (残地)

M209

位置 トーIVの西端に位置し、東にM211、南にM207が所在する。

周溝 西半が消失しており、西溝と南溝・北溝の一部は完全に検出し得ている。隣接の周溝とは共有関係にある。

墳丘 (平面形) マウンドは消失しており、平面形は長方形とみられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

M210 (残地)

M211

位置 トーIVの西よりに位置し、東にM212、西にM209、南にM207、北にM216が所在する。

周溝 全周し、周囲の周溝と共有関係にある。このうち、東溝・西溝・北溝がやや深く掘られている。溝内の層序は、

第1層が青灰色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が黒灰色粘土であった。

墳丘 (平面形) マウンドはすでに消失し、平面形はややいびつな長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

M212

位置 へーIVの中央に位置し、北東部が旧河道Cにより削平を受けている。西にM211、南に残地をはさんでM202が所在する。

周溝 西溝と南溝の一部が検出され、隣接の周溝と共有関係にあるが、切り合いは明確でない。溝内の層序は、第1層が青灰色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘 (平面形) マウンドは消失し、やや変形した方形の平面形が予想される。

主体部 検出できなかったが、南より長円形の落ち込みが認められる。ただ埋土は黒色粘土で、下層遺構に伴うものとみられる。

遺物 出土しなかった。

M213 (残地)

M214 (残地)

M215 (残地)

M216

位置 トーIVの西北端に位置し、東北半は旧河道Cによる削平消失している。他の周溝墓と異なり、残地の一面に周溝をめぐらせたものである。

周溝 全周せず、北溝は切れ「除橋部」状になっている。ただし旧河道Cにより削平で、北溝の残りや東溝の形状・内

容は明らかでない。溝内の層序は、第1層が暗青灰色粘土、第2層が黒色粘土層であった。

墳丘（平面形） マウンドは削平され、平面形は方形と考えられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

M217（残地）

M218（残地）

M219（残地）

M220（残地）

M221

位置 ハーIとニーIにまたがり、南に残地、北にM222、M223、M224が所在する。西は旧河道Cが南北流する。

周溝 共有する形態で、北溝はM222、M223、M224の南溝と共有するが、切り合いは不明。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失、ややびつな長方形に呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

M222

位置 ハーIの南端に位置し、東にM223、南にM221、北にM227が所在し、西側に旧河道Cが走る。

周溝 共有する形態で、東溝がM223、M225の西溝と、南溝がM221の北溝と、北溝がM226、M227の南溝と共有するが、切り合いはない。

墳丘（平面形） 西半を旧河道Cにより削平されており、全形不明。

主体部 検出しなかった。

遺物 東溝より、壺1点（E163）出土。

M223

位置 ニーIの南端に位置し、東にM224、西にM222、南にM221、北にM225が所在する。

周溝 共有する形態で、鑿接のものとすべて共有関係にあるが、切り合いは明瞭ではない。

墳丘（平面形） マウンドは消失し、平面形は隅丸方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 東溝より、広口壺（E164）、同底部（E165）が出土。

M224

位置 ニーIの東南端に位置し、西にM223、南にM221、北にM225が所在する。東半が消失。

周溝 共有する形態とみられるが、大部分が消失しており、詳細不明。M221の北溝、M223の東溝、M225の南溝と重複するが、切り合い不明。

墳丘（平面形） すでに削平され、平面形は方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M225

位置 二一Iの東溝に位置し、西にM222、南にM223、北にM228が所在する。

周溝 共有する形態で、M222の東溝、M223の北溝、M228の南溝と共有するが切り合いは不明。

墳丘(平面形) マウンドはすでに消失し、平面形は長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M226

位置 二一Iの北端に位置し、東にM227、南にM222、北にM230、西に旧河道Cが西半を削平する。

周溝 共有する形態で、東溝がM227の西溝と重複するが、切り合いは不明。

墳丘(平面形) すでに削平され、平面形は方形とみれる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M227

位置 二一Iの北端に位置し、東にM228、西にM226、南にM222、北にM230が所在する。

周溝 共有する形態で、それぞれM228の西溝、M226の東溝、M222の北溝、M230の南溝と重複するが、共有関係は不明。

墳丘(平面形) すでに削平され、平面形はややいびつな長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M228

位置 二一Iの北端に位置し、西にM227、南にM225、北にM229が所在する。

周溝 共有する形態で、M225の北溝、M227の東溝、M229の南溝と共有関係にあるが切り合いは不明。

墳丘(平面形) すでに削平され、平面形は方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M229

位置 二一Iの北端に位置し、西にM227・M230が、南にM228が所在する。東半は調査外。

周溝 共有する形態で、M228の北溝、M230の東溝と重複するが、切り合いは不明。

墳丘(平面形) すでに削平され、平面形も大半が調査外で不明。方形を呈するか。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M230

位置 ホーIの北東端に位置し、M227の北、M231の南に所在する。西には低平地が広がり、周溝墓は途絶えている。

周溝 共有する形態で、M227、M229の北溝、M331の南溝と共有するが、切り合いは不明。

墳丘（平面形）すでに削平され、平面形はいびつな方形を呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M231

位置 ホーIの南東端に位置し、南にM230、北にM233が所在する。西側は低平地で、東半は調査域をはずれる。

周溝 共有する形態で、南溝・北溝がM230の北溝とM232の南溝と重複するが、切り合いは不明。

墳丘（平面形）すでに削平され、平面形は方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 西溝より、壺底部1点（E166）出土。

#### M232

位置 ホーIの東端に位置し、西にM233、南にM231、北にM237が所在する。

周溝 共有する形態で、M331の北溝、M233の東溝M237の南溝と重複するが、切り合いは不明。

墳丘（平面形）すでに削平され、平面形は方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M233

位置 ホーIの東端に位置し、東にM232、北にM236、西に旧河道C、南に残地が広がる。

周溝 共有する形態で、M232の西溝、M236の南溝と重複するが、切り合いは不明。

墳丘（平面形）すでに削平されるが、平面形は方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M234

位置 ホーIの中央に位置し、東にM236、北にM235が所在し、西半は旧河道Cにより大きく削平される。

周溝 共有する形態で、M235の南溝と共有関係にあるが、切り合いは不明である。

墳丘（平面形）すでに削平され、平面形も西半を消失しているため、詳細不明。方形か。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M235

**位置** ホーIの北端に位置し、西半を旧河道Cにより削平され、東にM238、南にM234が所在する。

**周溝** 共有する形態で、M234の北端と共有関係にあるが、切り合い関係は不明。

**墳丘（平面形）** すでに消失し平面形は方形の可能性がある。

**主体部** 検出しなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M236

**位置** ホーIの東端に位置し、東にM237、西にM234、南にM233、北にM238が所在する。

**周溝** 共有する形態で、東溝はM237の西溝に切られ、西溝もM234の東端に切られている。北溝もM238の南溝に切られ、南溝のみM233の北溝を切っている。したがって、M233—M236、M236—M234、M237、M238の序列が判明する。

**墳丘（平面形）** すでに削平され、平面形は方形とみられる。

**主体部** 検出しなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M237

**位置** ホーIの東端に位置し、西にM236、南にM232、北にM238が所在する。

**周溝** 共有する形態をとり、M232の北溝、M238の南溝、M236の東溝と共有し、M236—M237、M238—M237の切り合いが判明する。

**墳丘（平面形）** すでに削平され、平面形は方形を呈するとみられる。

**主体部** 検出しなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M238

**位置** ホーIの北端に位置し、西にM235、南にM237、北に低平地が広がる。

**周溝** 共有する形態をとり、南溝はM237の北溝により切られている。

**墳丘（平面形）** すでに消失し、平面形は均正な方形とみられる。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 西溝より、11点出土、壺・甕・高杯など（E167～E177）。

**その他** 或は、後世のSD152Bの遺物か。

#### M239

**位置** ホーIの南端に位置し、南にM238、北にM240が所在する。西半は旧河道Cにより、大きく削平を受けている。

**周溝** 単独にめぐる形態で、共有関係はなかった。

**墳丘（平面形）** すでに削平されており、平面形は均正な方形を呈する可能性が大きい。

**主体部** 検出しなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M240

位置 へーIの東端に位置し、南にM239、北にM241、西にM242が所在する。

周溝 単独にめぐる形態で、円形に近い。

墳丘(平面形) すでに削平されており、平面形は楕円形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 東溝より、甕底部1点(E178)出土。

#### M241

位置 へーIの東端に位置し、西M243、南にM240、北にM244が所在する。

周溝 単独にめぐる形態で、共有関係は認められない。

墳丘(平面形) すでに削平されており、平面形は方形とみられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M242

位置 へーIの東よりに位置し、西南半を旧河道Cにより大きく削平される。東にM240、西にM257、北にM241が所在する。

周溝 単独にめぐる形態で、西溝かM257の東溝により切られる(M242—M257)。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が灰白青色粘土、第3層が灰青色粘土に黒色粘土混入、第4層が黒色粘土、第5層が黒色粘土に灰青色砂質土のブロックであった。

墳丘(平面形) すでに削平され、平面形は均正な方形とみられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M243

位置 へーIの東端に位置し、東にM241・M244、西にM257、南にM242、北にM247が所在する。

周溝 共有する形態で、東溝・南溝は単独にめぐるようである。西溝・北溝が、M257の東溝、M248の南溝と共有し、

M243—M245の関係のみ判明する。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が黒灰青色粘土、第4層が暗灰青色砂質粘土であった。

墳丘(平面形) すでに削平され、平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 溝内より、蓋の口縁部破片(E179)、底部破片(E180・E181)が出土した。

#### M244

位置 へーIの東端に位置し、西に残地が、南にM241、北にM245が所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとり、共有関係は認められなかった。

墳丘(平面形) すでに削平され、東半は調査域外のため、詳細は不明であるが方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M245

位置 へーⅠの東北端に位置し、西にM246、南にM244、東にM259が所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、西溝のみM246の東溝と共有するが、切り合いは不明。

墳丘（平面形） すでに削平され、残っていないが、平面形は方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M246

位置 へーⅠの東北端に位置し、東にM245、西にM251、北と南は残地が広がる。

周溝 共有する形態をとるが、南北溝は単独にめぐる。M245の西溝、M251の東溝と共有するが、切り合いは不明である。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が灰青色砂質粘土、第3層が黒色粘土、第4層が黒色粘土に青灰色砂質粘土のブロックであった。

墳丘（平面形） すでに削平をうけ、平面形は方形を呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M247（残地）

#### M248

位置 へーⅠの中央に位置し、東に残地、西にM257、南にM243、北にM249が所在する。

周溝 共有する形態で、東溝を除き隣接の周溝と共有する。ただし、切り合いのあるのは、南溝がM243の北溝を切っているだけで、あとは不明である。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が黒灰色粘土であった。

墳丘（平面形） すでに削平をうけ、平面形は長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M249

位置 へーⅠの中央に位置し、東にM250、西にM256、南にM248、北にM253が所在する。

周溝 共有する形態で、いづれも隣接の周溝と共有関係にあるが、切り合いは不明である。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が黒色粘土、第4層が黒色粘土に灰青色粘土混入であった。

墳丘（平面形） すでに削平されており、ややいびつな方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

M250

位置 へーⅠの北よりに位置し、東にM246、西にM249、南にM248、北にM252が所在する。

周溝 共有する形態で、隣接の各周溝と共有関係にあるが、切り合いはいづれも不明である。溝内の層序は、第1層が  
灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が黒色粘土と灰青色粘土の互層、第4層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) すでに削平され、平面形は長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

M251(残地)

M252

位置 へーⅠの北端に位置し、東に低平地が広がり、西にM253、南にM251、北にM262が所在する。

周溝 共有する形態で、隣接のすべての周溝と共有するが、切り合いは不明。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第  
2層が灰青色粘土中に黒色粘土ブロック、第3層が黒色粘土中に灰青色粘土、第4層が黒色粘土中に黄褐色砂質土含  
有であった。

墳丘(平面形) すでに削平を受け、平面形は均正な方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

M253

位置 へーⅠの北端に位置し、東にM252、西にM254、南にM249、北にM266が所在する。

周溝 共有する形態で、いづれも隣接の周溝と共有関係をもつが、切り合いは検出できなかった。溝内の層序は、第1  
層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が暗灰青色粘土に黒色粘土が混入、第4層が黒色粘土に灰青色粘  
土混入であった。

墳丘(平面形) すでに削平され、平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

M254

位置 へーⅠの北端に位置し、東にM253、西にM255、南にM256、北にM266が所在する。

周溝 共有する形態で、隣接の各周溝と共有関係にあるが、切り合い関係は明らかでない。溝内の層序は、第1層が灰  
青緑色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が黒灰青色粘土、第4層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) すでに削平されており、平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M255

位置 へー1の北端に位置し、東にM254、西にM277、南にM256、北にM269が所在する。

周溝 共有する形態をとり、隣接の周溝といづれも共有関係にあるが、切り合いは不明。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土であった。

墳丘(平面形) すでに削平を受け、平面形は長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M256

位置 へー1の北端に位置し、東にM249、西にM280、南にM257、北にM254が所在する。

周溝 共有する形態をとり、隣接の周溝と共有関係にあるが、東溝のみM249-M256の切り合いがみとめられる。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が灰青色粘土に黒色粘土含有、第3層が黒色粘土、第4層が灰青色粘土に黒色粘土含有であった。

墳丘(平面形) すでに削平を受けており、平面形は長い長方形である。ただし、北半が削平されており、均正な長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 東溝中央より、細頸壺1点(E182)が、北溝より壺底部1点(E183)が出土した。

#### M257

位置 へー1の中央に位置し、南半を旧河道により削平されるが、東にM243、M248、南にM242が所在する。

周溝 共有する形態をとり、隣接の周溝と共有関係にあるが、切り合いは全く明らかでない。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) すでに削平され、平面形も削平により明確でないが、方形を呈する可能性が大きい。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M258

位置 へー1の中央に位置し、南半を旧河道Cにより削平される。東にM257、西にM278、北にM256が所在する。

周溝 共有する形態をとり、隣接の周溝と共有するが、北溝がM256の南溝に切られているほか、切り合いは不明。溝内の層序は、第1層が緑灰青色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) すでに削平されており、平面形も旧河道による削平で不明。

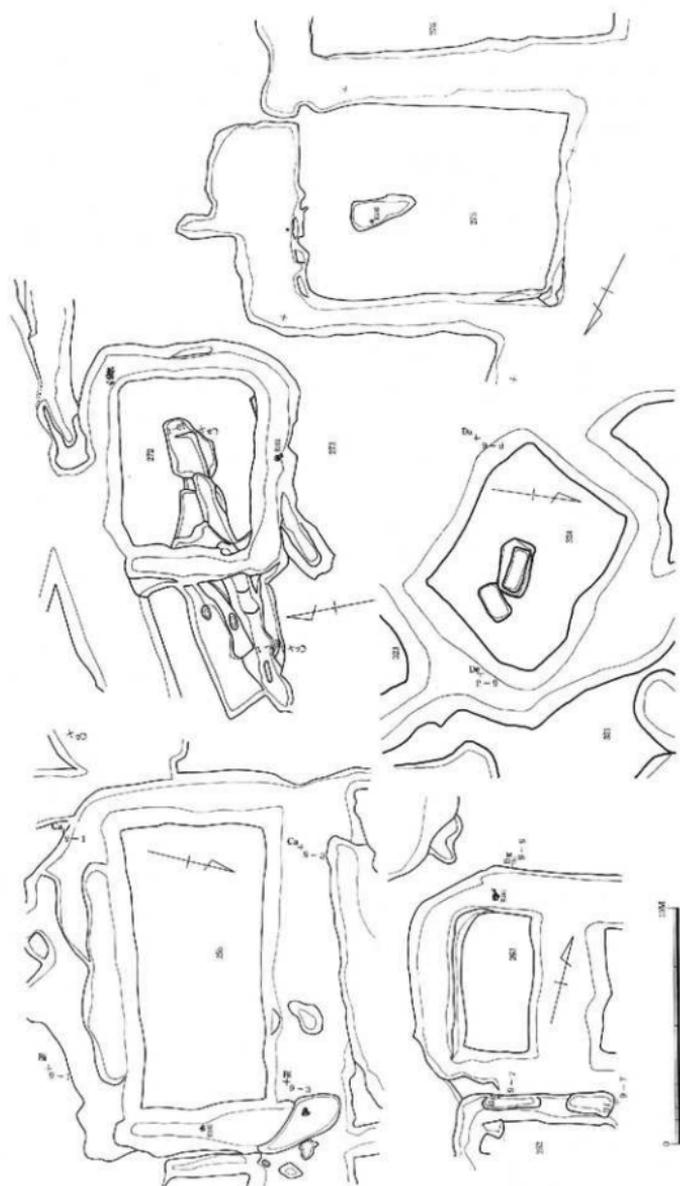
主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M259

位置 トー1の南端に位置し、西M260が所在するほか、南と北に残地が広がる。

周溝 単独にめぐる形態をとり、北西コーナーがM261の南東コーナーと共有する。



第25图 M256·M263·M272·M275·M324 供献土器·主体部検出状況実測图

墳丘(平面形) すでに削平されており、平面形は方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M260

位置 トーIの南端に位置し、東にM259、西にM262、南に残地、北にM263が所在する。

周溝 単独にめぐる形態で、西溝のみM262の東溝を切っており、溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が灰青色粘土、第3層が暗灰青色粘土、第4層が黒灰色粘土であった。

墳丘(平面形) すでに消失していたが、平面形は均正な方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M261

位置 トーIの南よりに位置し、東にM259、西にM263、南にM260、北に残地が広がる。

周溝 単独にめぐる形態で、東南コーナーが、M259の北西コーナーと切り合うが、西溝は後世の溝により削平されている。溝内の層序は、第1層が灰褐色砂質粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が暗灰色粘質砂土、第4層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) すでに消失しており、平面形は方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M262

位置 トーIの南端に位置し、東にM260、西にM266、南に残地、北にM263が所在する。

周溝 単独にめぐる形態で、東溝がM260の西溝に切られ、西溝がM266の東溝を切り、M260-M262-M266という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が暗灰青色粘土、第3層が黒色粘土に灰青色粘土のブロック、第4層が灰青色粘土に黒色粘土ブロックであった。

墳丘(平面形) すでに削平されており、平面形は均正に方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M263

位置 トーIの南端に位置し、東にM261、西にM265、南にM262、北に残地が所在する。中央を南北に後世の掘削りがある。

周溝 単独にめぐる形態で、溝内の層序は、第1層が緑灰青色粘土、第2層が灰青色粘土(炭化物含)、第3層が暗灰青色粘土、第4層が暗灰青色粘土(炭化物含)、第5層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) すでに削平を受けているが、平面形は均正な長方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 東溝より細頸壺 (E187)、北溝より直口壺 (E188)、鉢 (E184)、西溝より広口壺 (E193) が出土した。

#### M264

位置 トーIの中央に位置し、東にM262、西にM268、南にM253、北に残地をはさんでM265が所在する。

周溝 共有する形態であるが、台状部の裾では単独にめぐる形態を呈す。隣接の周溝との共有関係は不明で、溝内の層序は、2～3層に類別され、第1層と第2層は黒色粘土と暗灰青色粘土からなり、第2層の方がやや明るい。第3層は暗灰青色粘土に黒色粘土のブロックが混入している。

墳丘 (平面形) 小型ながら均正な長方形を呈するが、墳丘はすでに消失して検出されなかった。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M265

位置 トーIの中央に位置し、東にM263、西にM267、南にM264、北にM266が所在する。

周溝 共有する形態で、M263によって東半が切られる。ただし、西半が後世の攪乱により消失しており、東半はM263に削平されていないとも考えられる。隣接する周溝との切り合いは不明であるが、溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が黒色粘土粒を含む灰青色粘土、第3層が暗灰青色粘土、第4層が黒色粘土に暗灰青色粘土ブロックである。

墳丘 (平面形) 東半が削平されていないなら、やや長い長方形を呈するが墳丘はすでに消失している。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M266

位置 トーIの北端に位置し、東と北に残地、西にM273、南にM267が所在する。

周溝 単独にめぐる形態であるが、南溝のみM267の北端と切り合っている。切り合いから、M267-M266の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が黒色粘土粒を含む灰青色粘土、第3層が灰青色粘土、第4層が灰青色粘土に黒色粘土ブロックであった。

墳丘 (平面形) 墳丘は消失するが、平面形はややいびつな長方形を呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 西溝中央より広口壺 (E189) 1点が出土している。

#### M267

位置 トーIの北よりに位置し、東にM265、西にM275、南にM268、北にM266が所在する。

周溝 共有する形態で、南溝がM268の北溝に、北溝がM266の南溝に切られており、M267-M266、M267-M268の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が黒色粘土粒を含む灰青色粘土、第3層暗灰青色粘土、第4層が暗灰青色粘土に黒色粘土ブロックであった。

墳丘 (平面形) 均正中型の長方形を呈し、マウンドはすでに消失していた。

主体部 検出しなかった。

遺物 西溝中央より広口壺 (E190) 1点、北溝中央より鉢 (E191) 1点が出土した。

#### M268

位置 トーIの中央に位置し、東にM264、西にM276、南にM254、北にM267が所在する。

周溝 共有する形態で、北溝がM267の南溝を切っており、M267—M268の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が灰色粘土、第2層が黒色粘土粒を含む灰色粘土、第3層が暗灰色粘土、第4層が暗灰色粘土に黒色粘土ブロックであった。

墳丘(平面形) 南半が後世の削平により消失し、やや長い長方形を呈す。マウンドはすでに消失。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M269(残地)

#### M270(残地)

#### M271

位置 トーIの西端に位置し、東にM267、西にM275、南にM276、北にM272が所在する

周溝 共有する形態で、北西コーナーにM274とつながる陸橋部が認められる。切り合いはなく、溝内の層序は第1層が青灰色粘土、第2層が炭化物を含む青灰色粘土、第3層が黒色粘土を含んだ青灰色粘土、第4層が暗青灰色粘土であった。

墳丘(平面形) マウンドはすでに消失、平面形は長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M272

位置 トーIの中央に位置し、東に残地ををきんでM266、西にM274、南にM267、北にM273が所在する。

周溝 共有する形態で南東コーナーに陸橋部が認められる。M273の南溝により北溝が切られており、M272—M273の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色粘土、第2層が青灰色粘土に黒色粘土、第3層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) マウンドはすでに消失し、平面形は方形を呈す。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

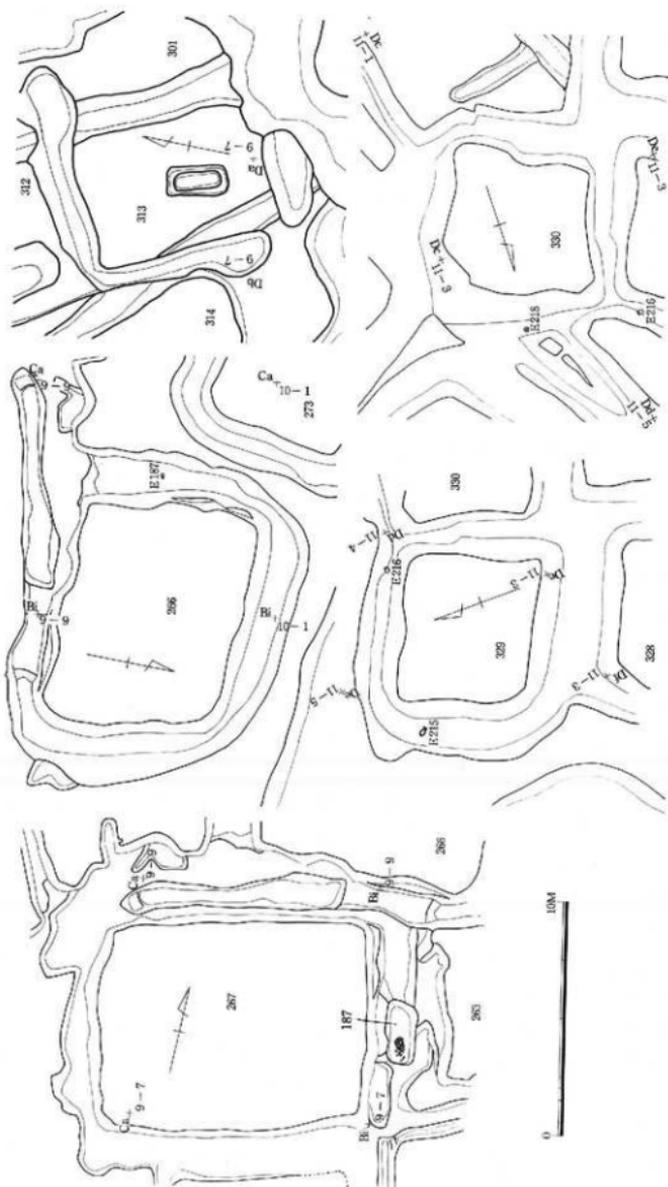
#### M273

位置 トーIの中央に位置し、東にM266、西に残地、南にM272、北に残地が広がる。

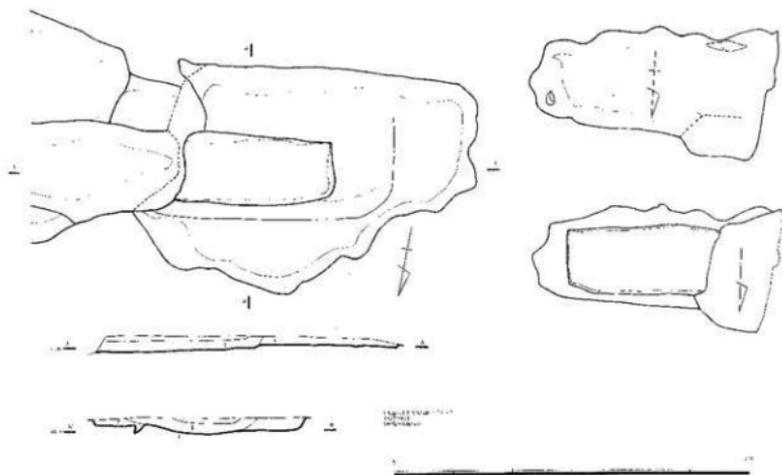
周溝 単独にめぐる形態で、南溝の一部がM272の北溝と切り合ってM272—M273の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰色粘土、第2層が黒色粘土を含んだ灰色粘土、第3層が灰色粘土に黒色粘土ブロック、第4層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) マウンドはすでに消失し、平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 中央に軸を等しくして、長さ3.0m、幅2.0m、深さ11cm土盛が検出された。木棺の痕跡はないが主体部とみられる。



第26图 M266·M267·M313·M329·M330 供献土器·主体部検出状況実測图



第27図 M273 第1主体部平面・断面実測図

遺物 南溝中央より広口壺1点(E192)出土した。

#### M274

位置 トーⅠとトーⅡにまたがった位置にあり、東にM272、西にM290、南にM275、北に残地をはさんで、M305が所在する。

周溝 共有する形態であるが、切り合いは不明、溝内の層序は、第1層が暗青灰褐色粘質土、第2層が青灰色粘土、第3層が暗青灰色粘土、第4層が黒色粘土を含む暗青灰色粘土であった。

墳丘(平面形) マウンドはすでに消失し、平面形は長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 北溝より、広口壺(E194)1点が出土した。

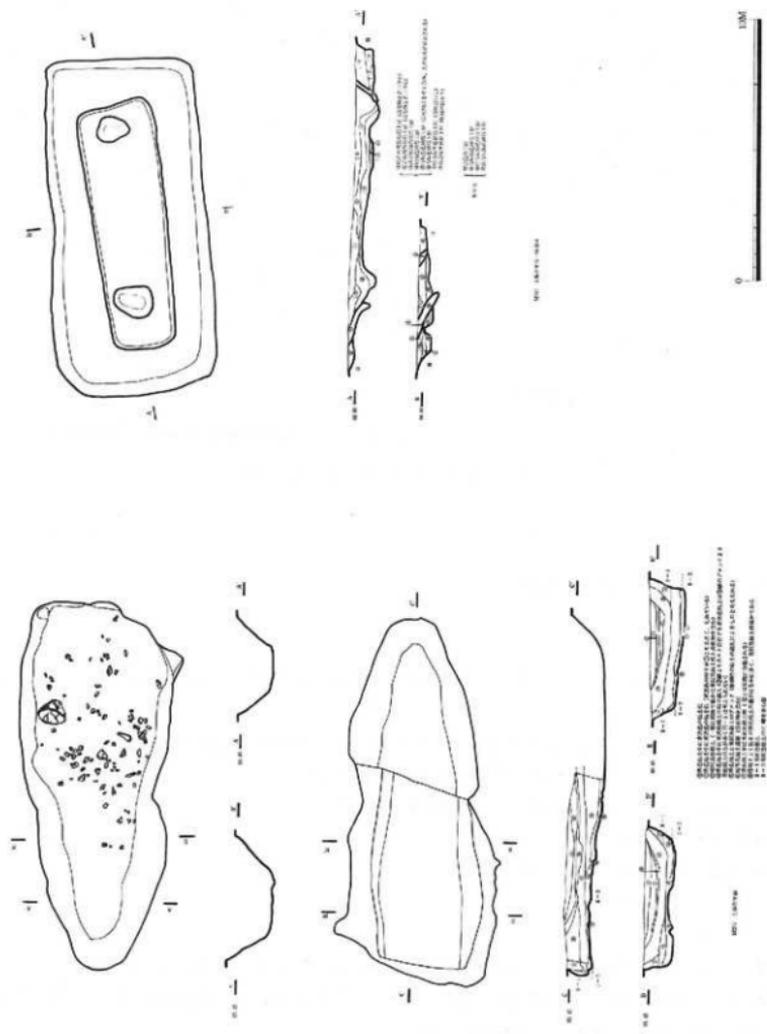
#### M275

位置 トーⅠ・Ⅱの境界南端に位置し、東にM267、西にM289、南にM276、北にM274が所在する。

周溝 共有する形態であるが、切り合いは不明である。溝内の層序は、第1層が青灰褐色粘質土、第2層が暗青灰褐色粘質土、第3層が青灰粘質土第4層が黒色粘土であった。

墳丘(平面形) マウンドは消失し、平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 中央よりやや東よりに長辺2.9m、短辺1.2mの不整楕円の土甕が検出され、鉢1点(E195)を出土した。深さ



第28图 M275·M312 主体部平面·断面实测图

45cmの皿状を呈し、主体部の残骸か。

遺物 主体部とみられる土域内より鉢（E195）1点が出土した。

#### M276

位置 へーⅠの北端に位置し、東にM270、西にM288、南にM277、北にM275が所在する。

周溝 共有する形態で切り合いは確認できなかった。溝内の層序は、第1層が暗青灰色粘質土、第2層が青灰黒色粘土、第3層が暗青灰黒色粘土、第4層が淡青灰黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 西溝より壺底部（E196）1点、北溝より細頸壺（E197）1点が出土した。

#### M277

位置 へーⅠの西端に位置し、東にM255、西にM283、南にM280、北にM276が所在する。

周溝 共有する形態であるが切り合い関係は不明。溝内の層序は、第1層が暗青灰色粘土、第2層が青灰黒色粘土、第3層が暗青灰黒色粘土、第4層が淡青灰色粘土に黒色粘土ブロックであった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失、南西コーナーが大きく削平を受けているが平面形は長方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M278

位置 へーⅠの中央西端に位置し、東にM257、西にM279、北にM280が所在し、南側は旧河道Cにより削平されている。

周溝 共有する形態であるが、切り合い関係は不明であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、南半が旧河道Cにより削平され、平面形は判然としない。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M279

位置 へーⅠ中央西端に位置し、東にM278、西にM284、北にM280が所在する。南側は旧河道Cにより消失している。

周溝 共有する形態で、切り合いは不明。溝内の層序は、第1層が青灰褐色粘質土、第2層が暗青灰褐色粘土、第3層が灰黒色粘土、第4層が黒灰青色粘土、第5層が青灰黒色粘土、第6層が暗青灰褐色砂質土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失、平面形も南側が大半削平されており不明である。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M280

位置 へーⅠ中央西端に位置し、東に残地をはさんでM256が、西にM284、南にM279、北にM277が所在する。

周溝 共有する形態で、北溝がM281の南溝を切っており、M280—M281という序列が判明する。溝内の層序は第1層が

青灰褐色粘土、第2層が暗青灰褐色粘土、第3層が青灰黒色砂質粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドは消失し、ややいびつな長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M281

位置 へーⅠの西端に位置し、東にM277、西にM282、M283南にM280、北にM276が所在する。

周溝 北東・北西コーナーに陸橋部があり、他は共有する形態をとる。周溝の切り合いの判明するものは南溝のみで、M282—M280の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が淡灰青色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が灰青黒色粘土、第4層が黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は方形を呈するとみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M282

位置 へーⅡの東端に位置し、東にM280、西にM287、南にM284、北にM283が所在する。

周溝 北溝のみ単独にめぐり、他は共有する形態をとる。ただし切り合いは不明で溝内の層序は、第1層が青灰黒色粘土、第2層が灰青褐色粘土、第3層が灰青黒色粘土、第4層が暗青灰褐色砂層であった。

墳丘（平面形） マウンドは斜平され、平面形は方形を呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M283

位置 へーⅡの西端に位置し、東にM277、西にM292、南にM287、北にM276が所在する。

周溝 南西コーナーに陸橋部が所在するが、周溝は共有する形態をとる。切り合いは不明で、溝内の層序は、第1層が暗青灰色粘質土、第2層が淡青灰黒色粘土、第3層が黒灰色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドは消失し、平面形は均正な長方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M284

位置 へーⅡの東端に位置し、東にM280、西にM286、南にM285、北にM287が所在する。

周溝 共有する形態をとり、北西コーナーに陸橋をもつ。ただし、切り合い関係は不明で、溝内の層序は、第1層が青灰褐色砂質土、第2層が青灰褐色粘土、第4層が青灰黒色粘土、第5層が黒灰色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形はいびつな方形を呈する。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

M285

位置 ヘーⅡの中央付近に位置し、南側を旧河道Cにより大きく削平され、東にM279、北にM284、西にM286が所在する。  
周溝 共有する形態をとるが、切り合い関係は不明。溝内の層序は、第1層が青灰色粘土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が暗青灰色粘土に黒色粘土ブロック、第4層が黒色粘土であった。  
墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形も大半を消失しているため、不明である。  
主体部 検出しなかった。  
遺物 出土しなかった。

M286

位置 ヘーⅡの中央に位置し、東にM284、西にM293、南にM285北にM287が所在する。  
周溝 共有する形態であるが、切り合い関係は明確でなく、溝内の層序は、第1層が青灰褐色粘土、第2層が暗青灰褐色粘土、第3層が淡青灰褐色粘土、第4層が青灰黒色粘土、第5層黒灰褐色粘土、第6層が青灰黒色砂質土であった。  
墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形はいびつな長方形を呈す。  
主体部 検出しなかった。  
遺物 出土しなかった。

M287

位置 ヘーⅡの中央に位置し、東にM282、西にM294、南にM286、北にM292が所在する。  
周溝 共有する形態をとるが、切り合いは明確でない。溝内の層序は、第1層が青灰褐色粘土、第2層が青灰黒色粘土、第3層が黒灰褐色粘土、第4層が黒灰褐色粘土、第5層が暗青灰褐色砂層であった。  
墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は均正な長方形を呈する。  
主体部 検出しなかった。  
遺物 出土しなかった。

M288

位置 トーⅡの中央に位置し、東にM276、西にM292、南にM287、北にM289が所在する。  
周溝 共有する形態をとるが、切り合いは明確でない。溝内の層序は、第1層が青灰黒色粘土、第2層が青灰褐色粘土、第3層が暗青灰黒色粘土、第4層が黒灰褐色粘土であった。  
墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は長方形を呈する。  
主体部 検出しなかった。  
遺物 出土しなかった。

M289

位置 トーⅡの中央に位置し、東にM289、西にM291、南にM288、北にM290が所在する。  
周溝 共有する形態で、北西コーナーに陸橋部をもつ。西溝が、M291の東溝により切られており、M289-M291の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が青灰褐色粘土、第2層が淡青灰褐色粘土、第3層が黒褐色粘土、第4層が黒灰褐色砂泥、第5層が青灰黒色粘土であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は隅丸の長方形を呈する。

主体部 中央に、東西3.3m、南北1.4mの不整楕円形の土趾を検出している。主体部掘方の可能性があるが、木棺等の痕跡はなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M290

位置 トーⅡ北端に位置し、東にM274、西にM302、南にM291、北にM304が所在する。

周溝 共有する形態をとり、南東コーナーに除樋部をもつ。ただし、切り合い関係は不明で、溝内の層序は、第1層が青灰褐色粘土、第2層が暗青灰褐色粘土、第3層が灰青黒色粘土、第4層が青灰黒色粘土であった。

墳丘（平面形） 平面形は、ややいびつな長方形を呈し、マウンドはすでに消失していた。

主体部 検出しなかった。

遺物 北溝より広口壺（E198）1点、甕底部（E202）1点が出土したほか周溝内より細頸壺（E199）1点、甕底部（E200、E201）2点が出土した。

#### M291

位置 トーⅡの中央に位置し、東にM289、西にM293、南にM292、北にM290が所在する。北西コーナーと古墳時代前期の溝が削平している。

周溝 共有する形態で、東溝がM289の西溝を切っており、M289—M291という序列が判明する。溝内の層序は、第1層が暗青灰褐色粘土、第2層が青灰褐色粘土、第3層が淡青灰黒色粘土、第4層が暗灰黒色砂泥、第5層黒灰青色粘土であった。

墳丘（平面形） 平面形は、均正な長方形を呈し、マウンドはすでに消失していた。

主体部 検出しなかった。

遺物 東溝より広口壺（E203）1点、南溝より壺底部（E205）1点、北溝より広口壺（E204）1点が出土した。

#### M292

位置 トーⅡの南端に位置し、東にM288、西にM298、北にM291、南にM287が所在する。

周溝 共有する形態をとるが、切り合い関係は明確でない。

墳丘（平面形） 平面形は均正な長方形で、マウンドはすでに削平されていた。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M293

位置 へーⅡの北端に位置し、南半を旧河道Cにより削平されている。北にはM286、M294、M295が所在する。

周溝 共有する形態をとるが、切り合い関係は明確でなかった。

墳丘（平面形） 平面形は均正な方形を呈するとみられるが、マウンドはすでに削平されていた。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

M294

- 位置 へーⅡの北端に位置し、東にM287、西にM295、南にM293、北にM292が所在する。
- 周溝 共有する形態であるが、切り合い関係は不明確。溝内の層序は、第1層が暗青灰色粘土、第2層が灰青褐色粘土、第3層が暗青褐色粘土であった。
- 墳丘（平面形） 平面形は均正な長方形を呈するが、マウンドはすでに削平されていた。
- 主体部 検出しなかった。
- 遺物 出土しなかった。

M295・296

- 位置 へーⅡの北端に位置し、東にM287、西には旧河道C、南にM293、北にM292が所在する。
- 周溝 共有する形態をとるが、切り合い関係は明確でない。溝内の層序は、第1層が暗青灰砂質粘土、第2層が黒灰色砂質粘土、第3層が黒灰色粘土であった。
- 墳丘（平面形） 平面形は長方形を呈し、マウンドはすでに削平され消失していた。
- 主体部 検出しなかった。
- 遺物 出土しなかった。

M297

- 位置 トーⅡの北端に位置し、東にM292、西にM299、南にM295、北にM313が所在する。
- 周溝 共有する形態をとるが、切り合い関係は明確でない。溝内の層序は、第1層が淡青灰色砂質土、第2層が黒褐色粘土、第3層が暗青灰黒色粘土であった。
- 墳丘（平面形） 平面形は長方形とみられ、マウンドはすでに削平されていた。
- 主体部 検出しなかった。
- 遺物 出土しなかった。

M298（残地）

M299

- 位置 へーⅣの西端に位置し、北にM301、西にM322が所在する。南側を旧河道Cが横切る。
- 周溝 北端、東端は後世の溝により削平され、南端、西端のみが残る。単独にめぐる形態である。
- 墳丘（平面形） 平面形は方形を呈し、マウンドは削平され確認できなかった。
- 主体部 検出しなかった。
- 遺物 出土しなかった。

M300（残地）

M301・313

- 位置 M302の南に位置する周溝墓である。2条の後世の溝によって攪乱されている。1条のそれは、周溝墓のほぼ中央

を南北方向に縦断しており、他のそれは、かつての周溝のうち東溝及び南溝の一部をたどるような流路で、周溝を破壊している。

**周溝** 南西コーナーに陸橋部を残す、北溝はM312と完全共有の関係にあり、西溝はM314とM301-M314の切り合い関係が認められる。周溝は各辺とも断面がU字状を呈し、比較的狭くて深い溝である。青灰色粘土の地山を切り込み、青灰色砂層中にその底部を置く。

**墳丘（平面形）** 後世の溝によって攪乱を受けているが、隅丸長方形プランが予想される。

**主体部** 墳丘のやや西に偏して1基を確認している。墓は、長軸1.1mの長方形を呈し、木棺を埋置していたものと考えられる。断面観察の結果、木棺は組み合せ式木棺と考えられ、棺材そのものは、腐植を帯びた黒色系の粘土に変質している。復元長1.8m、復元幅0.6mを計る。覆土は掘り方として4層、棺内7層が識別される。掘り方は青灰褐色の砂質土を主体とする。棺内は上部に青灰褐色粘質土が、下部に青灰黒色粘質土の各土層が主体となって堆積しており、上部で炭化物片が確認され、下部では特に床面上に朱の沈着が著しい。また、棺内の小口側西端近くは楕円形にやや深くなる傾向が認められるが、それが小口板を落とすことによるかどうかなどについては、断定し難い。

**遺物** 西溝より広口壺主体部（E207）と底部（E208）各1点が出土している。

#### M302 - 312

**位置** M303の南に位置し、周溝墓のほぼ中央および東溝を後世の溝によって破壊されている。

**周溝** 遺存する2コーナーを陸橋部状に残す傾向が認められる。周溝は、西溝がM314と切り合い関係にありM302-M314が判明している。北溝と南溝はM303及びM301とそれぞれ完全共有している。断面は各辺ともU字状を呈し、幅1.0~2.0m、深さ0.8m程度を計る。覆土は最高7層が識別され、上部5層の厚い堆積が洪水等に起因する青灰色系のシルト層で、径1cm前後の砂を混入している他、微砂が薄く層状介入している箇所も認められる。下部2層は溝臂や盛土の崩落によって再堆積した層位である。

**墳丘（平面形）** 後世の溝により東溝を失っているが、隅丸長方形プランが予想される。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 出土しなかった。

#### M303 - 311

**位置** M308の南に位置する周溝墓である。周溝墓の中央および東溝は、後世の溝により削平され、北溝の一部は攪乱溝によって破壊されている。

**周溝** 遺存している北西及び南西の両コーナーを陸橋部状に残している。周溝は北溝と南溝がM308及びM302とそれぞれ完全共有の関係にある。断面はいづれも浅いU字状を呈し、幅1.5m程度、深さ0.5~0.8mを計る。覆土は最高5層が識別される。

**墳丘（平面形）** 後世の溝によって、東溝を失っているが隅丸長方形プランとなる。

**主体部** 墳丘上部のほぼ全体に圧力攪乱を受けていたため、主体部の確認は困難であったが、墳丘のほぼ中央で、東西方向に長軸線をもつ隅丸長方形の墓は1基を検出した。ただ遺存状態が不良であるため、明確な事は不明である。

**遺物** 出土しなかった。

#### M304（残地）

### M305

位置 トーⅠの北端に位置し、東に残地、西M306、南に残地、北にM337が所在する。

周溝 単独にめぐる形態で、各コーナーの切れたものである。溝内の層序は、第1層が青灰色粘土、第2層が青灰色粘土に黒色粘土混入、第3層が黒色粘土、第4層が暗灰青色粘土であった。北溝は古墳前期の溝で南溝は最近の濠削で消失していた。

墳丘(平面形) 平面形は方形とみられ、マウンドはすでに削平されていた。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

### M306

位置 トーⅡの北端に位置し、東にM305、西にM307、南に残地、北にM337が所在する。

周溝 単独に廻る形態で、各コーナーが切れたものである。溝内の層序は、第1層が青灰褐色粘土、第2層が黒褐色粘土、第3層が黒灰色粘土、第4層が暗青灰黒色粘土質であった。

墳丘(平面形) 平面形は均正な方形を呈する。マウンドはすでに削平されていた。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

### M307

位置 トーⅡ北西端に位置し、東にM306、西にM310、南に残地をはさんでM290、北にM333が所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとり、西溝は古墳時代の溝により削平されている。溝内の層序は、第1層が青灰褐色粘土、第2層が暗青灰褐色粘土、第3層が灰青黒色粘土、第4層が暗灰青黒色粘土、第5層が黒灰青色粘土、第6層が青灰黒色砂質粘土であった。

墳丘(平面形) 平面形は長方形を呈するとみられ、マウンドはすでに削平されていた。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

### M308・310

位置 M307の西に位置する周溝墓。後世の2条の溝及び掘乱溝によって縦横に切断されている。

周溝 西溝が残地をひかえて単独にめぐる以外は、M307、M311、M317とそれぞれ接している。M307と接する東溝は、後世の溝に切り込まれて遺存しないため切り合い関係は不明、M311と接する南溝は、完全共有の関係にある。M317と接する北溝は、M310—M317の新旧関係が認められる。溝の断面は上部の開いたU字状を呈しており、層上は最高7層が識別される。比較的安定したレンズ状堆積を示している。

墳丘(平面形) 北西コーナーに陸橋部状の高まりのある隅丸方形を呈している。

主体部 検出しなかった。

遺物 マウンド上より壺の胴部上半(E206)が1点出土している。

### M309(残地)

#### M314

位置 M313の西に位置する周溝墓で、後世の溝により墳丘が斜に2分されている。

周溝 周溝は周辺の各周溝墓と切り合い関係をなす。まず東溝はM312、M313とそれぞれM312-M314、M313-M314の関係にある。西溝はM300・M323とそれぞれM314-M300、M314-M323の関係にある。一方北溝はM315とM315-M314の関係を保っている。周溝の断面は浅い椀状を示している。

墳丘(平面形) 変則的な形状を呈しているが、隅丸長方形プランを意図したものである。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 東溝の溝尻付近より、広口壺の口縁部(E209)が1点出土している。

#### M315(残地)

#### M316(残地)

#### M317

位置 M310の北西に位置し、北東側は後世の溝に削平されて遺存しない。

周溝 南東溝の一部をM310と北西溝の一部をM318とそれぞれ接する以外は、いずれも残地をひかえて溝が単独にめぐらる。M310と接する南東溝は切り合い関係にあり、M310-M317の新旧関係が判明する。M318と接する北西溝も切り合い関係にあり、M318-M317であることがわかる。溝の断面は上部の開いたU字状を呈しており、溝底は比較的平坦である。覆土は最高8層が識別され、比較的安定したレンズ状堆積となる箇所が多い。

墳丘(平面形) 北東側を削平されているが、本来は隅丸方形プランであったと考えられる。南コーナーに隠蔽部が確認される。

主体部 中央に東西2.5m、南北1.4m、深さ17cmの浅い落ち込みが認められる。

遺物 北西溝内より広口壺(E210)1点が出土している。

#### M318

位置 M317の北西に位置し、北東側過半は後世の溝により削平されて遺存しない。

周溝 南西溝の一部をM319と南東溝の一部をM317と接する以外は、いずれも残地をひかえて単独にめぐっている。M319と接する南西溝は上部を古墳時代の溝が切り込んでいるが、完全共有の関係にある。M317と接する南東溝は切り合い関係にあり、M318-M317が判明している。溝の断面は上部の開いたU字状を呈しており、溝底は比較的平坦となる箇所が多い。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に溝底を置く。

墳丘(平面形) 過半を削平されており全容は定かでないが、隅丸方形を意図していたものと予測される。

主体部 現状では痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M319

位置 M318の南西に位置する周溝墓で、南側の一部を覆乱溝によって破壊されている。

周溝 北東溝の一部がM318と接する以外は、いずれの周溝も残地をひかえて単独にめぐらる。M318と接する北東溝は上部を古墳時代の溝が切り込んでいるが、完全共有の関係にある。周溝は幅2.0m前後、深さ1.0m程度で、断面は上部

の開いたU字状を呈す。覆土は最高9層が顕別される。

**墳丘 (平面形)** 一部攪乱によって破壊されているものの、比較的整然とした隅丸長方形プランを呈している。

**主体部** 墳丘の中央付近より隅丸長方形の墓竃3基を検出した。その中の2基は明らかに木棺墓であり、掘り方の内側に組み合わせ式木棺の痕跡が認められる。両者の軸線は直交する。他の1基は、既述の2基を切り込んで造られたもので、木棺の痕跡は確認できなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M320

**位置** M315の北西に位置する周溝墓で、中央を東西に最近の攪乱溝が走る。

**周溝** 周溝は南西溝の一部がM324に接しており、その切り合い関係からM324—M320が判明する以外は、いずれの周溝も単独にめぐる。溝幅は広い箇所では2.0mを越えるところも存在するが、全体に浅く、断面は椀状を呈している。覆土は、上部に青灰色のシルト層が厚いレンズ状堆積をなし、下部に黒色の強いシルト層が細層を形成している。上部は洪水等により一気に埋没した層位、下部は溝屑や盛土の崩落したものが再堆積して成起したものと予測される。

**墳丘 (平面形)** 南コーナーに陰輪部のある隅丸長方形プランである。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 西南溝内の比較的深い箇所より、広口壺2点、(E211・E212)が出土している。

#### M321 (残地)

#### M322

**位置** M299のすぐ南西に位置し、墓の西半を旧河道により削平されている。

**周溝** 北西溝は、M323と完全共有する以外は、切り合い関係又は単独に周溝がめぐる。北東溝はM323と同じくM314に對し、M314—M322の切り合い関係が認められる。南東溝は、隣接するM299の周溝の一部を切り込みながら単独にめぐる周溝である。東隅の溝のみで、青灰色グライ砂層中に溝底を置く。

**墳丘 (平面形)** 削平されているため全容は把握できないが、菱形的ながらも方形を意図した周溝墓である。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 北コーナー付近のほぼ底部より細頸壺(E213)1点が出土している。ほぼ完形を示し、横転状態で検出された。

#### M323

**位置** M300の北西にあり、南西側の過平を後世の旧河道により削平されている。

**周溝** 周溝は、M300・M324をそれぞれ完全共有し、M314とは、M314—M323の切り合い関係にある。北隅が陰輪部位にやや浅くなる以外は、深さ1.0m程度の椀状の溝がめぐる。南東溝では、椀状の底部をさらにU字状に一段折り窪めている。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色グライ粘土層を経て青灰色グライ砂層中に底部を置く。

**墳丘 (平面形)** 全容は判別すべくもないが、方形を意図した周溝墓である。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 出土しなかった。

### M324

位置 M323の北にあり、南西側を後世の河道によって削平されている。

周溝 北東溝は断面が深いU字状、東南溝及び北西溝は椀状を呈す形状を持ち、東北溝はM320との切り合い関係にあり、M324-M320が判明している。溝幅は断面の形状が椀状の箇所では広く、U字状の箇所では狭くなる。逆に溝の深さは、椀状で浅くU字状で深い。覆土は北東溝で最高9層が識別される。いずれも整然としたレンズ状で堆積をなしている。

墳丘(平面形) 南西側が不明だが、隅丸方形のプランが予測される。

主体部 南東溝側に偏して、平行及び直交気味の2基の主体部をなしている。ただ、いずれも遺存状態が悪く、長方形プランを確認したにとどまる。

遺物 北溝より細頸壺1点(E214)が出土した。

### M325

位置 周溝墓群の西端近くに位置する小規模な周溝墓である。

周溝 四辺とも残地ないし空地をひかえて周溝が単独にめぐり、周溝は幅1.2m前後、深さ0.6m程度の小規模なもので、断面は椀状をなしている。ただ溝底の一部でV字にさらに、深くなる箇所が存在する点が留意されている。覆土は最高で6層が識別されている。なお、西コーナーから周溝がさらに西方向へ伸びており、L字の溝と合一している。西側にもう1基周溝墓が存在した可能性が考えられる。

墳丘(平面形) 小規模ながら隅丸方形プランを呈しており、北コーナーが隆起部状に高くなっている。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

### M326

位置 周溝墓群の北西辺近くに位置し、後世の旧河道や擾乱溝によって大きく削平された大型の周溝墓である。

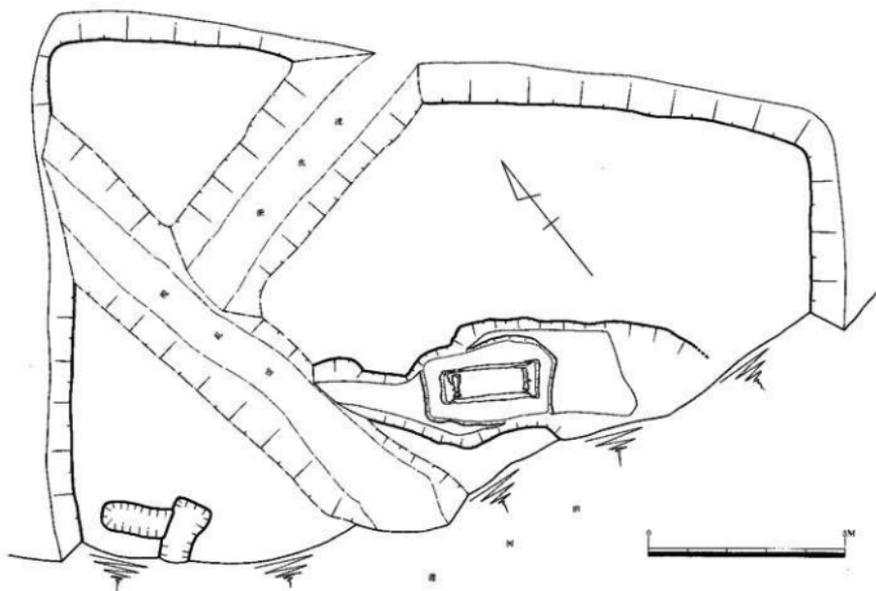
周溝 周溝は各辺とも単独にめぐり、周囲の周溝墓と切り合い関係をもたない。周溝の断面は、当遺跡の大型周溝墓の通例どおり、比較的深くて幅の広い、しかも底部の平坦な椀状を呈している。

墳丘(平面形) 削平を受けているため、全様は定かでないが、一辺が20mを超える大型の方形周溝墓である。

主体部 中央付近で1基検出した他、周辺部で直交気味の2基の痕跡をわずかに確認している。墳丘上は後世の削平が著しく、盛土はおろか地山の一部まで失っているが、中央付近で検出した1基は、墓蓋を地山深くまで達するよう構築していたため、当初の面影を比較的良く残していた。

墓蓋は3.0×10.0mの掘り鉢状に浅く掘り込み(掘り方Ⅰ)、次いで2.2×3.4mの隅丸長方形に一段深く掘り下げ(掘り方Ⅱ)、その中央に木棺を埋置していた。木棺は、底部・蓋板各1枚、側板・小口板各2枚、計6枚の板材を組み合わせた箱式木棺であり、底部と側板をほぼ同じ長さにし、小口板を両端よりやや内方に置く形式をとっている。底板は、長さ2.1m、幅0.8m、厚さ15cmを測り、極めて厚い点で留意される。側板は、長さ2.1m、高さ0.5m、厚さ10cmを測り現状では、底板両端の外側に接している。小口板は腐食が幾分進んでいたが、長さ0.6m、高さ0.5m、厚さ0.8cmを測り、両小口間2.0mを保つ。なお、底下と側板は、いずれも短辺の内側両端が一段削り込まれている。小口板を組み合わせるための機能を果たしていたのであろうか。蓋板は、長さ1.6m、幅0.7m、厚さ5cmを測り、やや棺内に落ち込んで底板との隙間25cmを保っていた。棺内には砂質味を帯びた粘土が流入しており、下部でわずかにリン分を検出したが、人骨及び副葬品等は皆無であった。ただ、底部の南側には朱の付着がみられ、遺体または棺材に朱を塗布して





第30図 M326 主体部平面・断面実測図

いたものと思われる。

遺物 出土しなかった。

#### M327

位置 チーⅢより西に位置しM352の北、M328の南に接して所在する。

周溝 コーナーが切れる形態をとるが、東溝、西溝と西溝の一部は古墳時代前期の溝により切られている。

墳丘（平面形） マウンドは削平され南半と溝により削平されているため、平面形も明確でないが、M325位置関係からみて、ほぼ方形を呈するとみられる。

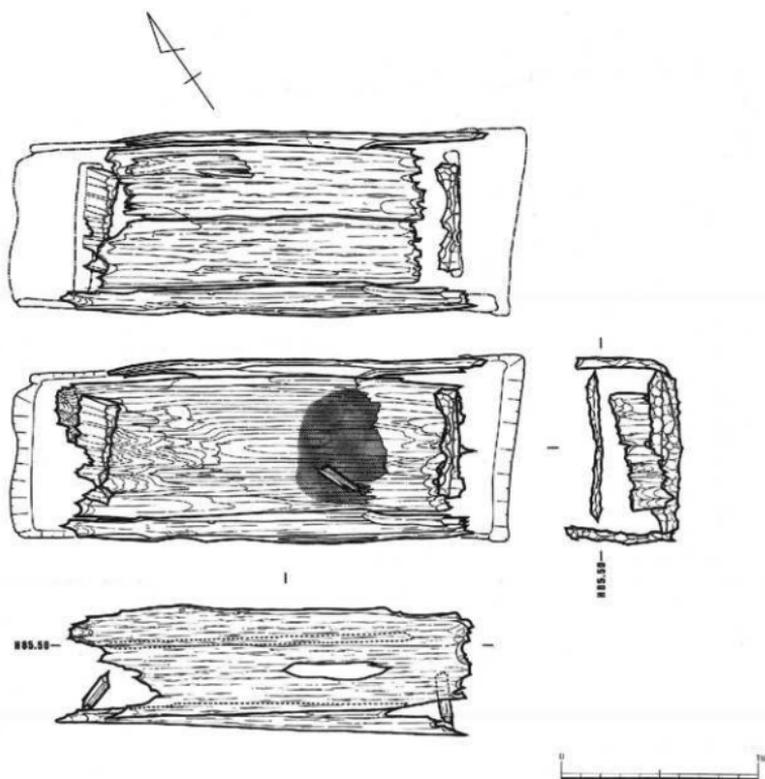
主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M328

位置 チーⅢの中央に位置する。北にM329、M330が接し、東、南、西には残地が広がる。

周溝 単独にめぐる形態をとるため、北溝とM329との切り合いは必ずしも明確でないが、M328の北溝がM329の南溝を切っているようである。

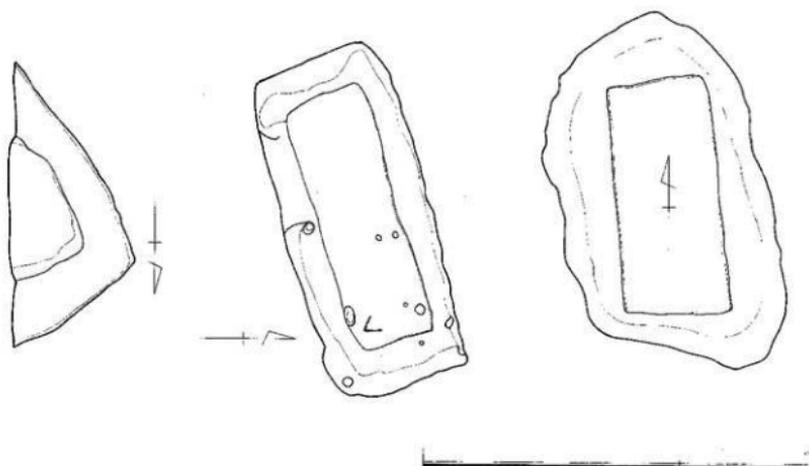


第31図 M326 主体部木棺実測図

墳丘（平面形） マウンドはすでに削平され、確認はできないが、平面形は隅丸方形を呈する。  
 主体部 検出しなかった。  
 遺物 出土しなかった。

M329

位置 チーⅢの中央に位置し、南のM328と東のM330と接続して所在する。  
 周溝 単独にめぐる形態をとるが、南溝をM328と東溝をM330と接続する。切り合いはM330-M329-M328の序列を示す。  
 墳丘（平面形） ほぼ方形を呈するがマウンドは削平され、確認できない。  
 主体部 検出できなかった。  
 遺物 西溝より広口壺（E215）壺底部（E217）の2点が、北溝より広口壺（E216）1点が出土をみた。



第32図 M332 第1主体部・M334 第2主体部平面実測図

#### M330

位置 チーⅢの中央に位置し、東にM334、西にM329、北にM345、南M328が所在する。

周溝 東・西溝が隣接の周溝と共有するが、他は単独にめぐる。

墳丘（平面形） 均正な、方形を呈す。

主体部 痕跡はなかった。

遺物 北溝より鉢（E218）1点が出土した。

#### M331

位置 チーⅢ東端に位置し、M334の西に接して所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、東端のみ、M334の西溝の一部と連接する。東端を後世の溝で削平されているため、切り合いは明確でないがM334—M331の序列をとる可能性が高い。

墳丘（平面形） ほぼ方形をとるとはられるが、マウンドは削平され痕跡も確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M332

位置 チーⅢの南西端に位置し、南にM307、東にM333、北にM334と接して所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、南溝は必ずして明確でなく、M307の北溝と重複している可能性が高い。東溝、西溝については後世の溝により変形を受けており、明確ではない。M307との切り合いは明確ではないがM307—M332の序列が一応考えられる。

墳丘（平面形） 長方形を呈するとみられるが、マウンドはすでに削平されていた。

主体部 中央の東よりに南北を主軸とする南北1.6m、東西1.3m掘り方を検出し、その内部で南北1.3m、東西1.6 mの木棺とみられる痕跡を検出した。ただ残りは30cmと浅く、その構造まで明らかにできなかった。

遺物 出土遺物はなかった。

#### M333

位置 チーⅡの南端に位置し南にM307、西にM332と接し、北には大型のM334が所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとる。ただし、南溝、西溝については、後世の溝により削平されており、M307、M332との共有関係は明らかでない。

墳丘（平面形） ほぼ方形を呈するとみられるが、マウンドはすでに削平され、確認できなかった。

主体部 中央付近に東西1.0m、南北2.0mの楕円形を呈する浅い落ち込みを検出した。主体部掘り方の残がいとみられる。

遺物 出土しなかった。

#### M334

位置 チーⅡとチーⅢの境界付近に位置する大型の周溝墓である。東側にこれも大型のM342が所在するが、各コーナーに接するように、M331、M335、M320などが所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、上述のように各コーナーに接続するように、小型の周溝墓が築造されている。M331 M335の場合については、明らかに後から切り込んでいることが判明し、これらが後出することが判明する。

墳丘（平面形） 均正な長方形を呈するが、マウンドはすでに削平され確認できなかった。

主体部 中央よりやや東よりに、東西2.8m、南北1.2mの長方形の浅い落ち込みを検出して、主軸も基のそれと一致しており、主体部掘り方の残がいと推測される。

遺物 南東コーナーで壺（E219）、鉢（E221）、北溝中央で壺（E220）各1点が出土しており、周囲の供献土器にくらべ、やや古い様相を示している。

#### M335

位置 チーⅡの中央に位置し、西にM334、東にM336、北にM342、南にM323が所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、南溝は南に所在するM333に規制を受け掘削されなかったとみられ、西溝はM334の南東コーナーを切り込んで築造されている。

墳丘（平面形） ほぼ方形を呈し、マウンドはすでに削平されていた。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M336

位置 チーⅡの中央に位置し、西にM335、東にM337が接して所在し、北に大型のM342が所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、西溝M335の東溝を東溝はM337の北端を切り込んでいる。

墳丘（平面形） ほぼ方形を呈するとみられ、マウンドはすでに削平され、確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M337

位置 チーⅡの南より位置し、北にM336と接するほか、西にM333、南にM306などが所在する。

周溝 単独をめぐる形態をとるが東溝が独立して、西溝が陸橋をなしているほか、北溝をM336が切り込んでおり、M336に先行することが知られる。

墳丘(平面形) 均正な長方形を呈し、マウンドはすでに削平され確認できなかった。

主体部 中央に東西を主軸とする、東西2.9m、南北1.2mの長方形を呈する掘り方を検出した。その内部に東西2.9m、南北1.2mの長楕円形の落ち込みを検出しており、埋葬主体の痕跡とみられる。

遺物 東溝の外側より壺底部破片(E222)1点が出土している。

#### M338

位置 北西から南東方向へ直線的に伸びる方形周溝墓列の南東端に位置しており、さらに東側での方形周溝墓は確認されない。周辺にも方形周溝墓の構築されない空間が目立つようになり、広大な墓域の東限が近いものと予想される。

なお、この方形周溝墓が埋没してもなく、直上に弥生時代中期後葉の集落関連遺溝が累々と構築されるようになる。

周溝 単独に周溝のめぐる形状を示し、陸橋部は存在しない。周溝幅は南東溝がやや広く、東隅でいささかみだれる傾向にあるが、全体に幅1.3m前後を測り、深さ0.5m、断面は倒立の台形状を呈し、底部は比較的平坦である。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土の地山中に底部を置く。覆土は3層よりなる。まず、底部真上に淡青灰黒色粘土(③層)が、周溝内側から流れ込むように堆積している。この層は、青灰色と黒色粘土のブロック状混入層であり、周溝掘開時、先の黒色粘土及び青灰色粘土からなる地山などを掘り込んで、盛土に供されていたものが、再び崩落して溝底に堆積したものと推定される。次いで、暗青灰褐色粘土(②層)と青灰褐色粘土(①層)が順次層を重ねて、周溝は埋没したようである。周溝のなかで、北西溝は、弥生時代中期後葉の遺物を多量に出土した溝(SD152B)によって切られている。SD152Bが掘開された段階でも、北西溝がまだ溝の痕跡を残していたためか、北流するSD152Bは、北西溝に接するとともに、急に曲折して、北西溝にそった流れとなる。

墳丘(平面形) 隅丸長方形を呈している。

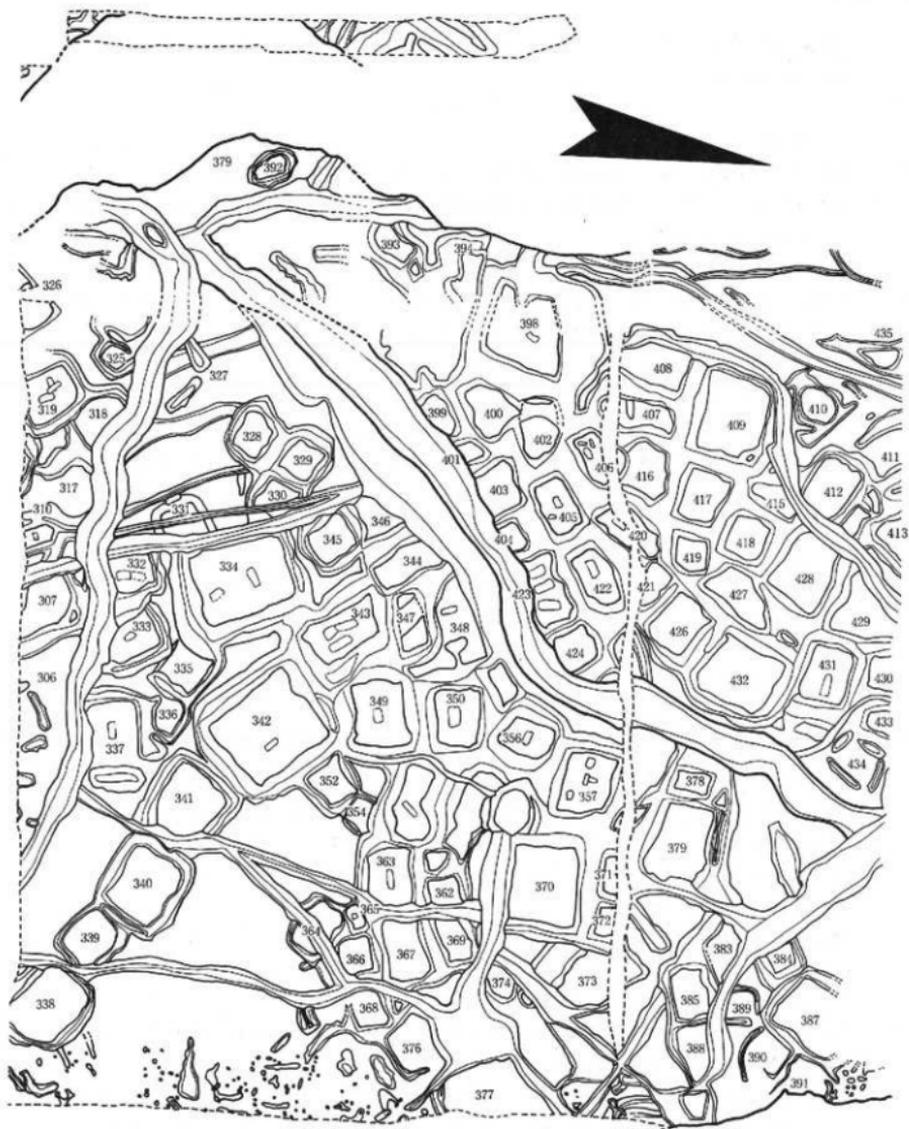
主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M339

位置 北西から南東方向へ直線的に伸びる方形周溝墓の南東端より2基めに位置している。M338と同様にこの方形周溝墓の埋没後、真上に弥生時代中期後葉の集落関連遺溝が構築される。

周溝 単独に周溝のめぐる形状を示し、陸橋部は存在しない。ただ、各辺ごとに溝の形状が、いささか異なる。北東溝は、東側半まで、幅1.0m、深さ0.4m、断面U字状に呈しているが、それより西側では、深さや断面の形状に大きな変化は認められないものの、溝幅がしだいに広がり、2.0mを越えるようになる。南東溝は、幅0.9m、深さ0.3m、断面は椀状を呈している。南西溝は中央付近がしだいに深くなる傾向にあり、最深处で0.6mを測る。溝幅は0.8mと



第33图 D地区平面图

三辺中最も狭い、断面は平坦な底部をわずかに保つが、V字状に近い。北西溝は、直接するM340に完全包括されて消失している。このことから、M339-M340の構築順序が判別される。周溝は、各辺とも黒色粘土の地山を切り込んで、青灰色粘土の地山中に底部を置く。溝内には、底部直上より淡青灰黒色粘土層(⑥層)、青灰黒色粘土層(⑤層-南東溝のみ)、黒灰色粘土層(④層-南西溝のみ)、暗青灰褐色粘土層(③層-北東溝のみ)、暗青灰黒色粘土層(②層-北東溝東側のみ)、青灰褐色粘土層(①層)の6層が識別される。この中で、②・⑤・⑥の各層は、盛土に供されていた各地山のブロックが崩落して再堆積したものと推定される。なお、南東溝は、M340と同様、弥生時代中期後葉の遺物を多量に出土した溝(SD152B)によって切られている。

墳丘(平面形) 7.8m×7.3mの隅丸長方形を呈している。隣接するM338やM340と比べると規模が小さい。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M340

位置 北西から南東へ直線的に伸びる方形周溝墓列の、M339とM341の間に位置する。M338やM339と同様、この方形周溝墓も埋没後、直上に弥生時代中期後葉の居住関連遺構が構築される。

周溝 周溝の単独にめぐる形態を示す。南西コーナーのみ不明確だが、それ以外の各コーナーでは、溝底が0.3m前後高くなり、いわゆる陰櫓部の様相を呈している。周溝幅は1.6~1.8mのほぼ均一した値を示す。深さは0.8m前後を測り、断面は、いづれも周溝内側ではなだらかで、一部テラス状になる箇所もみられるが、周溝外側は急峻なカーブを描いて一気に底部に至る。従って、各辺とも底部の位置は、周溝の比較的外側にある。周溝は黒色粘土の地山を切り込んで、青灰色粘土の地山中に底部を置くのが通常だが、北溝や南溝の東側では、さらに下部の地山(青灰色砂層)まで到達している。溝内には底部側より、暗青灰黒色粘土層(⑧層)、淡黒灰色粘土層(⑦層)、黒灰色粘土層(⑥層)、淡青灰黒色粘土層(⑤層)、青灰黒色粘土層(④層)、青灰褐色粘土層(③層)、暗青灰褐色粘土層(②層)、黄褐色粘土層(①層)の8層が順次層を重ねている。⑧層は、④・⑤層と同様、盛土に供されていた黒色粘土及び青灰色粘土のブロック状混入層が崩落して再堆積したものと推定される。⑥・⑦層はやや泥土に近い粘土層で、周溝肩部を形成していた黒色粘土の地山が流入したものと考える。②・③層は各方形周溝墓に共通して周溝内の上部過半を覆っている土層で、盛土の崩落や地山の流入以外の要因、例えば洪水等によるシルトの堆積によって比較的短期間に埋まったものと考えられ、おしなべて層が厚いのが特徴である。①層は他に例をみない土層であり、当周溝でも北東溝の東側のわずかな部分で確認されたにすぎない。層内には焼土及び炭化層が薄く層状に介入しており、炭化層内には、弥生時代中期後葉の土器細片が混入していた。居住関連の遺構が構築される、中期後葉段階でも、周溝が浅く形骸化して残ってしまったものと思われ、そこに同期の遺物が土砂とともに流入したのであろう。

なお、北溝は弥生時代中期後葉の溝(SD152A)によって切られている。

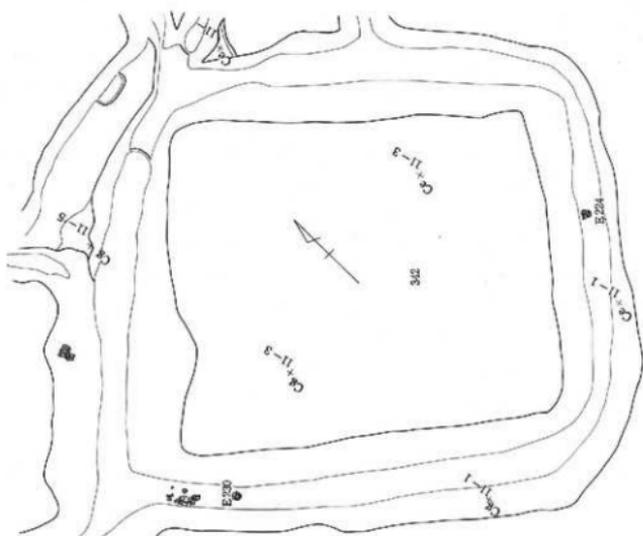
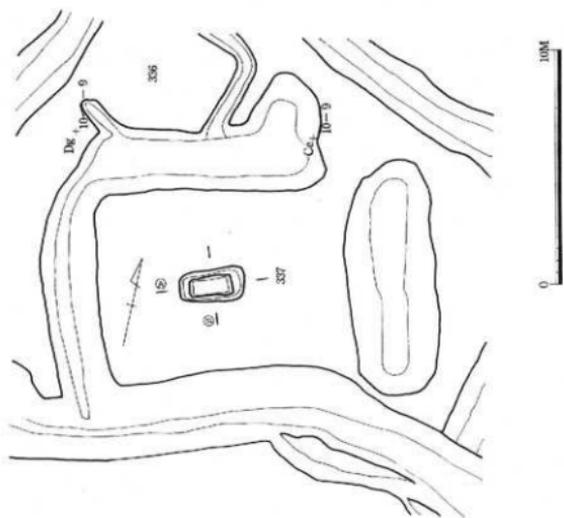
墳丘(平面形) 11.6m×10.1mの隅丸長方形を呈している。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 北溝の西側において、中期中葉の壺の頸部(E223)1点が出土した。周溝底部にほぼ接した⑤層中より、大きく2箇所に分かれて出土している。

#### M341

位置 北西から南東へ直線的に伸びる方形周溝墓列のM340と大型のM342の間に位置し、東溝は弥生時代中期後葉の溝



第34图 M337・M342 供献土器・主体部検出状況実測図

(SD152A) によって切られている。

**周溝** 周溝は、東溝のみSD152Aに切られているため不明だが、他は単独にめぐり、陸底部は存在しない。周溝の幅は2.0m前後のほぼ均一した値を示し、深さ0.6m前後、断面はU字状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土を経て、青灰色砂層中にその底部を置く。覆土は6層が識別され、洪水等に起因し青灰色系のシルトが厚く堆積した上層と、盛土や溝内の地山の崩落に起因する黒灰色系の粘土の堆積した下層に大別される。

**墳丘(平面形)** やや不定形気味ながらも、隅丸長方形を意図した形状を示す。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 南溝西側より受口状口縁を呈する広口壺の口頸部(E225)と壺底部(E226)の2点が、又、北西コーナー付近より、広口壺(E224)1点が出土している。

#### M342

**位置** 北西から南東へ直線的に伸びる方形周溝墓列の起点になるかとも思われる大型の方形周溝墓である。

**周溝** 周溝は南側過半は単独にめぐり、北側ではM349及びM352と完全共有の関係にあり、また、M343とは切り合い関係にあることからM342—M343であることが判明する。周溝の幅は3～5mを測り、深さ1.0～1.4mの断面U字状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土を経て、青灰色砂層中に底部を置くが、一次の礫層にまで達している箇所もある。覆土は8層が識別され、洪水等に起因して青灰色系のシルトが厚く堆積した上層と、盛土や溝内を形成する地山の崩落による黒灰色系の粘土の堆積した下層に大別される。

**墳丘(平面形)** 16.7m×14.3mの大型の隅丸長方形プランを呈する。

**主体部** 痕跡はなかった。

**遺物** 北西コーナー付近より壺(E233、E235)2点、東溝内より壺底部(E229)1点、また、南溝内より受口状口縁を有する広口壺(E227)や壺底部(E228、E230)が出土している。

#### M343

**位置** 大型の方形周溝墓M342の北西に位置し、北東側の墳丘から周溝にかけて、後世の条里溝により、上部を削平されている。

**周溝** 周溝は、南西溝が残地をひかえて単独にめぐり、南西溝がM342—M343の切り合い関係にある以外は、隣接する各周溝と完全共有の関係にある。周溝の幅は、2.5～3.8mとやや変化に富むが、深さはいづれも1.0m余り、断面は輪状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は最多で11層が識別される。

**墳丘(平面形)** 条里溝によって一部削平されているが、隅丸長方形のプランが意図されていたであろう。

**主体部** 墳丘のほぼ中央(第1主体部)と西コーナー付近(第2主体部)でそれぞれ検出した。両者とも墓底の方位は西方にあり、墳丘の軸線とは一致しない。第1主体部は、2.1m(長軸)×1.2m(短軸)、深さわずか10cmを残すに過ぎない。木棺墓であろう。第2主体部は、さらに遺存状態は不良で過半が消失している。

**遺物** 南西溝内のほぼ底部より、受口状口縁を有する広口壺(E232、E231)2点が出土した他、M347と共有する北西溝内北側より壺の底部(E239)1点が出土している。

#### M344

位置 M343の北西に位置し、方形周溝墓の北西側を後世の大溝等によって削平されている。

周溝 周溝は南西溝と北西溝の北側には残地をひかえて単独にめぐるが、南東溝はM343と、また、北東溝の南側はM347と完全共有の関係にある。北西溝は後世の大溝によって削平を受け遺存しない。周溝の幅はM343間で3.8mと最大幅を示し、M347間で最小の2.5mを測る。深さは1m前後、断面は椀状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、通常は、青灰色砂層中にその底部を置くが、南西溝ではさらにその下層の地山である灰白色砂層に達している。覆土は最高9層が識別されて、洪水等に起因して青灰色系のシルトが厚く堆積した上層と、盛土や溝溝を形成している盛土の崩落による黒灰色系粘土の堆積した下層に大別される。

墳丘（平面形） 南東から北西方向に細長い隅丸長方形を呈している。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M345

位置 チーⅢの北東端に位置し、北にM344、東にM334、南にM330が所在する。

周溝 単独にめぐる形態で、北東コーナーがM344と一部切り合う。

墳丘（平面形） 均正な方形を呈するが、マウンドは削平され確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

遺物 南溝より甕底部（E236）1点が出土した。

#### M346（残地）

#### M347・348

位置 M343の北側に位置し、当該方形周溝墓の北東一帯には不定形な残地が広がっている。

周溝 周溝は北溝と東溝が残地をひかえて単独にめぐるが、南溝及び西溝は、M343とM344のそれぞれの周溝と完全共有の関係にある。周溝の幅は、単独にめぐる方では比較的狭く、2m前後、深さは0.5mと浅い。断面は浅い椀状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は5層が識別される。

墳丘（平面形） 条里溝によって上部を大きく削平されているが、隅丸長方形の周溝墓であろう。

主体部 痕跡が認められない。

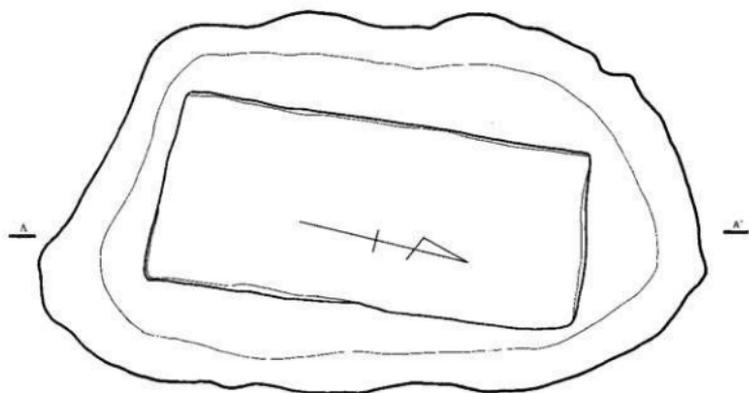
遺物 M343と共有する南溝内東側より甕の底部（E239）1点が出土した他、北溝より広口壺（E237、E238）の2点が出土し、北溝内中央の底部で朱が散布していた。

#### M349

位置 大型の方形周溝墓M342の北に位置し、M350と軸線をならべて併存する。後世、東溝を切り込んで溝が掘開かれ、南溝をかすめるように条里溝が走る。

周溝 周溝は、四辺の各周溝と完全共有の関係にあり、切り合い関係をもたない。周溝の幅3m～5m、深さ1.1m前後を測り、断面は椀状を呈す。底部はさらに幅0.5～1.0m、深さ0.2m程度U字状に掘り込まれる傾向が認められる。

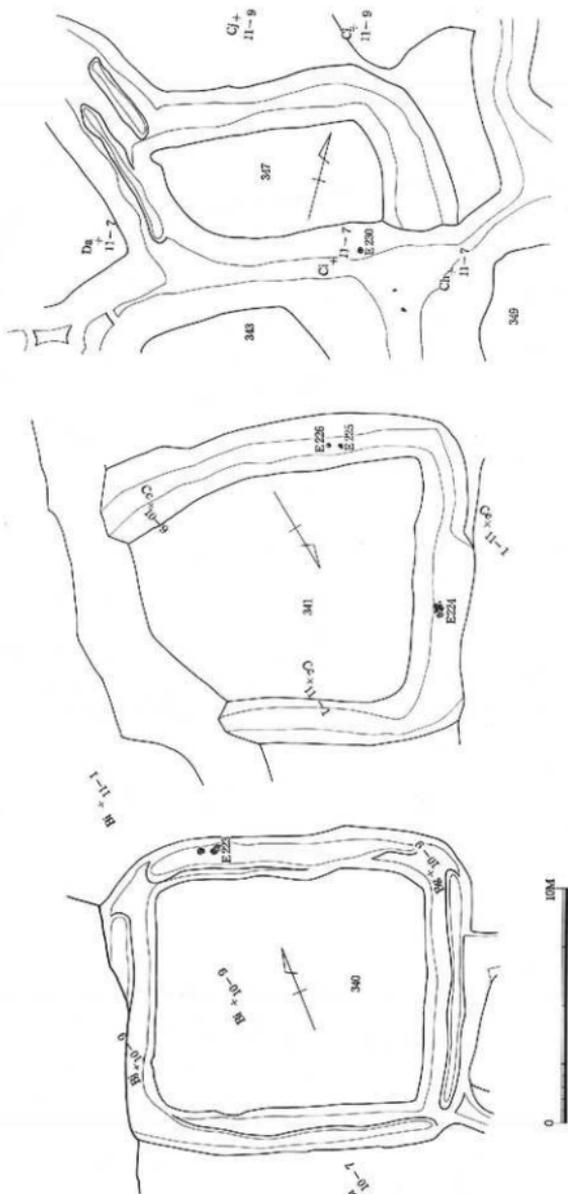
周溝は、黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は、14層が識別されるが、



- 1 黄砂層
- 2 黄砂層
- 3 黄砂層
- 4 黄砂層と黄砂層の混合
- 5 黄砂層と黄砂層の混合 (黄砂層)
- 6 3と類似し中々黄砂層
- 7 黄砂層中に黄砂層
- 8 黄砂層に黄砂層
- 9 3より下層に黄砂層
- 10 黄砂層



第35図 M343 第1主体部平面・断面実測図



第36图 M340·M341·M349 供献土器·主体部検出状況実測图

大きくは上層に厚く堆積した青灰色系の粘土層と、下層の底部近くに堆積する黒色系の粘土層に分けられる。青灰色系の各層は、洪水等に起因し、比較的短期間埋没したと考えられるものである。黒色系のそれは、盛土の崩落や地山そのものの流入など要因が考えられる。

墳丘（平面形）11.8m×9.9mの隅丸長方形を呈している。

主体部 墳丘のやや東より中央にて、周溝と軸線をほぼ同じくして1基が検出された。墓室は長軸2.7m短軸1.2mの長方形プランを呈し、深さ0.3mを測る。墓室の中央には木棺を埋置した痕跡があり、長軸2.0m、短軸0.5m深さ0.3mである。覆土は、掘り方として3層、棺内4層が識別される。

遺物 M343と共有する南溝内より、広口壺・甕（E240～E242・E244）など4点が、M342と共有する西溝内より壺底部（E245）1点が、また、M353と共有する東溝内よりも鉢脚台（E243）1点が出土している。

#### M350

位置 M349の北側に、M349と軸線を並べて併存している。

周溝 周溝は、周囲の各周溝といずれも完全共有しており、切り合い関係をもたない。周溝の幅は、残地に対する西溝で3m前後と最も狭く、他では通常5m前後を測る。深さは0.5m前後で断面は碗状を呈す。

周溝は、黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土を経て、青灰色砂層中にその底部を置く。覆土は6層が識別され、洪水等に起因し、青灰色系の粘土が厚く堆積した上層と盛土や溝屑の地山の崩落に起因する黒色系の粘土の堆積した下層に大別される。

墳丘（平面形）10.2×2.9mの隅丸長方形を呈している。

主体部 墳丘の東より中央に、周溝と各軸線を同じくする主体部1基を検出した。墓室は東西4.5m南北5.3mの張り鉢状にまず浅く掘り込み（掘り方Ⅰ）、次いで東西（長軸）2.0m、深さ0.5mに一段深く掘り下げ（掘り方Ⅱ）、その中央部に木棺を埋置していたものと予想される。木棺の痕跡は東西（長軸）1.8mを計る。覆土は、棺内、掘り方Ⅰ、掘り方Ⅱ、各2層ずつが識別される。

遺物 墳丘上、棺の北西側掘り方上より大型の壺（E247）1点が出土している。口頸部は遺存していない、棺外供献土器であろうか。東溝より広口壺（E246）1点が出土した。

#### M351（残地）

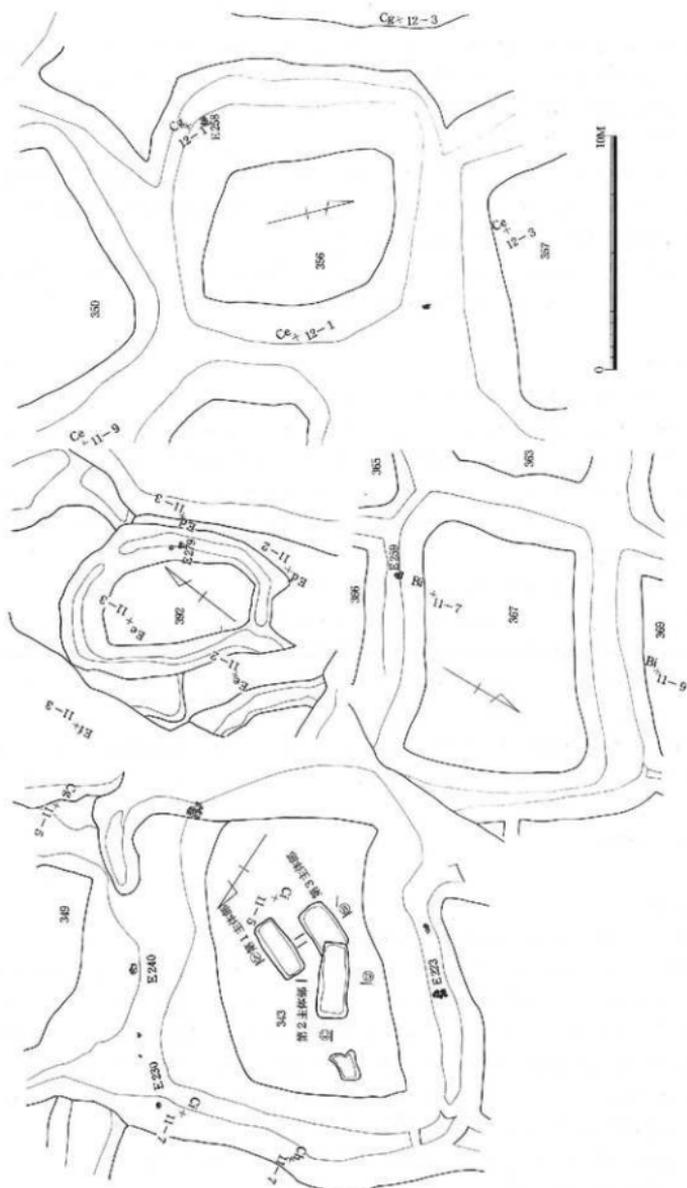
#### M352

位置 大型方形周溝墓M342の北東に位置する小型の方形周溝墓である。

周溝 周溝は、基本的に単独にめぐるものであるが、南西溝は、大型方形周溝墓M342によって包括されてしまったのか、あるいは完全共有の関係にあったのか判然としない。北東溝は、M351と切り合い関係からM351～M352である。周溝の幅は1.2～1.5mを測り、深さは北西溝と南東溝で深く0.6m、北東で0.4m、断面は碗状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、浅い周溝では青灰色粘土中に、また、深い周溝ではその地山を経て青灰色砂層中に底部を置く。覆土は7層が識別され、大きくは上層に厚く堆積した青灰色系粘土と、下層の黒灰色系粘土に別けられる。下層の各層は、盛土の崩落に起因することを物語るように墳丘側で顕著である。

墳丘（平面形）6.8m×5.3mと小型で不定形ではあるが、長方形プランを意図している。

主体部 痕跡が認められない。



第37图 M343·M356·M367·M392 供献土器·主体部検出状況実測图

遺物 南東溝や南よりで広口壺の口縁部（E248）1点がそれぞれ出土している。

#### M353（残地）

#### M354

位置 M352とM363の間に位置する小型の方形周溝墓である。

周溝 周溝は、基本的に単独に廻っていたものと考えられるが、南西溝と北西溝はM352とM363に切られて、ほとんど遺存していない。この切り合い関係からM354—M352、M354—M363の新旧関係が明らかである。また、東と南の両コーナーは周溝が連結せず、いわゆる階梯部の様相を呈している。周溝の幅は狭く0.7～1.0m、深さも浅く0.3mを測りに過ぎない。断面は椀状を呈し、6層が識別される。

墳丘（平面形） 4.8以上m×4.5以上mと小型で不定形なものだが、方形プランを意図している。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 南東溝南側より広口壺（E249）1点が出土している。

#### M355（残地）

#### M356

位置 テーⅡの中央に位置し、南にM350、北にM357が存在する。

周溝 隣接する周溝と共有関係にあるが、切り合い関係は明らかでなかった。

墳丘（平面形） 長方形を呈し、マウンドは削平され確認できなかった。

主体部 中央に東西4.2m、南北に2.5mの長方形掘り方を一基を確認した。ただ残りは20cmと悪く、内部主体は確認できなかった。

遺物 西溝コーナー付近で広口壺（E251・E252）2点が出土した。コーナー供献の一例とみられる。

#### M357

位置 テーⅡの北端に位置し、南にM356、西にM370が存在する。

周溝 北溝、西溝の単独でめぐるが、西溝、東溝は共有関係にあった。ただし切り合いは明確でなかった。

墳丘（平面形） ややいびつな長方形を呈し、マウンドは削平されて確認できなかった。

主体部 四ヶ所で隅丸方形の浅い落ち込みを確認した。第1主体は東西3.1m、南北2.1m、第2主体は東西3.5m、南北1.5m、第3主体は第2主体を切っており、東西2.1m、南北3.1mをはかる。第4主体は東西3.5m、南北2.0mであった。ただし内部設備はいずれも確認できなかった。

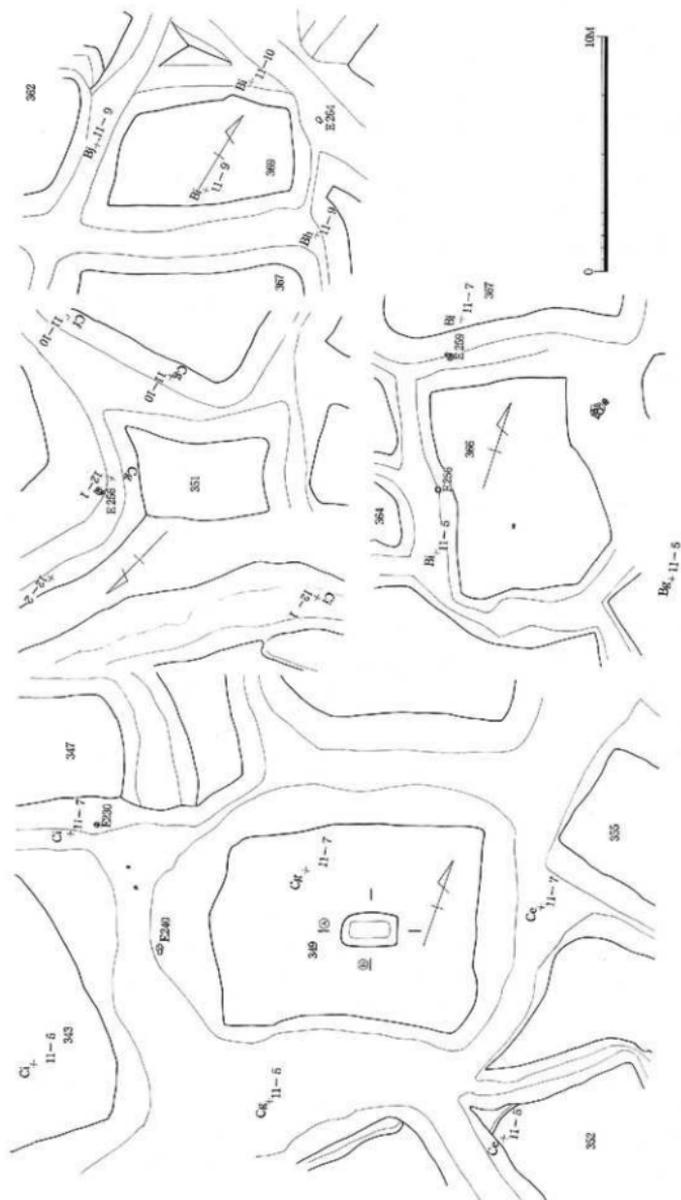
遺物 出土しなかった。

#### 358（残地）

#### 359（残地）

#### 360（残地）

#### 361（残地）



第38图 M349·M351·M366·M369 供献土器·主体部検出状況実測图

#### M362

位置 リー1の中央に位置し、南にM263、北にM370が所在する。

周溝 隣接の各周溝と共有する形態をとるが、切り合いを明確に確認できなかった。

墳丘（平面形） ほぼ方形を呈し、マウンドは削平されており、確認できなかった。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M363

位置 リー1の南西端に位置し、東にM367、北にM362が所在する。

周溝 南溝を除き隣接の各周溝と共有関係にある。ただし、切り合い関係は明確でなく、周囲の周溝墓との前後関係は明らかになっていない。

墳丘（平面形） 長方形を呈し、マウンドは削平されておりその存在は確認できなかった。

主体部 中央に東西に主軸をとる東西2.5m、南北1.2mの長方形の落ち込みを検出した。深さは10cm程度で残りは悪く主体部掘り方の一部とみられる。

遺物 南溝に広口壺（E253）、山形口縁の甕（E254）の2点、西溝に甕底部（E250）1点の供献があった。

#### M364

位置 チー1の北端に位置し、南と西に残地が広がり東にM374、北にM365、M365が所在する。その中央がSD152Aによって切られる。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、西溝がM365の南溝と北西のコーナーがM366の西南溝と共有関係にある。

墳丘（平面形） 長方形を呈し、マウンドは消失。

主体部 不明。ただし西端より不整楕円の土盛が検出され、その可能性が考えられる。

遺物 北溝より直口壺（E255）が1点出土をみた。

#### M365

位置 リー1の南端に位置し、M366の西、M364の北に所在、北西コーナーをSD150が削平している。

周溝 周溝を隣接の周溝と共有する。東溝がM366の西溝と南溝がM364の北溝と共有、北溝がM363の南溝と共有するが、切り合いは不明。溝内の層序は第1層が灰青色粘土、第2層が灰青色粘土に黒色粘土ブロック、第3層が青色粘土と黒色粘土の互層であった。

墳丘（平面形） 長方形を呈し、マウンドは消失している。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M366

位置 リー1の南端に所在し、東にM377、西にM365、南にM364、北にM367が所在する。南東コーナーをSD152により削平される。

周溝 周溝を共有する形態で、北溝はM367の南溝と西溝はM364、M365の北東溝と共有関係にあり、M366の北溝がM

367の南溝に切っており、M367-M366の序列が判明する。溝内の層序は第1層が灰褐色粘質土、第2層が暗青灰色砂質土、第3層が灰色砂層、第4層が暗灰色粘質土であった。

墳丘（平面形） ややいびつな方形でマウンドは消失。

主体部 中央に東西1.7m、南北0.9m、深さ22cmをはかる落ち込みを検出した。

遺物 西溝より、広口壺（E256）1点が出土したほか、南溝より壺（E258）、細頸壺（E257）、鉢（E262）、受口口縁甕（E261）、単純口縁甕（E260）が出土している。

#### M367

位置 リーIの東端に位置し、北にM369、南にM366が所在。西溝を、SD152Aにより切られる。

周溝 周溝は共有する形態で、北溝はM369の南端と南溝はM366の北溝と共有にあり、西溝はSD150に切れ、東溝のみ単独にめぐる。北溝がM369の南溝に切れ、M367-M369の序列が判明。南溝はM366の北溝に切られており、M367-M366の序列が判明した。溝内の層序は、第1層が暗青灰色粘質土、第2層が青灰色粘質土、第3層が暗青灰色粘質土、第4層が暗青灰色粘質土に黒色粘土ブロック、第5層が黒色粘土層であった。

墳丘（平面形） ややいびつな長方形で墳丘は消失。

主体部 中央に東西2.7m、南北1.2m、深さ15cmの落ち込みを検出した。

遺物 南溝より、広口壺（E264）、細頸壺（E263）2点が出土したほか、北溝より壺底部（E264、E265）2点、受口口縁甕（E266）1点が出土した。

#### M368（残地）

#### M369

位置 リーIの中央M367の北、M369の東に所在し、西溝を、SD150により、北東コーナーを古墳前期の溝により削平される。

周溝 周溝を共有する形態で、南溝はM367の北溝と共有関係にあり、南溝がM367の北溝を切り込んでおり、M367-M369の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が灰青色泥砂、第2層が灰青色粘質土、第3層が暗青灰色粘質土、第4層が暗青灰色粘土に、黒色粘土が介入。

墳丘（平面形） いびつな長方形を呈す。

主体部 痕跡が認められなかった。

遺物 出土遺物はなかった。

#### M370

位置リーIの北よりM371の西、M362の北、M357の東に所在する。古墳前期の溝により南溝を、SD150により東溝を、古墳前期の溝により北溝を削平される。

周溝 周溝を共有する形態をとっており、西溝がM357の東溝と、北溝がM362とM372の南溝と共有関係にある。溝内の層序は、第1層が青灰色粘質土、第2層が暗青灰色粘土、第3層が灰青色泥砂、第4層が黒色粘土層である。

墳丘（平面形） 墳丘はすでに消失し、平面形は長方形を呈す。

主体部 痕跡が認められなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M371・M372

位置 リーIの北よりM370の東、M373の南に所在し、後世の溝によって北溝以外は、削平されている。

周溝 共有する形態とみられるが、後世の変形が大きく詳細は不明。

墳丘(平面形) 大部分を削平されているが、平面形は、長方形で呈するとみられる。

主体部 痕跡が認められなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M373

位置 リーI・ヌーIの間に位置し、M385の南、M371の北に所在する。西溝を後世の溝により切れ、東溝の一部をSD150で削平される。

周溝 周溝を共有する形態をとるとみられる。ただし、各周溝は新しい遺構により切り込まれており詳細は不明。

墳丘(平面形) マウンドはすでに消失し、平面形は長方形を呈す。

主体部 痕跡が認められなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M374

位置 リーIの北端に位置し、M375の南に接し、M364の東に所在する。中央をSD151によって切られる。

周溝 周溝は単独にめぐる形態で、北溝がM375、M366、M364の南溝、東溝と一部共有するとみられるが、SD151とその分枝によって切られており、詳細不明。

墳丘(平面形) やや長い長方形の平面形を呈し、マウンドは消失している。

主体部 痕跡が認められなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M375

位置 リーIの北溝、M367の東、M376の南に所在し、西溝をSD152Aによって切られる。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、南溝はM374の北溝と共有し、北東コーナーが、M376の南溝と共有関係が認められる。

墳丘(平面形) マウンドはすでに消失し、平面形は長方形を呈する。

主体部 痕跡が認められなかった。

遺物 南溝から広口壺(E267)、細頸壺(E268)が出土した。

#### M376

位置 リーI中央東端に位置し、M375の北に接するが、西溝をSD152Aによって切られる。

周溝 周溝が単独にめぐる形態で、南溝の一部がM375の北溝と共有関係にあるが、切り合いは不明。溝内の層序は第1層が暗青灰色粘質土、第2層が灰青色粘質土、第3層が暗灰色粘質土、第4層が褐灰と灰青色粘質土、第5層が黒灰

色粘土である。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、ほぼ長方形を呈する。

主体部 痕跡が認められなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M377

位置 リーⅠの東に位置し、M376の北東に所在する。後世の溝とSD152Aによって周溝はすべて切られ、東半は旧河道Dにより削平されている。

墳丘（平面形） マウンドは消失し、平面形は長方形とみられる。

主体部 痕跡は認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M378

位置 スーⅡの南端に位置し、M379の西に所在し、北と南には残地が広がる。西半を後世の大溝によって削平されている。

周溝 周溝を共有する形態をとり、東溝はM379の西溝と共有関係にあるが、切り合いはみられなかった。溝内の層序は、

第1層が灰青色砂質土、第2層が灰青色砂質粘土、第3層が灰青色粘質土、第4層が青灰色砂質土に黒色粘土ブロック混入であった。

墳丘（平面形） マウンドはすでに削平を受けていた。平面形は削平のため不明。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M379

位置 スーⅡの南端に位置し、M382の西、M378の東に所在し、南と北は残地が広がる。

周溝 周溝を共有する形態をとり、東溝はM382の南溝と、西溝はM378の東溝と共有関係にあるが、いずれも切り合い

はなかった。溝内の層序は、第1層が灰青色粘土、第2層が灰青色砂質粘土、第3層が青灰色粘土に黒色粘土の混入、第4層が灰黒色砂質粘土であった。（地山は青灰色砂質土）

墳丘（平面形） ややいびつな長方形を呈するが、マウンドはすでに消失していた。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M380（残地）

#### M381（残地）

#### M382

位置 スーⅠの南端に位置し、東にM373、西にM379、南にM362、M372が、北にM383が所在する。西辺を後世の溝で切られる。

**周溝** 周溝を共有する形態をとり、東溝のみ単独にめぐる。西溝と北溝が、それぞれM379とM383の東溝・南溝と共有関係にあるが、切り合いはなく、溝内の層序は、第1層が青灰色粘質土、第2層が青灰色粘質砂土、第3層が淡青灰色粘質土、第4層が暗灰青色粘質土であった。

**墳丘（平面形）** マウンドはすでに消失し、平面形は方形とみられるが、不明である。

**主体部** 検出しなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M383

**位置** ヌー1の中央に位置し、東にM385、西に残地、南にM382、北にM384が所在する。北辺を後世の溝でえぐられる。

**周溝** 周溝と共有する形態で、隣接の周溝と共有関係にあるが切り合いはなかった。溝内の層序は、第1層が黄褐色砂質土、第2層が青灰色粘土、第3層が青灰色砂質粘土、第4層淡青灰色粘質土、第5層が暗灰黑色粘質土、第6層が黒灰色粘質土、第7層が淡青灰色粘質土であった。

**墳丘（平面形）** マウンドはすでに消失しており、平面形はややいびつな長方形を呈する。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M384

**位置** ヌー1の中央に位置し、東にM387、西に河道をはさんで残地が、南にM383、北に残地が広がる。西側と旧河道によりえぐられている。

**周溝** 一部共有するか、周溝が単独にめぐる形態をとる。東溝がM387の西側を切っており、M387—M384の序列が判明する。溝内の層序は、第1層が灰青色砂層、第2層が暗灰青色砂質粘土、第3層が青灰色砂質粘土、第4層が暗灰色粘質土、第5層が暗黒灰色粘質土。

**墳丘（平面形）** マウンドはすでに消失し、平面形は均正な方形を呈す。

**主体部** 検出されなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M385

**位置** ヌー1の東南端に位置し、東にM388、西にM382、南にM373、北にM386が所在する。

**周溝** 周溝を共有する形態をとり、東溝・北溝がM388とM383の西溝、南溝と共有関係をもつが、切り合いはない。溝内の層序は、第1層が灰青色泥砂、第2層が暗灰青色泥砂、第3層が灰青色砂質粘土、第4層が黒色粘質土であった。

**墳丘（平面形）** マウンドは消失するが、平面形は長方形を呈す。

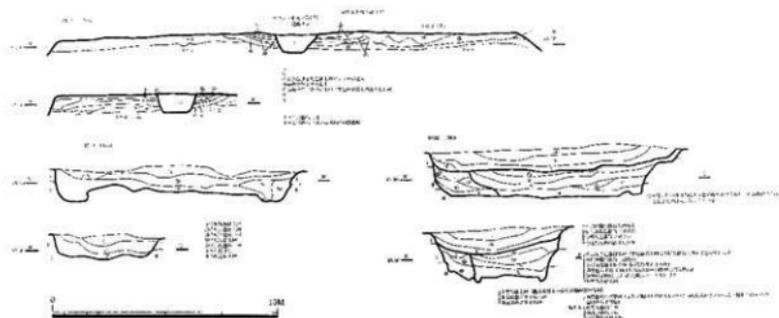
**主体部** 検出しなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M386

**位置** ヌー1中央東端に位置し、東にM389、西にM383、南にM385、北にM387が所在する。

**周溝** 周溝が単独にめぐる形態をとり、北東コーナーに隣接部をもつ。南溝は、河道により切られている。



第39図 M379・M420・M422 主体部断面実測図

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、ほぼ長方形を呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 西溝に2点の供献土器が出土、広口壺（E269）1点、高環（E270）1点であった。

#### M387

位置 ヌー1の北端に位置し、東にM389、M390、西に残地、南にM384、M386、北に残地が広がる。北西コーナーは、調査外で未調査。

周溝 単独にめぐる形態をとるが、隣接のM384、M389、M390と共有関係にある。南溝がM384の北溝に切られ、東溝もM389、M390の西溝に切られており、M387—M384、M389、M390の序列が判明する。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は均正な方形を呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 南溝中央より、細頸壺（E272）、東溝より広口壺（E271）各1点が出土している。

#### M388

位置 ヌー1の南溝に位置し、東にM391、西にM385、南と北に残地が広がる。

周溝 単独にめぐる形態で、東溝・北溝は河道に切られ、西溝のみM386と共有関係にある。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は長方形とみられる。

主体部 検出しなかった。

遺物 南溝より広口壺（E273）1点が出土した。

#### M389

位置 ヌー1の中央に位置し、東に残地、西にM387、南にM386、北にM390が所在する。

周溝 単独にめぐる形態で、東溝、南溝は円弧を描き、西溝はM387を切っており、M387—M389の序列が判明する。

墳丘（平面形） マウンドは消失し、平面形はいびつな方形を呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M390

位置 ヌーⅠの東北端に位置し、東に旧河道D、西にM387、南にM389、北に残地が広がる。

周溝 単独にめぐる形態で、南溝・西溝は、M389の北溝、M387の東溝と共有関係にあり、西溝がM387の東溝を切っており、M387—M390の序列が判明する。

墳丘（平面形） マウンドはすでに消失し、平面形は方形を呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M391

位置 ヌーⅠの東端に位置し、西にM388が所在するほか、残地が広がる。東には旧河道Dが南北流する。

周溝 単独にめぐる形態とみられるが、河道により大きく削平されており、切り合い層序は不明。

墳丘（平面形） マウンドは消失し、平面形は方形を呈す。

主体部 検出しなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M392

位置 チーⅢの中央に位置し、周辺部は旧河道Cをはじめ、多くの自然水路によってズタズタになって、島状を呈する。

周溝 単独にめぐる形態で、楕円形を呈する。

墳丘（平面形） いびつな長方形を呈し、マウンドは削平され確認できなかった。

主体部 検出できなかった。

遺物 東溝より受口壘（E279）1点が出土している。

#### M393

位置 リーⅣの南端に位置し、北にM396が所在する。

周溝 単独にめぐる形態をとるとみられるが、旧河道などの影響でややみだれている。

墳丘（平面形） マウンドは削平され、確認できないが、ややいびつな長方形を呈する。

主体部 検出できなかった。

遺物 出土しなかった。

#### M394（残地）

#### M395（残地）

#### M396

位置 リーⅣの南端に位置し、北にM398、南にM393が所在する。

周溝 共有する形態とみられるが、特に南溝と西溝が旧河道など後世の自然水路により乱れており、切り合い等明らか

にできなかった。

墳丘（平面形） 後世の削平によりマウンドはもとより平面形も確認できないが、本来は方形に近い形をとるとみられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 南溝より甕（E280）直口壺（E281）、甕底部（E282）の2点が出土している。

#### M397（残地）

#### M398

位置 M400やM402の西に位置し、広大な周溝墓群の西を限るかと思われる比較的大型の周溝墓である。

周溝 周溝は、東溝がM400やM402と完全共有の関係にある以外は、単独にめぐめるものである。周溝の幅は最も狭い箇所でも4mを越える程広く、深さは1m程度と比較的浅い輪状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層や青灰色砂層を経て、南溝が再び出現する青灰色粘土層に底部を置く以外は、いづれも灰白色砂層中に底部を取っている。なお、墳丘中央に東西に走る溝が確認され、西に向かってしだいに深さを増し、西溝を突き破ってさらに西方へ伸びている。溝内出土土器は、当周溝と大きな時間的隔たりはない。当周溝を再分割する意図を持った溝であったのだろうか。

墳丘（平面形） 台形状を呈する比較的大型の周溝墓である。

主体部 中央北側に東西1.1m×南北2.2m、深さ20cmの落ち込みが検出した。

遺物 M402と共有する東溝内中央にM398側肩部より広口壺（E285）1点が、また、南東コーナーの下部 近くより受口状口縁甕（E284）1点がそれぞれ出土している他、墳丘中央を東西に走る溝内からも受口状口縁の甕（E285）が出土している。

#### M399

位置 M400の南東に位置し、墳丘の南東過半を後世の大溝等により削平されている。

周溝 周溝は、北西溝がM400と切り合い関係にあり、M400—M399が判明する。北東溝はM401と完全共有している。

なお、南西側一帯は残地が広がっているが、当周溝の南コーナー付近から南西へ輪状の溝が数回走って止まっている。周溝墓の構築途中で放棄したものかとも考えられ、当南西溝と切り合い関係にある。当南西溝が切られている。周溝の幅1.7～2.3m、深さ0.8mを測り、断面は北西溝がU字状を呈する以外は輪状である。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、北東溝では青灰色砂層中に底部を置くが、他域ではさらに下層に至って再び出現する青灰色粘土層中に底部を取っている。覆土は6層が識別される。

墳丘（平面形） 南東側過半は削平を受けて不明だが、方形を意図するものであったと考えられる。

主体部 墳丘のやや北西より中央付近に、周溝と軸線をほぼ同じくして1基を検出した。墓底は長軸1.8m、短軸0.9mの長方形プランを呈し、深さ0.3mを測る。木棺を埋置した痕跡が認められず、土盛墓であった可能性が考えられる。覆土として7層が識別され、⑥層の北東側では朱の沈着が認められる。

遺物 出土しなかった。

#### M400

位置 M399の北に位置する。

周溝 周溝は南東溝がM399と、北東溝がM402とそれぞれ切り合い関係にあり、M400—M399、M400—M402が判明する。他の溝の周囲の周溝墓と完全共有している。周溝の幅は1.5～5.1mを測り、特にM398と共有する北西溝が広い。深さは0.9m余、断面は一部でU字状を呈する以外は椀状である。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て青灰色砂層中に底部を置くのが通常だが、南東溝一帯では、さらに下層に至って再び出現する青灰色粘土層中に底部を収めている。また、北西溝周辺では、さらに下層に灰白色砂層が広がっており、同層中に底部を収めている。覆土は、北西溝で最高19層が識別される。ただ洪水等に起因して青灰色系のシルトが厚く堆積した上層と、盛土や溝削り形成している地山の崩落してものが再堆積した黒灰色系粘土系の下層に大別される点は変わらない。なお、周溝がほぼ埋没して時点で、北西溝及び南西溝では、周溝内中央上部を、断面U字状の小溝が、周溝に沿って走っている。

墳丘(平面形) 不定形ながらも、五角形状に各辺がめぐり、北西コーナーはM402へむかって陸橋部状に伸長し、ほぼ接している。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 北西溝の北コーナー付近より広口壺(E286、E287、E289)3点が、また、南西溝の中層より直口壺(E288)と受口状口縁甕(E290)各1点が出土している。直口壺の底部は焼成後穿孔を施している。また、東溝でも「く」字口底甕(E291)1点が出土した。

#### M401

位置 M400の東に位置し、東側を後世の大溝等により削平されている。

周溝 周溝は、いづれも周辺の各周溝と完全共有の関係にある。周溝の幅は1.5～2.1m、深さ0.9m前後と比較的狭くて深く、断面はU字状に近い椀状を呈している。特に周溝内側は急峻なカーブを描いて底部に至る傾向が顕著である。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は6層が識別される。

墳丘(平面形) 現状では形状を定め難い小型の周溝墓である。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M402

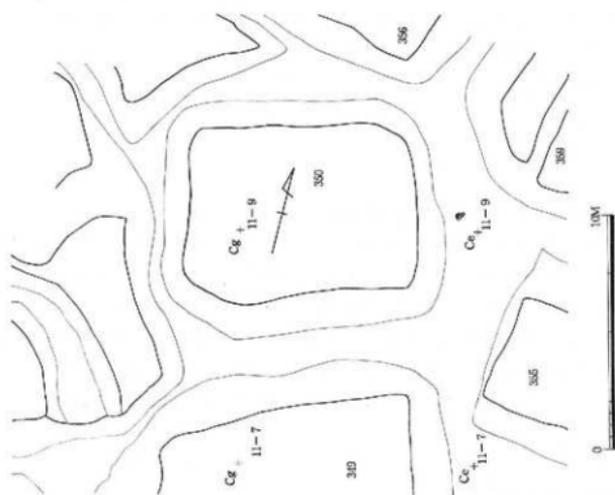
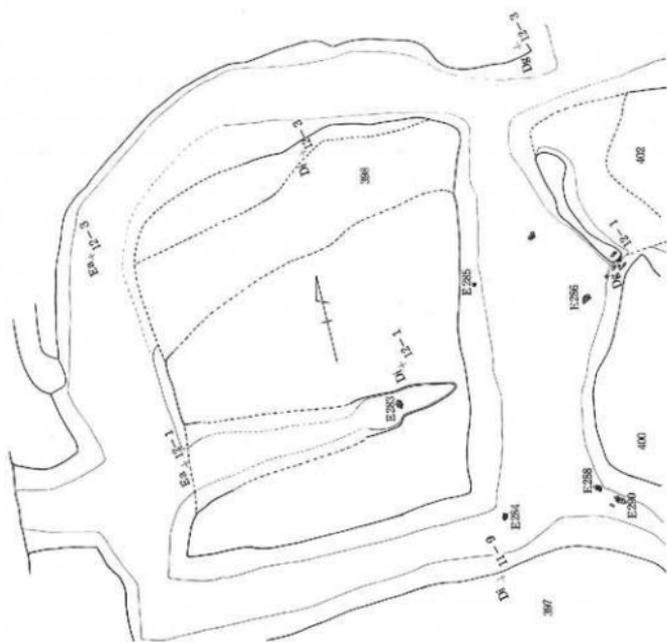
位置 M400の北に位置し、墳丘西半を南北方向の溝状攪乱により削平されている。

周溝 周溝は、南溝がM400と北溝がM406とそれぞれ切り合い関係にあり、M400—M402、M402—M406が判明する。他の周溝は、周囲の周溝墓と完全共有している。周溝の幅は、通常3m弱であるが、M398と共有する西溝では5.4mを測る。深さは0.6～0.8mとほぼ一定している。断面は椀状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て青灰色砂層中に底部を置く以外に、北溝周辺では、さらに下層の青灰色粘土層中に、また、西溝周辺ではさらに下層の灰白色砂層中に至ってようやく底部を収めている。覆土は、西溝で最高の13層が識別された。

墳丘(平面形) 形の定まらない四角形状を呈しており、南西コーナーは、隣接するM400とほぼ接するかのよう接近している。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 北溝より細頸壺(E305)1点が出土した。



第40图 M350・M398 供献土器・検出状況実測図

#### M403

**位置** M401の北東に位置し、南東側を後世の大溝等により削平されている。

**周溝** 周溝は、北西溝がM405と切り合い関係にあり、M405→M403が判明する以外は、いずれも周辺の各周溝の完全共有の関係にある。周溝の幅は、1.4～2.4mを測り、深さは北西溝が0.5mと比較的浅い以外は0.8～0.9mである。断面は、南西溝がややV字状を示す以外は、碗状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、北東溝では青灰色粘土中に底部を置くが、他溝では、さらにその真下の青灰色砂層に至って底部を収めている。覆土は最高6層が鑑別され、上部は洪水等に起因する青灰色系のシルト下部は溝屑や盛土の崩落したものが再堆積した黒灰色系粘土の大きく2種類に大別される。

**墳丘(平面形)** 隅丸長方形を意図するものであろう。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 北溝より広口壺(E293)1点が出土した。

#### M404

**位置** M403の北東に位置し、南東過半を後世の溝により削平されている。

**周溝** 周溝は、周辺の方形周溝群すなわちM403、M405、M423のいずれとも完全共有の関係にある。周溝幅は、1.7～2.4mを測り、深さ0.6～0.9m、断面は倒立の梯形状を呈す。通常、黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て青灰色砂層中に底部を置くが、南西溝のみ、青灰色粘土層が厚く、同層中に底部を収めている。覆土は最高8層に分層される。

**墳丘(平面形)** 遺存する北西辺が4mにみえない小規模なもので、方形を意図している。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 溝内より細頸壺(E293)1点が出土した。

#### M405

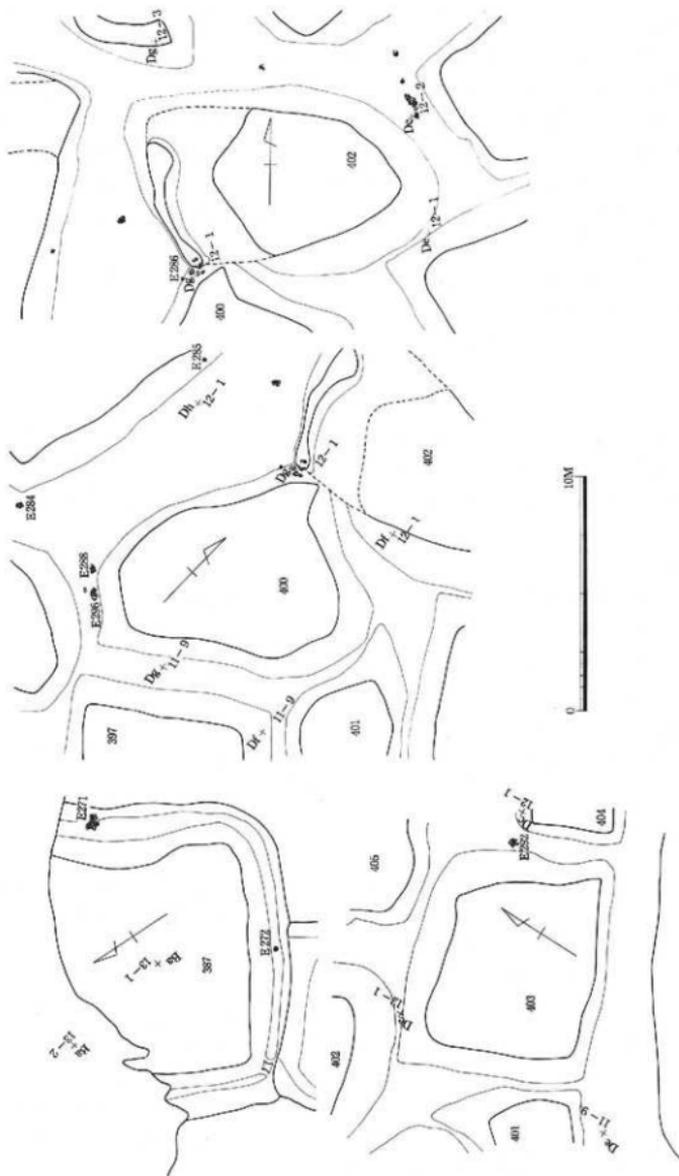
**位置** M402の北東に位置している。

**周溝** 周溝は、南東溝がM403と北西溝がM406と、また、北東溝がM422とそれぞれ切り合い関係にあり、M405→M403、M405→M406、M422→M405が判明している。M402とM404の周溝とは完全共有している。周溝の幅は、M403間が最も狭く1.0m前後、逆にM402間は最も広く2.7mを測る。深さは、0.6～0.9mとほぼ一定している。断面はM403間のように狭くて深くV字状に呈する箇所、M402間のように広くて浅い碗状の示す箇所その他、M404間、M406間、M422間のように溝底が平坦でU字状となる箇所が多い。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て青灰色砂層中に底部を置く。覆土は4層～7層が鑑別される。

**墳丘(平面形)** 5.4m×9.0mの隅丸長方形を呈している。

**主体部** わずかに痕跡を残す2基を検出した。1基は墳丘のほぼ中央に位置し、周溝とも軸線をほぼ同じくするものである。長方形を呈している。他の1基は、墳丘のやや東南方向に偏しており、軸線も周溝と異なる。隋円形状に carruaging して遺存していた。

**遺物** M402と共有する南西溝の北側で、同一層位同一レベルから受口状口縁を有する広口壺(E297)、細頸壺(E295)、壺の頸部(E298)、甕(E300)水差型土器(E299)、高環(E301)などが一括出土した。また、同じ南西溝の南側では、広口壺(E294)1点と細頸壺(E296)1点が出土している。



第41图 M387·M400·M402·M403 供献土器出土状况实测图

#### M406

**位置** M402の北に位置し、M416とは北コーナーの一部で接しているようである。

**周溝** 周溝は、南西溝がM402と、南東溝がM405と、また、北東溝がM420とそれぞれ切り合い関係にあり、M402-M406、M405-M406、M420-M406が判明している。M416とは北コーナーの一部で接しており、切り合い関係は不明である。周溝の幅は、南西溝で最も狭く2.5m、南東溝で最も広く3.7mを測る。周溝の深さは、通常0.8m程度であるが、北東溝のみ浅く0.4mである。溝の断面は底部の比較的平坦な椀状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、南西溝では、青灰色粘土層、青灰色砂層の各地山を経て再び出現する青灰色粘土層中に底部を置くが、浅い北東溝では、黒色粘土層直下の青灰色粘土層中に底部を収める。覆土は最高7層が識別され、上部は洪水等に起因する青灰色系のシルト、下部は溝岸や盛土の崩落したものが再堆積した黒灰色系粘土の大きく2類に大別される。

**墳丘（平面形）** 墳丘は東西に走る攪乱溝より2分されている。平面形は台形に近い長方形を呈す。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 北東溝より広口壺（E302・E303）2点が出土している。

#### M407

**位置** M402の北西に位置し、当周溝墓以西に周溝墓は存在しない。

**周溝** 周溝は、北溝と東溝がM409・M406・M416とそれぞれ完全共有の関係にある以外は、単独にめぐっている。周溝の幅は、おおよそ3m前後を測り、深さ0.8m、断面は底部の比較的平坦な椀状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。なお、墳丘の中央やや南よりに西へ向かってやや深さを増す東西方向の溝が確認される。溝内からは豊富に土器が出土し、周辺の周溝関連の土器とも大きな時間的隔たりはない。南北に長い当周溝墓を、再分割する意図を持った溝であったのだろうか。

**墳丘（平面形）** 墳丘は東西に長く走る攪乱溝より、2分されている。平面形は南北に細長い長方形を呈す。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 墳丘上周辺から、大型の広口壺の口頸部（E306）や、高杯（E308）、壺の底部（E304、E307）などが出土している。

#### M408

**位置** ヌーⅢの西端に位置し、北に大型のM409が、東にM407が所在し、西に残地が広がる。

**周溝** 共有する形態をとるが、西溝、南溝は後世の溝により削平され検出でされなかった。周溝の切り合い関係は明確でないが、M409-M408-M407の序列が推定される。

**墳丘（平面形）** 長方形を呈するとみられマウンドはすでに削平され、確認されなかった。

**主体部** 検出できなかった。

**遺物** 出土しなかった。

#### M409

**位置** M407の北に位置する比較的大型の方形周溝墓である。西溝及び北溝の一部は後世の溝に抉られて遺存しない。

**周溝** 周溝は、後世の溝によって抉られた西溝と北溝以外は、いづれも完全共有の関係にある。周溝の幅は3.0mから3.5mを測り、深さ0.8m、断面は底部の平坦な椀状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、通常青灰色粘土に底部を置

くが、南東側のみさらに下部の地山である青灰色砂層にまで達している。覆土は5層から8層が識別され、上部は灰青色系粘土、下部は黒灰色系粘土の各堆積層である。

墳丘(平面形) 東西方向にやや長い隅丸長方形を呈している。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 墳丘上の南東側より6点、北東側より1点を確認した他、南溝内より1点が出土している。墳丘上南西側のものは、細頸壺(E314)、広口壺(E309)、直口壺(E312、E310)、受口状口縁を有する大型広口壺(E311)、甕(E315)より構成され、北東側のものは細頸壺の口頸部(E314)、又、南溝内のもは同じく細頸壺(E313)である。

#### M410

位置 後世の溝をへだてて、M409の北西に位置する周溝墓である。

周溝 周溝は、各溝とも残地をひかえて単独にめぐっている。周溝幅は通常0.5m前後、深さ0.2mを測る浅く狭いもので、断面は皿状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層中に溝の底部を置く。覆土は1層ないし、2層の青灰色系粘土よりなる。

墳丘(平面形) 形態上、方形周溝墓の範疇に属しているが、隅丸部の発達が顕著なため、一見円形周溝墓のように見える。また、北東と南西溝は、おのおのの周溝両端が外部へ伸長しており、さらに北東溝ではその両端が周溝側へ曲折して墳丘を2重に囲む傾向が認められる。特異な平面形である点が留意されよう。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 南西溝内より、口縁が「く」字状を呈する甕(E318)が出土した他、北西溝内より台付甕(E317)と細頸壺(E316)が出土している。

#### M411

位置 残地をはさんでM410の北に構築された周溝墓である。北側の一部は未調査域に広がっている。

周溝 周溝は、南西溝がM412と完全共有の関係にある以外は、北東溝・南西溝とも残地をひかえて単独にめぐっている。南コーナーは、わずかに掘り残して陸橋部状を呈している。周溝幅7.0m前後の比較的浅いもので、断面は碗状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層中に溝底を置く。覆土は3層が識別される。

墳丘(平面形) 北側の一部が調査域外に広がるため全容は定かではないが、東西方向にやや長くなる隅丸長方形が予測される。

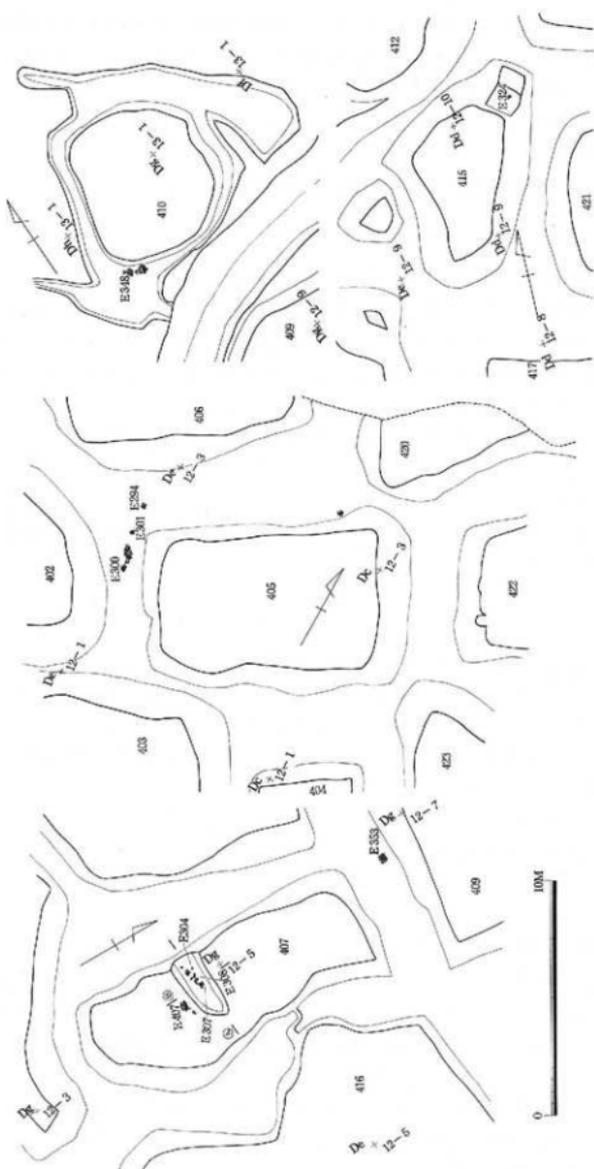
主体部 墳丘内にその痕跡は認められなかったが、南西溝のすぐ外側の残地で、長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.2mの長方形プランを呈する土盛1基を検出した。周辺の遺構を考慮すると周溝墓の周辺に構築された墓基と考えるのが妥当かもしれない。その場合、墓基の様式は、断面が皿状を呈することから土盛基であった可能性が高い。覆土は3層が識別される。

遺物 墳丘上東コーナー近くの暗灰色粘土内より、広口壺(E319)が出土している。

#### M412

位置 M411の東に位置し、東溝は後世の溝に挟られている。

周溝 周溝は、東溝は後世の溝に挟られ不明である他、北溝の東端半はM413と完全共有し、西溝はM411と切り合い関係にあり、M411-M412が判別される。上記以外での周溝は残地をひかえて単独にめぐっている。周溝の幅は最も広



第42图 M405·M407·M410·M415 供献土器檢出状況実測図

い北溝でも2.2m程度と狭く通常は1.0m前後である。周溝の深さも浅く0.5m程度を測り、断面は椀状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、通常青灰色粘土中に溝の底部を置くが、北溝のみさらに下部の地山である青灰色砂層にまで達している。覆土は、3層から7層が識別可能である。

墳丘（平面形） 東西方向にやや長い、隅丸長方形を呈している。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 M413と共有する北溝内よりよく張った壺の胴部下半（E320）が1点出土している。

#### M413

位置 M412の北に位置する小型の周溝墓で、東溝の一部を後世の溝により挟られている。

周溝 周溝は、東溝が後世の溝に挟られ未確認である他、西溝が残地をひかえて単独にめぐり、南溝と北溝はM412及びM414とそれぞれ完全共有の関係にある。周溝の幅は2.0m程度、深さは0.5m前後と比較的浅く、断面は底部の比較的平坦な椀状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に溝底を置く。覆土は最高7層が識別され、上部に青灰色系粘土、下部に黒灰色系粘土が層を重ねている。

墳丘（平面形） 残地を活用したかのごとき不定形な形状を呈しているが、本来は方形を意図するものであったと予測される。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 M412と共有する南溝内より壺の胴部下半（E322）が1点、M414と共有する北溝内より直口壺の胴部上半（E321）が1点それぞれ出土している。

#### M414

位置 調査域の北端に位置し、北溝過半が調査域外に広がっている。

周溝 周溝は、南西溝が残地をひかえて単独にめぐり、M413、M429の各周溝と完全共有の関係にある。周溝幅3.0m前後、深さ0.5m前後と比較的浅い周溝で、断面は底部の平坦な椀状を呈している。

墳丘（平面形） 北側過半が調査域外に広がるため、全容は定かではないが、南コーナーがやや鋭角的に曲折しており、不定形な周溝墓が予測される。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 M429と共有する南東溝中央より直口壺（E323）1点がそれぞれ出土している。

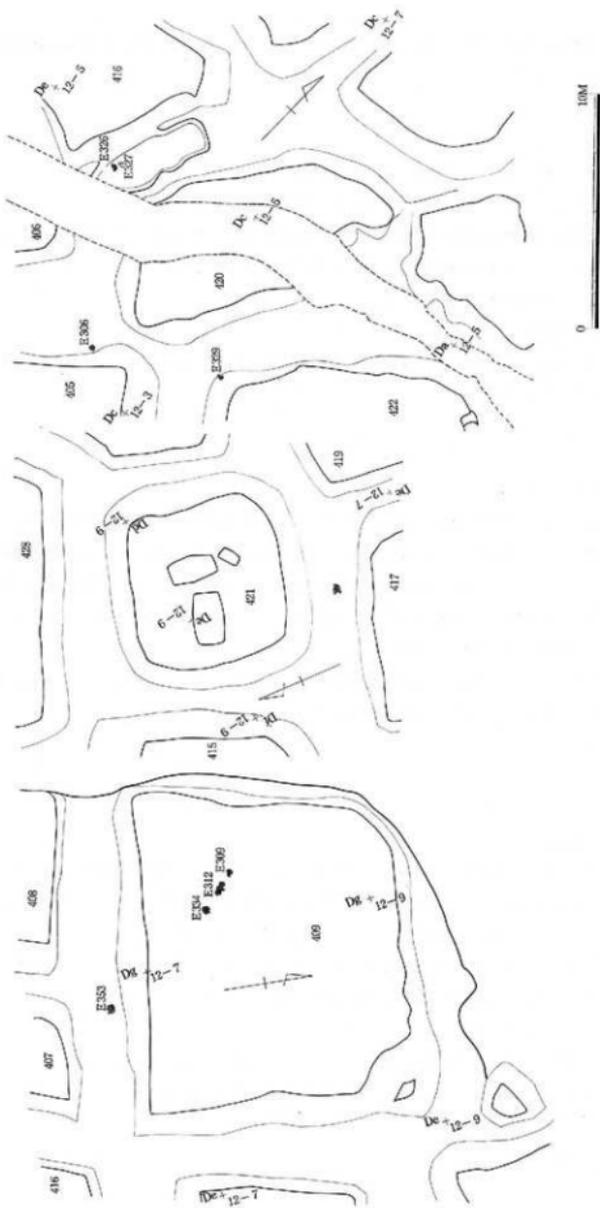
#### M415

位置 M412の南東に位置し、北西側を後世の溝により大きく挟られている。

周溝 周溝は遺存する東溝についてM418と完全共有の関係にある。溝幅2.8m、深さ1.3mを測り、断面は上部を椀状に下部を急峻なU字状にする。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は14層が識別され、⑧層までが洪水等に起因する青灰色粘土の堆積層、⑨層以下が溝削りや盛土の崩落による再堆積層と考えられる。

墳丘（平面形） 本来、方形を意図したものであったと考えられるが、北西側は後世の溝により大きく挟り取られて遺存せず、また、北西から南東へ走る溝によって2分割され旧状をとどめない。

主体部 痕跡が認められない。



第43图 M409・M420・M421 供献土器・主体部検出状況実測図

遺物 M418と共有する東溝内より小型壺(E325)1点が、また、墳丘の北東端の溝肩部より壺の胴底部(E324)1点がそれぞれ出土している。

#### M416

位置 M406の北に位置し、M406とは南コーナー部で接している。

周溝 周溝は、M406とは南コーナーで接しており、切り合い関係が不明である。他の北溝、東溝、西溝は、それぞれM409、M407と完全共有の関係にある。周溝の幅は3m前後、深さ0.7m、断面は椀状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は8層が識別される。

墳丘(平面形) 平面形は不定形な多角形を示す。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 東溝の中央付近で台付壺(E328)、細頸壺の口頸部(E326)、受口縁壺(E327)などが出土している。いずれも底部よりわずかに浮いている。

#### M417

位置 M416の北側に位置している。

周溝 周溝のべて、つまりM409、M415、M416、M418、M419とも完全共有の関係と判断されるが、M416との関係は、M417-M416の切り合い関係にあった可能性を残している。溝幅3m前後、深さ1m弱を測り、断面椀状の比較的広くて浅い溝である。通常、黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置くが、西溝のみ青灰色砂層中にまで達していない。覆土は、ほぼ8層と一定しており上部は青灰色系シルトに大きく2分される。

墳丘(平面形) 比較的規則的な長方形状を呈している。

主体部 墳丘のやや東より中央付近で、周溝とほぼ軸線を同じくする主体部1基を検出した。主体部は隅丸長方形プランを呈するが、遺存状態は不良で、底部わずか数cmを残して削平されていた。

遺物 出土しなかった。

#### M418

位置 M417の北側に位置している。

周溝 周溝は四辺のすべての周溝墓、つまりM415、M417、M419、M427、M428と完全共有の関係にある。溝幅は3m前後、深さ1m前後を測り、断面は通常椀状を呈しているが東溝及び西溝の各一部は、上部は椀状だが下部はやや急峻なU字状となる。又、東溝では溝の内側中位でテラス部が確認される。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て青灰色砂層中に底部を置く。覆土は西溝で最高14層が識別され、上部は洪水等に起因する青灰色系シルト、下部は溝肩や盛土の崩落したものが再堆積した黒灰色系粘土に大別される。

墳丘(平面形) 端正な隅丸方形を呈している。

主体部 墳丘中央付近で、2.0×1.0m前後の直交する主体部のおのおの1基、及び斜めの小型主体部1基の合計3基を確認した。いずれも隅丸長方形プランを呈しているが遺存状態は不良で、底部わずか数cmを残すに過ぎなかった。従って、木棺墓、土盛墓の識別も不可能であった。

遺物 出土しなかった。

#### M419

**位置** M417の東に位置する小規模な方形周溝墓である。

**周溝** 周溝は、周囲のM417、M418、M420、M421のいずれとも完全共有の関係にある。周溝の幅は、2.0～3.0m、深さ0.8～0.9mを測り、断面はM421と共有する南東溝で底部の平坦なU字状を呈するが、他溝では通常の椀状を示す。周溝は黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て青灰色砂層中に底部を置くが、南溝のみ青灰色粘土層が存在せず、黒色粘土層の直下に青灰色砂層の地山が広がっている。覆土は、南溝で最多の12層が識別される。

**墳丘(平面形)** 隅丸方形を呈する比較的小型の方形周溝墓である。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 出土しなかった。

#### M420

**位置** M405の北東に位置する。

**周溝** 周溝は、南西溝がM406と、南東溝がM422とそれぞれ切り合い関係にあり、M420—M406、M422—M420が判明している。その他の北西溝及び北溝はM416、M417と完全共有の関係にある。周溝の幅は2.8m前後、深さ0.7～1.0mを測り、断面は南西溝のみU字状を呈するが、他溝は椀状を呈す。特に南東溝では溝底にそって、さらに、幅0.4m深さ0.4mの細い溝状に掘り進めている。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置くのが通常だが、南西溝では浅いため青灰色粘土層中に底部を収める。覆土は最高8層が識別される。

**墳丘(平面形)** 墳丘は、東西に長く走る攪乱溝により二分されている。平面形は、北東から南西方向に細長い長方形が考えられる。

**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 南西溝の南側の比較的上層より灰口壺(E330)が出土した他、南東溝より直口壺(E329)が出土している。

#### M421

**位置** M422の北に位置し、M420とは西コーナー一部で接近し、ほぼ接している。

**周溝** 周溝は、M419、M420、M426のいずれの周溝とも完全共有の関係にある。周溝の幅は2.0m前後、深さ0.8～1.0mを測り、断面は底部の比較的平坦なU字状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て青灰色砂層中に底部を置く。覆土は最高9層が識別され、上部は洪水等に起因する青灰色系のシルト、下部は溝壁や盛土の崩落したものが再堆積した黒灰色系粘土の大きく2類に大別される。

**墳丘(平面形)** 墳丘は、その南側を攪乱溝により削平されて遺存しない。平面形は、小型の長方形になるものと予測される。

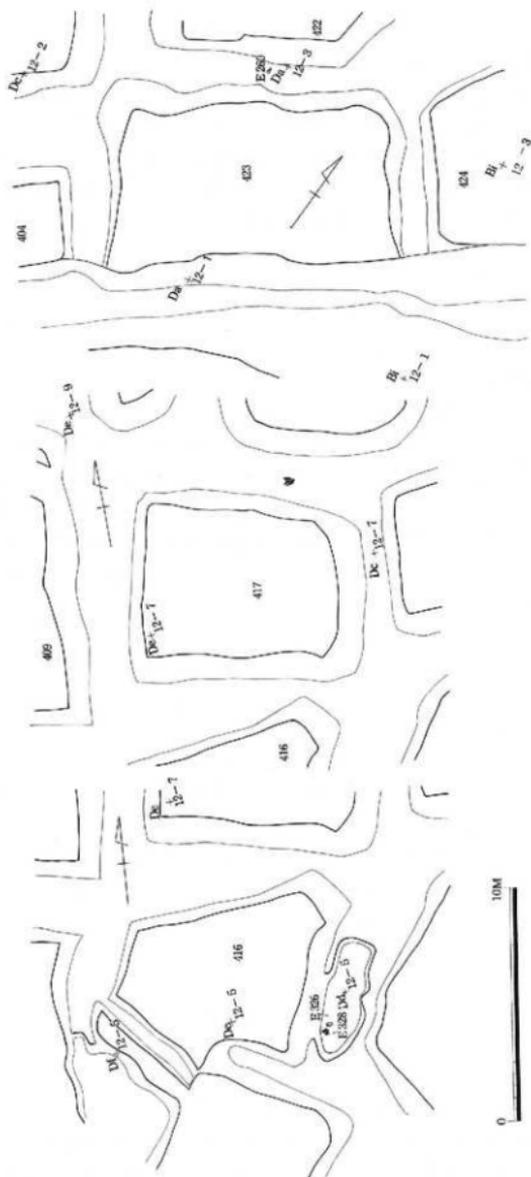
**主体部** 痕跡が認められない。

**遺物** 東溝より壺体・底部(E331)、高杯(E332)が出土している。

#### M422

**位置** M405の北東に、M405と軸線・規模・形態等を類する形で存在する。

**周溝** 周溝は北東溝がM424と、北西溝がM420と南西溝がM405とそれぞれ切り合い関係にあり、M424—M422、M422—M420、M422—M405が判明している。M423周溝とは完全共有している。周溝の幅は2.0～2.8m、深さは1.0m前後、



第44图 M416・M417・M423 供獻土器検出状況実測図

断面は北西溝と南西溝でU字状を示している。その他の溝の断面は碗状を呈す。いずれも黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は最高で9層が識別される。

墳丘(平面形) 5.6m×11.0mの隅丸長方形を呈している。

主体部 墳丘中央のやや南西より、周溝と軸線をほぼ同じくする墓室を1基検出した。墓室は長軸2.2m、短軸1.2mの長方形プランを呈し、深さ0.5mを計る。墓室の東に偏して木棺を埋置した痕跡があり、長軸1.7m、短軸0.8m、深さ0.4mである。痕跡から察して、衝板、小口板の両方とも底板の外側に置くタイプの組合わせ式木棺であろう。覆土は、掘り方として4層、棺内6層が識別され、棺上には盛土等の客土4層が乗っている。客土は、いずれも黒色粘土や青灰色粘土のブロック状混入層である。

遺物 北西溝の中央付近最下部より大型の広口壺(E333)や細頸壺(E334)そして、甕(E335)が一括出土した。また南溝より甕体底部(E336)1点が出土した。

#### M423

位置 M422の南東に位置し、墳丘の南東側を後世の溝によって削平されている。

周溝 周溝は、周辺の方形周溝基すなわちM404、M405、M422、M424のいずれとも完全共有の関係にある。周溝の幅は、北東溝と南西溝で2m程度、北西溝は内側線が波うつようにみだれ2.8m～4m前後を測る。深さは北西溝で最も深く1.0mの断面碗状を呈す。黒色粘土を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は最高9層が識別される。

墳丘(平面形) 隅丸長方形を意図するものであったと考えられる。

主体部 墳丘上で3基を検出した。ただ、いずれも残存状態が不良で、その痕跡もわずかに残すに過ぎない。墓室は、いずれも長方形を意図していたと考えられる。2基は周溝とほぼ軸線と同じくするもので、南東から北西方向にある。

遺物 M422と共有する北西溝の中央付近より細頸壺(E337)1点が出土している。

#### M424

位置 M423の北東に位置し、東コーナーを後世の溝によって削平されている。

周溝 周溝は、北西溝がM422と切り合い関係にあり、M424-M422が判明している以外は、いずれも周辺の各周溝と完全共有の関係にある。周溝の幅はM423とM425の間では狭く、M422とM425の間では広い、深さは0.8m程度、断面は碗状を呈す。黒色粘土直上の地山である青灰色粘土層を切り込み、青灰色砂層を経て、灰白色砂層中に底部を置く。覆土は6層が識別され、上部5層までが洪水等に起因して青灰色系のシルトの堆積したものであり、最下層のみ溝岸の崩落したものが再堆積したものである。

墳丘(平面形) 隅丸長方形を呈する小型の方形周溝基である。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 北西溝内5層中より直口壺(E339)、広口壺(E338)が、また、南西溝内からは甕(甕E340)が出土している。

#### M425

位置 M424の北側に位置し、後世の大溝や攪乱によって削平を受けている。

周溝 周溝は、M426、M432の両周溝とも完全共有の関係にある。周溝幅は1.9m～2.6m、深さは通常0.6m程度の浅い碗状を呈しているが、北西溝の一部が1.5mの深いV字状となる。黒色粘土の地山を切り込み、直下の青灰色砂層中に

底部を置く。覆土はV字溝で23層の細層に識別される。

墳丘（平面形） 平面形は、小型の長方形に近い形状が予測される。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 出土しなかった。

#### M426

位置 M421の北東、M425の北西に位置し、両者間に挟まれて存在する。

周溝 周溝は、四辺のすべての周溝基つまり、M421、M425、M427、M432と完全共有の関係にある。周溝は、幅1.9～2.6m、深さ0.5～1.5mと変化に富み、断面の形状も通常は椀状を呈するが、南東溝や南西溝の一部ではV字状ないしU字状となる。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置くが、南東溝では青灰色粘土の地山が消失し、黒色粘土層の直下に青灰色砂層が広がっている。覆土は南東溝のV字溝で最高23層が識別される。

墳丘（平面形） 隅丸方形を呈す。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 東溝より壺体部（E341）、水差型土器（E342）が、西溝より水差型土器（E343）をはじめ、受口甕（E344）、甕底部（E345）、壺底部（E346）が出土した。

#### M427

位置 M426の北西に位置する周溝墓である。

周溝 周溝は北西溝がM428と切り合い関係にありM427～M428が判明する以外はいずれの周溝基とも完全共有の関係にある。周溝幅は、M419の南西溝で一部狭くなり、北溝で広がるが、おおよそ2.0m、深さは0.8～1.1m、断面はM418と共有する西溝がU字状を呈する以外はいずれも椀状である。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は最高9層が識別される。

墳丘（平面形） 不定型な形状を呈する周溝墓だが、その原因を周辺の方形周溝基構築後残地を占取したためと考えることは、M428との切り合い関係などからも不可能である。

主体部 痕跡が認められない。

遺物 西南溝から盛土の崩落した土層中より甕の口頸部（E347）などが出土している。

#### M428

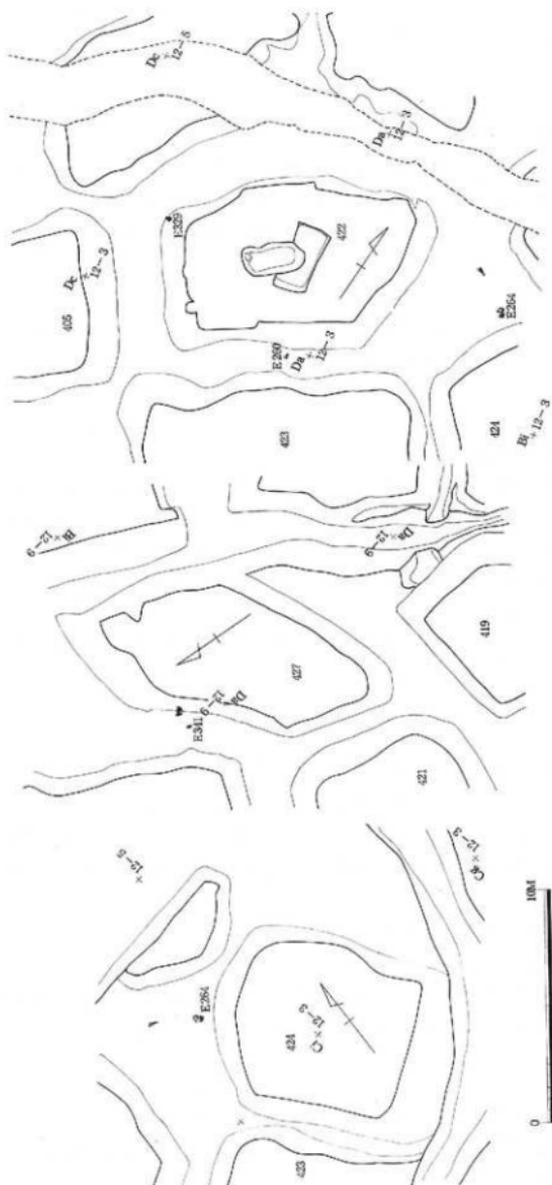
位置 M418の北側に位置し、西辺を一部、後世の溝により削平されている。

周溝 周溝は、北溝をM429と、南溝をM418とそれぞれ完全共有しており、東溝はM427と切り合い関係からM427～M428が判明している。西溝は後世の溝により削平されて遺存しない。周溝幅は、南溝で3.3mと最も広く、北溝では2.4mを測る。深さは、1.0～1.2m、断面は椀状を呈す。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は北溝で最高10層が識別される。

墳丘（平面形） 西辺のややすばまった等脚台形状を呈している。

主体部 確認されず。

遺物 出土しなかった。



第45图 M422·M424·M427 供献土器·主体部検出状況実測图

#### M429 (残地)

#### M430

位置 調査域の北端に位置し、南側半分を調査した。

周溝 周溝は、南溝がM431と切り合い関係にあり、M431-M430の関係が判明している。東溝には、後世の溝が周溝基の間隙を縫うように垂折して流れている。周溝幅は2.5~4.0m、深さ1.0m前後、断面は底部の平坦なU字状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て青灰色砂層中に底部を置く。覆土は南溝で最高6層が識別される。

墳丘 (平面形) 方形プランが予測される。

主体部 確認されなかった。

遺物 南東コーナー付近で、高坏の脚部 (E348) 1点が出土している。

#### M431

位置 M430の南側に位置する。

周溝 周溝は北溝がM430と切り合い関係にあり、M431-M430が判明している。又、M429とは、完全共有の関係にある。周溝の幅は3m前後、深さ1.0~1.2m、断面は底部の比較的平坦なU字状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆土は西溝で最高8層が識別され、上部は洪水等に起因する青灰色系シルト、下部は溝肩や盛土の崩落したものが再堆積した黒灰色系粘土の大きく2類に大別される。

墳丘 (平面形) 端正な長方形を呈している。

主体部 墳丘上東側の中央付近で隅円形状の浅い落ち込みとして、かろうじて痕跡を確認することができた。

遺物 出土しなかった。

#### M432

位置 M426の北東に位置する比較的大型の方形周溝墓である。

周溝 周溝は、M425、M426、M427の各周溝墓と完全共有の関係にある。周溝は、幅2.6m、深さ0.6m断面が浅い碗状を呈している。黒色粘土の地山を切り込んで、直下の青灰色砂層中に底部を置く。覆土は最高6層が識別され、上部は洪水等に起因する青灰色系シルト、下部は溝肩や盛土の崩落したものが再堆積して黒灰色系粘土の大きく2類に大別される。

墳丘 (平面形) 比較的大型の隅丸方形を呈する。

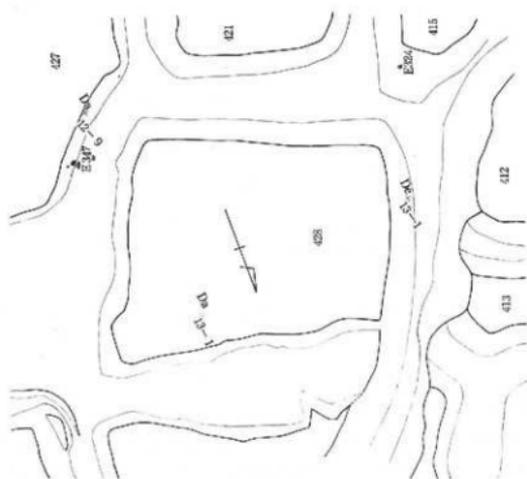
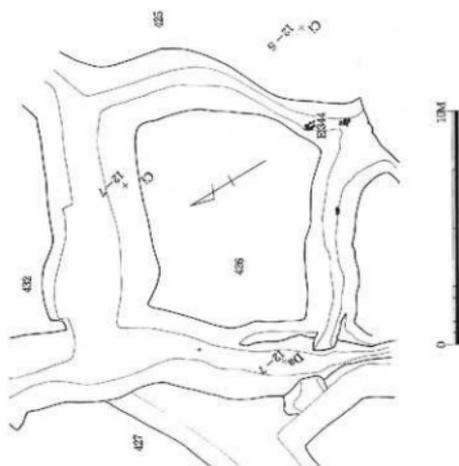
主体部 痕跡が認められない。

遺物 M425と共有する南東溝の南側より、高坏片 (E354) 1点が出土した他、南東溝中央付近より完形の受口壺 (E350)、広口壺の頸胴部 (E351)、甕 (E352、E353) などが一括出土している。

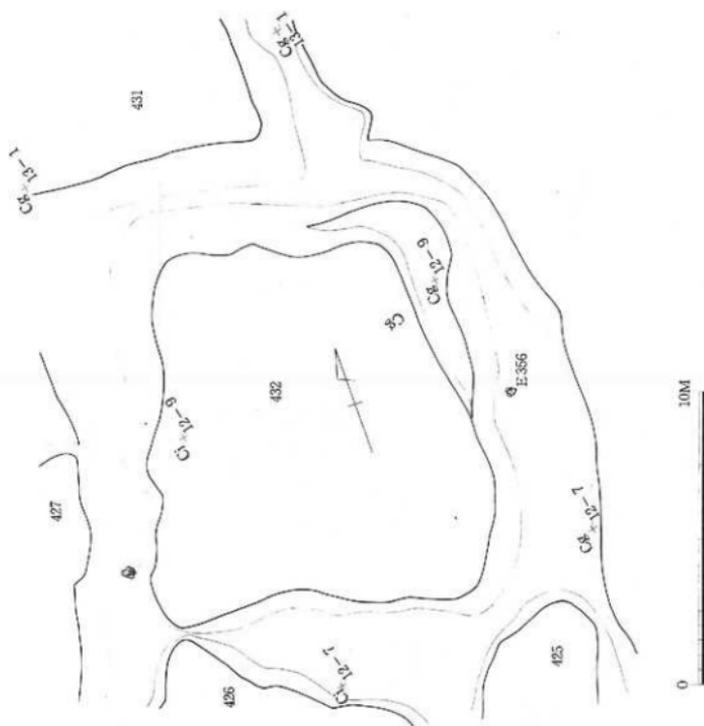
#### M433

位置 調査域の北端に位置し、M430の東側に存在する。南側半分を調査した。

周溝 周溝は、西溝がM430と東溝がM434とそれぞれ完全共有の関係にある。周溝幅4.0m前後、深さ1.0m、断面は底部の平坦なU字状を呈している。黒色粘土の地山を切り込み、青灰色粘土層を経て、青灰色砂層中に底部を置く。覆



第46图 M426・M428 供献土器検出状況実測图



第47図 M432 供献土器検出状況実測図

土は西溝で最高4層が識別された。

墳丘（平面形） 不規則ながらも方形プランが予想される。

主体部 確認されず。

遺物 M434と共有する東溝内南側より直口壺（E355）1点が出土している。中期後葉の所産である。

#### M434

位置 調査域の北端に位置し、M433の東側に存在する。

周溝 南東を流れる大溝に向かってレベルが順次さがるため、周溝も北西側で最も残りが良く、南東へ向かってしだいに浅くなり、南東溝では両端が陸橋部様を呈している。周溝幅も北西溝で3mを越えるが、南東溝ではわずか0.5m前後となる。深さも北西溝では0.7m、南東溝では最も深い箇所でも0.4mを測るに過ぎない。

墳丘（平面形） 隅丸方形を呈している。

主体部 確認されず。

遺物 出土しなかった。

#### M435

位置 ヌーⅢの西北部に位置し東側にM410、M411などが所在するが、旧河道が、縦横に走りかなり乱れた状況を呈している。

周溝 旧河道による乱れのため明確でないが、単独にめぐる形態をとる。

墳丘（平面形） 旧河道に削平され、マウンドはおろか平面形さえ現状はうかがえないが、北東コーナーなどからみて、方形を呈する可能性が高い。

主体部 検出できなかった。

遺物 東溝より広口壺（E356）水差し型土器（E357）甕（E358）の各1点が出土した。

#### M436

位置 ヌーⅢの中央付近に位置し、北にM434、西にM431、南にM432、東に大溝が所在する。

周溝 共有する形態をとり、南溝はM432の北端に西端はM431の東溝にそれぞれ切れており、前後関係が判明する。

墳丘（平面形） 後世の削平により旧状をとどめないが、平面形はほぼ方形を呈するとみられる。

主体部 検出できなかった。

遺物 南西コーナーより広口壺（E349）1点が出土している。

道庁番号	方位	積丘	平面形状規模		周縁の形態と規模		主体部の形態と規模		供						備考					
			平面形	東西(m)	南北(m)	形態	面積(m <sup>2</sup> )	周縁(m)	面積(m <sup>2</sup> )	比高(m)	位置	東西	南北	北緯		陸揚部	田地区			
																		東	西	東
M001	N-5°W	-	方形	7.53上	14.5	単線	-	2.4	-	3.5	0	-	-	E001	-	-	ワ-Ⅱ	14		
M002	N-12°W	-	長方形	16.4	18.8	#	6.2	6.0	8.1	4.5	0	-	-	E003	-	E004	カ-Ⅱ	5		
M003	N-6°W	-	-	8.3	2.6	連続	1.3	1.0	-	1.6	0	-	-	-	-	E005	-	#	10	
M004	N-15°W	-	方形	7.8	10.0	#	1.8	0.7	1.6	1.2	0	-	-	-	-	E006	-	#	8	
M005	N-8°W	-	方形	9.2	10.5	#	1.2	1.7	1.5	1.3	0	-	-	E009	-	E007	-	#	9	
M006	N-5°W	-	長方形	7.5	9.1	#	1.0	1.0	1.1	1.4	0	-	-	E012	-	E010	カ-Ⅱ	13		
M007	N-8°W	-	#	11.1	10.0	#	1.7	1.5	1.6	2.0	0	-	-	-	-	E011	カ-Ⅱ	3		
M008	N-11°W	-	#	11.1	10.7	単線	1.6	1.3	2.8	2.4	0	-	-	E016	-	E015	-	#	4	
M009	N-12°W	-	方形	8.5	7.9	#	1.6	1.1	1.8	1.6	0	-	-	-	-	E018	-	#	6	
M010	N-5°E	-	#	11.7	11.1	単線	1.1	0.7	1.0	1.2	0	-	-	-	-	E019	-	#	7	
M011	N-85°W	-	長方形	10.1	9.3	#	-	-	1.7	1.6	0	-	-	E022	-	E023	カ-Ⅱ	12		
M012	N-9°W	-	#	10.9	9.3	#	-	1.2	1.3	0.7	0	-	-	E026	-	E024	カ-Ⅱ	2		
M013	N-18°W	-	#	17.4	10.9	#	0.8	1.4	1.3	1.2	0	-	-	E028	-	E025	-	#	1	
M014	敷集	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M015	N-82°E	-	長方形	10.6	8.2	連続	2.2	-	3.2	3.4	1	-	-	-	-	E031	-	ワ-Ⅱ	3	
M016	N-52°E	-	#	10.4	7.6	#	3.0	2.2	2.0	2.2	0	-	-	-	-	-	-	#	2	
M017	N-82°E	-	#	11.0	10.2	#	1.5	3.0	1.1	2.1	1	中央	1.5×0.9	0.3	E037	E038	-	#	1	
M018	N-62°E	-	#	8.1	7.2	#	-	1.2	1.5	1.1	0	-	-	E039	-	-	カ-Ⅱ	8		
M019	N-35°E	-	方形	10.7	10.1	#	1.6	1.5	1.1	1.4	0	-	-	E041	-	-	カ-Ⅱ	1		
M020	N-67°E	-	長方形	13.5	10.7	#	3.0	1.6	1.8	1.9	0	-	-	E043	-	E042	カ-Ⅱ	1		
M021	N-32°E	-	#	12.6	9.8	連続	1.7	3.2	1.5	1.2	0	-	-	-	-	E046	-	カ-Ⅱ	6	
M022	複線	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M023	N-67°E	○	方形	4.3	4.3	単線	1.7	1.7	1.7	1.5	3	中央	1.8×1.4 0.8×0.8 0.1×0.1	-	E049	-	カ-Ⅱ	2		
M024	N-62°E	-	長方形	9.0	10.3	連続	-	1.1	1.5	1.8	0	-	-	-	-	-	カ-Ⅱ	4		
M025	N-35°W	-	方形	10.5	10.3	#	0.9	-	0.9	-	0	-	-	-	-	-	カ-Ⅱ	-	-	
M026	N-67°E	-	#	8.1	8.0	#	1.4	0.9	0.7	2.1	0	-	-	-	-	-	カ-Ⅱ	-	-	
M027	N-62°E	-	長方形	12.7	10.7	#	2.6	1.5	2.2	2.1	0	-	-	-	-	-	カ-Ⅱ	2	-	
M028	N-54°E	-	#	6.8	5.7	#	-	2.6	2.3	2.0	0	-	-	E050	-	-	カ-Ⅱ	3	-	
M029	N-57°E	-	#	7.6	6.3	#	0.6	1.3	1.5	2.3	0	-	-	-	-	E051	カ-Ⅱ	2	-	
M030	N-52°E	○	#	10.3	7.6	#	1.7	1.9	2.1	2.4	1	中央	1.1×2.5	0.29	-	-	-	#	3	

建機番号	方位	位置	墳丘	平面形状		周溝の形態と規模			主体物の形態と規模			供			備考							
				東西(m)	南北(m)	形	長さ	距離(m)	距離(m)	北縁(m)	数	位置	東西	溝溝		北縁	日地区	田番号				
M031	N-64°-E	○	長方形	5.5	7.5	連続	2.9	2.1	2.3	1.8	1	中央	1.0×1.6	0.23	-	-	-	II-Ⅲ	4			
M032	N-69°-E	○	方形	6.1	5.4	■	2.5	2.5	2.5	3.5	2	■	1.5×1.5 1.4×0.8	0.27 0.22	E054 E052	E055	-	E053	○	ハ-I	6	
M033	N-67°-E	○	■	5.9	4.7	■	2.3	1.5	2.1	1.9	1	■	1.3×0.8	0.13	-	-	E056	-	-	■	4	
M034	N-67°-W	○	■	1.9	2.8	■	-	1.1	1.7	-	1	■	1.3×1.0×0.8	0.10	-	-	E057	○	■	3		
M035	N-54°-E	○	■	4.1	3.3	単塊	1.9	1.9	1.5	1.6	1	■	1.4×1.45	0.16	-	-	E058	-	E058	○	ハ-E	5
M036	N-74°-E	○	長方形	4.7×1.2	3.2	連続	1.7	-	1.6	1.7	2	■	1.4×1.5 1.5×1.3	0.08 0.09	E059	-	-	-	-	ハ-I	7	
M037	N-57°-E	○	長方形	6.0	5.6	■	1.7	2.0	1.7	-	2	■	1.3×1.1 1.3×1.1	0.20 0.20	-	-	-	-	-	ハ-I	5	
M039	N-75°-E	-	■	10.8	8.0	連続	2.5	3.8	3.3	4.2	1	■	3.2×1.2	0.28	-	-	-	-	-	ハ-Ⅲ	-	
M040	N-67°-E	-	方形	8.0	5.1	■	2.2	2.7	2.8	2.7	0	-	-	-	-	-	-	-	-	ハ-Ⅳ	-	
M041	N-58°-W	-	■	7.0	7.5	■	-	2.0	1.6	-	3	中央	1.1×1.1 1.1×1.1	0.19 0.19	-	-	-	-	○	■	-	
M042	N-62°-E	-	■	5.0	3.0	■	2.8	2.0	2.4	2.5	0	-	-	-	-	-	-	-	○	ハ-Ⅲ	7	
M043	N-63°-E	-	■	5.5	6.2	■	2.8	3.1	2.9	2.3	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	5	
M044	N-6°-E	-	■	4.5	5.0	■	2.8	2.8	2.3	1.7	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	6	
M045	N-61°-E	-	■	2.0	2.4	単塊	-	1.0	1.1	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M046	N-55°-W	-	方形	7.0	5.2	連続	1.1	1.4	1.4	1.7	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	ハ-Ⅲ	-
M047	N-37°-E	-	■	5.6	5.1	単塊	1.5	1.3	1.6	1.6	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	ハ-Ⅲ	-
M048	N-85°-E	-	■	4.2	3.3	連続	1.3	1.5	1.6	1.3	1	中央	2.6×1.8	0.20	-	-	-	-	-	○	■	18
M049	N-54°-W	-	長方形	6.0	3.9	単塊	3.0	2.0	2.4	2.4	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	■	17
M050	N-53°-W	-	■	3.4	4.3	連続	0.8	1.3	1.8	1.4	1	中央	1.5×0.8	0.15	-	-	-	-	-	○	■	19
M051	N-52°-W	-	方形	8.3	7.0	■	1.9	1.7	1.6	3.3	0	-	-	-	-	-	E061	-	-	-	■	7
M052	N-52°-W	-	長方形	6.0×1.2	8.6	■	-	2.5	3.4	3.2	1	南西	1.1×2.1	0.34	1984- 1987	E062 E063	-	-	○	■	20	
M053	N-67°-W	-	■	5.2	6.0	単塊	2.3	2.4	2.0	3.0	1	中央	1.5×2.2	0.30	-	-	-	-	-	-	■	15
M054	N-34°-E	-	■	3.0	4.0	連続	2.3	3.8	3.0	4.8	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	■	21
M055	N-65°-E	-	■	9.8	6.5	■	3.7	1.6	4.0	2.4	0	-	-	-	-	-	-	-	E068	-	■	14
M056	N-55°-E	-	方形	3.6	4.1	■	2.2	2.8	2.4	0.7	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	■	13
M057	N-39°-E	-	■	4.8	5.7	■	2.8	2.6	2.0	5.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	■	22
M058	N-37°-E	-	■	1.3	2.1	■	5.4	3.4	1.8	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	■	23
M059	N-52°-W	-	長方形	4.9	10.4	■	2.6	2.1	4.7	-	2	-	1.3×1.3 1.6×1.8	0.35 0.13	-	-	-	-	-	-	■	12
M060	N-63°-E	-	方形	7.5	9.4	■	2.2	4.2	4.6	4.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	■	2

遺跡番号	方位	墳丘	平面形復原		周囲の形態と地盤			主体部の形態と規模			供 献				備考						
			平面形	東西(m)南北(m)	形 態	基盤(m)	西側(m)	南側(m)	北側(m)	位置	東西×南北	深さ	内部主体	東 横		西 横	南 横	北 横	除遺部	旧地区	田番号
M061	N-6°W	-	-	6.2	1.10上	連絡	2.4	-	2.6	-	0	-	-	-	-	-	-	ニ-I	16		
M062	N-50°E	-	-	長方形	2.2	3.5	#	4.1	1.3	3.4	1.6	0	-	-	-	-	-	#	11		
M063	N-58°W	-	-	長方形	4.3	4.0	#	1.6	1.5	2.4	2.7	0	-	-	-	-	-	E069	O	10	
M064	N-54°E	-	-	方 形	3.4	3.5	#	2.0	3.4	2.5	3.5	0	-	-	-	-	-	E070	-	9	
M065	N-53°W	-	-	長方形	3.4	2.6	#	3.3	3.5	3.3	3.4	0	-	-	-	-	-	E071	-	8	
M066	N-57°W	-	-	#	7.2	5.9	#	1.5	1.4	1.4	2.1	0	-	-	-	-	-	#	7		
M067	N-18°W	-	-	円 形	2.70上	6.8	#	2.0	-	1.5	4.5	0	-	-	-	-	-	ニ-IV	72		
M068	N-23°W	-	-	#	5.50上	4.0	#	2.8	-	4.5	2.8	0	-	-	-	-	-	#	65		
M069	N-53°E	-	-	長方形	5.5	6.2	#	5.0	-	1.9	3.1	0	-	-	-	-	-	E072	-	62	
M070	N-14°E	-	-	#	8.0	12.5	#	3.0	3.4	2.2	1.6	1	中央	1.3×2.2	0.16	-	-	O	#	48	
M071	N-50°W	-	-	方 形	6.6	6.7	#	1.2	3.3	2.0	2.0	0	-	-	-	-	-	#	45		
M072	N-4°W	-	-	#	0.6	3.5	#	3.0	-	-	2.9	0	-	-	-	-	-	#	-		
M073	N-72°E	-	-	長方形	4.5	3.0	#	-	3.0	-	3.1	0	-	-	-	-	-	#	23		
M074	N-52°W	-	-	#	8.5	5.5	#	2.0	4.6	2.8	2.5	0	-	-	-	-	-	#	70		
M075	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
M076	N-6°W	-	-	-	5.0	9.2	#	0.7	3.0	2.5	-	1	中央	0.9×1.3	0.20	-	-	O	ニ-IV	55	
M077	N-54°W	-	-	-	5.2	-	#	3.7	1.6	-	2.5	0	-	-	-	-	-	#	61		
M078	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
M079	N-60°W	-	-	長方形	8.1	5.8	#	5.1	2.0	-	2.8	0	-	-	-	-	-	ニ-IV	69		
M080	N-45°W	-	-	#	4.5	7.2	#	1.2	4.0	3.2	-	1	中央	2.1×1.2	0.23	-	-	#	68		
M081	N-63°E	-	-	#	4.2	3.5	#	-	5.0	-	3.4	1	中央	2.3×2.0	-	-	-	#	71		
M082	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
M083	N-50°W	-	-	長方形	5.0	4.0	単独	1.1	1.2	3.1	1.2	0	-	-	-	-	-	E074 E075	-	米-III	3
M084	N-14°E	-	-	方 形	8.80上	8.9	#	2.5	-	2.3	3.5	1	中央	1.8×1.1 1.3×2.2 0.17	0.20	-	-	-	E079	-	2
M085	N-50°E	-	-	方 形	8.80上	8.70上	#	3.4	-	-	-	1	中央	1.4×3.1	0.30	-	-	-	E080	-	1
M086	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M087	N-58°W	-	-	長方形	12.7	9.5	連絡	4.5	4.0	3.9	6.3	0	-	-	-	-	-	E081	-	米-IV	32
M088	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M089	N-61°W	-	-	方 形	11.00上	8.50上	単独	1.1	-	1.8	-	0	-	-	-	-	-	E081	-	米-IV	5
M090	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

建築物番号	方位	棟数	平面形状		周囲の形態と規模		主体部の形態と規模		供給				備考					
			平面形状	高さ(m)	東側(m)	北側(m)	位置	東西	南北	北	南	西		東				
M051	雑種																	
M052	雑種																	
M053	雑種																	
M054	N-35°-W	-	方形	6.0	7.5	単層	1.1	1.5	3.3	1.2	0	-	-	E083	-	北-IV	41	
M055	雑種																	
M056	N-37°-W	-	方形	4.7	4.9	連続	1.1	0.9	2.0	1.8	0	-	-	-	-	北-IV	34	
M057	雑種																	
M058	N-65°-W	-	方形	6.1	4.0	連続	0.9	1.4	1.9	2.7	0	-	-	-	-	北-IV	53	
M059	N-47°-E	-	長方形	7.5	6.0	#	2.1	1.5	1.7	2.1	1	南側	1.35x2.1	0.72	-	北-IV	33	
M100	N-65°-W	-	#	6.2	9.2	#	1.7	2.4	3.2	1.8	0	-	-	-	E084	北-IV	43	
M101	N-67°-W	-	#	6.2	8.0	#	2.3	1.8	1.7	1.8	0	-	-	E085 E086	-	北-IV	36	
M102	雑種																	
M103	雑種																	
M104	雑種																	
M105	N-77°-E	-	長方形	6.1	5.2	連続	2.1	1.5	2.7	2.2	0	-	-	E087	-	北-IV	25	
M106	N-84°-W	-	#	7.8	6.4	#	1.2	2.5	1.8	2.0	0	-	-	-	E088	北-IV	27	
M107	N-87°-W	-	#	11.9	6.4	#	1.8	1.8	2.2	1.8	0	-	-	E089 E090 E091	-	北-IV	13	
M108	N-79°-W	-	#	10.7	7.2	#	3.5	2.3	2.9	2.3	0	-	-	E091	-	北-IV	22	
M109	N-6°-E	-	方形	3.0	3.1	#	1.4	2.1	1.1	0.7	0	-	-	-	-	北-IV	26	
M110	N-43°-E	-	長方形	12.0	9.1	#	3.1	2.5	4.0	3.0	0	-	-	-	E094	-	北-IV	14
M111	N-67°-W	-	方形	7.0	6.5	#	1.5	1.4	3.0	5.0	0	-	-	-	-	北-IV	21	
M112	N-47°-E	-	#	6.0	5.0	#	3.2	2.2	2.0	1.6	0	-	-	-	-	北-IV	15	
M113	N-47°-E	-	長方形	3.7	4.5	#	1.2	2.0	2.0	1.4	1	-	-	-	E098	北-IV	152	
M114	N-46°-W	-	#	5.2	8.8	#	3.7	3.6	2.1	2.0	0	-	-	-	E096	北-IV	59	
M115	N-26°-W	-	方形	7.3	7.8	#	2.4	4.6	-	3.0	0	-	-	-	-	北-IV	67	
M116	N-37°-W	-	#	5.3	7.1	#	1.9	3.4	2.5	1.8	0	-	-	-	-	北-IV	57	
M117	雑種																	
M118	N-36°-W	-	長方形	4.6	7.1	連続	3.6	1.5	1.8	2.0	0	-	-	E097 E098 E099	-	北-IV	56	
M119	N-64°-E	-	#	5.7	4.2	#	3.0	3.1	3.1	2.0	0	-	-	-	-	北-III	18	
M120	N-55°-W	-	方形	3.1	3.6	#	2.6	3.0	2.5	2.3	0	-	-	-	-	北-III	16	



測線番号	方位	填丘	平面形規模		周縁の形態と規模			主体部の形態と規模				供				備	備考		
			東西(m)南北(m)	面積	東縁(m)南縁(m)	形	東縁(m)南縁(m)	位置	東西(m)南北(m)	東縁(m)南縁(m)	西縁(m)北縁(m)	東縁(m)南縁(m)	西縁(m)北縁(m)	陸揚部	田圃区				
M151	N-6°-W	-	方形	8.7	8.1	溝縁	4.2	1.9	2.6	0.8	1	-	E122	-	-	-	ホ-II	17	
M152	N-7°-W	-	長方形	10.0	5.7	#	3.0	3.6	3.2	3.8	1	東	2.1×0.8	0.24	-	E125 E126	#	2	
M153	N-7°-W	-	方形	4.5	4.1	#	4.5	0.9	0.8	1.5	0	-	-	-	-	-	#	11	
M154	N-7°-E	-	長方形	8.9	5.4	#	1.7	1.5	3.9	4.0	1	中央	2.4×1.3	0.50	-	-	#	1-3	
M155	N-37°-E	-	方形	3.5	5.0	#	2.9	3.5	2.0	3.2	1	中央	1.7×1.5	0.46	-	-	#	13	
M156	N-5°-W	-	#	13.2	10.8	#	3.5	3.9	4.2	4.2	3	周辺	1.5×0.8 1.4×1.0 0.38	0.37	-	E128 E129 E130 E131 E132 E133 E134	#	15-16	
M157	MISSE同	-																	
M158	N-1°-W	-	長方形	12.1	7.5	溝縁	5.0	3.8	4.0	2.7	1	北	1.9×1.3	0.28	-	E133	E132	ホ-II	17
M159	雑地																		
M160	雑地																		
M161	MISSE同																		
M162	N-6°-W	-	長方形	5.2	3.0	溝縁	3.4	1.7	2.5	3.2	1	北	0.9×1.4	0.03	-	E135	-	ホ-II	6
M163	N-7°-W	-	#	8.4	5.6	#	3.0	3.0	3.2	3.9	0	-	-	-	-	E137	-	#	19
M164	MISSE同																		
M165	MISSE同																		
M166	MISSE同																		
M167	N-6°-W	-	長方形	11.0	8.7	溝縁	2.8	4.1	2.2	4.5	3	南側	3.4×1.7 0.95	0.15	-	E141 E142	E140	ホ-II	18
M168	N-6°-E	-	#	2.7	2.8	#	1.5	2.9	3.4	3.6	0	-	-	-	-	E143 E144 E145 E146	-	#	20
M169	N-3°-E	-	-	2.8	3.4	#	-	3.0	3.6	-	0	-	-	-	-	E147 E148	-	#	25
M170	N-5°-W	-	長方形	15.3	10.0	#	2.7	3.5	4.5	5.6	1	北西	0.6×1.7	-	-	E148 E149	-	#	6
M171	N-5°-E	-	#	4.6	3.5	#	1.8	2.6	3.2	1.3	0	-	-	-	-	E150	-	#	21
M172	N-2°-E	-	長方形	9.02上	7.3以下	#	5.5	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	ホ-IV	-
M173	N-6°-W	-	#			#					0	-	-	-	-	-	-	#	18
M174	N-6°-W	-	長方形	9.5	6.8	#	3.2	6.3	3.4	4.0	1	中央	0.821×2.1	0.28	-	-	-	#	-
M175	N-1°-E	-	方形	7.5	8.5	#	1.7	3.2	3.6	3.4	0	-	-	-	-	-	-	#	13
M176	N-6°-E	-	#	12.1	8.2	#	3.8	-	4.3	6.0	0	-	-	-	-	-	-	#	18
M177	N-7°-W	-	#	10.0	7.9	#	5.0	3.8	3.4	5.0	0	-	-	-	-	-	-	#	11
M178	N-6°-W	-	#	4.5	2.8	#	1.7	1.9	1.0	2.8	0	-	-	-	-	-	-	#	12
M179	N-1°-W	-	長方形	8.3	5.5	#	3.1	4.9	2.8	1.4	1	中央	2.4×0.9	-	-	E152	-	#	10
M180	N-7°-W	-	#	5.0	2.7	#	1.5	4.6	1.4	2.1	1	#	1.6×1.2	-	-	-	-	#	9

遺構番号	方位	位置	平面形状		周囲の築壁と範囲		周囲の築壁と範囲		主体部の形状と規模		供 載				備考					
			平面部	東西(m)南北(m)	形 態	東側(m)西側(m)南側(m)北側(m)	数	位置	東西×南北	長さ	内部主体	東 側	西 側	南 側		北 側	陸揚部	旧地区	旧遺分	
M181	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
M182	N-27°-E	-	方 形	4.5	4.4	連続	2.9	2.4	1.3	1.1	1	中央	1.0×0.8	-	E153	-	-	-	ハ・Ⅳ	8
M183	N-11°-E	-	長方形	2.4	3.6	■	4.0	1.4	5.6	1.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	7
M184	N-0°-E	-	■	5.7	4.0	■	2.0	3.2	1.6	1.8	0	-	-	-	-	-	-	-	-	6
M185	N-17°-E	-	■	10.2	8.0	■	2.3	2.8	1.7	2.4	0	-	-	-	-	-	-	-	-	5
M186	N-65°-W	-	■	7.8	5.4	■	3.5	2.3	2.0	4.1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	3
M187	N-31°-W	-	■	9.2	15.2	■	-	2.4	-	5.2	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M188	N-85°-W	-	■	15.8	12.1	■	5.3	5.1	6.0	7.3	0	-	-	-	-	-	-	-	-	23
M189	N-12°-W	-	-	3.1以上	5.0以上	■	4.5	5.0	-	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	27
M190	N-18°-E	-	-	0.3	5.7	■	-	2.6	6.0	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M191	N-1°-W	-	-	-	-	■	5.2	-	-	2.2	0	-	-	-	-	-	-	-	-	28
M192	N-34°-E	-	方 形	11.3	9.6	■	4.5	4.5	2.1	5.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	20
M192	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M194	N-13°-E	-	長方形	3.2	3.2	連続	2.5	1.8	5.0	3.7	0	-	-	-	-	-	-	-	-	15-17
M195	N-58°-E	-	■	4.0	3.3	■	3.2	4.6	3.0	4.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	16
M196	N-54°-W	-	長方形	8.6	5.7	共有	2.4	3.2	2.3	1.6	0	-	-	-	-	-	-	-	-	14
M197	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M198	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M199	N-42°-W	-	-	5.8	5.0	共有	3.8	2.0	2.6	2.3	0	-	-	-	-	-	-	-	-	30
M200	N-47°-W	-	長方形	7.7	11.2	■	5.2	2.0	3.0	4.8	0	-	-	-	-	-	-	-	-	26
M201	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M202	N-72°-E	-	長方形	8.3	6.3	共有	2.0	2.3	2.7	2.2	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M203	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M204	N-1°-E	-	-	2.5	1.8以上	共有	4.0	1.5	3.5	-	0	-	-	-	-	-	-	-	-	33
M205	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M206	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M207	N-58°-W	-	長方形	12.1	10.0	共有	2.8	3.0	4.3	3.9	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M208	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M209	N-65°-W	-	長方形	2.85以上	3.5	共有	3.0	-	3.4	2.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	40
M210	竪溝	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

渠番号	方位	填丘	平面形		周縁の形と高さ		主体部の形と規模		供 飲				備 考			
			平面形	東西(m)南北(m)	形 態	水深(m)頂高(m)距離(m)	位置	東西(m)南北(m)	東岸(西岸)長さ	内部主体	東 溝	南 溝		北 溝	陸揚部	
M211	N-1°-W	-	正方形	5.0	7.1	共有	3.4	2.4	3.0	1.5	0	-	-	-	-	日地区 田番号 へ-IV
M212	N-7°-W	-	■	7.3	10.0以上	■	0.7	3.5	2.6	-	0	-	-	-	-	■
M213	雜地	-														
M214	雑地	-														
M215	雑地	-														
M216	N-35°-W	-	-	5.4	5.2	共有	-	1.2	0.9	1.0	0	-	-	-	-	へ-IV
M217	雑地	-														
M218	雑地	-														
M219	雑地	-														
M220	雑地	-														
M221	N-57°-W	-	長方形	14.5	9.0	共有	-	-	-	-	1.7	0	-	-	-	CE 5
M222	N-70°-E	-	-	3.50上	10.7	■	0.8	-	0.8	2.1	0	-	-	-	-	■ 8
M223	N-70°-E	-	芳 形	4.9	5.0	■	1.0	1.3	1.8	1.0	0	-	-	-	-	■ 6
M224	N-11°-W	-	-	1.6	3.4	■	-	1.2	1.1	-	0	-	-	-	-	■ 2
M225	N-75°-W	-	長方形	5.6	4.4	■	-	0.9	1.0	0.9	0	-	-	-	-	■ 7
M226	M227と異	-														
M227	N-22°-E	-	方 形	4.6	5.5	共有	2.0	1.2	2.1	0.4	0	-	-	-	-	CE
M228	N-5°-E	-	-	3.78上	4.9	■	-	1.7	0.9	1.4	0	-	-	-	-	■
M229	N-5°-E	-	-	2.85上	4.0	■	-	2.0	1.4	-	0	-	-	-	-	■
M230	N-10°-E	-	-	3.3	4.0	■	1.0	1.6	0.9	0.4	0	-	-	-	-	■
M231	N-31°-W	-	-	4.2	9.5	■	-	-	-	2.4	0	-	-	-	-	E166
M232	N-28°-W	-	-	2.12上	7.4	■	-	1.6	-	1.4	0	-	-	-	-	■ 10
M233	N-47°-W	-	-	4.5	7.8	■	1.6	-	1.9	1.1	0	-	-	-	-	■ 11
M234	N-30°-W	-	-	4.72上	9.5	■	1.5	-	1.0	0	-	-	-	-	-	■
M235	N-35°-W	-	-	3.38上	6.2	■	2.0	-	1.0	-	0	-	-	-	-	■
M236	N-30°-W	-	-	6.0	7.5	■	3.0	-	1.0	1.4	0	-	-	-	-	■
M237	N-25°-W	-	-	4.36上	6.1	■	-	3.0	2.5	1.8	0	-	-	-	-	■
M238	N-25°-W	-	-	7.05上	8.1	■	-	-	1.8	2.0	0	-	-	-	-	E187 E177
M239	N-35°-W	-	-	8.0	9.3	■	2.6	-	3.7	-	0	-	-	-	-	■ 13
M240	N-55°-W	-	-	7.0	5.8	■	9.2	5.0	5.0	1.5	0	-	-	-	-	■ 14 へ-1 15

測線番号	方位	填丘	平面形規模		周囲の形態と規模		主体部の形態と規模				供 養				備 考					
			平面形	東西(m)	南北(m)	形 態	距離(m)	間隔(m)	面積(m <sup>2</sup> )	位置	東西×南北	深 さ	内部主体	東 端		西 端	南 端	北 端	陸 域	田 地
M241	N-12°-E	-	-	8.60±	13.9	共有	-	3.0	2.3	2.2	0	-	-	-	-	-	-	-	〜1	-
M242	N-51°-E	-	-	7.9	3.9±	共有	1.3	-	-	2.7	0	-	-	-	-	-	-	-	〜	59
M243	N-57°-E	-	-	長方形	6.8	6.0	共有	-	2.8	2.8	3.2	0	-	-	-	-	-	-	〜	58
M244	N-7°-W	-	-	-	1.70±	6.1	共有	-	0.8	0.9	0.7	0	-	-	-	-	-	-	〜	-
M245	N-7°-W	-	-	-	4.70±	5.3	共有	-	2.2	3.3	3.5	0	-	-	-	-	-	-	〜	-
M246	N-62°-W	-	-	方 形	4.5	4.1	共有	2.2	1.3	2.0	1.0	0	-	-	-	-	-	-	〜	57
M247	疎通	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M248	N-27°-W	-	-	長方形	3.0	4.2	共有	1.9	1.8	3.3	2.5	0	-	-	-	-	-	-	〜1	53
M249	N-62°-E	-	-	方 形	3.6	3.6	共有	1.8	1.2	2.3	5.5	0	-	-	-	-	-	-	〜	51
M250	N-62°-E	-	-	方 形	5.3	3.5	共有	1.3	1.8	1.8	-	0	-	-	-	-	-	-	〜	54
M251	疎通	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M252	N-67°-E	-	-	長方形	4.4	3.6	共有	1.6	3.2	1.0	1.4	0	-	-	-	-	-	-	〜1	56
M253	N-64°-E	-	-	方 形	6.0	4.6	共有	3.2	1.3	5.0	2.4	0	-	-	-	-	-	-	〜	50
M254	N-71°-E	-	-	方 形	4.9	4.0	共有	1.2	1.9	2.8	1.2	0	-	-	-	-	-	-	〜	49
M255	N-54°-E	-	-	長方形	7.1	4.8	共有	1.8	1.1	2.6	2.8	0	-	-	-	-	-	-	〜	48
M256	N-68°-E	-	-	方 形	12.1	6.0	共有	1.9	2.2	3.0	3.2	0	-	-	-	-	-	-	〜	20
M257	N-47°-W	-	-	-	6.00±	8.8	共有	3.0	-	4.6	3.2	0	-	-	-	-	-	-	〜	52
M258	N-71°-W	-	-	-	7.10±	5.30±	共有	-	2.3	-	2.6	0	-	-	-	-	-	-	〜	18
M259	N-30°-W	-	-	長方形	5.50±	9.5	共有	1.3	2.5	1.2	0	-	-	-	-	-	-	-	〜	-
M260	N-75°-E	-	-	方 形	2.0	4.0	共有	-	1.5	1.1	2.3	0	-	-	-	-	-	-	〜	-
M261	N-88°-W	-	-	方 形	4.2	5.5	共有	1.5	2.0	-	2.4	0	-	-	-	-	-	-	〜	-
M262	N-72°-W	-	-	長方形	5.6	4.0	共有	1.5	2.1	0.9	2.9	0	-	-	-	-	-	-	〜	-
M263	N-15°-W	-	-	方 形	7.5	5.9	共有	1.5	2.2	2.9	2.0	0	-	-	-	-	-	-	〜	65
M264	N-67°-E	-	-	方 形	6.1	5.2	共有	2.2	0.8	0.9	0.6	0	-	-	-	-	-	-	〜	62
M265	N-31°-W	-	-	方 形	2.6	6.4	共有	2.3	3.3	2.2	1.6	0	-	-	-	-	-	-	〜	-
M266	N-1°-E	-	-	長方形	9.3	1.7	共有	2.9	2.2	3.5	2.3	0	-	-	-	-	-	-	〜	60
M267	N-75°-E	-	-	方 形	11.2	9.1	共有	3.5	2.3	2.1	3.2	0	-	-	-	-	-	-	〜	46
M268	N-68°-E	-	-	方 形	7.5	5.7	共有	1.8	2.1	2.4	2.1	0	-	-	-	-	-	-	〜	61
M269	疎通	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M270	疎通	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

道標番号	方位	積丘	平面形復原		周縁の形態と高さ		主体部の形態と規模		供					備考					
			平面形	東西(m)南北(m)	形態	東縁(m)西縁(m)南縁(m)北縁(m)	位置	東西×南北	長さ	東西	東	西	南		北	概			
M271	N-3°-W	-	方形	3.3 3.9	共有	1.3 2.3	1.0 2.3	0	-	-	-	-	-	-	-	-	田路区 田路分		
M272	N-75°-E	-	■	4.6 3.4	■	1.2 3.5	2.0 1.0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	44	
M273	N-30°-W	-	長方形	7.1 6.0	■	1.8 1.6	1.7 1.9	1	中央	3.0×2.0	0.11	-	-	E152	-	-	田-I	42	
M274	N-61°-E	-	■	9.8 7.2	■	3.7 4.8	1.8 3.4	0	-	-	-	-	-	E194	○	田-II	34		
M275	N-61°-E	-	■	10.8 8.3	■	3.7 3.0	3.2 1.8	1	中央東	2.9×1.2	0.45	E195	-	-	○	■	33		
M276	N-62°-E	-	■	12.6 8.3	■	2.6 3.5	4.0 3.2	1	東北端	1.0×2.0	0.27	-	-	E196	-	E197	■	21	
M277	N-50°-E	-	方形	6.7 5.8	■	1.0 1.7	2.5 5.0	0	-	-	-	-	-	-	-	○	■	19	
M278	N-51°-E	-	-	4.7 4.3以上	■	2.7 2.3	-	3.6	0	-	-	-	-	-	-	-	■	16	
M279	N-25°-E	-	-	5.6 1.3以上	■	2.7	-	1.5	0	-	-	-	-	-	-	-	■	15	
M280	N-41°-E	-	長方形	5.0 6.5	■	3.7 2.7	3.3 4.5	0	-	-	-	-	-	-	-	○	■	14	
M281	N-35°-W	-	■	3.0 5.1	■	1.4 2.6	0.7 0	0	-	-	-	-	-	-	-	○	■	13	
M282	N-37°-E	-	方形	3.8 4.3	■	1.2 0.9	1.8 1.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	■	12
M283	N-42°-W	-	■	6.9 6.1	■	0.8 4.2	2.4 3.4	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	■	11
M284	N-57°-W	-	■	7.3 6.0	■	3.8 1.5	2.2 2.0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	■	10
M285	N-41°-E	-	-	2.0以上 2.3	■	1.2	1.0 2.1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	■	8
M286	N-56°-W	-	長方形	10.1 7.4	■	1.2 3.0	2.6 2.6	0	-	-	-	-	-	-	-	-	○	■	6
M287	N-50°-W	-	■	7.9 7.3	■	1.5 2.3	2.5 2.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	9	
M288	N-30°-W	-	■	6.5 8.2	■	4.2 0.8	1.2 2.8	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	22	
M289	N-5°-W	-	■	5.9 13.2	■	2.5 3.0	2.0 5.1	1	中央	3.3×1.4	0.25	-	-	-	-	-	○	■	32
M290	N-51°-E	-	■	15.1 10.2	■	2.4 3.8	2.6 5.0	0	-	-	-	-	-	E198 E202	○	■	30		
M291	N-30°-W	-	■	14.0 12.0	■	1.0 2.3	1.6 3.0	0	-	-	-	-	-	E203	-	E205 E204	■	27 28 29	
M292	N-30°-E	-	■	7.3 6.7	■	2.3 2.3	1.5 1.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	23	
M293	N-66°-W	-	■	10.0 8.6	■	2.6 2.6	-	2.6	0	-	-	-	-	-	-	-	田-II	1	
M294	N-25°-E	-	■	3.6 6.3	■	3.1 1.4	1.6 1.3	0	-	-	-	-	-	-	-	○	■	4	
M295	N-21°-E	-	方形	3.5 7.5	■	1.5	-	2.0 1.6	0	-	-	-	-	-	-	○	■	3	
M296	M295E同	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M297	N-12°-W	-	長方形	5.5 7.5	■	1.4	-	1.7 3.1	0	-	-	-	-	-	-	-	田-III	24	
M298	跡地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M299	N-47°-W	-	方形	9.6 8.0	■	-	2.1 2.3	0	-	-	-	-	-	-	-	-	田-III	3	
M300	跡地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

建機番号	方位	墳丘	平面形貌		周囲の形跡と規模		周囲の形跡と規模		主体部の形跡と規模				供		備考						
			平面形	東西(m)南北(m)	前縁	距離(m)	距離(m)	距離(m)	北縁(m)	北縁(m)	位置	東西×南北	東西	南北		北縁					
M301	N-53°-E	-	長方形	10.4 8.0	共有	3.0	1.7	1.9	1.6	1	中央	1.3×2.7	0.15	-	-	E207 E208	-	-	ト-Ⅲ	6-31	
M302	N-62°-W	-	■	7.5 6.0	■	-	2.8	1.6	2.2	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	7a	
M303	N-62°-E	-	■	9.5 8.0	■	-	2.0	2.2	4.4	1	中央	1.9×1.0	0.14	-	-	-	-	-	■	7b	
M304	遺構																				
M305	N-85°-W	-	方形	5.0 4.8	共有	1.5	2.1	3.2	3.2	0	-	-	-	-	-	-	-	-	ト-Ⅲ	41	
M306	N-75°-E	-	■	7.6 6.0	■	2.1	1.5	1.6	1.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	38	
M307	N-67°-E	-	長方形	7.10E 12.0	単独	1.6	1.3	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	■	39	
M308	N-5°-E	-	方形	7.6 3.7	共有	-	1.5	3.8	1.5	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	3	
M309	遺構																				
M310	M308と同																				
M311	M302と同																				
M312	M302と同																				
M313	M301Eと同																				
M314	N-31°-W	-	長方形	6.8 11.2	共有	1.3	2.7	4.1	3.4	0	-	-	-	-	-	E229	-	-	ト-Ⅲ	5	
M315	遺構																				
M316	遺構																				
M317	N-45°-E	-	方形	8.8 9.0	共有	1.8	3.3	3.5	1.5	1	中央	2.5×1.4	0.17	-	-	-	-	E210	○	チ-Ⅲ	4
M318	N-52°-W	-	■	3.1E 2.7	■	-	2.3	2.7	1.6	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	13	
M319	N-62°-W	-	■	7.6 9.5	■	2.6	2.3	8.2	2.6	3	中央	1.1×1.1 0.14	0.14	-	-	-	-	-	■	15	
M320	N-55°-E	-	長方形	7.1 10.3	■	2.4	1.8	2.1	2.4	0	-	-	-	-	-	E211 E212	-	-	○	ト-Ⅲ	11
M321	遺構																				
M322	N-32°-E	-	長方形	5.0 7.5	共有	1.3	3.2	-	2.2	0	-	-	-	-	-	-	-	E213	-	ト-Ⅲ	2
M323	N-62°-E	-	■	5.8 4.8	■	3.5	2.6	-	2.2	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	1	
M324	N-75°-W	-	■	8.0 6.2	■	2.9	2.5	-	2.0	2	中央	2.8×1.2 0.14	0.14	-	-	-	-	E214	-	■	4
M325	N-77°-W	-	方形	3.6 4.0	■	1.6	1.6	1.5	1.7	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	18	
M326	N-65°-W	-	長方形	13.3 19.7	■	8.2	-	6.2	-	3	中央	3.2×1.8 0.14	0.14	-	-	-	-	-	○	ト-Ⅲ	17
M327	N-59°-W	-	方形	7.3 6.0	■	-	1.8	-	2.2	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	12	
M328	N-67°-W	-	■	6.9 5.2	■	2.1	2.0	2.0	3.7	0	-	-	-	-	-	-	-	-	■	12	
M329	N-65°-W	-	■	6.0 5.6	■	2.4	2.6	3.7	2.0	0	-	-	-	-	-	-	-	E215 E217	-	■	10
M330	N-71°-W	-	■	6.0 6.2	■	3.0	2.4	2.4	2.0	0	-	-	-	-	-	-	-	E218	-	■	8

進捗番号	方位	積立	平面形		周囲の形取と規模		主体部の形取と規模		供				備考						
			面積(m <sup>2</sup> )	高さ(m)	東横(m)	北横(m)	位置	東西×南北	東西主体	東	西	南		北					
M331	N-57-E	-	方形	6.0	6.7	共有	2.0	1.4	1.5	1.3	0	-	-	-	-	田地区 チ-II	6		
M332	N-27-W	-	■	6.0	7.0	■	3.0	3.6	4.2	2.0	1	東上り	1.6×1.3	0.30	-	-	チ-II	-	
M333	N-30-W	-	■	7.02上	9.4以下	■	2.0	-	-	2.3	1	中央	1.0×2.0	0.30	-	-	■	4	
M334	N-25-W	-	長方形	12.7	16.2	■	3.7	2.8	4.3	3.5	1	■	2.8×1.2	0.18	-	E219 E221	■	1	
M335	N-70-W	-	方形	7.8	8.5	■	2.3	1.9	2.0	1.4	0	-	-	-	-	-	O	■	5
M336	N-70-W	-	■	6.0	5.0	■	0.8	1.7	0.8	1.0	0	-	-	-	-	-	O	■	5
M337	N-70-E	-	長方形	10.6	8.0	■	3.8	2.4	3.2	2.8	1	中央	2.9×1.2	0.36	-	-	O	■	7
M338	N-67-W	-	■	10.5	9.6	■	2.3	1.6	2.4	1.7	0	-	-	-	-	-	-	■	2
M339	N-58-W	-	■	8.6	7.2	■	1.0	2.0	0.8	1.5	0	-	-	-	-	-	-	■	2
M340	N-77-W	-	■	11.3	10.0	■	2.0	2.4	1.9	1.9	0	-	-	-	-	-	-	■	3
M341	N-64-W	-	■	11.7	10.3	■	2.7	2.7	2.0	1.6	0	-	-	-	-	E224	■	4	
M342	N-52-W	-	■	16.7	14.3	■	5.9	5.1	3.9	3.5	0	-	-	-	E225	E225 E226 E227 E228	■	3	
M343	N-48-W	-	■	7.4	11.9	■	4.0	3.2	5.1	4.8	3	中央	1.1×1.7 1.1×1.6 0.14	0.10	-	E231 E232 E234	■	8	
M344	N-45-W	-	■	4.8	9.5	■	2.8	4.5	3.7	-	0	-	-	-	-	-	■	3	
M345	N-46-W	-	方形	6.0	7.5	■	1.8	2.4	1.9	3.0	0	-	-	-	-	E236	■	2	
M346	雑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	E239 E237 E238	■	7	
M347	N-59-E	-	方形	14.1	14.6	共有	2.7	2.7	2.4	3.5	0	-	-	-	-	-	■	7	
M348	M372同	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M349	N-66-E	-	長方形	11.8	8.9	共有	3.2	3.6	6.5	4.7	1	中央	2.7×1.2	0.27	-	E243 E244	■	1	
M350	N-70-E	-	■	10.2	7.9	■	2.6	2.8	4.8	3.0	1	中央	4.5×5.3	0.50	-	E246	■	2	
M351	雑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	■	-	
M352	N-40-E	-	方形	6.8	5.3	共有	1.3	3.5	1.7	1.8	0	-	-	-	-	R248	■	-	
M353	雑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	■	-	
M354	N-70-W	-	方形	4.80上	4.50上	共有	1.0	1.0	1.8	-	0	-	-	-	-	E249	■	-	
M355	雑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	■	-	
M356	N-7-E	-	長方形	6.3	8.0	共有	1.5	4.3	2.4	3.6	1	中央	4.2×2.5	0.20	-	E251 E252	■	4	
M357	N-66-E	-	■	10.6	8.3	■	4.6	3.6	3.5	(5.0)	4	-	-	-	-	-	■	15	
M358	雑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M359	雑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M360	雑地	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

測野番号	方位	位置	墳丘	平面形似観		周縁の形態と規模		主体部の形態と規模					供				備考							
				東西(m)	南北(m)	形	面積(m <sup>2</sup> )	西側(m)	南側(m)	位置	東西×南北	深さ	内部土体	東溝	西溝	南溝		北溝	掘削部	影地区	田番号			
M351	南緯																							
M352	N-64°E			長方形	5.0	4.7	共有	3.0	2.4	5.0	1.5	0								9-1	8			
M353	N-67°W				9.7	6.6		2.7	2.8	2.0	2.9	1	中央	2.5×1.2	0.10		E253 E251							
M354	N-66°W				8.4	5.7		1.1	0.9	0.9	1.3	0					E255				3			
M355	N-52°E				4.2	3.7		1.8	1.2	1.3	2.5	0										4		
M356	N-62°E				方	5.8	5.3		3.5	1.8	2.2	2.5	1	中央	1.7×0.9	0.22		E256					6	
M357	N-60°E				長方形	10.0	7.6		2.3	2.8	2.6	3.2	1	中央	2.7×1.2	0.15		E257 E254 E255					9	
M358	南緯																							
M359	N-51°E				長方形	7.5	4.3	共有	2.1	2.6	3.1	2.5	0								9-1	10		
M370	N-10°E				方	12.1	11.0		3.3	6.5	4.7	4.4	0										11	
M371	N-1°W				長方形	10.6	6.8			2.8		3.2	0										12-17	
M372	N-52°W				4.9	2.4		2.8	2.7	4.0	1.8	0											14	
M373	N-61°W				長方形	9.6	11.7		2.5	3.5	2.5	3.2	0										13	
M374	N-62°E				10.0	5.6E上		2.0	1.0	3.0		0												
M375	N-62°E				方	5.7	5.2		1.6	3.6	2.0	1.8	0					E258 E257					20	
M376	N-60°E				長方形	7.5	4.3E上		1.0		2.0		0											18
M377	N-62°E				13.0	11.5		1.5	2.3	2.2		0												
M378	N-1°W				7.6E上	6.4		1.9		2.1	2.2	0												13
M379	N-66°W				長方形	13.2	10.5		3.3	1.9	3.4	3.9	0											14
M380	南緯																							
M381	南緯																							
M382	N-25°E				方	6.8	10.4	共有	3.0		3.5	3.6	0											
M383	N-37°W				長方形	7.7	5.8		2.2	4.3	4.0	3.1	0											
M384	N-47°W								2.0	1.2	5.5	1.6	0											
M385	N-67°E				長方形	8.2	5.5		2.0	2.3	2.7	3.5	0											
M386	N-75°E				方	4.5	5.0E上		1.3	1.1	2.9		0					E259 E270						51
M387	N-62°E				9.7	7.0E上		2.6	2.0	1.6		0												50
M388	N-60°E				長方形	5.5	10.0		1.2	1.9	1.5	2.5	0					E271						
M389	N-62°E				方	6.0	5.4		0.3	0.8	0.5	2.7	0											
M390	N-62°E				7.2	6.8			1.8			1.3	0											

漢字番号	方位	填丘	平面形状		周囲の形状と規模		主体部の形状と規模		供					備考					
			東西(m)	南北(m)	形状	東隣(m)	西隣(m)	北隣(m)	北側	位置	東西×南北	内面主体	東隣		西隣	南隣	北隣		
M381	N-6°-E	-	方形	4.5	3.9	樹叢	-	1.2	4.0	1.5	0	-	-	-	-	-	-	-	田原区 田邊分
M382	N-4°-W	-	方形	6.1	3.3	#	1.6	1.5	2.0	1.9	0	-	-	E279	-	-	-	子-IV 3	
M383	N-2°-E	-	長方形	3.5	7.4	#	3.4	1.8	3.5	1.2	0	-	-	-	-	-	-	# 2	
M384	樹叢																		
M385	樹叢																		
M386	M-8°-W	-	方形	7.0	5.0	共有	-	1.0	1.2	4.5	0	-	-	-	-	E280	-	子-IV 5	
M387	樹叢																		
M388	N-°-E	-	方形	11.8	16.8	共有	5.5	5.0	3.5	4.2	1	中央北	1.1×2.2	0.20	木柵?	E285	-	ハ-IV 19-20	
M389	N-4°-E	-	方形	4.5	5.7	#	-	3.6	6.0	2.8	1	中央	1.8×0.9	0.3	木柵?	-	-	ハ-III 14	
M400	N-3°-E	-	方形	7.0	8.4	#	2.2	7.0	3.6	2.0	0	-	-	-	-	E285	-	ハ-III 13	
M401	N-4°-E	-	方形	3.2	3.3	#	1.1	2.3	2.8	2.5	0	-	-	-	E291	-	-	# 12	
M402	N-6°-E	-	長方形	7.5	5.5	#	3.4	4.8	2.5	4.1	0	-	-	-	-	-	E305	-	# 9
M403	N-5°-E	-	方形	7.5	6.7	#	2.8	2.6	1.5	3.5	0	-	-	-	-	-	E292	-	# 7
M404	N-5°-E	-	方形	4.0	3.5	#	2.7	2.6	2.0	4.6	0	-	-	-	-	-	-	# 6	
M405	N-6°-E	-	長方形	5.4	9.0	#	5.5	4.8	4.1	4.8	2	中央	1.7×1.0 0.6×1.2 0.30	0.11	不明	E284 E296	-	# 4	
M406	N-4°-E	-	方形	3.5	9.5	#	4.7	-	4.5	-	3	西側	1.4×1.1 1.8×0.6	0.22	-	E302 E305	-	# 8	
M407	N-°-W	-	方形	4.8	6.8	#	2.8	2.8	2.4	3.8	0	-	-	-	-	-	-	# 14	
M408	N-8°-E	-	方形	5.8	12.5	#	4.3	3.0	5.5	3.8	0	-	-	-	-	-	-	# 15	
M409	N-8°-W	-	長方形	18.6	10.8	#	4.3	4.3	4.2	2.8	0	-	-	-	-	-	E313	-	# 13
M410	N-12°-E	-	円形	5.2	6.1	樹叢	1.3	1.0	1.1	1.8	0	-	-	-	-	-	E318	-	# 18
M411	N-3°-W	-	方形	5.5	9.4	上	3.4	3.4	2.7	-	1	階外	1.4×0.7	0.20	-	E316 E317	-	# 16	
M412	N-6°-W	-	長方形	8.8	6.5	#	-	2.7	2.4	2.3	0	-	-	-	-	-	E320	-	# 12
M413	N-1°-E	-	方形	4.5	2.5	共有	-	2.3	2.3	2.8	0	-	-	-	-	-	E322	-	# 11
M414	-	-	方形	6.0	7.5	上	3.0	-	3.4	-	0	-	-	-	-	-	E323	-	# 9
M415	N-1°-E	-	方形	5.5	6.5	#	3.0	-	3.7	4.4	0	-	-	-	-	-	E325	-	# 8
M416	N-7°-E	-	方形	9.5	8.0	#	2.0	2.8	-	4.4	0	-	-	-	-	-	E324	-	# 6
M417	N-4°-W	-	長方形	8.0	6.3	#	2.9	4.4	4.6	4.1	1	中央	1.2×1.8	0.18	-	-	-	# 4	
M418	N-6°-W	-	方形	5.8	6.2	#	2.9	3.4	4.1	4.2	3	中央	1.2×1.1 1.2×1.1 0.19	0.19	-	-	-	# 5	
M419	N-8°-W	-	方形	5.5	5.0	#	4.5	3.0	3.5	3.5	0	-	-	-	-	-	-	# 3	
M420	N-2°-E	-	方形	5.3	10.6	#	3.8	4.0	4.6	1.2	1	中央	0.8×0.4	0.11	-	E329	-	# 2	

遺構番号	方位	位置	墳丘	平面形状		周縁の形質と規模			主体部の形質と規模			供				備考						
				東西(m)	南北(m)	形	面積	東縁(m)	西縁(m)	北縁(m)	位置	東西	東西	北	東		西	東	西	東	西	
M621	N-33°W	-	-	長方形	5.5	4.8	共有	-	2.4	-	2.3	0	-	-	E331 E332	-	-	-	文-II	11		
M622	N-37°E	-	-	長方形	5.6	11.0	#	3.0	3.7	4.7	4.2	1	中央部	2.2×1.2	水堀	-	E333 E334 E335	-	-	#	11	
M623	N-33°E	-	-	方	11.0	5.5	#	3.0	2.6	-	3.0	3	-	-	-	E337	-	-	-	#	10	
M624	N-37°E	-	-	方	6.8	7.2	#	-	4.2	2.0	3.6	0	-	-	-	E339 E338	-	-	E340	-	#	12
M625	N-48°E	-	-	長方形	3.85L	8.4	#	-	2.4	3.7	2.5	0	-	-	-	E341 E342 E346	-	-	-	-	#	13
M626	N-56°W	-	-	長方形	8.5	8.3	#	2.6	4.2	2.0	3.6	0	-	-	-	E343 E344	-	-	-	-	#	2
M627	N-55°E	-	-	方	6.5	10.5	#	2.3	2.8	3.8	3.5	0	-	-	-	E347	-	-	-	-	#	4
M628	N-75°W	-	-	方	10.9	9.5	#	2.4	-	4.2	4.1	0	-	-	-	-	-	-	-	-	#	6・7
M629	雑土	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M630	N-6°W	-	-	長方形	6.1	5.1	共有	2.6	2.6	3.2	-	0	-	-	E348	-	-	-	-	チ-II	8	
M631	N-7°E	-	-	長方形	9.6	8.0	#	2.5	2.7	3.2	3.2	0	-	-	-	E349 E350	-	-	-	-	#	5
M632	N-54°E	-	-	方	11.1	13.1	#	2.9	3.0	2.6	3.2	0	-	-	-	E351	-	-	-	-	#	3
M633	N-47°W	-	-	方	4.7	5.1	#	3.8	2.5	2.3	-	0	-	-	E352	-	-	-	-	-	#	9
M634	N-34°E	-	-	長方形	4.8	8.2	#	3.5	3.7	3.2	1.8	0	-	-	-	E353 E354	-	-	○	-	#	11
M635	N-8°W	-	-	方	2.8	6.0	#	1.4	2.0	1.5	-	0	-	-	-	E355 E356	-	-	-	-	文-III	-
M636	N-30°E	-	-	方	2.8	6.0	#	1.4	2.0	1.5	-	0	-	-	-	E349	-	-	-	-	チ-II	10

## IV. 出土した遺物

### 1 はじめに

服部遺跡で検出された方形周溝墓は、総数360基を優に越える膨大な規模を有する。然しながら、後世の削平、流出は極めて著しく、マウンドはおろか主体部さえも消失しているのが大半であって、供献土器を保有するものは、約1/3を数えるに過ぎない。しかし本遺跡周溝墓群が、若干の中断をばさみつつも弥生時代中期前半～後半の長期間に渡って継続して構築されているという事実から、弥生時代中期墓制のあり方は言うに及ばず、これまで不明瞭であった近江の中期段階土器の解明に重要な手懸りを与えるものである。

供献土器は、総数358個体と周溝墓全体に占める出土量としては、決して多くはないが、『弥生式土器集成』畿内地方(以下「集成」と略す)に基づき畿内第Ⅱ様式～第Ⅳ様式に区分することが可能である。しかし、編年作業においては、<sup>(註1)</sup>全ての周溝墓が供献土器を保有していないこと、又、セット器種の欠如、伴出遺物の些少等、資料としては断片的であり、さらには周溝墓の切り合いが複雑で、それによって土器の共伴関係が決定し難いなど種々の制約を持つものである。しかし又、積極面として、同一周溝墓内に供献された土器は、埋葬主体が1～2であってかなり接近した時期の一括性をもつこと、周溝墓の墓域のあり方から、その形態、分布よりグルーピングが可能であり、そこにおける土器の分布状態から大きく共伴関係を捉えられること、洪水堆積土の介在により墓地の中断終末が明確に捉えられること、また、近江在地の土器も存在するが、畿内、伊勢湾沿岸地域との関連を窺わせるものもあり、それらとの比較検討が可能であること等々、型式編年の「ものさし」を補強し得る根拠も若干存在しており、以下、これらの視点に基づき、畿内の様式に対応する形式編年を試みることにしたい。

### 2 形態の分類

形態分類においては、『集成』畿内地方を参照するが、本遺跡の全段階を通じてその土器様相には、一貫した地域的独自性も多分に認められることから、本書では形態分類及び細分に当っては、独自の名称、用語を用いている。

#### (1) 第Ⅱ様式(後半)段階

第Ⅱ様式段階土器には、壺A(A1、A2)、B(B1、B3)、細頸壺A、鉢A、C(C1)、甕A(A2)等がある。  
壺型土器

[A] 球状の体部より口頸部は大きく外湾して広がるもので、頸部の長短によりさらにA1、A2、に細分される。

A1 口縁部が外湾して大きく広がるもの。

A2 外湾気味に長くのびる頸部を有し、口縁部は、水平近くにさらに広がる。

[B] 筒状の頸部に口縁部が外湾して広がるもので、形態によりB1、B2(Ⅲ「最古」)、B3に細分される。

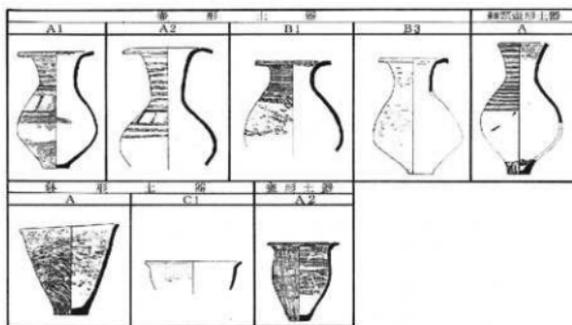
B1 下腹部の膨らむ体部よりなだらかにすばまり、筒状の短かい頸部に口縁部は水平近くに広がる。

B3 算盤玉状の体部を有し、口縁は直立したのち、ゆるやかに外湾する。

細頸壺型土器

[A] 球状の体部に、口頸部は漏斗状にのびる。突出したぶ厚い底部を有す。

鉢型土器



第II様式（後半段階）土器

- [A] ふ厚い底部から体、口縁部は斜上方にのびる。  
 [C] 口縁部が外反又は外湾してひろがるもの。形態によりC1、C2（Ⅲ〔最古〕）に分類される。  
 C1 「く」字状に短かく外反して開く口縁部を有す。

壺型土器

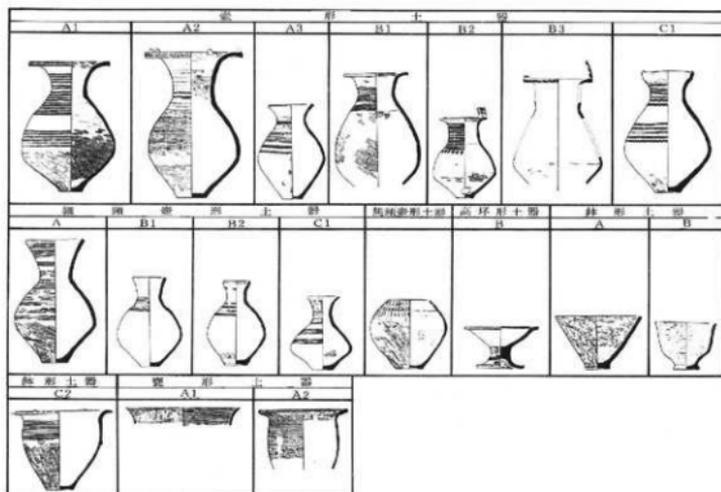
- [A] 倒鐘形の体部に口縁部は外反又は外湾気味に開くもので、A1（Ⅲ〔最古〕）、A2に分類することができる。  
 A2 外湾して開く口縁部で、頸部外面及び口縁部内面に加飾を施こす在地的特色を有するものである。

(2) 第III様式（最古）段階

第III様式（最古）段階土器には、壺A（A1、A2、A3）、B（B1、B2、B3）、細頸型土器A、B（B1、B2）、C（C1）、無頸壺壺、高坪B、鉢A、B、C、甕A（A1、A2）等がある。

壺型土器

- [A] 口頸部が外湾又は外反して大きく広がるもの。形態によりA1、A2、A3に分類される。  
 A1 腰の張る体部を有し、口頸部は外湾気味に大きく広がる。口縁端部には、肥厚乃至若干拡張が認められる。  
 A2 球状の体部より頸部は外湾気味にのび、口縁部はさらに水平に広がるもの。  
 A3 やや胴長の体部に、口縁部は外反又は外湾して開くもの。  
 [B] 筒状の頸部より口縁部が外湾して広がるもの。形態によりB1、B2、B3に分類される  
 B1 下腹部の張る体部よりなだらかにすぼまり、筒状の頸部より口頸部は水平近くに開く。  
 B2 肩の張る算盤玉状の体部を有し、筒状の頸部より口縁部は外反して大きく開く小型の壺。  
 B3 下腹部の張る体部。筒状の頸部より口縁部は水平近くに広がる。  
 [C] 外湾気味にのびる頸部より口縁部は短かく立ち上がり受口状を呈するもの。  
 C1 屈曲して短かく立ち上がる口縁部で、対面する四方が低い波状を呈す。



第Ⅲ様式（最古段階）土器

**細頸壺型土器**

- [A] 球状の体部に漏斗状にのびる口頸部を有する。
- [B] 筒状の細い頸部に口縁部は屈曲して廻かく内反気味に立ち上がる。体部は、ほぼ球状を呈す。  
B1 口縁端部が内傾しないもの。  
B2 口縁端部が内傾するもの。
- [C] 算盤玉状の体部に細い口頸がつく。  
C1 口縁部がやや弓なりに外湾するもの。

**無頸壺**

腹部中位の張る壺。口縁部は内傾する。

**高坏型土器**

- [B] 水平線口縁を有する坏部に、緩やかに広がる脚部を付す。

**鉢型土器**

- [A] 体、口縁部が斜上方に広がるもの。底部は、ぶ厚く突出気味。
- [B] 腹部下部で屈曲して、口縁部がほぼ直口気味にのびる。
- [C] 深い倒鐘形の体部を有し、口縁は大きく外反する。(C2)

壺型土器

[A] 倒錐形の体部に口縁部は外反又は外湾して開くもので、A1、A2に分類される。

A1 口縁部がわずかに外反気味に開くもの。

A2 倒錐形の体部に、口縁部は外湾又は「く」字状に強く屈曲して開き、口縁端部や口縁部内面及び胴部外面等に加飾を施す。

(3) 第Ⅲ様式（前半）段階

第Ⅲ様式（前半）段階土器には、壺A（A1、A4、A5）、B（B1）、C（C1、C2）、D、H（H1）、細頸壺型土器A、B（B2、B3）、C（C1、C2）、鉢C（C1、C2）、甕A（A1、A2）、B（B1）等がある。

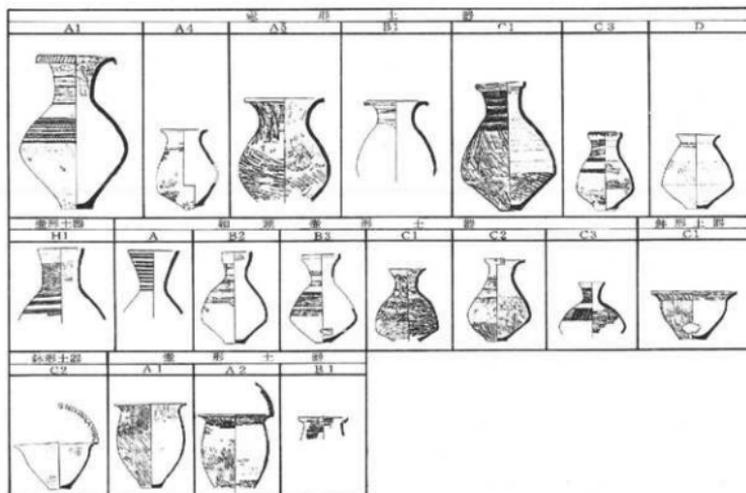
壺型土器

[A] 中位又は下腹部の張る体部に、口頸部は外湾して、大きく広がるもの、形態によりA1、A4、A5に分類される。

A1 下腹部が大きく張る体部に口頸部は外湾して広がり、端部を下方又は外下方に著しく拡張する。

A4 下ぶくれの体部に口頸部は緩やかに外湾して広がる。

A5 球状の体部に、口縁部が大きく外湾するもの。



第Ⅲ様式（前半段階）土器

- [B] 筒状の頸部に口縁部が外湾して広がるもの。  
 B1 腹部の強く張る体部に、頸部は筒状に外湾して開き、口縁部は下方に曲折して広がる。  
 [C] 口縁部が屈曲して短かく立ち上がるもので、形態によりC1、C3に分類される。  
 C1 筒状の頸部より口頸部は屈曲して短かく立ち上がる。体部は、下腹部の強く張る下ぶくれを呈す。  
 C2 小型の壺。下腹部の張る体部に、緩く屈曲して口縁部は、内湾気味に立ち上がるもの。  
 [D] 球状又は、腰の強く張る体部に「く」字状に外反して開く口縁部を有する。  
 [H] ほぼ直口する筒状の口頸部をもち、肩はそれほど張らない(H1)

#### 細頸壺型土器

- [A] 口頸部が漏斗状にのびるもの。  
 [B] 算盤玉状の体部に、口頸部は緩やかに外湾してのび上方において屈曲して短かく立ち上がる。  
 B2 口縁部がゆるやかに内湾するもの。  
 B3 筒状の頸部に口縁部が内折して立ち上がるもので形態的にはB2と良く類似するが、施文・調整等に尾張の貝田町式の模倣が認められるもの。  
 [C] 口頸部は細く外湾気味にのびるもの。  
 C1 口頸部は細く弓なりに外湾してのびる。  
 C2 口縁部は短く外湾してのび、腹部は大きく張る。  
 C3 大きく膨らむ体部を有し、口頸部は、細く外湾気味にのびあがる。

#### 鉢型土器

- [C] 口縁部が外反又は外湾して開くもので、形態によりC1、C2に細分される。  
 C1 半球碗状の体部に口縁部は外反又は外湾して広がるもの。  
 C2 鉢としてはやや深い倒鐘形の体部を有し、口縁部は湾曲して広がる。口縁部内面及び胴部外面に瘤状突起を付す。

#### 壺型土器

当段階壺型土器には、口縁部が外反して開くA(A1、A2)と、屈曲して直上に立ち上がり低い波状を呈するB(B1)がある。

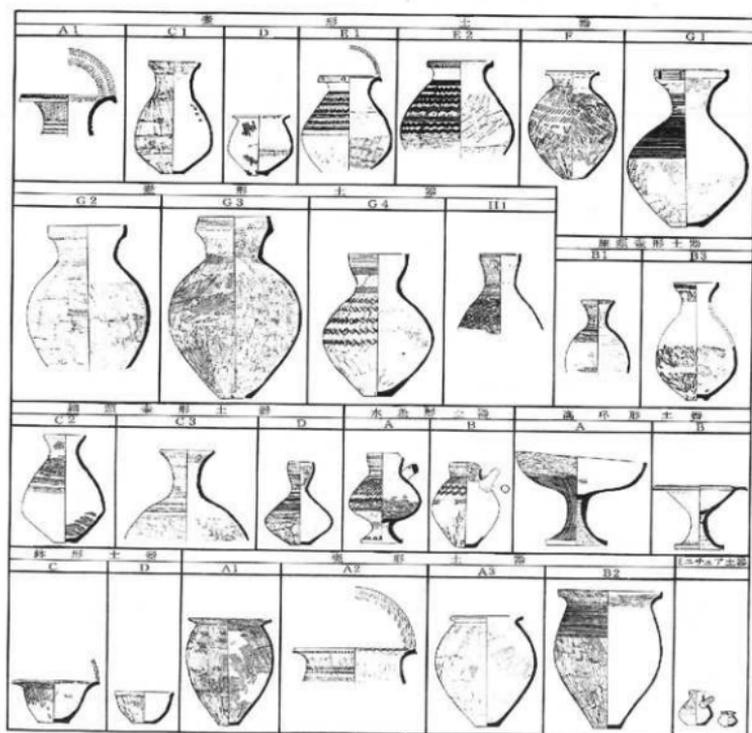
- [A] 倒鐘形の体部に口縁部が外反又は外湾して開くもので、A1、A2に分類される。  
 A1 胴の膨らむ倒鐘形の体部に口縁部が外反又は外湾して開き、端面にはへう庄痕文を施文。  
 A2 A1と同様の形態を呈するが、口縁部内面に波状文、胴部外面には直線文等を施文する。  
 [B] 口縁部外面が短かく直上に立ち上がる「受口状」を呈するもの。  
 B1 「受口状」口縁の対面する四方が弱い山形を呈するもの。

#### (4) 第三-IV様式段階

第三-IV様式段階土器には、壺A(A1)、C(C1)、D、E(E1、E2)、F、G(G1、G2、G3、G4)、H(H1)、細頸壺型土器B(B2、B3)、C(C2、C3)、D、水差型土器A、B、高坏型土器A、B、鉢B、C、D、壺型土器A(A1、A2)、B(B2)、ミニチュア土器等がある。

#### 壺型土器

- [A] 口頸部が外湾して大きく開くもの。  
 A1 口頸部は、外湾して大きく広がり、端部を下方に著しく拡張する。頸部には、断面三角形貼付凸帯を付す。



第Ⅲ-ⅣⅡ様式土器

- (C) 口縁部が屈曲して短かく立ち上がるもの。  
 C1 筒状又は外反して開く頸部に、口縁部は屈曲して短かく直立する。体部は、球状又は下ぶくれを呈す。  
 (D) 腰の張る体部に口縁部は「く」字状に外反して開く。  
 (E) 下腹部の張る球状の体部に外満して開く口頸部を有する。  
 E1 口縁端部は、若干拡張気味で、凹線文を廻らすもの。  
 E2 口縁部が屈曲し短かく立ちあがる。

[F] 上腹部の張るやや胴長の体部を有し、筒状の頸部より口縁部は外反して開く。形態によりF1、F2に分類される

[G] 外湾気味に開く頸部より口縁部は屈曲して上方に立ち上がるもので、形態によりG1～G4に細分される。

G1 丈高の壺。外湾して大きく開く頸部に口縁部は屈曲して上方に立ち上がる。口縁部外面には、4～5条の明瞭な凹線文を廻らし、さらに刻目、櫛描縦線文、棒状浮文等を付加。体部は、腹部中位の張るほぼ算盤玉状を呈し、上腹部は櫛描縞紋様によって飾る。

G2 丈高の壺。外湾して開く頸部より口縁部は、屈曲して上方に立ち上がるもの、口縁部外面には4条～2条の凹線文を廻らす、G1に比べ浅く不明瞭なものが多い。体部は、上腹部の張る縦長。頸部屈曲部には、ハケ疋痕文凸帯を有する。

G3 形態はG2とほぼ同じ、口縁部がふ厚く内傾する。

G4 口頸部が内湾気味にのびるもの。口縁部外面には多条の凹線文、櫛描列点文等を施文。体部は、胴の張る球状を呈す。

[H] 細く外反気味にのびる口頸部で、上端で内反する。体部は、胴の強く張る球状を呈する(H1)。

#### 細頸壺型土器

B (B2、B3)、C (C2、C5)、Dのタイプがあるが、特に口頸部が内湾気味にのびるD型の出土が多い。

[B] 細く外湾気味にのびる口頸部で、上端は屈曲して短かく立ち上がるもの。形態によりB2、B3に分類される。

B2 球状の体部にやや外湾気味にのびる口頸部を有し、上端は、屈曲して短かく直立する。

B3 下ぶくれの体部に受口状の口縁。

[C] 下ぶくれ又は球状の体部を存す。口頸部は外湾気味にのび上端で短かく立ち上がるもの、C2、C3がある。

C2 細く筒状にのびる口頸部で上端は、屈曲して短かく立ち上がる。

C3 球状の体部に細く外湾する口頸部が長くのびる。

[D] 算盤玉状の体部に口頸部は内湾気味に上方にのび上がるもの、凹線文、櫛描縞紋様になり微細な装飾を施す。

#### 水差型土器

胴の張る体部に、内湾気味にのびる片口の口縁部を有す。肩部には、横位の半環状把手を付す。

[A] 寸づまりの体部に脚台がつく。

[B] 丈高で脚台のつかないもの。

#### 高坏型土器

直口のものAと水平縁口縁を有するBがある。

[A] 直口の口縁部を有する坏部で、脚部は細い筒状の柱状部より「ハ」字状に緩やかに広がる。

[B] 水平縁口縁を有し、内面には内傾する凸帯を廻らす。脚部は、緩やかに「ハ」字状に広がるもの。

#### 鉢型土器

[C] 半球碗状の体部で、口縁部は外反又は外湾して開く。

[D] 浅い体部に、短かく外反する口縁がつく。

#### 壺型土器

当段階壺型土器には、A (A1、A2)、B (B2)、等がある。

[A] 胴の膨らむ倒錐形の体部に口縁部が外反して広がるもので、A1～A3に分類される。

A1 胴の膨らむ倒錐形の体部と、口縁部は「く」字状に外反して開くもの、端部にはヘラ疋痕文が廻る。

- A2 口縁部が緩やかに外反して開くもので、調整、施文等は、B類と共通する。
- A3 口縁端部を内上方に拡張するもの。
- [B] 口縁部が直立して受口状を呈するもの。いわゆる「近江型」甕。口縁部の形態によりB2-I、B2-IIに細分される。
- B2-I 口縁部が外傾し、屈曲が明確でないもの。
- B2-II 口縁部が直立気味に立ち上がるもの。

#### (5) 第四様式段階

第四様式段階土器には、壺C1、D、E (E1)、F (F1、F2)、G (G1、G2、G5)、H (H1、H2、H3)、I (I1、I2)、J、K、細頸壺型土器B (B3)、C (C4)、D、水差型土器A、B、高坏A (A1、A2)、台付鉢、壺型土器A (A1、A2、A3)、B (B2)、C (C1、C2) 等がある。

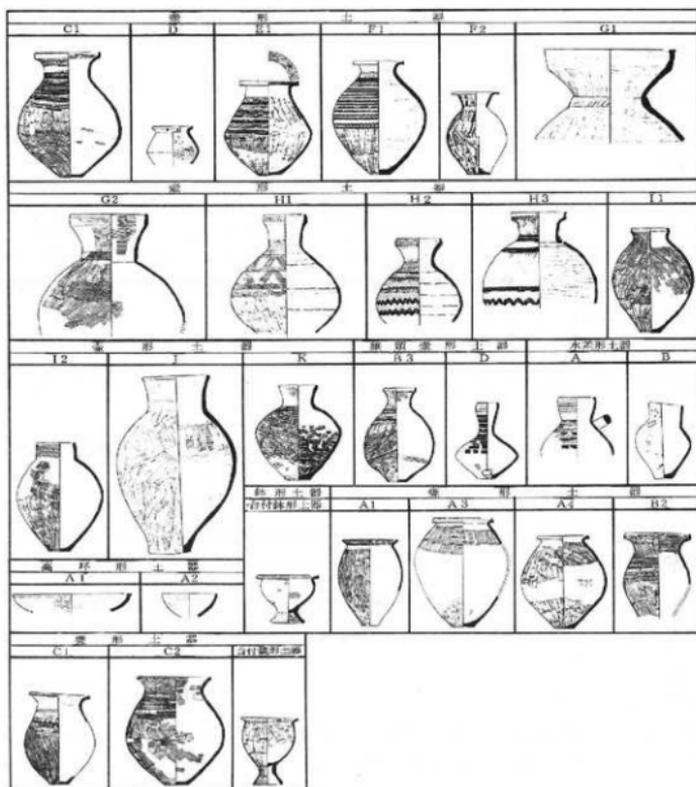
#### 壺型土器

- [C] 筒状の頸部に屈曲して短かく立ち上がる口縁部、下ぶくれの体部を有するもの (C1)。
- [D] やや下ぶくれの球状の体部に、短かく外湾する口頸部がつく。
- [E] 算盤状の体部に、短かく屈曲する口縁部がつく (E1)。
- [F] 縦長の体部を有し、筒状の頸部より口縁部が外反して開くもの。形態によりF1、F2に分類される。
- F1 筒状の頸部に口縁部は外反して水平近くに広がり端部を上方に拡張、体部は、上腹部の張る縦長を呈す。
- F2 F1に比して頸部がしまり、口縁も外上方に直線的にのび端部を外へ引き出す。
- [G] 外湾気味に開く頸部より口縁部は屈曲して上方に立ち上がるものでG1、G2がある。
- G1 頸部が「く」字状に屈曲する。
- G2 丈高の壺で、外湾して開く頸部に口縁部は屈曲して立ち上がる。体部は上腹部の張る縦長を呈し、頸部にはハケ状文凸帯を廻らす。前段階G2と殆ど差異がみとめられない。
- [H] 形態及び手法上の相違によりH1、H2、H3に分類される。
- H1 外湾気味に細くのびる口頸部で、上端はやや内反する。体部は、腹部の強く張る球状を呈すか。
- H2 外湾して開く頸部に口縁部は屈曲して立ち上がるもの。体部は、腹部の張る球状を呈す。上腹部には、精緻な櫛描諸紋様が施こされている。
- H3 球状の体部に、直口する長い頸部と受口状の口縁がつく。
- [I] 卵形の体部に直口の口縁部を有する壺で、口縁部の形態によりI1、I2、に分類される。当段階壺型土器では最も多量に検出されている。
- I1 口縁部上端が屈曲してやや内反するもの。
- I2 口縁部がほぼ直口を呈するもの。
- [J] 口縁部は、外反して緩やかに開く。
- [K] 球状又は、縦長の体部に口縁部は外湾気味に広がる。

#### 細頸壺型土器

当段階では、B3、Dタイプが存在が若干知られる。

- [B] 短かく外湾気味にのびる頸部に口縁部は屈曲して直立する。体部は下ぶくれを呈す (B3)。
- [D] 算盤玉状の体部に内湾気味にのび上がる口頸部を有するもの。



第IV様式土器

水差型土器

〔A〕 内湾気味にのびる口頸部で、口縁部外面には多条の浅く太い凹線文が廻る。肩部には、横位の半環状肥手を付し、上腹部は、撫指により加飾。

〔B〕 卵形の体部に直口の筒状の口頸部がつく。

### 高環型土器

[A] 直口の口縁部を有するもので形態によりA1、A2に分類される。

A1 内湾して端部を内外に肥厚させる口縁部を有するもので、環部は比較的浅い、口縁部外面には凹線文を施す。

A2 半円状の椀型の環部をもつもの。

### 台付鉢形土器

脚台を付す半球状の体部に鋭く屈曲して開く口縁部を有する。口縁端部は、上方に若干拡張。

### 甕型土器

当該階甕型土器は、A (A1、A2、A3)、B (B2)、C (C1、C2)のタイプが存在する。

[A] 倒鐘形の体部に口縁部は外反又は外湾気味に開くもので、形態によりA1、A2、A3に分類される。

A1 胴の膨らむ倒鐘形の体部に「く」字状に屈曲して開く口縁部を有するもの。口縁端部にはヘラ匠痕文が施す。

A2 上腹部の膨らむ球状の体部に口縁部は「く」字状に屈曲して短かく開く、甕である。口縁端部は、若干上方に拡張気味で、端面は、強い横ナデにより浅く凹む。

A3 A2よりやや下ぶくれの体部をもつ。

[B] 腹部の張る体部より頸部は大きく湾曲して開き、口縁部は鋭く屈曲して上方に立ち上がる「近江型」甕 (B2-II)。

[C] 腹部の張る体部に口縁部は緩やかに屈曲して外上方に広がる。調整、施文等は、Bと良く類似したものである。

C1 口縁が「く」字状に外湾するもの。

C2 口縁が短く屈曲するもの。

## 3 系譜と地域的特徴

本節では、先の形態分類に従い、県内及び他地域等の出土資料との比較検討により、本遺跡出土遺物の形態及び、手法的特徴を明らかにし、又その系譜関係並びに地域性的問題について論及を試みたい。

### (I) 第Ⅱ様式 (後半) 段階

第Ⅱ様式は、前期のヘラ描沈線文から多条の平行沈線文を一回の操作で描くことのできる櫛描文の成立によって位置づけられている。櫛描文の発生事情には、かなりの地域差を伴うようであるが、大勢としては前半-第Ⅰ様式の影響が残る段階、後半-第Ⅱ様式としての独自性が発揮される段階に大別されよう。

本遺跡第Ⅱ様式段階土器は、壺A (A1、A2) B (B1、B3)、細頸壺A、C (C1)、鉢A、C (C1)、甕A (A2) 等があり、器種、量共に少ないが、壺型土器には、漏斗状の頸部に口縁部は屈曲して大きく広がるもの、又巻き込むように開くもの等がみられ、畿内第Ⅱ様式 (後半) 段階に共通した特徴がみられる。

### 壺型土器

#### 壺A

壺Aは、第Ⅱ様式段階において畿内及び周辺地域において最も普遍的にみられる壺である。球状の体部に口縁部は外湾して開き、特に口縁部は屈折して水平近くに大きく広がる。底部は、ぶ厚く突出気味。頸の長短によりA1、A2に分類される。

A1 (E068、E100)

口径18~20cm前後、器高30cm前後、最大腹径20~23cm前後、底径6.5cm前後を測る。口縁端部は、いずれも面を成して

終わり、端面は、横ナゲ後下端又は、上・下端にヘラ圧痕を施文。器体調整は、ハケ調整後部分的なナゲを加えるものが多いが、E068下腹部にはヘラミガキを施す。施文は、口頸部より腹部上半に至るまで櫛描直線文を主体とする幅広い紋様帯を構成するが、肩部に横線文(E100)を施文するものがある。又、直線文帯は、単帯構成の他、(E100腹部)のように複帯構成をとるものがある。

#### A 2 (E085, E118, E211)

いずれも体下部を欠失しており、その全形は詳らかでないが腹部の張る球状の体部に口頸部は、漏斗状に外湾して大きくのび、口縁部は、水平近くを開くものや、巻き込むように外反して開くものがある。口径19.8~25.2cm、最大腹径19.8~27.5cmを測る。口縁端部は、そのまま面を成して終わり、端面は横ナゲ。E211、上・下端には、ヘラ圧痕文を施文。器体調整は、ハケ調整後ナゲを行なう。口頸部より腹部上半に櫛描直線文(単帯)を主体とする幅広い紋様帯を有し、肩部には、縦線文(E085)斜格文(E118)を施文するものがある。

口縁部内面に加飾を有するものは少数でありE118(A2)に連弧文が認められるに過ぎない。又、当段階においては、波状文の使用は極めて稀で、頸部にアクセントとして1帯添えたものが1点(E100)認められる程度である。

伴出関係は、E211、がM320出土。E212(B3)と共伴。又、E068については、M055より単独出土したものであるが、櫛目が太く、5~6回連続して一回りすることや、又、その形態等から他に比べ古い要素を有すると考えられる。E118は、M143よりE116(B1)との共伴が確認される。

なお、県内における当期の遺跡として、蒲生郡安土町大中の湖南遺跡、長浜市大辰巳遺跡、大津市南滋賀遺跡、同滋賀里遺跡、守山市寺中遺跡等をあげることができる。中でも、大津市南滋賀、同滋賀里遺跡出土遺物は、方形周溝墓出土の一括資料である。滋賀里遺跡IVB区3号溝出土の壺2点は、突出したぶ厚い底部を付す球状の体部より漏斗状又は外湾気味に大きくのびる口頸部を有す。B1は、口縁端部下端に櫛描直線文を廻らし、又口頸部より上腹部に至るまで櫛描直線文(単帯)による巾広い文様帯を有している。いずれも器体調整は、ハケ調整後ナゲを加える。南滋賀遺跡出土壺№13は、やや肩長の球状の体部に外湾して開く口頸部を有するもので、口縁端部には縦位の櫛又はヘラ圧痕文を廻らし、頸部には、櫛描直線文(単帯)による文様帯を有している。滋賀里例、南滋賀例共に第Ⅱ様式後半段階に位置づけられるが、滋賀里例については、本遺跡例より若干先行する可能性がある。

当段階壺Aは、大概においてその形態、施文等に畿内と共通の要素が認められ、【集成】第Ⅱ様式段階壺型土器に類する特徴を有する。しかし、調整、施文等に若干の差異もみられ、特に畿内中心部に多い文様同のヘラ研磨は、全く認められない。

#### 壺B

##### B 1 (E116)

本例は、M142出土で壺A2(E118)との共伴が認められるものである。下腹部の強く膨らむ体部に、筒状の頸部より口縁部は大きく水平近くに広がる。口径19.8cm、最大腹径25.9cmを測る。口縁端部は面を成し、外面には直線文が廻る。器体は、外面ハケ調整後下腹部に細かいヘラミガキを施こし、内面ナゲ仕上げ。口頸部外面には、櫛描直線文帯(複帯構成)を廻らし、その下位には頸状文を1列配す。壺B1は、当段階よりⅢ様式段階にかけて各々1~2点の検出が知られ、量的には僅少ではあるが、その形態には大きな変化はみられず、器体の粗いハケ調整と口頸部のみ施文される複帯構成の直線文帯は、B1の特徴的要素であり、壺A類とはまた異った様相を呈する。

県内においては、これまでのところ類似品の出土は知られていないが、三重県鈴鹿市東庄内B遺跡(壺B)、同上箕田遺跡(B、大頭壺型土器)等出土の壺類と細部に相違を認め得るものや近似した特徴を有する。直線文が複帯構成

(注8)

を成すことは、近江をはじめ伊賀、伊勢、尾張等東海地域にみられる共通した施文法である。

本遺跡第Ⅱ様式後半段階土器では、複帯構成を有するものは、少数であるが、しかし、当手法が、特に壺B類、又壺CⅠ類等の在地的壺型土器（東海の要素を内在するが）に限って第Ⅳ様式段階までも長く継承されることは、前期Ⅱ—Ⅲ段階からの多条沈線文の遺制としての地方色として抱えられ、同じく畿外に位置する伊賀、伊勢湾沿岸地域にも共通して認められる。畿内中心部においては、第Ⅱ様式前半に属するものである。

### B3 (E212)

本例は、M320出土で、E211 (A2) と伴している。算盤玉状に近い体部をもち、口頸部は直口気味で、口縁部は大きく外湾して広がる。口縁部外面は、ハケ調整後横ナデで成形し、上・下端に、ヘラ状具による刻目をめぐらし、頸部から体部中位にかけて、櫛状具による直線文をめぐらせている。BⅠにくらべ、頸部は長く、下腹部の形態も異なる。Ⅲ様式（最古）段階にも、やや変化したもの（E133）が認められるが、その系譜は、壺CⅠに継承されたとみられる。現在のところ、類例に乏しいが、形態・手法からみて、当該階に比定できるものである。

### 細頸壺型土器

#### A (E060, E070, E182)

球状の体部に漏斗状のびる口頸部を有するもの。底部は、ぶ厚く突出する。口径12cm前後、器高30～35cm前後（図上復元）を測るものと、口径8.1cm、器高18.7cm（図上復元）の小型のものがある。

口縁部は、内方に著しく肥厚し外傾する面を成すもの（E060, E182）と、丸みを有し、端面にはヘラ圧痕文を施すもの（E070）がある。いずれも器体内外面共ハケ調整後ナデが施され、外面には口縁部より上腹部に至るまで櫛描直線文（単帯）を施す。細頸壺Aは、畿内地域においては一般的に認められるものであり、又、県内でも大津市南滋賀遺跡、同滋賀里遺跡、近江八幡市長命寺湖底遺跡、守山市金ヶ森西遺跡等より出土が知られている。いずれも体部又は口縁部を欠失するなど部分的ではあるが、本遺跡出土例と良く類似した形状を呈し、器体は、ハケ調整後ナデを施し、口縁部より上腹部にかけて櫛描直線文（単帯）を施す。いずれも第Ⅱ様式段階に比定し得るが、長命寺湖底遺跡例については、第Ⅱ様式段階でも前半頃に位置づけられる。又、南滋賀出土例は、口頸部に指頭圧痕を加え小突起状を呈しているが、これは、伊勢湾地方の第Ⅱ様式段階細頸壺に類例を求めることができる。

畿内地域においては、『集成』第Ⅱ様式細頸壺型土器に指摘されているように、口縁部より上腹部にかけて流水文（横型）を描く実例も多いが、当地方では、櫛描直線文（単帯）で飾るものが一般的である。

### 鉢型土器

#### A (E083)

底部より直線的に斜上方にのびる体部で、口縁部は、やや外反気味に短く開く。底部は大きくぶ厚い平底で、器壁は約3cm器を測る。口径26.1cm、器高23.8cm、底径8.3cm。器体内外面共横又は斜方向のハケ調整を施し、内面にナデを加える。胎土は、粗く1～2mm大の石粒多含。色調は、暗茶褐色を呈し、体部外面には、煤の付着が認められる。M094より単独出土。兵庫鳳田能遺跡第6D調査区土盛4出土壺<sup>(注10)</sup>（11）に形態の類似がみられ、田館例は、第Ⅱ様式段階に比定されているものである。

#### 鉢CⅠ (E102)

口縁部が緩く外反して開くもの。体部下半を欠失。口径25.5cm、口縁部は、わずかに上方に肥厚し、端面には縦位のハケ圧痕文を施す。器体内外面共ハケ調整後内面にナデを加える。M122より単独出土で、その編年の位置づけは難しい。県内では、大津市南滋賀遺跡より同種の鉢の出土が知られており、『集成』琵琶湖地方において第Ⅱ様式段階に位置

づけられているが、詳細は不明。

#### 変型土器

##### 壺A

倒鉢形の体部に緩やかに外湾して開く口縁部を有するもので、いわゆる「大和型」壺である。近江における大和型壺には、畿内通有の特徴を有するA1とそれに在地的特色として端部又は口縁部内面に加筋を施すA2があるが、当該段階ではA2のみの出土が知られる。

##### A2 (E109)

口径19.1cm、器高20.9cm、底径4.9cmを測る。胴の張りの弱い倒鉢形の体部に、口縁部は緩やかに外湾して開く。口縁部は、外方に折り返し器壁はぶ厚い。端部は、丸味を有し、外面には、上・下端にヘラ圧痕文と波状文（ハケ又は櫛）を等間隔に施文。器体外面縦方向、内面横方向の粗いハケ調整を施す。器体外面に煤付着。M126出土で突出したぶ厚い底部を有する壺体部等との伴出が知られ当該段階に位置づけられる。

壺A2は、県内の諸遺跡（中期前半）より多数の出土が報告されており、中でも代表的な遺跡として大津市南滋賀遺跡、長浜市大辰巳遺跡、米原町入江西野遺跡<sup>(E120)</sup>、近江八幡市長命寺湖底遺跡等<sup>(E121)</sup>があげられる。又その分布は、伊勢湾沿岸地域（東庄内B遺跡<sup>(E122)</sup>、上箕田遺跡<sup>(E123)</sup>、納所遺跡<sup>(E124)</sup>、朝日遺跡等<sup>(E125)</sup>）で多数の出土が知られる他、山城（深草遺跡<sup>(E126)</sup>、中臣遺跡<sup>(E127)</sup>、鶏冠井遺跡<sup>(E128)</sup>）、大和（唐古遺跡<sup>(E129)</sup>）、北摂津地域においても出土が報じられているが、やはりその中核を成すのは、近江、伊賀、伊勢の諸地域と考えられる。

壺A2は、「大和型」壺の形態と調整法を有するが、口縁端部に圧痕（棒状圧痕又は指頭圧痕）、又は突起、波状文等を施文し、口縁部内面には、波状のハケ調整を交えることを共通的特徴的要素としている。

周知のように、壺、甕等の口縁部に施文される指頭圧痕の起源については、東海、水神平式系にその系譜を求めることができる。県内では、本遺跡を始め、守山市小津浜遺跡<sup>(E130)</sup>、近江八幡市長命寺湖底遺跡等、Ⅰ様式（新）段階～Ⅱ様式（前半）段階壺型土器口縁部に連続した指頭圧痕を認めることができ、又三重県納所遺跡、愛知県朝日遺跡等においても多数の出土が知られている。壺A2は、本来的には、その手法を継承したものと考えられ、さらに口縁部内面に波状のハケ調整を加えるなど装飾的要素を加味した特徴的な変型土器として発展する。県内では、長命寺湖底遺跡、入江内湖西野遺跡等出土例にみられるように緩やかに外湾して開く口縁部の端部に圧痕又は突起を貼付、口縁部内面には波状のハケ調整を交えるなどその形態からも明らかに本遺跡出土例に先行するもので第Ⅱ様式（前半）段階に比定し得るものが知られている。

#### (2) Ⅱ様式（最古）段階

当地方においては、Ⅱ様式～Ⅲ様式段階の資料が少ない為、未だ土器様相の推移状況等については明らかに把握されておらず、またその区分も容易でない。しかし、本遺跡当該段階土器の傾向として、まず第一に前段階に比べ壺型土器等の器面装飾に櫛描波状文の著しい増加がみられること、また、壺口縁端部に肥厚及至拡張が認められること、体下部の張りが増えることなど形態的にもⅢ様式段階に近似した要素が多分にみられることから、当該段階土器が、Ⅱ様式～Ⅲ様式段階の中間的様相を呈するものと考え、Ⅲ様式（最古）段階として設定した。

当該段階では、壺A（A1、A2、A3）、B（B1、B2、B3）、C（C1）、細頸壺A、B（B1、B2）、C（C1）、無頸壺、高坏B、鉢A、B、C（C2）、甕A（A1、A2）等がある。

#### 壺型土器

##### 壺A

口頸部が外湾又は外反して開くもので、形態によりA1、A2、A3に分類される。

#### A1 (E111, E150, E160)

漏斗状に外湾してのびる頸部に口縁部は大きく水平近くに広がる。前段階に比べ口縁端部には肥厚及至拡張が認められるようになり、体部の形態も球状から腰の強く張るものが多くなる。口縁端部の加飾は、顕著となり前段階のヘラ印痕文から櫛描波状文を廻らすものが一般的となり、さらに口縁部内面にも波状文が施文される。E160の器体は、内外面共ハケ調整後外面上半部及び体部内面にナデが施こされ、ヘラミガキを有するものは皆無である。いずれも口頸部より腹部上半に至るまで直線文を主体とする一連の紋様帯を構成するが、前段階に比べ波状文の使用が著しく増加し、頸部位に波状文を添えるもの(E111, E160)がある。

E111 (M186)が単独出土。他、E150がM170より壺A3 (E147)、細頸壺A (E146)、鉢A (E151)等と伴出。E160はM199より壺底部片(E161)との伴出が各々認められ当該段階に位置づけられる。

県内では、長浜市鴨田遺跡<sup>(E20)</sup>、大津市南滋賀遺跡、高島郡新旭町針江南遺跡等より類似品の出土が知られるが、特に針江南遺跡出土例(3、4、5)は、腰の張る球状の体部に口頸部が緩やかに外湾して大きく広がるもので、口縁端部外面又は口縁部内面に波状文を廻らし、さらに上腹部にも波状文が多用されているなど本遺跡出土壺A1とその形態、調整、施文法等良く近似するものである。

#### A2 (E136)

下腹部の張る球状の体部に頸部は漏斗状に外湾してのび、口縁部が大きく水平に広がるもの、底部は安定した平底を呈し、木葉痕を有する。口径25.5cm、器高39.0cm、最大腹径24.4cm、底径7.7cmを測る。

口縁端部は、若干肥厚気味で、外面には、ヘラ印痕文(上、下嘴)、櫛描波状文を廻らし、又内面には、瘤状突起(5個)、連弧文(2条×3連)を施文。器体外面ハケ調整後上半ナデ、口頸部より、上腹部に至るまで櫛描直線文(2条×3連)を廻らす。頸部屈曲部には波条文を施文、器体内面口頸部に横方向のハケ調整、体部ナデ。

本例は、M156より壺B1 (E128)、甕A1 (E130)との伴出が認められる。

#### A3 (E089, E137, E147)

いずれも胴の張る縦長の体部に、口縁部は外反(E147)、外湾(E137)、又は輪状の頸部より口縁部が大きく外反して開くもの(E089)等がある。口縁端部は、若干肥厚気味で、端面には、櫛描波状文、刺突文等を施文。頸部より腹部上半にかけ櫛描直線文、波状文をほぼ交互に廻らす。器体は、外面ハケ調整後口頸部付近にナデを加えるが、E147は全面をナデにより平滑に仕上げる。器体内面ハケ調整後ナデ。

伴出遺物を有するものは、E147が、M170より壺A1 (E150)、細頸壺A (E146)、鉢B (E151)等との伴出が認められるほか、E089が壺頸部(E090)と伴出するもの(M107)、当該段階に位置づけ得る具体的根拠を欠くが、形態又は施文においてE147との類似がみられる。

当該段階Aの施文の特徴として波状文の多用があげられるが、さらにその施文原体としては、2条×2連、3条×2連、又は2条×3連といった巾のある櫛状工具(「半截竹管を用いたように先端が2つに分かれたものをさらにいくつか横ならびに束ねたもの」【京都府鶏冠井遺跡】、「半截竹管をその巾より広い間隔において束ねた形状の櫛」【集成】琵琶湖地方)が多用されている。同種の施文具の使用は、県内では、長浜市鴨田遺跡、大津市南滋賀遺跡、新旭町針江南遺跡等でも認められており、いずれも第Ⅱ様式(後半)～Ⅲ様式段階に比定されている。又、県外では、京都府深草遺跡、奈良県唐古遺跡、香川県紫雲出遺跡等に若干の出土例があり、かつて、佐原氏は、櫛Ⅱ種と呼び分け、さらにA、先端が2つに分かれたものをいくつか束ねたもの、B、先端が丸い棒状のものを束ねたとみられるもの、C、管状のものを束ねたものに分類されていたが、櫛Ⅱ種は、畿内中心部(Ⅲ様式段階)には少なく、又、伊勢など東海地域においては、

むしろ中期末(長床式)に至って盛んに用いられるようである。本地域では、中段階階臺・細頸壺等(IV様式でも若干認められる)にこの種の施文具が多用されており、より合理的に緻密な文様を描いている。

以上、壺Aは、前段階からの継承が認められる畿内通有の壺型土器であるが、口縁端部及び体部に認められる形態的変異、又節描波状文の飛躍的な増加等、これらは明らかにII様式段階への移行状況を示しているものと考えられる。しかし、形態的には畿内との共通性を有するが、器体調整においてヘラミガキは全く認められず、ハケメ、ナデで仕上げられ、又、特異な施文原体を多用している点などが在地的要素も濃厚に窺える。口縁部内面に認められる瘤状突起は、特に近江・伊勢湾沿岸地域や山城にその分布が知られている。

#### 壺B

##### B 1 (E128)

外反気味に開く筒状の頸部に口縁部が屈折して大きく水平近くに開くもの。体部は、下腹部の張る下ぶくれを呈す。前段階B 1 (E116)と形態等殆ど差異はみられない。口縁端部は、面を成して終わり、無紋(E128)。器体は、外面ハケ調整、内面ハケ後ナデを施し、口頭部外面には、前段階同様複帯構成の直線文帯を廻らす。

上述の通り、県内ではII様式段階における類似品の出土は知られていないが、E128は、M157より壺A (E136)、壺A 1 (E131)との共伴が認められ当該階に位置づけられる。

##### B 2 (E032, E033, E034, E035)

肩の張る算盤玉状の体部に筒状又は外反気味にのびる頸部より口縁部は外反して大きく広がるもの。口径12.0cm、器高20.0cm前後、最大腹径17.0cm前後、底径4.0cm前後を測る小型の壺。M015より一括出土したもので、体下部に焼成後の穿孔を有するもの。底部を打穴したものと等がみられ、明らかに仮器として意図的に埋納されたものである。器体外面は、ハケ調整後ナデにより丁寧に仕上げられ、E033下腹部にはヘラミガキの痕跡が認められる。内面ハケ調整後ナデ、口縁端部は、面を成し、横ナデ調整、無文。口縁部内面には、いずれも小さな瘤状突起を貼付が、3個(E033, E034)、4個(E035)、2個1対を4方(E032)に配するなど種々である。E032には羽状列点文が廻る。又、口頭部外面には、複帯構成の直線文帯を施文するが、その下位には扇形文(E034)、波状文(E033)、波状文+扇形文(E032)、単帯の直線文(E035)を施文するなど、その紋様構成には細部に微妙な違いが認められる。しかし、調整、施文等いずれも良く近似しており、単独又は複数者による同時制作の可能性も考えられる。胎土はやや粒砂を含むが緻密で、色調は、茶褐色を呈する。M015より一括出土し、他に壺C 1 (E031)との共伴が知られるが、壺B 2は、本遺跡周溝基群中でもM015においてのみ認められる特殊な壺で、M015の被葬者が如何なる性格を帯びていたか問題である。又、輸入品としての可能性も考えられるが、県下では胎土分析等の研究がたち遅れている為明らかにし得ない。口頭部の形態や施文等B 1類と良く類似しており、口縁部内面に瘤状突起貼付がみられ、又、肩の張る算盤玉状の体部を有するなど、伊勢湾地方との共通性が強い。

##### B 3 (E133, E193)

下腹部の強く張る体部より、頸部は、筒状にのび、水平近くに広がる口縁部を有するもの。E193は、口縁端部外面に波状文を廻らす。器体外面ハケ調整後、頸部より上腹部にかけて直線文、波状文(3条×2連)を施文。内面ハケ調整後体部ナデ。E133は磨滅が著しく詳細は不明。E193はM263より鉢B (E184)との共伴が認められ、当該階に位置づけられる。

##### C 1 (E031)

口縁部が屈曲して短く立ち上がる「受口状」を呈するもので、口縁端部の対面位置に外方より押圧を加え低い波状を呈する。体部最大腹径は中位下方に位置する。器体外面ハケ調整後体部ナデ。口縁部内外面共横ナデ調整、頸部及び

上腹部には、櫛描直線文、波状文等を施文（4条単位）、M015出土で蓋B2との共伴が確認され当段階への位置づけがなされる。

#### 細頸壺型土器

細頸壺型土器には、口頸部が漏斗状にのびるA類と、口縁部が屈曲して短かく内湾気味に立ち上がるB類がある。

##### A（E052、E146、E152）

前段階から引き続き認められるものであるが、前段階Aに比べ口頸部は緩やかに外反して開き、端部の肥厚も若干弱くなる。又、体部は、球体から腰の張る算盤玉状に近い形態となり、底部の突出はほとんどみられず安定した上げ底を呈する。E146は、口径14.8cm、器高33.0cm、最大腹径21.8cm、底径6.3cmを測り、E152は、口径10.0cm、器高23.0cm前後、最大腹径15.0cm前後とやや小型に属する。器体は、外面ハケ調整後上半部にナデを加えるもの、内面ハケ調整後ナデ、施文は、前段階同様口頸部より腹部上半に至るまで櫛描直線文（単帯構成）を廻らすもの（E146）又無文のもの（E152）等々みられる。

伴出関係は、E146がM170出土で蓋A1（E150）A3（E147）、鉢B（E151）等との共伴が認められ、当段階に位置づけられる。E152は、M179より単独出土である。

##### B（E052、E053、E157）

細い筒状の頸部より口縁部は短かく屈曲して立ち上がるもの（E157）、口縁部が内湾気味にのびるもの（E052、E053）等がある。体部は、いずれも腰の張る球状を呈し、底部は、上げ底。両者共磨減が著しいが、E157外面ハケ調整あとナデが施こされ、口縁部に櫛描直線文の痕跡を留め、肩部には、直線文と波状文が交互に廻らされている。口縁部内面及び、底部外面付近に指頭圧痕。E052、E053は外面ハケ調整後口頸部に櫛描直線文の痕跡残存。E052、E053は、M032より高坏B（E055）等と伴出。又、E157は、M192より突出したぶ厚い壺底部片との出土が各々認められ当段階への位置づけがなされる。ここではE052、E053をB1、E157をB2として細分した。

しかし、B類に関しては、これまで県内においても大津市南滋賀遺跡より1点（第Ⅱ様式段階）の出土が知られているに過ぎず、その実態については不明の点が多い。南滋賀例は、外反してのびる頸部に屈折して短かく内湾気味に立ち上がる口縁部を付し、下腹部の強く張る体部に突出したぶ厚い底部を有するものである。口縁立ち上がり部外面には、櫛描波状文を廻らし肩部には直線文、頭形文等を施文する。形態、施文等の点からしても本遺跡出土例は、南滋賀例よりは明らかに後出のものと考えられる。

##### C1（E213）

M322より単独に出土したもので、細い筒状の頸部をもち、口頸部は外反、体部は算盤玉状を呈し、口頸部より体部上半に櫛描直線文をめぐらせる。

#### 無頸壺型土器（E113）

無頸壺は、1点（E113）のみ出土が知られる。球状の体部に内湾してすばまる口縁部を有し、端部は、丸味のある内傾する面を成す。口径10.7cm、器高18.6cm、最大腹径20.5cm、底径7.5cmを測る。器体外面粗いハケ調整を施こして口縁部付近にナデ、口縁部には、6～7条の目の粗い櫛状具により籬状文様の断続的な直線文を廻らす。器体内面ハケ調整後ナデ。M138出土で、突出したぶ厚い壺底部片（E114）と伴出する。

#### 高坏型土器B（E055）

口径19.8cm、坏部高5.3cm、器高11.0cm、底径12.2cmを測るもの。水平線口縁を有する浅い坏部に中央の短い柱状部よりゆるやかに広がる脚部を付す。裾端部は、上方に若干肥厚気味。口縁部下端及び裾端部上端にヘラ圧痕文を施文。又、口縁部内面には、櫛描波状文1帯を廻らす。器体内外面共ハケ調整後坏部内外面をナデにより仕上げる。脚部外面

には、櫛描直線文を施す。坏部と脚部の接合は分割成形による。本例は、M032より細頸壺B1 (E052, E053) 等との伴出が認められ当段階に位置づけられるものである。

県内においては、Ⅱ-Ⅲ様式段階に比定し得る高坏の出土は皆無であるが、守山市寺中遺跡より第Ⅰ様式(新)段階の遺構(溝SX-1)に関連した土埴内より高坏の出土が知られている。寺中例は、口径22.0cmを測り、半球碗状の深い坏部に口縁部が大きく外反して開くもので、端部にはへら圧痕文が施され、口縁部にハケ調整の痕跡を留める。脚部は、裾部を欠失しており群かではないが、中実の柱状部が残存する。寺中例は、確かにその口縁部の形態等から本遺跡例により先行すると考えられるが、それが前期に帰属するかという編年の位置づけについては、今後の資料増加と検討を待たねばならないであろう。

#### 鉢型土器

当段階の鉢には、口縁部が外反して開くC類、体、口縁部が直線的に斜上方に開くA類、又、口縁部が内反して斜上方にのびるB類に分類される。口径16.2~23.1cm、器高11.6~14.3cm、底径5.2~7.4cm、を測り、いずれも無文で、器体外面縦又は横方向の粗いハケ調整を施し、内面は、横方向のハケ調整後ナデを加える。

A (E151, E195) は、共に体・口縁部が直線的に斜上方にのびるもので、突出したぶ厚い底部を有する。口縁端部は、外傾する面を成すが、E195は、浅い凹面を呈す。色調は、E151が暗茶褐色、E195は淡褐色を呈する。E151は、M170出土で壺A1 (E150)、細頸壺A (E146) との伴出が認められ当段階に位置づけられるが、E195は、M275より単独出土。両者は、良く近似した形態を有するが、M275周辺には、Ⅲ様式の前半段階に該当する周溝墓が散在しており、その位置関係からしてM275出土と、E195は、むしろⅢ様式の前半段階に属する可能性もある。

#### B (E094, E184)

E184は、直口気味の口縁部を有し、端部は、ぶ厚く肥厚する。底部は、突出気味の上げ底を呈す。M263出土で、壺B3 (E193) との伴出が認められている。又、E094は、外傾してふんばる高台状の底部に、体、口縁部がやや外反気味に斜上方にのびるもので、端部は面を成して終わる。M110より単独出土。当段階に位置づけ得る具体的根拠を欠くが、その形態、調整等他と良く類似しており、又、M110周辺には、同時期の周溝墓が認められることなどから、大きく時間的な隔りを有することはないと推測される。

鉢Bについては、県内の出土例が乏しくその様相等は不明瞭ではあるが、奈良県唐古遺跡、大阪府池上遺跡、兵庫県田能遺跡等より形態的にやや近似した特徴を有するものが出土している。しかし、器体に施こされる粗いハケ調整は、近江の在地的特色と言えよう。

#### C2 (E221)

口径26.0cm、器高21.0cm、底径7.0cmを測る。倒鉢形の深い体部に口縁部は湾曲して外方に広がる。端部は、丸味のある面を成し、底部は、大きく安定した上げ底を呈す。口縁部内外面共横ナデ調整、器体外面粗いハケ調整後肩部にナデを施し直線文帯を施文。器体内面ナデ仕上げ。口縁部内面には、櫛(ハケ)状具による「ハ」字状の刺突文を施し、さらに円錐形の小突起を4個貼付けると共に胴部直線文帯下位にも同様の小突起が相対する4方にみられる。色調は、茶褐色を呈し、体部には煤の付着が認められることから、甕としての用途が考えられる。

前期段階鉢型土器【集成】第Ⅰ様式鉢型土器(B)の頭部下に瘤状把手を有するものがあり、本例は、その系譜を引くものと解され、前期の瘤状把手が退化して本例にみられるような小突起に形核化したと考えられる。県内でも類似品の出土は全く知られておらず、その編年の位置づけには問題があるが、本例は、一応M334より壺C1 (E219, E220) との共伴が確認されている(Ⅲ様式前半段階)。

#### 壺型土器

当段階壺型土器には、壺A (A1、A2) の出土がみとめられる。

#### A1 (E130)

横やかに外湾して開く口縁部で、口径30.0cmを測る。外面縦方向、内面横方向の粗いハケ調整を施す。M157出土で壺A2 (E136)、B1 (E128) との共伴が認められる。

#### A2 (E134、E155)

口縁部が外湾して開くもの (E134) と「く」字状に鋭く屈曲して広がるもの (E155) がある。E155は、体下部を欠失しているがおそらく前段階と同じく胴の張らない倒錐形の体部を有するものと考えられる。E134口縁部は、丸味があり端面斜方向のハケ調整後ナデを加える。器体外面縦方向、内面は横方向の粗いハケ調整を施し、口縁部内面には波状文が廻る。又、E155は、口縁部を折り返して器壁はぶ厚く、端面は面を成し、ハケ具による丘状文を施文、器体外面縦方向、内面横方向の粗いハケ調整を施し口縁部内面には波状のハケ調整を交える。胴部外面にはハケ又は櫛 (5条単位) による直線文2帯と波状文1帯を廻らす。

前段階壺A2 (E092) とその形態や調整、又口縁部内外面の加飾等にほとんど差異はみられないが、胴部に文帯帯が認められることは注意される。E134については、M156より、壺A2 (E136)、B1 (E128) と伴出するが、E155については、M191より単独出土の為、その編年の位置づけには若干問題を残す。

### (3) 第三様式 (前半) 段階

従来より、当地方における第三様式併行段階土器については、回線文の有無を指標とした畿内地域の編年観の枠組の中で、努めて理解されるべく努力が払われてきていたが、実際には、良好な資料に恵まれなかったこともあり、今日に至ってもその推移状況を明確におさえることができないばかりか、さらには「地域的」サイドでの矛盾を抱えつつこれまで極めて曖昧に処理されてきたと言える。

しかしながら、近年、近畿内部においても資料の増大に従って、旧来からの「唐古編年」に導かれてきた編年作業及び様式編年観に対し、種々の疑問と矛盾点が露見する中で、特にⅢ-Ⅳ様式段階は、メルクマールと目されてきた回線文に小地域間による著しい格差が認められることなどから、近時、最も見直しの必要な部分として注目されてきている。本遺跡出土Ⅲ-Ⅳ様式段階土器を通観すると、むしろ畿内及び伊勢湾沿岸地域との共通性も多分に認め得るもの、その型式構造や、技術的諸特徴等には明らかに地域色として捉え得る要素が顕在しており、従来から偏重的とも言える畿内編年一時的な一への容易な適合化は、かえって混迷を深くするものである。今後は、さらに「地域的」レベルでの掘り下げが必要であり、型式構造及び技術的諸特徴等の総合的な分析と検討より「地域的小様式」としてのあり方を明確化した上で、畿内諸様式との整合化を計っていく必要があると思われる。

本遺跡第三様式段階土器は、主にB、C地区周溝墓群より検出されたが、当地区における遺物の欠失又は流出は極めて著しく、共伴関係も希薄なこともあり、先後関係等は明らかにできなかった。然しながら、回線文は全く認められず、前段階に引き続き櫛描文のみによって器面の装飾がなされており、又その形態的特徴からも、ほぼ前半頃に位置づけ得るものが多いと考えられる。

当段階を特徴づけるものとしては、畿内に一般的な壺型土器A1、在地色の強いC1、又尾張の貝田町式相壺B3、「近江型」壺B等があげられ、前段階同様他地域の影響が多分に認められるが、全体的には地域色が強まる傾向にあると言える。

技術的諸特徴等には明らかに地域色として捉え得る要素が顕在しており、従来から偏重的とも言える畿内編年一時的な一への容易な適合化は、かえって混迷を深くするものである。

器種は、壺型土器A (A1, A4, A5)、B (B1)、C (C1, C2)、D、H (H1)、細頸壺型土器A、B (B2, B3)、C (C1, C2, C3)、鉢型土器C (C1, C2)、甕型土器A (A1, A2)、B、(B1) 等がある。

#### 壺型土器

壺A 口頸部が外湾して大きく広がるもので形態によりA1, A4, A5に分類される。

##### A1 (E091, E117, E192)

第Ⅱ様式段階からの系譜を有する畿内のな壺型土器で口径20.0~26.5cm、器高36.4~54.0cm、最大腹径24.6~37.5cm、底径6.3~8.2cmを測る。外湾して大きく広がる口頸部で、端部は下方又は外下方に著しく拡張し幅広い端面を有する。端面は、横ナデ後部描波状文を施文。体部は、下腹部又は腹部中位が強く張る形状を呈し、底部はいずれも安定した上げ底を有す。器体外面ハケ調整後上半部にナデ。E091、E117腹部には横方向のヘラミガキが加えられる。内面ハケ調整後ナデ。施文は、前段階に引き継ぎ櫛描直線文を主体とするが、E091、E192類、腹部文様帯は直線文と波状文をほぼ交互に廻らし、E117腹部には、連弧文(4~5連)を施文する。E117は、口縁部内面に櫛描縦線文(三連)や2個1対の円錐形瘤状突起を4方に貼付る。又外面頸部屈曲部には、断面三角形刻目凸帯を2帯貼り廻らし、さらに下帯には棒状浮文10本を加える装飾豊かな大型の壺である。形態又頸部の断面三角形凸帯等播磨、摂津地域等との関連性が窺えるが、口縁部内面の瘤状突起等は、当地方及び伊勢湾地域等にみられる特徴的装飾法である。E091は、M108出土で、壺C1 (E092) と相伴。E117は、M143出土、壺A1 (E121) との相伴が認められるが、E192は、M273より単独出土。

果内では、大津市南滋賀遺跡、蒲生郡竜王町堤ヶ谷遺跡等が当該階に比定されており、各々壺A1類の出土が知られる。南滋賀出土例(6、7、8)は、肩の張る算盤玉状の体部に、外湾して開く口頸部を有し、端部には、肥厚及至若干下方への拡張が認められる。端部には櫛描波状文又はヘラ圧痕文(上・下端)を施文、口縁部内面に瘤状突起を貼付るものもある。(8)頸・腹部の文様帯には、直線文、擬流水文等がみられるが、さらに直線文上に櫛描縦線文を加飾する。器体外面ハケ調整後下半部にヘラミガキ、内面ハケ調整後ナデを加える。堤ヶ谷例は、口縁部片のみで全容を知り得るものはないが、いずれも端部は、肥厚乃至若干下方への拡張がみられ、南滋賀例同様櫛描波状文又はヘラ圧痕文等を施文する。又、口縁部内面には、波状文(11)、2個1対の瘤状突起(10)がみられる。(11)頸部外面には、櫛描直線文、波状文が廻る。南滋賀例、堤ヶ谷例共に、本遺跡出土壺A1類と比較し、端部の拡張が弱く又施文においても古い要素が認められるなど時間的に若干先行するものと考えられる。

##### A4 (E189)

下ぶくれの体部に、緩やかに広がる口頸部を有す。底部は、突出気味の上げ底。内外面共磨減が著しいが、外面肩部に櫛描直線文、波状文の痕跡を残す。M266より単独出土。

##### A5 (E125, E246)

球状の体部よりなだらかにすばまり口縁部は外反して開くもの。端部は丸味を有するもの(E125)と面を成すもの(E246)があるが、無文で横ナデが施こされる。底部は、大きく突出したぶ厚い底部を有する。器体外面は、磨減が著しく詳らかではないがハケ調整が施こされ、一部ナデが加えられる。内面ハケ調整後ナデ。E125はM152より鉢C1 (E126) と相伴するが、M350出土のE246は壺体部(E247)と伴出其位置づけは難しいが、その周辺にⅢ様式段階の周溝墓群が集中していることから、ほぼ同時期が当てられると考えるが、E125は、突出したぶ厚い底部を有することから、Ⅱ様式段階に遡る可能性がある。

#### 壺B

筒状の頸部より口縁部が外反して開くもので、第Ⅱ様式段階から継続して認められる下ぶくれの体部を有する。B1

がある。

#### B 1 (E062)

Ⅱ様式段階B 1と形態等にほとんど差異は認められないが、口縁部は巻き込むように広がり、端部外面には、縦位の櫛状突起を整然と廻らす。器体外面磨減が著しいが、体部にハケ調整痕が認められ、口頸部には、複帯構成の直線文帯を有する。内面ナデ仕上げ。本例は、M052より貝田町式細頸壺B 3 (E063)、鉢A (E064) 等との伴出が認められ当該階に位置づけられる。

しかし、壺B 1については、Ⅱ様式段階で述べたように、県内ではこれまでほとんどその出土が知られておらず、又、本遺跡においてもⅡ様式後半～Ⅲ様式段階の各段階で1～2個程度とその出土量は、極めて少数である。その編年的位置づけに対しては共伴関係のみに準拠した不確かなものであり、又、系譜関係についても明らかにし得なかったが、先述の通りその形態的特徴並びに施文等には伊勢地域にみられるものとの若干の類似性が認められる。

#### 壺C

口縁部が屈曲して短かく立ち上がる「受口状」を呈するもので、形態によりC 1、C 2に分類される。

#### C 1 (E042、E092、E219、E220、E227、E231、E240、E259、E271)

口径12.0～15.3cm、器高29.5～34.6cm、最大腹径22.2～25.8cm、底径5.6～6.5cmを測る壺で、当該階では、16個体と壺型土器の70%と高い比率を占めている。下腹部の強く張る下ぶくれの体部よりなだらかにすばまり、筒状の頸部より屈曲して短かく直上又は外反気味に立ち上がる口縁部を有する。口縁端部は、内方に肥厚し面を成すものと、そのまま丸味のある面をなして終わるものがある。又、体部は、下腹部が強く張り出し腰を成すもの(E042、E219、E240、E271)、丸味を有するもの(E231)など若干の相違がみられるが、全体的なプロポーシオン等は良く共通する。器体外面は、口縁部に横方向・以下腹方向の粗いハケ調整が施され、後、口縁部に横ナデを加えるもの(E220、E231、E240、E271)、さらに櫛状波状文を廻らすもの(E042、E219)がある。底部と腹部の接合付近には指頭圧痕や二次調整の横方向のハケ目を認めるものが多い。又、口頸部外面には、一様に櫛状直線文帯(複帯構成)が認められ、さらにその下に波状文一帯を添えるものもある(E219、E240)。器体内面ハケ調整後ナデ。

壺C 1は、壺A 1、壺B 1、鉢C、細頸壺A、B (B 2、B 3)、C (C 1、C 2)、壺A (A 1、A 2)、B 1等との共伴が認められ当該階に位置づけられる。

壺C 1は、Ⅲ様式～Ⅳ様式段階まで継続して認められるが、特に当該階(前半頃)に集中している。本遺跡においてこれ程多量の検出が知られるにも関わらず、県内ではこれまで守山市金ヶ森東遺跡・高島郡新旭町針江南遺跡より各1点が報じられているに過ぎない。両遺跡出土例共、器体外面ハケ調整、口縁立ち上がり部外面横ナデ調整後櫛状波状文を廻らし、口頸部には櫛状直線文帯、最下段に波状文を一帯施文。体部は、丸味のある下ぶくれを呈する。金ヶ森東出土例は、溝SD-3の溝底出土。又、針江南出土例は、包含層より出土したもので、両者共、共伴遺物等については明らかでないが、その形態等からおよそⅢ様式の後半頃に位置づけ得ると考えられる。

受口状口縁壺については、すでに『集成』第Ⅲ様式壺型土器Aに大阪府東部の特徴的な形態として示唆させているものであり、又、近年では、大阪府八尾市恩智遺跡出土資料により受口状口縁壺がⅡ様式段階にまで遡り得ることが判明している。

一方、東海地方においては、尾張の貝田町式段階(畿内第Ⅴ様式併行)に口縁部が屈折して立ち上がる特徴的な細頸壺が盛行し、伊勢、伊賀、美濃等近江の隣接地域にまで強い影響力をもって波及している。

むしろ近江においても貝田町式細頸壺が多数検出されており、当期における伊勢湾(西岸)地域との交流関係を物語るものであり、壺C 1にしても、おそらく「受口化」という東海地域における傾向性の中で捉え得ると推測される。し

かしながら、そのプロポーションや調整、施文等の諸特徴については、いわゆる貝田町式特有の精巧さとは無縁のものであり、むしろ本遺跡第Ⅱ様式段階壺B1の諸特徴を継承しつつ、口縁部が受口化したものと考えられるのである。

#### C2 (E043, E058)

口径7.9cm前後、器高19.4cm前後、最大腹径14.5cm前後、底径4.4cm前後を測る小型壺。胴又は下腹部の張る体部に頸部は緩やかに屈曲し内湾気味に立ち上がる口縁部を有する。E043端部は、内傾する面をなす。両者共器体外面ハケ調整を施すが、E043は口頸部にナデ。又、E058は、ナデ後下腹部に不定方向の細かいヘラミガキを施す。いずれも口縁部外面に櫛描波条文を施文。頸部より肩部にかけ直線文、波状文、扇形文等を廻らす。器体内面ハケ調整後上半ナデ。E058は、M035より単独出土。底部打欠。E043はM020出土で壺C1 (E042)、壺D (E044)との共伴が認められる。

#### 壺D (E044, E233)

球状又は、下腹部の強く張る体部に「く」字状に緩やかに外反して開く口縁部を有する。E044は、口縁部下に2個1対の小孔を穿つ。器体外面粗いハケ調整、内面ナデ。E233は、器体外面に縦方向のヘラミガキ、内面ナデ仕上げ。E044はM020より壺C1 (E042)、C2 (E043)との伴出が認められ、E233は、M342より壺C1 (E231) 細頸壺B (E232)との伴出が各々認められるものである。

#### 壺H

##### H1 (E253)

外傾しつつ直立する口頸部、体部は欠失しているが、強くふくらむ球状を呈するとみられる。M363より壺B1 (E254)と伴出した。

壺H1は、C1と同じく、在地色の濃厚な器種で、粗いハケ調整の多用も、近江の地域色を示すものであろう。ただしその盛行期はⅢ-Ⅳ様式段階で、本例は初期的なものか。

#### 細頸壺型土器

当該段階細頸壺には、A、B (B2、B3)、C (C1、C2、C3) 等がある。

##### A (E123, E152, E197, E241)

澗斗状に外反してのびる口頸部で、体部はいずれもその大半を欠失しており形状不明。口縁端部は、平坦又は外傾する面を成し、前段階まで顕著にみられた内方への肥厚は認められない。器体外面ハケ調整後ナデ。口頸部又は頸部上半から上腹部にかけ櫛描直線文(単帯)を廻らす。器体内面ハケ調整後ナデ。E123はM154より細頸壺C1 (E122)、壺A1 (E124) 等と伴出。E152はM179より単独出土。E197はM276より壺底部 (E196) と伴出。E241はM349出土で壺C1 (E240)、壺A2 (E242) と伴出。

県内では、これまで当該段階に比定し得る細頸壺Aの出土が、ほとんど知られておらず、その実態は、明らかに把握されていなかったが、本遺跡においてⅡ様式段階～Ⅲ様式段階まで若干の形態変化を伴いながらも、畿内通有の細頸壺Aは、確実に存在することが確かめられた。【集成】第Ⅲ様式細頸壺型土器掲載No.112 (大阪・船橋)、奈良県唐古遺跡北砂出土332等に良く近似している。

##### B2 (E214, E232, 293)

前段階から引き続きみられるもので、下腹部の張る算盤玉状の体部に、頸部は緩やかに外湾して開き、口縁部は、屈折して短く内反するものである。口径8.4cm、器高23.5cm、最高腹径18.3cm、底径4.8cmを測る。器体外面ハケ調整後上半部にナデ。口縁立ち上がり部外面には櫛描波状文(2条×2連)を廻らし、口頸部より肩部にかけて、直線文(複帯)を施文しその下位には口縁部と同一施文具による波条文1帯を廻らす (E232)。又、肩部直線文帯上には、櫛状具による花卉線の連続文を描く (E232)、頸部屈曲部には、低い櫛状痕文凸帯2帯を貼り付る。器体内面ハケ調整後上半ナデ。

E232はM343出土で壺C1 (E231)、壺D (E233) 等との共存が認められる。E214はM324より、E293はM404より単独出土。県内では、草津市下物遺跡<sup>(註30)</sup>、大津市南滋賀遺跡等に出土例があり、形態等良く類似する。調整、施文等は明らかでないが(筆者は実見していない)、単帯構成の櫛溝直線文、波状文を交互に、又は複帯構成の直線文等を有す。上記の類例については、「集成」琵琶湖地方第Ⅲ様式細頸壺型土器に掲げられているものであるが、本遺跡例共に前段階B類の継承的要素が強い。むしろ前述のように東海地域との関連性は充分に考えられるものではあるが、当該階で新たに認められる貝田町式B3類とは、調整法や文様構成の点で相違が認められる。

### B3 (E056、E059、E063、E069)

B3類は、尾張の貝田町式細頸壺の特徴を有するものである。全て色調は灰褐色を呈しており、貝田町式特有の黒漆色のものは検出されていない。

細い筒状の頸部に口縁部は外反して開き上端において内折して短かく立ち上がるものと、そのまま外反して開くものがみられる(C類に分類)。体部は、算盤玉状乃至下腹部の張る下ぶくれを呈し、上げ底気味の底部を有する。口径6.5cm、器高19.5~25.0cm、最大腹径16.3~17.7cm、底径4.2~6.0cmを測る。器体外面いずれも磨減が著しく調整等詳かではないが、ハケ調整後ナデにより平滑に仕上げるものが認められる。口頸部外面には、一様に複帯構成の直線文帯を有しその最下段に波状文1帯を廻らすもの(E063)もみられる。上腹部には一定の間隔において直線文帯(2~3帯)の複帯、又は単帯を廻らし、さらに直線文帯上には縦線文を付加するもの(E059)扇形文による擬流水文(E063)を成すものがある。E069上腹部には羽状列点を施文。E059、体下部には焼成後の穿孔がみられる。各々、形態、施文等細部に若干の違いが認められ、或いは時期差(貝田町(古)、(新))を有するものがあると考えられるが、大半が単独出土の為明らかでない。尾張の貝田町式と比べプローション等良く類似するが、若干頸部が太く、又調整、施文等の技法面においては、貝田町式特有の繊細さに加え、直線文帯上の加飾にも粗雑さが窺われ、さらに調整においては、本遺跡例のほとんどがハケ調整後ナデ又は、粗いヘラミガキで仕上げられており、貝田町式特有の精緻なヘラ研磨はほとんどみられない。又、黒漆色のものは皆無で、全て当地において模倣して制作されたことは明らかであるが、それに準拠しても貝田町式の精巧さは、充分に生かされておらず、施文、調整等からも、間接的な技法の伝播であったことは推測される。

県内でも貝田町式細頸壺の出土は比較的多く知られており、大津市南滋賀遺跡、長浜市鴨田遺跡、竜王町堤ヶ谷遺跡等の諸遺跡の他、山城深草遺跡においても認められている。特に大津市南滋賀遺跡で、搬入品と考えられる黒漆色のものが検出されており、他の模倣品にしてもその施文等には、貝田町式特有の精巧さが窺える。E063は、M052出土で、壺B1 (E062)、鉢C1 (E064) と伴出が認められている。E056はM033、F059はM036より単独出土した。

### C1 (E122)

形態・手法とも、B3の貝田町式に準ずるが、口縁部が受口状にならず、そのまま外湾するものをC1として区別した。E122には器体外面をヘラミガキ(ただし粗い)で平滑に仕上げている。E122はM150より細頸壺A (E123) や壺A1 (E124) と伴出した。

### C2 (E272)

下腹部の張る体部より頸部は、外湾気味にのび、口縁部は屈折して短かく上方に立ち上がる。口径9.2cm、器高22.5cm、(図上復元)、最大腹径17.0cm、底径5.4cmを測る。口縁立ち上がり部には、櫛溝波状文を廻らし、2本1組の棒状浮文を4方に貼付る。器体外面ハケ調整後ヘラミガキ。本例は、M387出土で壺C1 (E271) との伴出が認められ当該階に位置づけられる。県内では、長浜市鴨田遺跡、竜王町堤ヶ谷遺跡、能登川町宮の前遺跡、彦根市馬場遺跡等より類似品の出土が知られ、Ⅲ様式~Ⅳ様式段階に位置づけられる。C2類は、山城深草遺跡においても認められるが、特に近江、伊賀、伊勢に分布が知られる特徴的な細頸壺である。

### C3 (E162)

C類のうち体部が強く張るものをC3として区別した。M200より単独出土。口縁端面にヘラ圧痕文をめぐらし、器体外面ヘラミガキ、口縁部と体部上半に多象の帯描直線文帯をめぐらす。

#### 鉢型土器

当段階で認められる鉢は、すべて口縁部が外反して開くC類で、形態によりC1、C2に分類される。

### C1 (E064, E126, E190, E191)

口径18.6cm、器高12.9cm、底径17cm前後を測る。半球碗状の体部に口縁部は外反又は外湾気味に広がるもの、底部は、大きく安定した上げ底を呈す。口縁端部は、面を成して終わるもの(E064)と若干上方に拡張がはかれるもの(E126)があり、端面にはヘラ圧痕文(E064)、直線文(ハケ?E126)等を有するものがある。器体外面粗いハケ調整を施すが、E064内面ナデ仕上げ。E126口縁部内面に横方向のハケ調整。体部ナデ。体下部焼成後穿孔。又、E191は、口縁部上半及び体下部を欠失しており全容は明らかではないが、体部外面粗いハケ調整後同一工具による波状文が施こされており、内面にも横方向のハケ調整に波状のハケ調整を交えるもので、当期における在地的変型土器と同様の特色を備えている。色調は、暗茶褐色を呈し、石粒の多い胎土である。E064はM052より壺B1(E062)、細頸壺B3(E063)などと伴出し、E126もM152から壺A5(E125)と伴出し、E290、E191はM267より出土。

### C2 (E141)

口径27.6cm、器高19.9cm、底径6.9cmの深い鉢、口縁部は外湾気味に広がり、口縁端部は面をなしておわる。底部は安定した上げ底で、外面体部下半に細かいヘラミガキ、口縁部外面に指頭圧痕、口縁部内面にハケ状見による「X」字状の刺穴をめぐらす。M167より出土。壺口縁や壺底部が伴出(E138~E140、E142)。

#### 甕形土器

当段階甕形土器には、第Ⅱ様式段階から認められる「大和型」甕A類(A1、A2)と口縁部が直立して受口状を呈するいわゆる「近江型」甕B類(B1)の出土が知られる。

#### 甕A

### A1 (E121, E124, E163)

やや胴の膨らみ倒鐘形の体部に、口縁部は外反(E121、E124)又は外湾(E163)して広がる。E163は完形で、口径23.5cm、器高27.7cm、最大腹径22.2cm、底径6.4cmを測る。いずれも口縁端部は丸味があり、端面は、横ナデ後ヘラ圧痕文を廻らす。E121、E163は器体外面縦方向、内面口縁部に横方向の粗いハケ調整を施こす甕A1としては一般的な調整法を有するが、E124は、外面にわずかハケ調整の痕跡をとどめるのみで、前面ナデにより整形されている。内面も同様にナデ仕上げ。外面体部には、粘土継接合痕が明瞭に残存する。

E124は、M154より細頸壺A(E123)、との伴出が認められる。他、E163は、M222より単独出土、E121は、M143より壺A1(E117)との共伴が認められ、E163体部外面に保付着。

### A2 (E080, E144, E242)

前段階A2と大きな変化はみられないが、胴部に若干膨らみが認められ、腹径が口径を上回るものがある(E242)。口縁部は、緩やかに外湾して広がり、端部外面には横ナデを施こす。無紋。器体外面縦方向、口縁部内面には横方向の粗いハケ調整を施こすが、外面腹部には直線文帯を、又口縁部内面には、波状のハケ調整を交えるなど在地的加飾法を有する。E080は、M065より単独出土、E242は、M349より壺C1(E240)、細頸壺A(E241)等との共伴が認められ、いずれも胴部に膨らみがみられることから当段階(前半)に位置づけられる。

甕A2は、第Ⅱ様式段階より県内諸遺跡において顕著に認められるが、伴出関係等より第Ⅲ様式段階に比定し得るも

のは少なく、竜王町堤ヶ谷遺跡、能登川町宮の前遺跡出土例があげられるに過ぎない。堤ヶ谷例(13, 14)は、体部より緩やかに外湾して開く口縁部で、端部外面にヘラ圧痕文、口縁部内面には、波状のハケ調整を施す。器体外面縦方向の粗いハケ調整後胴部に断続的な直線文(13)、直線文(14)等を施文。両者共体部の大半を欠失するが(14)腹部にはやや膨らみがみられる。宮の前遺跡例はS X 9(土坑)一括資料で、細頸壺C 2、1点、甕A 2、3点が出土している。甕は、胴の張る倒鐘形の体部に口縁部が「く」字状に緩く外反して開くものと緩やかに外湾して開くものがあり、いずれも器体外面粗いハケ調整後胴部に直線文帯を施文。内面口頸部には波状を交えたハケ調整を施す。口縁端部は丸味を有し、横ナデで無文のものと、比較的大きな指頭圧痕を4方に配し、ヘラ圧痕文を廻らしたものがある。宮の前遺跡出土例については、その形態、施文等から本遺跡例や堤ヶ谷遺跡例に先行するものと考えられるが、県下においては、今日に至っても良好な一括資料を見出せない為、第Ⅱ様式(前半)段階～第Ⅲ様式段階の区分は言うに及ばず、当該段階における形態、施文等の変移状況も明らかに把握されていないのが実状である。

#### 甕B

##### B 1 (E 254)

受口状口縁を有する「近江型」甕である。口径13.2cmを測る小型の甕で、屈曲してやや外反気味に直立する口縁部で、対面する4方が低い波状を呈する。口縁部外面には、断続的な横方向のハケ調整、頸部以下縦方向のハケ調整を施し、胴部には簾状文様の断続的な直線文2帯を廻らす。又、口縁部内面にも同様の施文がみられる。体部内面ナデ。口縁部下に2ヶ1対の小孔を穿つ。色調は、暗茶褐色を呈し、外面には煤片着。

本例は、M363よりH 1 (E 253) との共伴が認められる。

#### (4) Ⅲ-Ⅳ様式段階

「集成」以降、畿内第Ⅲ様式(新)段階・第Ⅳ様式段階は、櫛描文の消長及び回線文出現・発達のプロセスを指標として区分されてきたことは周知の通りであるが、近年、櫛描文のみならず回線文出現・発達の過程には、器種・形態はもとより地域間によっても大きな格差が認められることから畿内諸地域においてもその分隴には著しい混乱が顕現していると言える。しかし、ここ数年来、このような状況を打破すべく積極的な方法論の修正と提言が畿内の研究者によって試行されており、とりわけ、森岡秀人の提唱を受けた森井貞雄の労作は、今後の各地における「地域的小様式」のあり方に重大な示唆を与えるものであり、又、Ⅲ-Ⅳ様式の混迷を打開すべき一つの手がかりとなり得る。

本遺跡では、先述の通り各周溝墓における伴出遺物の些少からセット器種及び施文状況等による総合的判断に即応した分離は難しく、一応回線分を有する土器とそれらとの共伴関係が確認される土器群については、全てⅢ-Ⅳ様式段階の範疇に収めた。(なお上述の通り、Ⅲ様式(前半)段階との間には、洪水による大きな断絶があり明確に分離できる。)

しかし又、県内においては、これまで大津市滋賀里遺跡11、12号方形周溝墓、堅田市真野春日山遺跡、野洲町五之里遺跡丁-5地区-4号方形周溝墓等と畿内第Ⅳ様式併行段階に比定されているものが若干知られていたに過ぎなかったが、最近の調査よりさらに彦根市馬場遺跡、今津町北仰・桂遺跡、守山市下之郷遺跡、同吉身西遺跡等が加えられ、その出土資料から次第にⅣ様式段階の土器様相が明らかになれつつある。本遺跡Ⅲ-Ⅳ様式段階では、上記遺跡出土土器と良く近似したものが多く認められることから、ほぼⅣ様式段階に近い時期を当てることができる。中でも特にⅠ類は、滋賀里遺跡11、12号方形周溝墓を始め、守山市下之郷遺跡などより出土が認められており、又、甕B 2の一部(E 261、E 263)には、形態、施文等上記遺跡出土例との類似性をみることができ、本書では、特にこれらの伴出が認められる遺物に関しては、当該段階より除外して、第Ⅳ様式段階として別掲する。

当段階の傾向としては、特に畿内の影響が強まり、器種構成も多様となる。特に壺型土器では、畿内に一般的な型式(A1、E、F、G～G3)が多量に検出されており、又、高坏型土器(A、B)の増加、水差型土器の出現などが認められる。紋様は、畿内通有の壺型土器や細頸壺、水差、高坏(A)等の口縁部には、一般に凹線文が施され、又、櫛目文は、当段階に至って最も盛行するが、その種類は、ほぼ直線文、波状文、列点文の三種に限られ、かつ中期前半の「描かれる紋様」から回転台に依存したより機械的な紋様と変質している。一方、在地型土器(壺C1、G4、H1、鉢A、甕B、C)においては、前段階と同じく粗いハケ調整を特徴とし、紋様も目の粗い櫛(又はハケ)による粗雑な直線文、波状文、列点文、弧状文等を施すが、凹線文は、全く認められない。

当段階土器は、主にA、D地区周溝墓群において認められ、器種にはA1、C(C1)、D、E(E1、E2)、F(F1)、G(G1、G2、G3、G4)、H1、細頸壺B(B2、B3)、C(C3)、D、水差型土器A、B、高坏A、B、鉢、C(C1)、D、甕A(A1、A2、A3)、B(B2-I、B2-II)等がある。

#### 壺型土器

##### 壺A1(E203、E274)

外湾して大きく広がる口頸部で、端部下端を外下方に著しく拡張する。端面横ナデ後部描波状文1帯を施文。口縁部内面には、羽状列点文(櫛)を施し、瘤状突起を等間隔に貼り付ける(E274)。口頸部外面ハケ調整、頸部位には、3条の断面三角形凸帯を貼り付け、その間には櫛描波状文を施す。内面ナデ。

E274は、M392出土で壺E1(E275)、壺G2(E276)、高坏A1(E278)等との共伴が認められる。E203はM291より壺E1(E204)などと共伴した。

##### 壺C

筒状又は外湾気味にのびる頸部に屈曲して短く立ち上がる口縁部を有するもの。

##### 壺C1(E045、E046)

筒状の頸部に屈折して短く立ち上がる口縁部を有し、体部は、下腹部の張る下ぶくれを呈するもの。ただしやや丸味をもつ前段階からほとんど変化はみられず、形態や手法などの踏襲が認められる。口径12.5cm、器高30cm、最大腹径22.5cm、底径6.2cmを測る。口縁立ち上がり部外面ハケ調整後ナデ。器体外面斜方向ハケ調整、下半横位のハケ調整で複帯構成の直線文帯もたない。いずれもM21より出土し壺B1(E048)と伴出している。

##### 壺D(E256)

腰の強く張る球状の体部に、口縁部は外反して開く。底部は、やや突出気味の上げ底を呈す。口径14.8cm、器高16.2cm、最大腹径17.4cm、底径5.0cmを測るもの。口縁部は、わずかに上方に肥厚気味で端面横ナデ調整を施す。器体内外面共ハケ調整。E256は、M366より壺G(E258)鉢C1(E262)、甕B2(E261)等との共伴が認められる。

##### 壺E1(E018、E028、E204、E204)

外湾気味に開く口縁部で、端部上、下端をわずかに拡張し、2、3条の細い凹線文を施すもの(E018)と、上縁を若干肥厚させて列点文を施すもの(E028)がある。体部の形状は、下腹部の張る下ぶくれと呈するものが多く、E028は、上腹部の膨らむほぼ球状を成す。口径15～17cm前後、器高22～25cm前後、最大腹径21～24cm前後、底径5.5cm前後を測る壺で、『集成』第Ⅲ様式壺Cに相当し、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式段階では一般的に見られるものである。

(E018)は、口縁部に細い凹線文を施すが、さらに円形浮文を付加する。又、口縁部内面に列点文を施文。器体外面ハケ調整後ナデを加え、上腹部には直線文、列点文、波状文を組み合わせ、最下段を列点文で締めくくる。内面ハケ調整後ナデ。E028は、端部がわずかに肥厚気味で、凹線文はみられず、横ナデ後下部に列点文を施し、又口縁部内面にも同様の列点文を施文。器体外面ハケ調整後上半ナデ。上腹部には、櫛目直線文、列点文、斜格文(ヘラ)等を施

文し、最下段に被状文を一帯廻らせる。内面ハケ調整後ナデ。

E018はM009より単独の出土。E028はM013より壺K (E029)、細頸壺D (E030) と伴出している。

## E2 (E010)

下腹部の大きく膨らむ体部に外湾して開く口縁部を有するが、外端面は、やや凸状を呈し、羽状列点文を廻らすもの。器体外面ハケ調整後口頸部にナデ、下腹部には横方向のヘラミガキを施す。上腹部は、櫛描縦線文により区画され、被状文、直線文等を施文。器体内面には、幅3cm前後の板状の小口による不定方向のケズリが行われている。本遺跡Ⅲ-Ⅳ様式段階において内面のヘラケズリが認められるのはE010のみである。内面ヘラケズリ技法は、周知のようにⅢ-Ⅳ様式段階に瀬戸内沿岸地域において発生をみた成形法であるが、その技法は、早くに畿内にも伝播し、兵庫県田能遺跡出土の壺底部内面に認められる他、特に高坪脚部内面、壺、甕の外面等に多用されている。E010の内面にみられるヘラケズリ技法は、明らかに瀬戸内沿岸地域からの影響と解されるが、端部の形態、調整、施文等、他と様相を異にしており、当地産かあるいは搬入品か判然としない。胎土は、1~2mm大の石粒を少量含有し、色調は赤褐色を呈す。

E010はM005出土で壺E1 (009)、壺J (E011) との伴出が認められる。壺Eは、畿内第Ⅲ様式(新)段階からⅣ様式段階に継続して認められる壺型土器であり、その分離は詳かでないが、共存関係より、ほぼ第Ⅳ様式に近い時期を当て得る。

## 壺F1 (E007, E210)

E007は筒状の頸部に外湾して開く口縁部を有し、端部は、上方に拡張。体部は、縦長でほぼ球状を呈しており、口径14.0cm、器高28.9cm、最大腹径23.5cm、底径6.0cmを測る壺。安定した平底の底部を有するが、器壁は薄く、焼成後穿孔。器体外面粗いハケ調整を施し、端部外面横ナデ調整。胴部にはナデ後ハケ庄痕文(7条単位)を2帯廻らす。器体内面ハケ調整後口頸部及び底部付近にナデを行う。【集成】第Ⅲ様式壺型土器D類に類似するものである。E007は、M004より壺G2 (E006)、高坪B (E008) 等との共存が認められ、当該段階に位置づけられるが、本遺跡第Ⅳ様式段階壺F1 (E286, E309) と形態的にもほとんど差異はみられずほぼ近似した時期を当て得るであろう。

## 壺G

外湾気味に開く頸部より口縁部は曲折して上方に立ち上がるもの、体部は、算盤玉状又は、胴長で上腹部に最大腹径を有するものがある。形態によりG1~G4に分類し得る。

## G1 (E004, E115, E283, E294, E333, E356)

大半が、完形で口径16.6~25.0cm、器高40.0~56.2cm、最大腹径29.2~43.8cm、底径6.7~11.4cmを測る文高の壺。外湾気味に大きく開く頸部より口縁部は屈折して内傾又は内湾気味に立ち上がり、端部は、内方に著しく肥厚するものがある (E283, E294)。体部は、胴長で上腹部に最大腹径を有するもの (E294, E356) とほぼ算盤玉状を呈するもの (E004, E283) 等がみられ、底部は、いずれも安定した平底乃至上げ底を呈す。

口縁部外面には、3~4条の明瞭な回線文を廻らす。さらに棒状浮文 (E004, E115)、刻目 (E294)、ヘラ描直線文 (E283) 等で加飾する。器体外面ハケ調整、後 (E356) を除いて上半部にナデを施し、又 (E283) 下半部には斜方向のヘラミガキが認められる。全て装飾性豊かな壺で、頸部上半より上腹部に至るまで櫛描直線文と被状文を交互に廻らす。又、E004頸部には、4条の断面三角形凸帯を貼り付ける。しかし、E356は、他と比べ調整、施文等にやや粗さがみられ、器体外面ハケ調整後全くナデは行われず、口頸部より上腹部にかけて櫛描直線文 (5条単位) を8帯廻らし、頸部屈曲部にはハケ庄痕文を施文する。器体内面は、いずれも外面と同一の粗いハケ調整が施されており、後、体部 (E356) 又はほぼ全面 (E283) をナデにより仕上げられるものがある。

E283はM398出土で甕B2 (E284) と伴出。E294はM405出土で壺H1 (E298)、水差型土器 (E299)、甕A1 (E

300)等と伴出。E356は、M435より水差し型土器(E357)と、E004は、M002より壺G2(E002)、ミニチュア土器(E005)との伴出が各々に認められ当該階に位置付けられる。

#### G2(E002、E003、E006、E024、E185、E194、E276、E306)

外湾して開く頸部に緩く屈曲して直上又は内反気味に幅広く立ち上がる口縁部を有する。胴長で上腹部の膨らむ体部を有し、口径19.0~25.0cm、器高48.8cm、最大腹径35.4cm、底径8.0cm前後を測る寸高の壺。

畿内及びその周辺地域において一般的にみられる通常の壺型土器で、近江においてもその出土率は高く、大津市滋賀里遺跡、長浜市鴨田遺跡、近江町長沢遺跡等において多数の出土が知られている。G2類は、加飾の著しいG1類とは異なり、無紋を常とし器体内外に施される粗いハケ調整を特徴とする。口縁部外面は、ハケ調整後横ナデを施し、3条(E006)の比較的細い凹線文もみられるが、大半は、上、下端に各1条又は上端のみたく浅い凹線文を施す。又、頸部屈曲部には、幅1.5cm~2cm前後の粗いハケ圧痕文凸帯を貼付ける。ハケ圧痕文は深く押さえるものや浅いものがみられるが、左下がりの右回転に廻らるものが一般的である。体部は、その最大腹径が上腹部に位置する卵形を呈し、やや上げ底気味の大きく安定した底部を有する。器体外面は3条/1cmの粗いハケを縦、横、斜方向等に用いて、全面を調整する。G1類のような帯指諸紋様は全く施されないが、ハケメの駆使によって装飾的效果を上げているとも考え得る。器体内面は、外面と同一のハケ原体により全面調整を施した後、主に口頸部にナデを行う。E002はナデが体部上半にまで及ぶ。

各々の同伴関係は、E002、E003は、M002出土で壺G1(E004)とE006はM004より壺F1(F007)高坏B(E008)とE024は、M011より壺H2(E023)と、E276は、M391より壺A1(E274)、高坏A1(E278)と、E306は、M407より高坏B(E308)との伴出が認められる。

#### G3(E027)

形態、手法は、G2とほとんど同じ。ただし口縁部の屈曲が鋭く「く」字で、ぶ厚いつくりとなっており、やや異質。M012よりG4(E026)と伴出。

#### G4(E026、E302)

E026は口径16.1cm、器高38.2cm、最大腹径29.6cm、底径7.4cmを測るもの、頸部より緩やかに内湾してのびる口縁部で、端部上端は、凹面をなす。体部は、中位の張る偏球状を呈し、安定した平底の底部を有する。口縁部外面には、4条の太い凹線文を廻らし、その下方にハケ原体による羽状列点文を施す。頸部屈曲部には、壺G2と同種の粗いハケ圧痕文凸帯を貼り付ける。器体外面口縁部以下には、比較的細かい斜方向のハケ調整を施し、上腹部には、5帯の帯指諸状文が廻る。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。E302は、口縁部破片で、全様は不明。

E026は、M012より壺G3(E027)との同伴が認められ当該階に位置づけられる。

畿内では、長浜市鴨田遺跡、守山市金ヶ森東遺跡等に類例が認められる。鴨田遺跡例は、口径20.5cmを測り、内湾してのびる口縁部に凹線文、列点文(ハケ)が交互に廻る。端部は、肥厚し内傾する面を成す。頸部以下欠失。金ヶ森東遺跡例は、周溝墓より出土。口径15cm弱。器高38cm弱を測り、ほぼ正形。口縁部は、やや内湾気味に外上方にのび、端部は丸く収める。体部は、胴の膨らむほぼ球状を呈する。口縁部外面には7~8条の不整の浅い凹線文が廻り、頸部屈曲部には、幅2cm前後の低いハケ圧痕文凸帯を貼り付ける。体部外面ハケ調整で、無紋。器体内面ハケ調整後ナデ。金ヶ森東例については、形態、施文等から明らかに本遺跡例よりは後出である。

また、奈良県唐古遺跡は、京都府長岡京市今里遺跡より類似品(いずれも口縁部片)の出土が知られるが口径13cm~15cm前後と、細頸壺型土器として分類されているものである。唐古遺跡出土例(441、442)は、口縁部に4~5条の細い凹線文を廻らし、以下帯指諸文又は頸部に4条の凹線文を有するもので両者共北砂地区出土。又、今里遺跡例は、

口径15cm前後で数条の凹線文と凹線文との間に列点文を配す(49, 50)。両遺跡例共に畿内第IV様式と比定されているものである。本遺跡例は、上彫出土例とその形態、施文等、良く類似が認められるが、先述のように本遺跡では、Ⅱ様式段階とⅣ様式段階の分離が不明確であるため、一応Ⅲ-Ⅳ様式段階に収めてある。

#### 壺H1 (E014, E015)

細く外反気味にのびる口頸部で、上端は弱く内折する。口径10.00cm前後を測る。体部は腹部の強く膨らむぼ球状を呈する。口縁端部は、ほぼ平坦な面をなすもの(E014)や尖り気味のもの(E015)等がある。

壺H1は、C1と同様に地的要素が濃厚であり、中期末から後期に盛行する受口壺の源流をなすものとみられる。そして器体に施される粗いハケ調整も近江の地域色と言えよう。口縁立ち上がり部には、斜方向、以下器体外面には縦、斜方向の粗いハケ調整を施し、後口頸部には若干ナデを加える。施文は、いずれも上腹部に集中してみられ、目の粗い櫛原体による器紋様で飾られている。本遺跡出土例には、頸部屈曲部に左下がりの列点文が施文され、以下櫛描直線文、波状文、弧状文等が廻り、E015肩部には、ヘラ状具による斜格文もみられる。器体内面ハケ調整後ナデ仕上げ。

E014, E015は共にM008出土で、壺D(E016)と伴出。当該階層に位置づけられる。

壺H1類は、畿内第Ⅲ様式(後半)段階~Ⅳ様式段階諸遺跡で多数認められており、八日市市内壺遺跡<sup>(E043)</sup>、守山市金ヶ森東遺跡、同下之郷遺跡、岡吉身西遺跡、大津市大伴遺跡等で検出されている他、三重県上野市西高倉遺跡<sup>(E043)</sup>、同県北切遺跡<sup>(E044)</sup>等においても類似品の出土が知られている。いずれも形態等は良く近似しており、上腹部は、本遺跡出土例にみられる如く目の粗い櫛原体による列点文、直線文、弧状文、斜格文(ヘラ)等の器紋様で加飾する。又、守山市金ヶ森東、同下之郷遺跡出土例には、口縁立ち上がり部に、山形文(ヘラ)、櫛描波状文、列点文等を施文するものがある。壺H1の上限については明らかでないが、県内ではむしろ第Ⅳ様式段階で盛行する壺型土器と考えられ、壺C1類と同じく在地的要素が強く、その粗い調整や紋様構成等は、近江固有の壺型土器B類とも良く共通する。

#### 細頸壺型土器

前段階までにみられた細頸壺を列挙すると、第Ⅱ様式段階から認められる漏斗状にのびる口頸部を有する畿内の細頸壺A、又、第Ⅱ様式後半段階において独自に又は東海地域の影響を受けた口縁端部が屈折して立ち上がるB2、Ⅲ様式段階に特徴的な尾張の貝目町式細頸壺を模倣して制作されたB3、主に近江、伊賀、伊勢の諸地域に分布が認められるC1~C3等が知られた。しかし、当該階層では、算盤玉状の体部に内湾気味にのびる口頸部を有する細頸壺D類が圧倒的に多く検出されており、他、B、C類が若干出土している。

#### B2 (E263)

細く外湾気味にのびる筒状の口頸部で、上端は、内折して短く立ち上がる。体部は、ほぼ球状を成す。口径8.6cm。器体内外面共ハケ調整後ナデを加える。口縁立ち上がり部横ナデ調整、口縁部外面に櫛描直線文(複帯)を5帯施文。又、頸部屈曲部にはヘラ圧痕文を廻らす。肩部付近は、櫛描直線文と波状文を交互に施文。

M367出土、壺C1(E259)壺B2(E266)等との伴出が認められる。本例は、前段階細頸壺B2(E232)の系譜上に位置し、体部に丸味がみられるが、口頸部に複帯構成の直線文帯を残すなど前段階からの施文法を受け継ぐ。

#### B3 (E269)

細く外湾気味にのびる筒状の頸部より、口頸部は外反して開き、上方で内折れて短く立ち上がるもの。

E269は、口径12.0cm、腹径cmを測り、体部は大きく膨らむ球状を呈すると考えられる。口縁立ち上がり部内外面に櫛描波状文をめぐらし、器体外面縦又は斜方向の粗いハケ調整を施し、上半部に櫛描直線文をめぐらし、内面下半粗いハケ調整。本例はM386より高坏A(E270)との共伴が認められる。

#### C2 (E249)

下ぶくれの体部より頸部は、外湾気味にのび、短かく立ち上がる口縁部を有する。器体外面磨減が著しく調整等不明であるが、上腹部に櫛指直線文が認められる。内面ハケ調整後ナデ。M354より単独出土。

### C3 (E295)

細い筒状の頸部より口縁部は外反して開く。体部は球状に大きく張り、頸部外面に7条単位の櫛指直線文3帯、体部上半に8条単位の櫛指直線文4帯をめぐらす。内面ハケ調整後ナデ、M405より壺G1 (E294)、水差B (E299) と伴出。

### D (E001、E012、E030、E296、E334、E337)

口径5～7cm前後、器高20～25cm前後、最大腹径12～19cm、底径5cm前後を測る。算盤玉状の体部に緩やかに内湾し、のびる口頸部を有し、端部はほぼ平坦な面をなす。いずれも形態および文様構成には、斉一性がみられるが、又、細部においては各々の若干の差異も認められ、その点についてまず口縁部にみられる凹線文の施文状況により区分すると、

#### D1 (E001、E334、E337)

いずれも器体外面ハケ調整を行い口縁部より肩部又は体部中位に至るまでナデを施す。E001体下部には、縦方向の細かいヘラミガキを認める。口縁部は、上端に浅い凹線文を一条廻らし、その下位に羽状列点文を施文、頸部には櫛指直線文を廻らし、さらに屈曲部には列点文を施文するものもある (E001、E334)。体部文様は、直線文と被状文をほぼ交互に廻らすもの (E001は5条単位の、E337は2条×2連)、又直線文帯を廻らし、その最下段に被状文1帯を施文、さらに直線文帯上には、同一施文具 (2条×2連) による縦線文を付加するものがみられる (E334)。器体内面ナデ仕上げ。頸部にはしぼり目残存。E001、E337は、各々単独出土。E334は、M422より、壺G1 (E333)、甕A1 (E335) との共伴が認められる。

#### D2 (E012、E030)

形態は、D1と同様。ただし、口縁部には4～5条の明確な凹線文を有しており、その下位には、羽状列点文を施文。頸部上半より体部中位にかけ、E012は、櫛指直線文と被状文をほぼ交互に廻らし、(3条×2連)、又、E030は、直線文のみを廻らす (3条×2連)。器体調整は、外面ハケ調整 (D1に比べハケメは細かい)、特にE030胴部は格子様に交差しており、後、両者共口頸部より肩部付近にかけてナデを加える。内面ハケ調整後ナデ仕上げ、頸部にしぼり目残存。E012はM006より単独出土。E030は、M013より壺E1 (E028)、壺K (E029) 等との共伴が、認められる。

以上、両者には凹線文の施文状況に相違がみられる他は、その形態、手法等良く類似しており、共伴関係からも特に時期差を含むか否かは判別し難しい。

細頸壺D類は、近江を始め、伊賀、伊勢、尾張等伊勢湾沿岸諸地方に広く分布が認められているが、特に高麗<sup>(注46)</sup>・朝日遺跡等でも知られるように尾張地方において多量の出土が知られている。全て形態、調整、施文等良く共通し、規格性の高い特徴的な細頸壺である。

細頸壺Dの上限については明らかでないが、おそらく畿内地方の影響を受けて発展したものと推測され、その盛行時は、畿内第IV様式併行尾張高麗期に求められるが、本遺跡では、残念ながら供出関係等から第IV様式と確定し得るものがなく、大半は、Ⅲ～IV様式段階に収められた。

### 水差型土器

本遺跡では、当段階より出現が認められるが、畿内では、大阪府瓜生堂遺跡よりⅢ様式 (古) 段階に遡るものが知られる。片口の口縁部を有し、壺型土器の如き丈高のものや (B)、又脚台を付すもの等がある (A)。

#### A (E013、E299)

腹部の張った体部にやや内湾気味にのびる片口の口縁部を有し、肩部には横位の半環状把手を貼付る。E299は、口径

8.4cm、器高23.0cm、最大腹径18.0cm、底径5.3cmを測り、器体外面ハケ調整後上腹部に若干ナデを加える。口縁部上端に浅い凹線文1条を廻らしその下方に縦位の櫛描列点文を施文、上腹部には、直線文、波状文を廻らす。器体内面ハケ調整後、体部ナデ。

E013は、口径12.8cm、器高48.5cm、最大腹径35.3cm、底径7.0cmを測る寸高の水差である。内湾気味にのびる片口の口縁部に、上腹部の張る縦長の体部を有する。口縁部外面には、8条の凹線文を廻らし、頸部屈曲部に、左下がりのハケ圧痕文を施文、上腹部にはハケ圧痕文、櫛描直線文、波状文等を廻らす。器体外面粗いハケ調整後、上半ナデ、器体内面同一原体による粗いハケ調整後、口頸部及び底部付近にナデ。体下部に焼成後穿孔。M007より単独出土の為時期等不詳。E299は、M405より壺G1(E274)、高坏B(E301)、甕A1(E300)等との伴出が認められることから明らかに当該層に位置づけられ得るが、E013は形態、又、凹線文の施文状況からむしろIV様式に帰属する可能性もある。

#### B(E357)

E357は、ほぼ算盤玉状の体部に「ハ」状に広がる脚台を有するもので、口径9.7cm、器高25.3cm、最大腹径19.4cm、脚部高5.4cm、底径10.8cmを測る。器体外面ハケ調整後上半部にナデを加え、下半部には縦方向のヘラミガキを施す。口縁部上端浅いに凹線文1条を廻らし、下方に羽状列点文を施文。頸部より体部上半かに柳櫛描直線文、列点文、波状文(7条単位)、斜格文(2条×2連)等で豊かに加飾する。脚台は、外面ハケ調整後ヘラミガキ、付根付近にヘラ櫛沈線4条を廻らす。裾端部は、若干上方に拡張し、端面横ナデ調整。器体内面ハケ調整後上半部及び脚台ナデ仕上げ。県内では、今津町弘川遺跡方形周溝墓より脚台付水差型土器の出土が知られるが、口縁部に4条の凹線文を廻らし、上腹部には、櫛描列点文を主とした文様帯がみられるなど、本遺跡出土例よりは、後出的であり、その伴出関係等からも畿内第IV様式併行の時期が当てられる。M435より壺G1(E356)、甕A2(E358)と伴出した。

#### 高坏型土器

口縁部が内湾気味に立ち上がるA類と、水平縁口縁を有するB類がある。

#### A(E270)

口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、端部は若干肥厚気味で上端は凹面を成す。端部下方に凹線を1条廻らす。坏部外面ハケ調整後上半部に横方向の細かいヘラミガキを施す。内面ハケ調整後ナデ仕上げ。脚部は、中空で筒状の柱状部より「ハ」字状に広がる裾部を付し、裾端部は若干拡張気味で面を成す。「円板充填法」により坏底部を形成。脚部外面縦方向のハケ調整、裾端部横ナデ、脚部内面はヘラズリを施す。口径34.7cm、器高23.3cm、杯部高10.1cm、底径16.0cmを測るもの。【集成】においては高坏型土器Aに分類されているものであり、県内でもⅢ-Ⅳ様式段階よりその出土は比較的多く知られている。E270はM386より細頸壺B3(E269)との伴出が認められる。

#### B(E008、E176、E301、E308、E332)

B類の出土は多い。口径13.5～22.9cm、器高17cm前後、坏部高70cm前後、底径11～13cm前後を測る。直線的に開く坏部に水平に広がる口縁部を付し、内側に1条の凸線を廻らすもので、【集成】において高坏型土器B類に分類されているものである。口縁端部は、下端をわずかに拡張するもの(E176、E301、E332)があるが、拡張と言えども概して著しいものではない。脚部は「ハ」字状に緩やかにひろがり、裾端部は若干拡張気味で面を成す。器体外面は、縦方向の粗いハケ調整を施し、口縁部及び裾端部は横ナデ調整。坏部内面は、ハケ調整を施すもの(E332)、ナデ仕上げによるもの(E301)、縦方向の細かいヘラミガキが施されるもの(E008、E308)等がある。脚部内面は、ハケ調整後ナデを施すものが多い。杯底部は「円板充填法」により成形する。E008はM004より、壺G2(E006)、壺F1(E007)と伴出。E301はM405より壺G1(E294)水差型土器B(E299)、甕A1(E300)等と、E308は、M407より、壺G2(E306)と、E332は、M421より細頸壺D(E331)との伴出が各々認められⅢ-Ⅳ様式段階に比定される。

## 鉢型土器

### C1 (E262)

半球碗状の体部に口縁部が外湾して開くもの。口径23.4cm、器高11.4cm、底径8.3cmを測る。大きく安定した底部より、体部はやや内湾気味に斜上方にのび、口縁部は緩やかに外方に開く。端部外面横ナデ。器体外面斜方向の粗いハケ調整、内面ハケ調整後ナデ。口縁部内面には、波状を交えた横方向のハケ調整が残存、色調は茶褐色を呈し、細砂を多含する胎土である。E262は、M366より壺G (E258) 甕B2 (E261) 等との共伴が認められ当該階に位置づけられる。調整、施文等には在地的特色が強い。

### D (E218)

安定した平底の底部をもち、体部はゆるやかに内湾、口縁部は短かく外反する。体部外面ハケ、他はヨコナデで仕上げ。M330で単独出土した。

## 甕型土器

当該階甕型土器は、口縁部が「く」字状に外反して開くA (A1~A3)、受口状口縁を有する「近江型」甕B2等がある。

### A1 (E300, E335)

胴の膨らむ倒錐形の体部に口縁部は「く」字状に鋭く外反して開くもので、口径20cm前後、器高30cm前後、最大腹径24cm前後、底径5.3cmを測る。口縁端部は、若干上方に拡張するもの (E335)、そのまま面をなして終わるもの (E300) がある。端部外面横ナデ後ヘラ庄痕を施文。器体外面縦方向の粗いハケ調整を施す。E335腹部には先行する横方向のハケが認められる。E300口縁部外面にナデ。器体内面は、口縁部に横方向、体部に縦方向のハケ調整を施す。E300体下部に煤付着。E300は、M405より壺G1 (E294) 水差型土器 (E299)、細頸壺C3 (E295)、高坏B (E301) 等と伴出。E335は、M422より壺G2 (E333) 細頸壺D (E334) との伴出が認められ、当該階に位置づけられる。

### A2 (E260)

緩やかに外湾して広がる口頸部で、口径32.2cmを測る。端部外面は、強い横ナデにより凹状を呈し、下端にはハケ庄痕が廻る。器体外面粗いハケ調整後胴部に直線文、列点文等を施文。口縁部内面には波状文が廻る。本例は、M366より壺D (E256)、鉢C1 (E262)、甕B2 (E261) 等との伴出が認められる。

### A3 (E358)

「く」字状に短く外反して開く口縁部が、端部を内上方に拡張し、端面には2条の凹線文を廻らす。体部は、上腹部の張る縦長を呈するか、口縁部は内外面共横ナデ調整。体部内外面共粗いハケ調整を施す。本例は、M435出土で壺G1 (E356)、水差型土器 (E357) 等との伴出が認められ当該階に位置づけられる。

## 甕B

口縁部が屈曲して真上又はやや外反気味に立ち上がる受口状口縁を有する甕で、いわゆる「近江型」甕と呼称されるものである。ものである。口縁部の形態によりB2-I、B2-IIに分類される。

### B2-I (E048, E050, E186, E284)

腹部が張る倒錐形の体部より緩やかに屈曲して、やや外傾気味に立ち上がる受口状口縁を有するもので、口縁端部は尖り気味又は、丸味のある面を成す。いずれも、口縁部外面に斜方向、体部に縦方向の粗いハケ調整を施し、胴部には、直線文帯、直線文帯+列点文 (E284) を施文。器体内面口縁部に横方向のハケ調整が認められ、体部はナデ仕上げ。体部外面に煤の付着が認められ、1~2mm大の石粒を多含する粗い胎土である。

E050はM028より単独出土、E048はM021より壺C1 (E045, E046) 等との伴出が認められ、両周溝基周辺部には

同じくⅢ様式段階の周溝高が集中していることから当該階に位置づけられるものである。E186は、M259出土で壺G2 (E185) と、E284は、M398より壺G1 (E283) との共伴が認められる。

#### B2-Ⅱ (E261、E266)

腹部が張る倒錐形の体部より緩やかに湾曲して広がり、口縁部は屈曲して直上又は内反気味に短く立ち上がる受口状を呈する。端部は、平坦な面を成す。口縁部外面に斜方向の粗いハケ調整を施し、さらに上端に強い横ナデを加える。外面頸部以下腹方向の粗いハケ調整。上腹部には、直線文+列点文 (E261) を施文。内面口頸部に横方向のハケ調整。体部ナデ仕上げ。1~2mm大の石粒を多含する粗い胎土である。E261は、M366出土で壺D (E256)、鉢C1 (E262)、甕A2 (E260) と共伴、E266は、M367出土で細頸壺B2 (E263) との共伴が認められ当該階に位置づけられるものである。

#### ミニチュア土器 (E005、E153)

ミニチュア土器としては2点の出土が知られる。E005は、口径4.2cm、器高9.2cm、底径4.6cmを測る水差型土器で、器体外面細かいヘラミガキ、内面ナデ仕上げのもの。肩部には、横位の半環状把手を付す。M002より壺G1 (E004)、壺G2 (E002) 等との共伴が認められ、Ⅲ-Ⅳ様式に段階に位置づけられる。E153は、腰の張る体部に口縁部は湾曲して短く開くもの、口径3.7cm、器高4.0cm、底径2.2cmを測る。器体内外面共ナデ仕上げ。口縁部下には、2個1対の小孔を穿つ。M182より単独出土。

### (5) 第Ⅳ様式段階

第Ⅲ様式(新)段階 第Ⅳ様式段階は、先述の通りその分層が、非常に困難であるが、本遺跡では壺Ⅰ及び甕B類のあり方などをメルクマールに、これらが第Ⅳ様式段階土器としての要素を備えると考えて、当該階の設定を行った。

当該階土器は、主に中期中葉後半の洪水後に形成をみたD地区西半周溝遺において認められ、器種は、壺C (C1)、D、E (E1)、F (F1、F2)、G (G1、G2)、H (H1、H2、H3)、I (I1、I2)、J、K、細頸壺B (B3)、D、水差型土器A、B、高坪A (A1、A2)、台付鉢、甕A (A1、A2、A3)、B (B2-Ⅱ)、C (C1、C2)、台付甕等がある。

#### 壺型土器

##### 壺C1 (E020、E215、E350)

頸部の頸部より口縁部は屈折して、短く直立するもので、下腹部の張る下ぶくれの体部を有する。

端部は、平坦な面をなすものと、丸味のあるものがみられる。器体外面粗いハケ調整を施し、口縁立ち上がり部横ナデ後被状文を施文。又口縁部には、直線文帯(複帯構成)が廻る。器体内面ハケ調整後ナデ仕上げ。壺C1は、第Ⅲ様式段階より認められるが、形態、調整、施文等ほとんど変化はなく、手法等の根強い踏襲がみられる。E020は、M010より壺H1 (E019) 壺I1 (E021) と共伴。E215はM329より壺F2 (E216) との、E350はM432より壺H1 (E351)、甕A1 (E352) などと伴出が各々認められ当該階に位置づけられる。

##### 壺D (E016)

胴部中位の張る算盤玉状の体部に短かく外反して開く口縁部を有す。口縁部下の相対位置に2個1組の小孔を穿つ。器体外面ナデ。口縁部内外面共横ナデ調整。体部内面ハケ調整後ナデを加える。本品は、M008より壺H1 (E014、E015) との伴出が認められ、当該階に位置づけられるものである。

##### 壺E1 (E009)

算盤玉状の体部に、短かく外反して肥厚する口縁部がつく。口縁部外面には3条の凹線文をめぐらし、体部外面上半

には7条単位の櫛描直線文、波状文を交互にめぐらし、下半はハケ調整。口縁部内面にはハケ具による羽状刺突文をめぐらす。M005より壺E2 (E010)、壺J (E011) と伴出した。

#### 壺F

胴長の体部を有し、筒状の頸部より口縁部が外反して開くもの。形態によりF1、F2、に分類される。

##### F1 (E286、E309)

筒状の頸部に大きく外反して開く口縁部を有し、端部を上方に若干拡張するもの。体部は、胴長で卵形を呈し、その最大腹径は、上腹部に位置する。口径13cm前後、器高30.5cm前後、最大腹径23.5cm底径5.3cm前後を測る。端部内外面共横ナデ調整。器体外面粗いハケ調整を施し、E286は無紋であるが、E309上腹部には、櫛描直線文、波状文を交互に廻らす。器体内面ハケ調整。E309はナデ仕上げ。前段階壺F1 (E007) とほとんど差違は認められないが、E309は、M409より壺G2 (E311) 壺H1 (E310) 壺I2 (E312) と伴出し、又、E286はM400より壺I1、I2 (E287、E288)、壺B2 (E290)、壺C1 (E289) 等との伴出が認められる。これらの伴出関係より明らかに第IV様式段階に比定し得るものである。

##### F2 (E216)

E216は、上腹部が張る縦長の体部に口頸部は外反して、外上方にのみ曲折してさらに水平近くに広がるものである。端部外面横ナデ、以下器体外面粗いハケ調整を施し、内面ナデ仕上げ。本例は、M329より、壺C1 (E215) との伴出が認められ、天津市滋賀里遺跡12号方形周溝墓出土 (B12) に形態等良く類似している。滋賀里例は、口縁部内面に2ヶ1組みの瘤状突起が付されているが、壺I2との伴出が知られており、本遺跡例も第IV様式段階上位置づけ得るであろう。

#### 壺G

外湾気味にのびる頸部より口縁部が屈曲して直上に立ち上がるもの。G1、G2がある。

##### G1 (E169、E170、E175)

口頸部は大きく外反し、口縁部は屈曲して立ち上がり端部を平坦におさめる。口縁外面に凹線文 (1~3条) をめぐらせる。いずれもM238より壺G2 (E168)、高坏B (E176)、壺B2 (E172、E173) などと伴出した。

##### G2 (E168、E311)

外湾気味にのびる頸部より、口縁部は屈曲して直上に立ち上がるもの。口縁端部は、ほぼ平坦な面をなす。体部は、上腹部の張る胴長を呈する。口径21.6cm、器高54.2cm、最大腹径38.8cm、底径8.0cmを測る丈高の壺 (E311)。口縁部外面斜方向のハケ調整後横ナデを施し、上端には浅く太い擬凹線文1条を廻らす。器体外面縦、斜方向の粗いハケ調整。頸部屈曲部には、幅1.5cm前後の低いハケ庄底文凸帯を貼付ける。器体内面ハケ調整。E168はM238より高坏B (E175)、壺B2 (E173) 等との伴出。E311は、M409より壺F1 (E309)、壺H1 (E310)、壺I2 (E312) 等との伴出が認められ当該階に位置づけられる。しかし、前段階G2との形態差はほとんど認められない。

#### 壺H

外湾気味にのびる口頸部で、上方で屈曲して直上又は内反気味に短く立ち上がるもの。調整、施文等の相違からH1~H3に分類することができる。

##### H1 (E019、E310、E319)

形態等前段階とほとんど差異は認められない。器体外面粗いハケ調整後、口縁部上方に強い横ナデを施し、外面は浅く凹む。E310口縁端部には、ヘラ庄底文を廻らし、頸部屈曲部には櫛描直線文、波状文を交互に廻らす。E319は、唐滅が著しく詳細は、明らかではないが、頸部に直線文をとどめる。E019は、口縁立ち上がり部に烈点文をめぐらし頸部

より体上半にかけて櫛描直線文、列点文、波状文（4条単位）を施し、その間にヘラ状具による山形文（6条単位）を配する。器体内面ナデ仕上げ。E319は、M411より単独出土、E310は、M409より壺F1（E309）、壺G2（E311）壺I2（E312）等との伴出が認められ、E019はM010より壺C1（E020）I1（E021）と伴出した。口径10cm前後、最大腹径22.1cmを測る。

#### H2（E023）

H1との形態的類似を見るが、調整、施文等手法の相違が認められる。口径11.0cm前後、最大腹径23.0cmを測る。口頸部は、外湾気味に斜上方にのび上方で内折して立ち上がり、端部は内傾する浅い凹面をなす。腹部の強く張る体部を有する。

H1と比較し、非常に丁寧な作りで、器体外面細かいハケ調整後、ほぼ全面ナデにより平滑に仕上げる。口縁立ち上がり部横ナデ調整。櫛描縞紋線により上腹部に加飾を施す装飾の豊かな壺である。口縁立ち上がり部に列点文、山形文を施文。口縁屈曲部にヘラ描沈線2条、頸部屈曲部に4条の波線を施し、腹部には、櫛描列点文、直線文、波状文、弧状文等、少なくとも2種類の工具を使い分けて繊細な紋様を構成している。内面ナデ仕上げ。E023はM011より壺G2（E024）との共伴が認められる。

#### H3（E072）

球状の大きな体部に、直口する太頸部がつき口縁部は受口状を呈する。口縁部外面に櫛描列点文、下端に刻み目をめぐらす。肩部外面、腹部中に櫛描直線文、列点文、刺突文、弧状文などをめぐらせ加飾している。H1、H2とはやや異なる受口壺である。E072はM069より単独出土。やや時期の降るものか。

#### 壺I

口径10cm前後、器高26.5cm前後、最大腹径20cm前後、底径5.5cmを測る。卵形の体部に直口の口縁部を有する壺で、検出数14個体と当該階層型土器の約半数を占めている。口縁部の形態によりI1、I2に分類し得る。

#### I1（E021、E225、E287、E323）

卵形の体部より口縁部は緩く屈曲して立ち上がり上方において内反するもの。端部は、平坦又は内傾する面を成す。口縁部高は、器高の1/9前後と低く、体部最大腹径は中位上方に位置する。器体外面は、口縁部上方に強い横ナデを施し、浅く窪む。以下粗いハケ調整。1例ではあるがE287体部上半に、先行する叩きが認められる。器体内面ハケ調整後口頸部及び体部下半にナデが施されるが、E287は内面ナデ仕上げ。

県内では、長浜市鴨田遺跡、彦根市馬場遺跡、守山市下之郷遺跡等より出土が認められる。

E021は、M010より壺C1（E020）壺H1（E019）と伴出。E225はM341より壺C1（E224）と伴出、E323はM414より単独出土。又、E287はM400より壺F1（E286）、壺I2（E288）壺A1（E291）、壺B2（E290）、C1（E289）等との共伴が認められ、第IV様式段階に比定し得る。

#### I2（E255、E281、E288、E312、E321、E329、E339、E355）

H1同様卵形の体部を有するが、口縁部は、直口で、上端は強い横ナデにより浅く窪む。端部は、平坦なもの、又内傾するものがあるが、器体外面は、ハケ調整により整形されているが、一様に体部には先行する叩きが認められ、さらに体部下をヘラケズリするものもある（E288、E355）。器体内面は、ハケ調整後一部にナデを施すものと、ほぼ全面ナデにより仕上げるものがある。I1と同じく無文を特徴とするが、E188口縁部付近には、櫛状具による匠文が施される。壺I2は、当該階層壺C1、F、G2、H、壺A、B類等との伴出が確認される。第IV様式に比定し得る。県内では、

大津市滋賀里遺跡11、12号方形周溝基、長浜市鴨田遺跡溝A、今津町弘川遺跡方形周溝基、壺穴住居12、守山市下之郷遺跡溝SD-1下層、今津町北仰・桂遺跡等の諸遺跡より出土が知られ、Ⅲ-Ⅳ様式として報告されている。これらは

いずれにおいても、その形態、調整等本遺跡出土例と良く共通するものであり、中でも遺構に伴う良好なる一括遺物として鼓賀里遺跡11号方形周溝墓より壺1、2点と共に高坏B (B14)、甕B2 (B5)、甕C1 (B13) 等との共伴が認められ、今津町弘川遺跡竪穴住居12では、I2 (2点) と共に高坏A (176)、高坏B (175)、甕A (174)、甕B (171) 等が認められている。(形式名は本遺跡に準ずる)このように共伴関係からしても明らかなように壺1に組成する土器は、畿内第IV様式併行段階に位置づけられるものである。壺1は、他府県ではほとんど出土していないことから、壺C、H 等と同じく近江固有の在地的壺型土器と考えられるが、その系譜等については未だ明らかではない。

#### 壺J (E011、E038)

卵形の体部に太く直口して立ち上がる口頸部がつく。頸部に3条の凹線文をめぐらす(E011)、内外面ともハケ後ナデ仕上げ。長頸壺、短頸壺のプロトタイプか。E011はM005より壺E1 (E009)、壺E2 (E010) と伴出。E038はM017より壺体部と伴出した。

#### 壺K (E029)

外反気味にのびる口縁部を有する。体部は肩の強く張る球状を呈する。壺Jと同じく無文化の著しい壺で、器体外面粗いハケ調整を施す。E029は、M013より壺E1 (E028)、短頸壺D2 (E030) 等との伴出が認められる。

#### 細頸壺形土器

当段階細頸壺型土器には、前段階に引き続きB (B3)、Dの出土が知られる。

#### B3 (E338)

M424において壺I2 (E339) との共伴が認められるもの。下腹部の膨らむ体部に、口頸部は、やや内湾気味にのび、上方において屈曲して内反気味に短く立ち上がる。口径8.3cm、器高25.1cm、最大腹径18.7cm、底径4.8cmを測る。器体外面粗いハケ調整、口縁立ち上がり部内外面には横ナデが施される。又、肩部付近には、刺突文(棒状?)、櫛描直線文等が施文される。内面ハケ調整後ナデ。彦根市馬場遺跡出土壺B1 (第IV様式併行) と口頸部の形態等良く類似している。

#### D (E305、E316、E326)

口径5.0~7.4cm、器高18.9cm、最大腹径16.3cm、底径4.3cm、を測る。算盤玉状の体部にわずかに内湾気味にのびる口頸部を有する。頸部は、やや内傾する面を成す。口縁部には、一様に4~5条の浅い凹線文を廻らす。頸部上半から体部上半にかけては種々の文様構成を有する。E326頸部には、直線文帯(単帯、4条×2連)。E305は、波状文と直線文をほぼ交互に施文しており、又、E316とE326の場合は、簾状文10帯を廻らすものである。器体外面は、ハケ調整後施文部にナデ。器体内面ナデ仕上げ。頸部にはしぼり目が残る。

前段階Dと比較し、形態、施文等大きな変化はみられないが、やや口頸部の内湾傾向が弱まり、文様が簡略化されつつある。これら細頸壺は、明らかに当段階に比定し得る、台付鉢(E317)、甕B2 (E327)、甕A3 (E318) 等との共伴が認められるものである。

#### 水差型土器

#### A (E342、E343)

口縁部がやや内湾気味にのびるもので、いずれも体下部を欠失しているが、ほぼ算盤玉状を呈すると考えられる。肩部には横位の半圓状把手を付す。口縁部外面には6~7条の浅い凹線文を廻らし、頸部より上腹部にかけて櫛描列点文、直線文を交互に施文する。器体内外面共ナデ仕上げ。両者共M426出土で、甕B2 (E344) 等との伴出が認められる。

#### B (E079)

肩の張る肩長の体部に直口の口縁部を有するもので、肩部には把手の痕跡をとどめている。器体外面ハケ調整、内面ナデ仕上げ。本例はM084より、畿内第IV様式段階高坏脚部(E078) との伴出が認められる。

県内において第IV様式併行段階に位置づけ得るものに今津町弘川遺跡方形周溝壺出土例や守山市下之郷遺跡SD-1出土例等が知られる。弘川遺跡例は、脚台を付した算盤玉状の体部に内湾気味にのびる口縁部を有するもので、口縁部外面には4条の浅い凹線文を廻らし、上腹部には帯描列点文、波状文等を施文。体下部より脚台には粗いハケ調整が残る。形態及び列点文等を多用する施文法等本遺跡出土例（E342、E343）と良く共通しており、弘川遺跡例は方形周溝壺よりIV様式段階壺（本遺跡壺I2）、壺（同A）等の共件が認められる。又下之郷遺跡例は、腰の張る体部にほぼ直口の口縁部を有するもので口縁部には弧状の袂りがみられる。肩部には横位の半環状把手を付す。器体外面ハケ調整後口縁部上方にナデ。器体内面ナデ仕上げ。口縁部外面に凹線文がみられず、又胴部も無文であるなどE079に近似するが、弘川遺跡例や本遺跡出土E342、E343に比べ無文化の著しい点でやや新相を有するものと考えられる。

#### 高坏

当段階に比定し得る高坏は少なく、直口の口縁部を有するA類がわずかに知られる。

##### A1（E278）

内湾気味に斜方向にのびる坏部で、端部は肥厚させて、平坦におさめる。口縁外面に1条の凹線文をめぐらし、内外面ともナデ調整。M391より壺A1（E274）、E1（E275）、G2（E276）などと伴出した。

##### A2（E077、E078）

E077は、いわゆる碗形の坏部をもつもので、口縁部内外面共横ナデ、外面ヘラミガキを施している。M083より壺B2（E076）などと伴出している。

E078は、筒状の柱状部より裾部が大きく広がる高坏脚部である。外面縦方向の細かいヘラミガキ、内面ヘラケズリ。柱状部には縦列に4ケの円孔を4方に穿つ。M084より水差型土器B（E079）との伴出が認められる。

##### 台付鉢型土器（E317）

「ハ」の字状に開く短い脚台を有する鉢で、球状の体部に「く」字形に強く屈曲して開く口縁部を有し、口縁端部を上方に拡張する。口縁部内外面横ナデ調整。外面は、磨滅が著しいが、体部にはハケ調整痕残存。体部下半より脚台にはヘラミガキを施す。器体内面ハケ調整後ナデ。脚部ハケ調整。

E317は、M410より細頸壺D（E316）や壺A3（E318）等との伴出が認められ当段階に位置づけられる。

#### 壺型土器

壺はA（A1、A3、A4）、B（B2-II）、C（C1、C2）、台付壺のタイプに分類されるが、Aは畿内型壺、Bは「近江型」と呼称される受口状口縁壺、Cも又在地色の著しい壺であるが、口縁部が、「く」の字状に緩やかに広がるものである。

#### 壺A

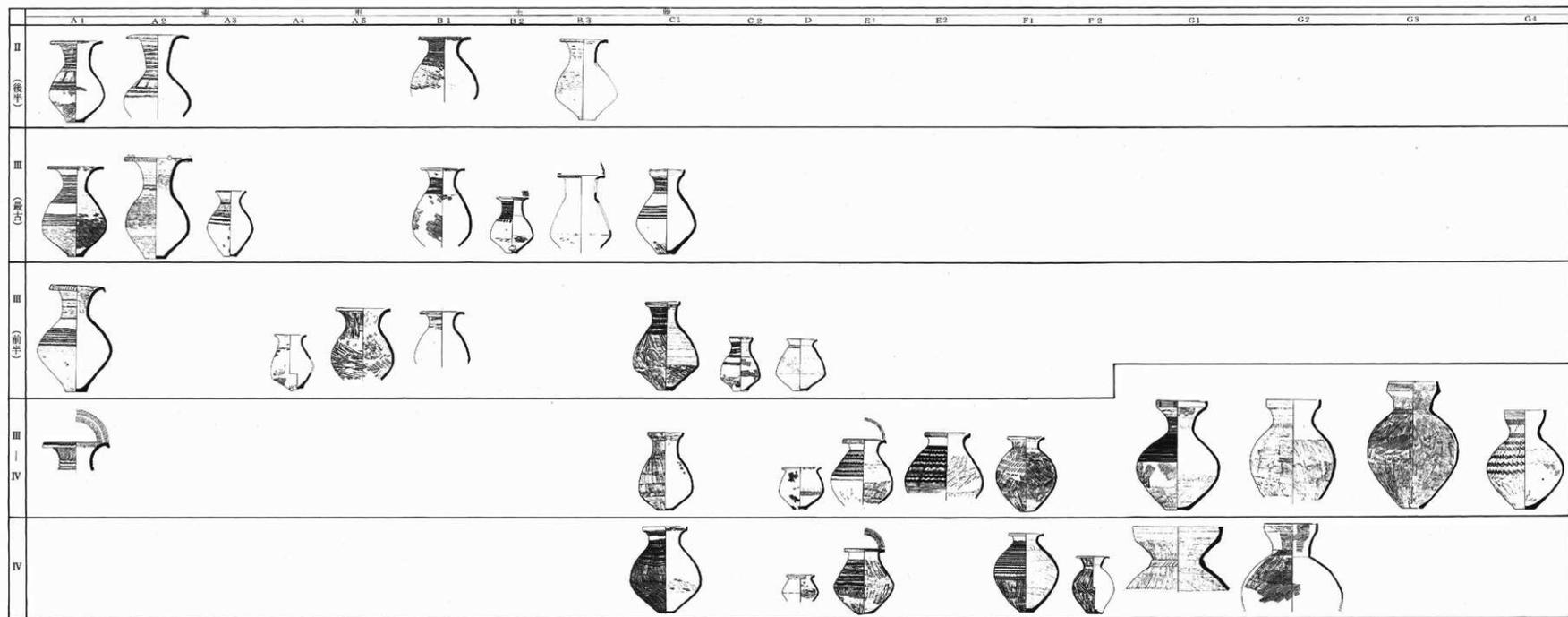
##### A1（E291、E352、E353）

胴の膨らむ倒錐形の体部に「く」字状に開く口縁部を有する。端部は、拡張はみられず外傾する面を成し、ヘラ匠痕文を施文。器体外面粗いハケ調整を施し、頸部位には接合の際の指頭匠痕が認められる。器体内面ハケ調整後体部ナデ。口径14.6cm、器高23.2cm、最大腹径17.2cm、底径4.5cmを測り、腹径が口径をわずかに上回るものである（E291）。

III-IV様式段階壺A1と形態等には全く差異は認められないが、E291は、M400より、壺I1（E287、E288）壺B2（E290）等との共件が認められIV様式段階に位置づけられる。またE352、E353はM432より壺C1（E350）、H1（E351）と伴出している。

##### A3（E318）

「く」字状に外反して短かく開く口縁部の増部を内上方に拡張し、端面に2条の凹線文をめぐらす。体部は上腹部が



第48図 方形周溝墓出土土器の型式編年(I)

	H1	H2	H3	I1	I2	J	K	A	B1	B2	B3	C1	C2	C3	D	無形土器	本形土器	
II (後半)																		
III (最古)																		
III (前半)																		
III IV																		
IV																		

第49図 方形周溝墓出土土器の型式編年(2)

	高塚形土器		鉢形土器				甕							石灯	ミナチミア土器			
	A	B	A	B	C1	C2	D	石灯	A1	A2	A3	A4	B1	B2	C1	C2	石灯	ミナチミア土器
II (後半)																		
III (最古)																		
III (後半)																		
III IV																		
IV																		

第50図 方形周溝墓出土土器の型式編年(3)

張る形態をとる。口縁部内外面共ナデ調整、体部内外面粗いハケ調整。M318より細頸壺D (E316)、台付鉢 (E317) などと伴出した。

#### A4 (E280)

腹部の張る球状の体部に口縁部は「く」字状に鋭く屈曲して短く開くもの。端部は肥厚気味で、端面は、強い横ナデにより浅く凹む。器体内外面共粗いハケ調整後口縁部にナデ。E280はM396出土で壺I2 (E281)の伴出が認められる。畿内第三、IV様式段階に普遍的な変型土器であり、県内では、大津市滋賀里遺跡、同大伴遺跡、今津町弘川遺跡、同北仰・桂遺跡、守山市下之郷遺跡等において多数出土が知られている。

#### 壺B

##### B2-II (E172, E173, E279, E290, E322, E327, E344)

腹部の張る倒錐形の体部より大きく湾曲して広がり、口縁部は屈曲して直上又は内傾して立ち上がる受口状を呈す。端部は、内傾し浅い凹面を成す。口縁部外面斜方向のハケ調整、上端に強い横ナデを施すものがある (E172, E279, E290, E327)。外面頸部以下縦方向のハケ調整を施すが、E173, E279は頸部より上腹部にかけナデを加える。いずれも上腹部には直線文+列点文を施文。E279最下段には弧状文を廻らす。内面口頸部に横方向のハケ調整後口縁部横ナデ。体部ナデ仕上げ。E172, E173は、M238より壺G1 (E175, E179)、壺G2 (E168)と伴出。E290は、M400より壺F1 (E286)、壺I (E287, E288)、壺A1 (E291)と、E322はM413より壺I2 (E321)と、E327はM416より細頸壺D (E326)、台付壺 (E328)と、E344は、M426より水差型土器A (E342, E343)との伴出が認められ当該階に位置づけられる。

#### C1 (E315)

腹部の張る体部に頸部は緩やかに屈曲して口縁部は外反して広がるもの。口径15.8cm、器高24.8cm、最大腹径18.8cm、底径4.8cm前後を測る。口縁端部は、肥厚気味で横ナデ後上、下端にヘラ疋痕文を施文。器体外面縦方向の粗いハケ調整後口頸部にナデ。上腹部には櫛形列点文、直線文、波状文等を廻らす。器体内面口頸部に横方向のハケ調整、体部ナデ仕上げ。本例は、M409出土で壺G2 (E311)、壺I2 (E312)等との共伴が認められ第IV様式に比定される。形態、調整、施文等伊勢地方に特徴的な変型土器 (津市亀井遺跡壺A (a) など) に近似するものである。

#### C2 (E289, E349)

E289, E349は、腹部の強く張る球状の体部に口縁部が緩やかに外反して広がるもので、端面は、面を成して終わる。端部外面横ナデ後ヘラ又は櫛形疋痕文を廻らす。器体外面粗いハケ調整を施し、上腹部には櫛形列点文、直線文等を施文する。器体内面ハケ調整後体部にナデ。

E349は、M431より単出土。E289は、M400よりI1, I2 (E287, E288)、壺A1 (E291)、壺B2 (E290)等と伴出。当該階に位置づけられる。

壺Cは、第II様式段階 (A2) 以来の系譜を有すると考えられる在地系変型土器である。本遺跡では、少数ではあるが、そのプロポーショナル調整、施文等には、壺Bに類した特徴をみることができる。近年、守山市下之郷遺跡や、同吉身西遺跡方形周溝墓群より壺H1等と共に壺Cが多量に出土し、他の伴出遺物からも畿内第IV様式に位置づけられている。しかし、壺Cは、湖北、湖西地域においては少なく、おそらく湖南地域を中心に発達した変型土器と推測される。

## 4. 紋様の変遷

弥生時代中期における主要な装飾法としては、櫛形文と凹線文の2者をあげることができる。前者は、中期全般を通じてみられる装飾法であるのに対し、後者は、後半段階に出現、発達したもので、回転運動に依存した器面調整と施文

を兼ねた機械的な手法である。両者共にその施文状況には、地域差並びに様式差を認め得るが、特に回線文に関しては、先学に指摘されているようにその出現、発達のプロセスは、器種、形態によって、また地域によっても一様でなく差異が認められることは、周知の通りである。

本遺跡中期後半段階土器には、むろん回線文の使用は顕著に認められるところであるが、前述したようにその出現から盛行段階に至る過程を段階的に把握することは現時点では不可能と言える。しかし、帯描文は、本遺跡全段階を通じて一般的にみられるものであり、またその施文状況についても成立から盛行、衰退の推移を大観でき得る。よって本節では、主に帯描文の変遷と地域色の問題について考察を進めたい。

(1) 中期前半

第Ⅱ様式後半～第Ⅲ様式段階は、帯描文の成立から盛行を迎える段階である。帯描文の駆使は、その技法を発達させると共に、文様の種類、組み合わせを豊富なものとし、さらには、装飾面の拡大化を意図した口縁端部の拡張を促進させる。

第Ⅱ様式後半罇壺・経頸壺は、口縁部より上腹部に至るまでの一連の幅広い文様帯を構成するが、その主体を成すのは直線文（主に単帯構成）であって、他縦線文、斜格子文、流水文、扇形文等若干認められる。波状文は、当該階に

第1表 中期前半壺形土器口縁部文様

口縁部 文様 式	帯 描 文 様							扇 形 文			連 弧 文			
	直 線 文		波 状 文			列 点 文		扇 形 文		連 弧 文		無 文		
	Ⅱ	Ⅲ(兼古)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ(兼古)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ(兼古)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ(兼古)	Ⅲ
帯 描 文 様	直線文								1		1			
	連弧文											1		
	波状文				3								1	
	列点文 (刺突文)	1												1
瘤状突起 帯描文様				1	1								1	
瘤状突起														3
無 文	2			2	7		1	1	3	1		1	2	8

第2表 中期前半壺形土器頸腹部文様

文 様 式	直 線 文						波 状 文						扇 形 文		連 弧 文	
	単 帯		複 帯		2 帯 以 上		1 帯				扇 形 文		連 弧 文			
	Ⅱ	Ⅲ(兼古)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ(兼古)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ(兼古)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ(兼古)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ(兼古)	Ⅲ	
直線文	単帯	6					4	5	1	3			1		1	
	複帯				2	6					5	1	2			
波状文	2帯以上		4	5												
	1帯	1	3			5										
扇形文			1	1		2										
連弧文			1													

おいては未だ極めて稀で、直線文帯にアクセントとして1帯添えたものが1点(壺A)知られるに過ぎない。また、口縁端部には、ほとんど拡張はみられず面を成して終わり、端面は、無文またはへう庄直文を廻らすものが多い。口縁部内面には加飾を有するものは少なく、連弧文または直線文を施したものが各1点認められる。しかし、Ⅲ様式(最古)段階に至ると端部は肥厚及至若干拡張するものが多くなり、Ⅲ様式(前半)段階では下方又は外下方に著しい拡張がみられる。このような端部拡張傾向が、むしろ櫛描文の発達に促された形態的変化であることは、Ⅲ様式(最古)段階以降端部の加飾がより顕著となることから明白である(第1表)。特にⅢ様式(最古)段階以降、波状文の使用頻度は、飛躍的な増大をみせ口縁端部及び内面に波状文を施文するものが多くなり、さらに腹頭部の文様帯には、前段階同様アクセント的に使用するものもあるが、直線文と波状文を交互に廻らすものが多数みられる(第2表)。また、施文自体にも巧夫がみられ(2条×2連、2条×3連、3条×2連)緻密で整然とした櫛描文を施しているものが知られる。Ⅲ様式(前半)段階においても文様の種類、組み合わせ等前段階とほとんど大差なく、櫛描直線文の優位性は変わらないが、体部の形状は、腰の低く張るものや、算盤玉状に近いものなど畿内Ⅲ様式と共通した特色を示す。

中期前半段階土器には、壺A、細頸壺A等畿内の色彩が多分に認められる一方、第Ⅱ様式(後半)段階以来の壺B、細頸壺A、壺A、又、第Ⅲ様式(前半)段階に盛行する特徴的な壺C1等、東海地域との関連性が濃厚に窺われるものがあり、いづれもその派生段階において東海的要素を「吸収」し、さらに在地型として発達していったものと推測される。

壺B1及びC1は、口縁部の形態を異にするが、その全体的なプロポーシオンや調整施文等は全く良く共通しており器体外面に粗いハケ調整を施し、口縁部にのみ複層構成の直線文帯又は直線文帯+波状文帯を施文する特徴的な手法を有する装飾的な畿内型壺(A類)に比べ、これら在地系の壺型土器は総じて調整が粗く文様も乏しいのが特色と言えよう。

以上のように本道跡中期前半段階で認められる櫛描文の種類としては、直線文、波状文、扇形文、列点文、連弧文、流木文、斜格文等が認められるが、中でも直線文の比重が最も高く、次いで波状文が多用されているが、他の諸文様についてはいづれも少数で付随的なものであり、畿内地方に比べ、概して装飾の豪華さに欠けるきらいがある。特に在地系壺類においては、調整、施文等に粗雑さが窺われ、具田町式細頸壺の模倣に際しても具田町式特有の精巧さはみられず、調整、施文等はより簡略化されたものとなっている。しかし、当期の鉢、甕類は言うに及ばず、中期後半段階の在地系土器についても同様の傾向が認められることから、むしろこの粗さが、当地方の特色と言えよう。

## (2) 中期後半

中期後半(第Ⅲ-Ⅳ様式段階・第Ⅳ様式段階)は、凹線文の出現、発達段階として捉えられるが、同時に櫛描文自体の質的变化と減少の傾向を認めることができる。

本道跡中期後半段階の土器様相は、全般的に畿内の影響が強く反映しており、土器組成の上でもほぼ類似した傾向を認め得る。凹線文は、特に畿内通有の土器形式である壺(E、F、G1~G3)、細頸壺、水差、高坏等の口縁部に顕著に認められるが、在地型土器形式である壺(C、H、I)、甕(B、C)等には、稀有で無文または櫛描文によって飾られている。

当該段階の櫛描文は、凹線文が回転運動によ存した機械的な施文法であったのと同じく、櫛描文もそれまでの「描かれる文様」としての性格から規則的かつ機械的な装飾法となっていくが、本道跡では、Ⅲ-Ⅳ様式段階こそむしろ櫛描文が最も盛行をみせる段階であり、その規則的なパターンを駆使して器面を精巧、華麗に飾る。しかし後半段階の櫛描文の種類としては、直線文、波状文、列点文の三種に限られ、前半段階でみられた流木文、扇形文等の諸文様は全く認められなくなる。

第3表は、口縁部の文様構成を示したものである。

上述のように凹線文を有する壺は、大体畿内通有の形式に限られているが、その施文状況から3～5条の細い凹線文を有する壺E、壺G1・壺G3と1～3条の太く浅い凹線文を有する壺G2、(壺I)に大別することができる。

細い凹線文を有する壺E、壺G1は畿内第III様式(新)段階～第IV様式段階に一般的に認められる形式であり細く明瞭な凹線文上に刻目、帯描縦線文、円形、棒状浮文等を付加するものが多い。また、頸腹部は、帯描直線文、波状文、列点文等により精巧に飾られている。口縁部内面の加飾は、壺E、又は壺Aに限られており、列点文(ハケまたは帯)を1帯乃至2帯を施すものである。

壺G2には、細い凹線文(4条)を有するものがみられるが、大体は、1～3条の太く浅い凹線文を施すものである。壺G1と形態等良く類似するが、G1に比べ口縁立ち上がり部の屈曲が弱く、また、体部の形態はG1がほぼ中位の膨くれるものが多いのに対し、G2は、長胴の楕円形を有する。頸部にハケ直文凸幅も広い帯を持つ他は、器面は粗いハケ調整が施される全く無文の壺である。他、畿内通有の壺型土器として壺D、壺F等があるが、壺Fには、上腹部を帯描直線文、波状文で飾るものが認められる。

次に、在地系壺型土器として、前半段階からの伝統色を強く継承する一群、壺C1、H(H1、H2)、I(I1、I2)等が畿内壺型と共存している。これらの在地系壺型土器は、いずれも共通して口縁部上方が屈曲して短く立ち上がるもので、口縁立ち上がり部には、ほとんど凹線文は認められず(壺Iは、口縁端部に強いナデを施し浅く凹む一帯凹線文)無文又は帯描文(列点文、波状文、刻目等)を施文する。頸腹部には、列点文、直線文、波状文、弧状文、斜格文(ヘラ)等の襍紋様を種々組み合わせるが、前半段階でも知られたように、手法的には概して粗雑さが感じられ、洗練さに欠けている。器体外面は、粗いハケ調整が施され、一部を除いてほとんどナデ調整は行われていない。壺Iは、当期では、最も多量に検出されているもので、口縁部が屈曲して内反するもの(I1)、ほぼ直口のもの(I2)があるが、体部はいずれも上腹部の膨らむ胴長をしている。口縁部上端に帯凹線文を有する他は、器面は、無文で粗いハケ調整が施されている。又、外面には、ハケ調整に先行する叩き目を有するものが多く、体下部をヘラケズリするものも若干認められる。無文化の最たるもので、その上限は明らかでないが、おそらくIV様式段階に盛行をみる近江固有の壺型土器である。

以上、後半段階では、畿内色が強まり畿内系壺型土器との共存として扱えることができる。後半段階の畿内系壺型土器は口縁部には凹線文が施され、又体部には帯描文の規則的かつ機械的なパターン駆使による整然とした文様帯の構成がみられる。が、同時に、凹線文の盛行は、さらに回転運動への依存を高めることになり帯描文の質的变化は言うに及ばず、減少化の傾向を促す結果となっていく。

第3表 中期後半壺形土器口縁部文様

口縁部文様	凹線文	帯描文					細い凹線文			太い凹線文		
		無文	刻目文	波状文	列点文	縦線文	凹線文	縦線文	棒状浮文	円形浮文	3/2条	1条
無文		21	5	3	9	1	5	2	1	2	9	16
列点文	1				1						1	
列点文	2	1	1				1					

第4表 中期後半壺形土器頸腹部文様

	直線文	波状文	列点文	弧状文	波状文 + 列点文	無文
直線文	5	7	2	2	7	
波状文	7	1	1			
列点文	2	1				2
弧状文	2					
波状文 + 列点文	7					
無文			2			25

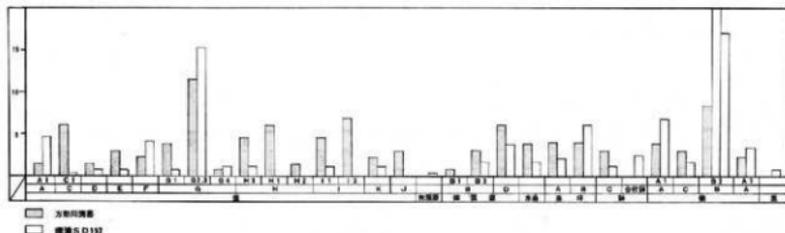


第6表-1 服部遺跡方形周溝墓(Ⅲ-Ⅳ・Ⅳ)・服部遺跡SD152(Ⅳ)器種構成の比較

	壺													無類壺		
	A	B	D	E	F		G			H		I			K	
	A1	C1			F1	F2	G1	G2	G3	H1	H2	H3	I1		I2	
方形周溝墓	2	8	2	4	3	4	5	15	1	8	2	6	6	9	3	
	(1.5)	(6.1)	(1.5)	(3.0)	(2.3)	(3.0)	(3.9)	(11.5)	(0.8)	(6.1)	(1.5)	(4.6)	(4.6)	(6.9)	(2.3)	
総数 (%)	78 (59.6)															
SD152	11	1	2	2	10		2	36	3			3	3		3	1
	(4.7)	(0.4)	(0.8)	(0.8)	(4.2)		(0.8)	(15.3)	(1.2)			(1.2)	(1.2)		(1.2)	(0.4)
総数 (%)	77 (32.2)															

	壺		甕	水差	高		鉢	椀			壺	総数	
	B	D			A	B		A	B	C			
	B1	B3						A1	A3				
方形周溝墓	1	4	8	5	4	4	4	5	3	11	4	131	
	(0.8)	(3.0)	(6.1)	(3.9)	(3.0)	(3.0)	(3.0)	(3.9)	(2.3)	(8.4)	(3.0)	(100)	
総数 (%)	13 (9.9)		<sup>5</sup> (3.9)	8 (6.0)		4 (3.0)		23 (17.6)					
SD152		4	9	4	5	12	3	6	16	8	87	4	237
		(1.7)	(3.8)	(1.7)	(2.1)	(5.1)	(1.2)	(2.5)	(6.8)	(3.4)	(37.0)	(1.7)	(100)
総数 (%)	13 (5.5)		<sup>4</sup> (1.7)	17 (7.2)		9 (3.7)		115 (48.9)			<sup>2</sup> (0.8)		

第6表-2 服部遺跡 方形周溝墓(Ⅲ-Ⅳ・Ⅳ)・SD152器種構成の比較

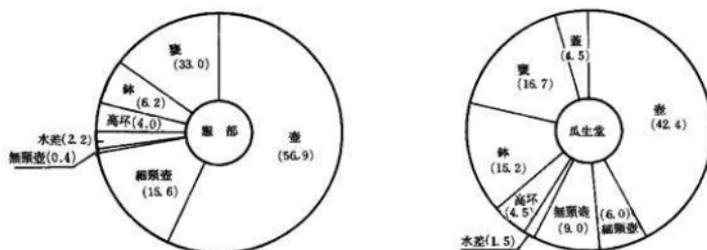


さらに両遺跡方形溝墓供献土器と本遺跡環溝SD152及び瓜生堂遺跡4 I地区C、Fトレンチ遺構、乞含層出土土器の器種構成を比較すると、4 I地区においては、壺の割合が少なく甕が全体の半割近くを占めている(第8表)。他器種においては、ほとんど差異は認められないが、壺、甕の比率に大きな変動がみられることは、日常生活容器と周溝墓等に埋納される供献土器としての性格の相違によるものと理解される。

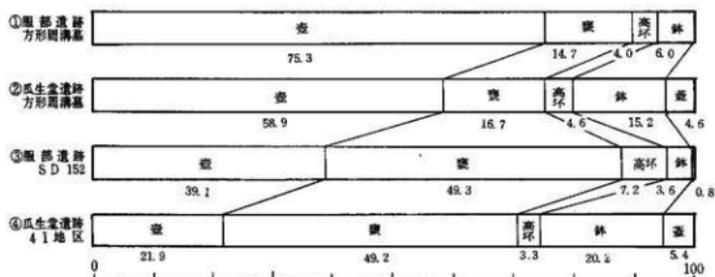
第7表-1 服部遺跡・瓜生堂遺跡供獻土器種類構成の比較

	壺	細頸壺	無頸壺	水差	高坏	鉢	甕	蓋	総数
服部遺跡 方形周溝墓	127	35	1	5	9	14	33	0	223
	56.9%	15.6%	0.4%	2.2%	4.0%	6.2%	14.7%	0	(100)
瓜生堂遺跡 方形周溝墓 (1号-15号)	28	4	6	1	3	10	11	3	66
	42.4%	6%	9%	1.5%	4.5%	15.2%	16.7%	4.5%	(100)

第7表-2 服部遺跡・瓜生堂遺跡供獻土器種類構成の比率



第8表 服部遺跡・瓜生堂遺跡出土土器種類構成の比較



## 6. 小 結

### (1) 供獻土器における二者

以上、本遺跡出土の土器について、いくつかの検討を加えてきた。そこで最後に、若干の残された問題について、すこし検討を加えておきたい。

まず、近畿地方の弥生土器編年は、これまで何回もふれているように、戦前の小林行雄氏による唐古編年によって、その土台が築かれ、1968年のそれを中核とする、佐原真氏による『土器集成』<sup>(1953)</sup>により、各地の土器体系が確立した。そして、この小林、佐原編年による枠組みは、部分的な修正は加えられながらも、今日までほぼ踏襲されてきた。ところが、1960年代以降、大規模化した発掘調査により、膨大な資料の集積が各地ですみ、様式内の細分化、様式間土器群の出現、地域間交流の細密化など、新しい動向が現実化し、小林、佐原編年を再検討する動きも、いくつかみられるようになった。

ところが、<sup>(1953)</sup>近江においては、これまで、良好な資料に恵まれないこともあって、部分的には論じられることはあっても、弥生土器全般にわたる、様式論、編年案は、いまだに本格的には論じられておらず、本報告にあたって、基本的には、佐原氏による、『土器集成』畿内地方、琵琶湖地方に依拠して、これまでの論述を加えてきた。したがって、ここで特に付け加えるべき点はないが、近江における土器編年上に占める、周溝墓出土土器の意義と近江の地域性、或いは隣接地との交流の問題などについて、若干の検討を加えておきたい。

本文でも詳しくふれているように、周溝墓に供獻された土器群は、層位的にほぼ2群に分けることができる。すなわち、中期初頭の洪水により、前期以来の集落と水田が埋没しその洪水堆積土を地山として築造され始めた方形周溝墓群は、ほぼ断絶することなく存続するが、中期中葉後半を前後する時期の大洪水によって完全に埋没したことが確認できる。そして、若干の断絶をはさんで、中期中葉末ごろから、調査域の北端と南端の2ヶ所において、新たに造墓活動が開始されている。そして、これらの新しい墓域も、これに深く関連する、下流東部の集落ととともに、中期後葉後半の洪水により、完全に埋没しているのである。

以上のように、周溝墓供獻土器については遺構の層序によって、大きく新、旧の2群に分けることができるが、古い一群については、おおよそ中期前葉後半から中期前半までに、新しい一群が中葉末から後葉前半に比定され、近年、畿内の編年で問題となっている、中期中葉と後葉の土器群の分離について、若干のデータを加えることになったと考えらる。

まず、古い土器群については、図録文を全くもたずに御描文を多用する土器群として確認できる。これに対して、新しい土器群においては、各器種において、図録文が多用されており、その間に大きな断絶が認められる。このことから、近江においては、図録文の有無によって、或る程度、土器の時期差が検証しうることが、明らかになったと宮える。そして、このことは、各器種における、形式の変化からもうかがうことができる。

まず釜では、古い一群において、A、B、C、Dの大きく4種によって構成されていたものが、新しい一群にあっては、A-Dは、ほとんどみられなくなり、A、Bの系譜を引くE、F、Gや、Cの系譜を引くH、古い一群からの系譜が明確でない、Iが主流を占めている

細頸壺においても、古い一群で主流を占めていた、A、B、Cのうち、Bの系譜が後者にも受けつがれているが、その主流は、Bから派生したとみられるDタイプに移行しており、大きな転換がうかがえる。

そして、水差し型土器や、高杯A、Bなどは、古い一群で、高杯Bタイプのプロトタイプとなるものがみられるほか、新しい一群に到って出現ないし、増加している。

壺では、A1・A2タイプ、B1タイプが、古い一群において主流を占めるが、新しい一群になって、新たに短い口縁部をもつA3タイプが加わっていること、B2タイプ、Cタイプの出現がみられるなど、大きな変化が認められるのである。

以上のように、洪水という、偶然的な遺跡の中絶によって分離された土器群の間には、形式や器種構成上、大きな断絶のあることが明らかになり、このことが逆に、これまで必ずしも明確でなかった。近江における中期中葉までの土器群と、中期後葉の土器群を区別する視点と提供することになったと考える。

ただ、両群の土器群の間には、若干の中絶があり詳しい検討は今後の課題として、残さざるを得ない。

## (2) 地域性の特徴

次に、近江の中期弥生土器の地域性と、隣接地域との交流については、早く佐原真氏によって指摘された、中、後期における、伊勢湾、東海地方との交流が重視されてきたが、近年にあつては、受口状縁壺を、近江独自の壺とする立場から、近江の地域性、或いは隣接地域との交流が、活発に論じられている。ただ、周溝墓供献土器は、その性格上、壺を主体とするものであつて、壺については、別に論じるとして、ここでは、壺を中心にこの問題に迫ることにしたい。

まず、近江の地域性を示す壺として壺Cをとりあげる。壺Cについては、これまで県内各遺跡においても数個体とわずかな出土が知られているに過ぎず、ほとんど注意を払われることはなかったが、本遺跡では多量に検出されたのみでなく、伴出関係によって、その帰属時期がほぼ明白となった。

特に、壺C Iは、Ⅲ様式(前半)段階に集中して認められ、壺A1(E091)細頸壺A(E241)、同B2(E232)、同C2(E272)、壺A2(E242)等との伴出関係が確認され、Ⅲ-Ⅳ様式段階では、高杯A(E270)、壺B2(E048)、壺F2(E216)との伴出が認められ、Ⅲ様式(前半)段階において最も盛行し、後に著しい減少を示しながらⅣ様式前半段階まで継続した系譜をたどることができる。

本遺跡において、壺CはⅢ様式前半段階に出現をみるが、むしろさらに遡って発見される可能性もあり、その成立については詳らかでない。第Ⅱ様式(後半)段階より認められる壺B1とプロポーション、調整、施文法等良く類似しており、或いは、伊勢湾地域との接触により部分的な受容をもって当地方で、発展したとも推測される。

Ⅲ-Ⅳ様式以降の変移状況については、資料が少なく言及し得ないが、形態において下腹部の張り弱まり全体に丸味を有していることや、Ⅲ様式前半段階の規則的な施文のパターンにやや崩れが認められるようである。

次に、壺B、細頸壺C等も地域性を考える上で注目される。これらは従来より指摘されているように伊勢湾地域との共通性を物語るものであるが、尾張を中心とする貝田町式の波及が伊勢、伊賀、美濃など近江の隣接地域にまで強い影響をもって受け入れられているのに対し、近江では、その影響はやく弱まり、壺B、C、細頸壺C1などで、器種或いは部分的な選択をもって受容されており、さらに在地的要素と結合した独自の形式としての展開も認められる。

特にⅢ様式(前半)段階は、近江を含め伊賀、伊勢等東西文化の接触ゾーンである諸地域においては強弱の差はあれ同様の傾向が認められることは、それまでの「受容」かつ「消化される過程」で、各々の地域的特色を強めていったものと考えられる。

Ⅲ-Ⅳ様式段階以降は、凹線文の出現、多用に代表されるように幾内色を強めていくが、その一方、在地型土器(壺C1、H1、H3、壺C、B2)においては、凹線文を欠き、粗いハケ調整と髷(又はハケ)による文様等、形態的にも、当地方の特色をより明確なものとして表出していく。

壺H3は、県内諸遺跡ではⅢ様式(後半)段階以降一般的に認められる壺形式である。腹部の張るほぼ球状の体部に口頸部は筒状又は外反してのび、上端において屈曲して短かく立ち上がる「受口状」を呈する。調整、施文等壺Bとの

共通性が多分に認められ、その発達において壺B類と何らかの関連性に有していたことが予想されるが、又、Ⅲ様式段階以降、伊賀、伊勢諸地域において若干の差異はみられるが、同じく、「受口状」口縁壺が盛行することは留意される。

【集成】琵琶湖地方Ⅱ様式段階において「受口状」口縁を有し、形状、手法の細部にわたって壺Bとの一致がみられるものとして壺型土器Bに分類されているが、これについても壺B同様、おそらくⅢ-Ⅳ様式段階以降のものである。

壺Hは、腹部が大きく張る球状の体部に、細く外反気味にのびる口縁部を有し、上端において屈曲して内反気味に立ちあがる壺でH1、H2に細分される。

本書では、伴出物の帰属時期が不明確なこともあり壺H1の大半をⅢ-Ⅳ様式段階として扱っているが、守山市下之郷遺跡、同吉身西遺跡出土例等においてはその伴出遺物から明らかにⅣ様式段階と属することが判明しており、壺H1の盛行は、Ⅳ様式段階と考えるのが頌当であろう。

器体は粗いハゲ調整後口縁部上端に若干ナデが認められるが、守山市下之郷遺跡出土例は、列点文、波状文等を廻らす。上腹部の加飾は著しく、特にその調整、施文等手法的には、壺H3と同じく壺Bとの一致がみられ、その形態及び技法面における近江固有の諸特徴の発現がみられる。

壺H1は、県内諸遺跡（特に湖南地域）の他、三重県上野市西高倉、同上野市北切遺跡において類例の出土が知られる。

壺Iは、本遺跡Ⅳ様式段階壺型土器の中で最も多量に検出されている。胴長の体部に直口又は屈曲して内反する口縁部を有し、口縁部上端に屈曲線文を有する他は、器体もハゲ調整で仕上げる全く無文の壺である。本遺跡及び県内諸遺跡においては、特にⅣ様式（前半）段階に集中して認められるが、他府県においては、これまでのところ類似品の出土が知られないことから近江固有の壺形式とした。しかし、先述のH1、H2、H3などと異なり無文化が著しいこと、又、器体調整において叩き目へラけすり等併用していることや、【集成】Ⅳ様式段階短頸壺型土器と若干の形質的類似が認め得るなど畿内地域の影響も無視し難い。

次に鉢型土器については、資料が少ない為その傾向等詳らかではないが、全般に形態的には、ほとんど変化は認められない。ただ手法的には、大半が無文で、器体を粗いハゲ調整で仕上げており、在地的要素が濃厚に認められる。しかしⅢ様式段階より畿内中心部において発達をみる袋状口縁を有するもの（【集成】鉢型土器B類）は、近江では、ほとんど出土をみない。

Ⅳ様式段階に至ると直口で凹線文を有する鉢（【集成】鉢型土器A類）が県内諸遺跡において認められるが、一方、半球碗状の体部に外反して開く口縁を有し、器体調整、施文等壺Bと共通する在地的鉢型土器が盛行する。

次に壺型土器について、検討してみると、Ⅱ様式段階に派生をみる壺A2では、本来の「大和型」壺A1に伊勢湾的要素を加味した裝飾性の著しい壺型土器として当地方を始め、伊賀、伊勢、山城等諸地域にその分布が知られている。特に口縁端部外面に施こされる種々の圧痕文、突起、又、口縁部内面に波状文が施文される他、Ⅲ様式（最古）乃至Ⅲ様式（前半）段階以降は、腹部にも直線文、波状文等の文様帯を施すものが一般的に認められるようになる。

しかし、Ⅲ様式（後半）段階以降における壺A2の様態については、県下遺跡においても確定的でなく、如何なる変移を伴うかは明らかにされていない。本書では、系譜関係に若干の疑問の余地も残るが、M366出土E260（壺D-E256、鉢C1-E262と伴出）等が形態及び手法的諸特徴等には継承的要素を有するものとみなして、Ⅲ-Ⅳ様式段階の壺A2として位置づけた。形態においては、腹部の張りが強まり、口縁部屈曲部の湾曲が大きくなる。また、腹部文様帯も著しいものとなるが、口縁部外面部にへラ圧痕文、口径部内面に施される波状文等根強い踏襲もみられる。

「近江型」壺B類については、本遺跡では大半がⅢ-Ⅳ様式段階に属するものであり、Ⅲ様式前半段階では、ほとんど

ど検出されていない。

しかし、上述したように、守山市寺中遺跡、同小津浜遺跡においてほぼ成立段階にまで遡り得ると考えられる資料が出土しており、本書では、成立段階における変遷過程とその成立事情に関して若干論及しておきたい。

寺中、小津浜遺跡の資料を詳細に検討された山崎氏は、甕の調整は、下から上へと刷毛目調整をし、成形後、下一上方向に刷毛目による器面調整が行われるが、その際の掻きとった粘土は指ナデで掃きとらないかぎり、口縁部下に残ることになる。口縁部に更に粘土を貼り足して外上方に肥厚させ、横あるいは斜めに刷毛目調整を加えると受口的なものと成り、偶然的産物として考えたくないが、寺中遺跡の遺物には、口縁部外面の縁がナデで水平に収められず、乱れているものがあり、成形の際の粘土の動いた感じを受けるとし、造賀川系の「く」の字状口縁甕（本遺跡「大和型」甕A1）からの派生を示唆<sup>(註54)</sup>されている。第Ⅱ様式段階に出現を見る「近江型」甕は、口縁部<sup>(註55)</sup>の形態に未だ規則性は認められないが、口縁部内面に波状のハケ調整を有し、又、外端面に刻目を施すものも知られるなど、その装飾法は、甕A2に類似する。かつ、佐原氏は、中期初頭に湖国の人々が、畿内系の甕型土器を自らの装飾法に従って、また東海的手法を取り入れて加飾を施し、さらには、独自の甕型土器Bを作り出したと指摘<sup>(註56)</sup>されているが、「近江型」甕Bの出現が、一連の調整作業に伴った偶発的な産物であったとしても、甕A2にみられる押任せ、突起等の装飾性指向にうながされた近江の人々の独創性もまた考慮されねばならないであろう。

第Ⅲ様式段階以降の「近江型」甕の変遷状況については、明らかではないが、口縁部の形態は次第に「受口」状口縁として明確なものとなり、口縁部内面の波状文は減少する。さらにⅣ様式段階に至ると腹部の張りが強まり、腹部屈曲部には着しい湾曲がみられ、口縁部は、鋭く直立及至内傾して立ち上がる。口縁立ち上がり部上端には強い横ナデが施され、下端及び口縁部内面には列点文を施すものがある。腹部の文様帯は、乱雑ながら加飾傾向を一段と強め、列点文、直線文、波状文、弧状文等を施す。そして、Ⅲ-Ⅳ様式段階以降の「近江型」甕の盛行に伴い、その形態のみならず、調整、施文等の手法的発達は、在地系壺、鉢等他器種にまでも大きく影響し、畿内色に對峙する在地色として明確<sup>(註57)</sup>していく。

以上、本遺跡出土土器の中で、在地的な諸形式について更めてその系譜関係等に関して若干の検討を行ったが、本遺跡出土土器全般を概観すると、その基調を成しているものは、前期以来の淀川水系を介した畿内地方（北部）との結びつきであり、その過程でⅡ様式-Ⅲ様式前半段階における伊賀、伊勢、東海西部との交流を通じた東の文化との接触は、地域的特色を強める切掛となったと考えられる。

むろん近江は、その真中に琵琶湖という広大な湖を有し、常に湖西、湖北、湖東、湖南といった小地域間の格差は無視し難く、本遺跡資料のみで近江の地域性を語ることは不可能なことでもある。したがって、この問題については、近江内部の地域性の検出と相まって、さらに論究する必要がある。

次に、集落との関係にふれたいが、本遺跡の集落については、中期初頭に前期以来の集落が洪水で廃絶して以降中期中葉末まで集落はみられず、ここでは、中期後葉の周溝墓出土土器が問題になる。

### (3) 周溝墓出土土器と集落出土土器

方形周溝墓群のうち、Ⅲ様式の後半において洪水によるとみられる、やや大きな断絶のあることは上述の通りであるが、この洪水によって、Ⅱ様式後半からⅢ様式前半に断絶して築造されてきた大半の周溝墓が埋没、あるいは破壊したとみられる。特に遺跡の中央を東から西へ大きくえぐる旧河道Cは、その痕跡の最大のものである。そして洪水の後、かなり早い中絶をはさんで、遺跡南端と、遺跡北端において、新たに造墓が開始されるのである。これらは同じく洪水後に遺跡東部から形成されだした集落と、ほぼ同一歩調をとっており、深いかわりがあるが、その点については別に

検討するとして、ここでは、遺跡の南端と北端で形成された、二つの墓域の土器群を対比し、その性格を検討しておくたい。

これら2群の墓域は、おおそ500mを隔てて、しかも、その中央に旧河道Cがあるなど明らかに性格のちがいが認められるが、南端のAブロックで計13基、北端のLブロックで41基と多数を数え、さらに細かくグループに分けうる可能性もあるし、それらの間には若干の時間差をもって築造されたものもあると考えられるが、この墓域群自体が、再びIV様式後半には、大洪水により、完全に埋没しており、ほぼⅢ様式末からIV様式前半の中におさまることが指摘できる。

まず大まかな器種構成上のちがいとして指摘できるのは、Aブロックの土器群には、鉢と甕類が全くみえないことである。Lブロックには、脚台付の鉢Aや、甕についても、Aタイプの各種、Bタイプの各種が、かなり認められるのである。

まず壺では、集落では多くみられる、Aタイプ、Bタイプが、いづれにおいても、ほとんどない点が注意される。わずかに、LブロックでA1タイプが1点みられるのみである。Cタイプについては、Lブロックで、C1がみられるのに対し、Aブロックでは、全く認められないこと、DタイプはLブロックのみにみえ、EタイプはAブロックのみで出土をみているが、Fタイプは、両方で出土が知られる。Lブロックのものは、口縁部の屈曲がシャープで、体部もスリムな形態をとるのに対し、Aブロックのものは、体部もやや張り、口縁部も、カーブを描いて外反しており、やや新しい様相を示している。

壺Gには、大きな差異は認められないが、Lブロックのものに比べ、Aブロックのものに凹線文の発達が著しく、Lブロックでは、ハケ目を残すものが目立っており、ややAブロックのものに、新しい様相が認められる。

壺Hは、IV様式の後半に盛行する壺であるがこの段階では、口縁部の受口状化はすなずでない。ただAブロックの、EO13のように、体部の形態、文様構成において、IV期の後半に一般化するものが、すでに認められ、Gブロックのものに比べ、新しい要素と言える。

壺Iでは、I1については、大きな差異はないが、やや古い様相を示すI2は、Aブロックでは認められず、一応のちがいが言える。ただ、AブロックではIの出土は少なく、断定はできない。

細頸壺、水差型土器、高杯などについては、形態や手法において、大きな差異はないが、Aブロックの細頸壺や水差型土器における凹線文の手法は著しく、若干の時期差を示す可能性はある。

以上の若干の検討によって、同ブロックの方形周溝墓の土器群は、ほぼ並行しつつも、Aブロックのものに、やや新しい様相のあることが明らかになった。このことから、ただちにAブロックにおける造墓が、Gブロックに比して、ややおくれたと判断できないことは、Aブロックにおいても、旧河道Bによって削平された部分に、さらに墓域の広がる可能性が大きいことから指摘できるが、一応の傾向は判明すると言えよう。次に集落とのかかわりについて、検討してみよう。

壺穴住居跡出土資料については、残りが悪く、器種においても不揃いであるため、集落を圍繞し、ほぼ壺穴住居跡の資料と共通したあり方を示す、SD151とSD152の土器群との比較を試みたい。

まずAブロック出土土器では、資料の残存状況もあって、広口壺Aは全く認められず、Cタイプが一点あるほか、Dタイプの存在は知られていない。壺Eタイプは、下流のLブロック SD151下層には認められる。が、SD151上層や、SD152では認められ、新しい様相となるかも知れない。ただ、壺Fについては、下流のLブロックや、SD151上層、SD152A、SD152Bではみえており、ほぼ同じ傾向を示している。壺Gでは、Aブロックのものは、凹線文を多用しているが、下流のLブロックや、SD151やSD152下層では、凹線文をみえず、ハケ目によって調整するものも多く、Aブロックのものに、若干、新しい様相がうかがえる。壺H、I、Jなどは、周溝墓からの出土例は多いのに対し集落

Aブロック 方形周溝墓	
Lブロック 方形周溝墓	
SD151下層	
SD151上層	
SD152A下層	
SD152A上層	
SD152B	

からの出土が少なく、供炊専用の土器の可能性が高いが、壺Ⅰでは、SD152出土資料に類似したものが多く、Lブロックのものには、SD151下層出土のものときわめて似た例が認められ、Aブロックのものに、やや新しい傾向が認められる。

細頸壺では、SD151のものが、直線的な口頸部をもつものに対し、Aブロック、LブロックとSD152のものは、内湾気味で、共通性が認められる。このことは、水笠型土器にも同じ傾向がうかがえる。

高杯では、周溝墓出土のものは、垂下する端部をもつものではなく、SD151のものに近い形態、手法をもっている。なおAブロックでは、甕、鉢の供炊は全く認められず、Lブロックとの違いを鮮明にしている。

以上みたように、Aブロックの資料は、SD151の資料と共通する点は、ほとんどなくSD152の資料と共通するところが多い傾向が明らかになった。

次にLブロックの土器群であるが、形態、手法等において、SD151、SD152との共通性がきわめて高い。

まず壺では、Fタイプか、SD151上層、SD152に共通しているし、壺Ⅱは、SD152のものに類別がある。GタイプはSD151、SD152に類別が多い、Iタイプでは、SD152と共通性が高いが、一部SD151下層の資料とも共通性をもっている。

細頸壺では、上述のように、SD152との共通性が高く、水笠型土器や鉢においても同様の傾向がうかがえる。ただ高杯においては、SD151上層や、SD152下層の資料との共通性が高く、若干ちがいをみせている。

甕では、A1、A2では、SD151の資料と共通して、タキ目を残すものが多いが、A3-A4タイプでは、SD151上層、SD152との共通性が明らかに高くなっている（特に口縁端部の処理など）。Bタイプでは、良好な資料は少ないが、SD151下層にみえるような古いタイプのものは少なく、SD151上層、SD152の資料との共通性が指摘できよう。

以上のように、A、L、二つのブロックに分けて、SD151、SD152の資料との対比を試みてみた。その結果、AブロックのものはSD152の資料との共通性が高くSD151と併行する部分は、ほとんどないことが明らかになり、Lブロックについては、SD152と併行することは、間違いないが、一部、SD151とも併行する可能性が指摘できた。そして、全体的な土器の様相においても、Lブロックのものが、SD151やSD152の資料にかなり親縁性のあることも、指摘できた。したがって、Lブロックについては、下流のSD151やSD152に囲まれた集落の風域として、ほぼ間違いないと考えられるが、Aブロックについては、集落の拡大過程にかかわるものか、別の集落とかかわる可能性も考えられよう。

(大橋美和子)

#### 註

- (1) 佐原 真「畿内地方」(小林行雄、杉原荘介『弥生式土器集成』本編2、1968)
- (2) 水野正好「大中の湖南遺跡調査概要」(滋賀県教育委員会、1968)
- (3) 佐原 真「先史時代」(『彦根市史』上册、1960)
- (4) 田辺昭三「大津市南志賀遺跡発掘調査概報」(大津市教育委員会、1959)
- (5) 福岡遼男「中期埴原土器の一類型」(『浜西線関係遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会、1973)
- (6) 岩崎 茂「寺中遺跡発掘調査報告」(『守山市文化財調査発掘調査報告書』第12冊、守山市教育委員会、1983.3) 同「寺中遺跡発掘調査概報」(『守山市文化財調査報告書』第20冊、守山市教育委員会、1986.2)
- (7) 谷本悦次ほか、「東庄内B遺跡」(『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』、三重県教育委員会、1970)
- (8) 仲見孝雄「上栗田」(三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ、1960)
- (9) 宮崎幹也「長命寺湖底遺跡発掘調査報告書」(滋賀県教育委員会、1984)
- (10) 大橋信弥「金ヶ森遺跡発掘調査報告書」(滋賀県教育委員会、1980)
- (11) 福井英治「田兼遺跡発掘調査報告書」(尼崎市教育委員会、1982)
- (12) 注(3)に同じ
- (13) 伊藤久綱「納所遺跡—遺構と遺物—」(三重県教育委員会、1980)
- (14) 高橋信明、加藤安信「朝日遺跡」(愛知県教育委員会、1982)
- (15) 杉原荘介、大塚初重「京都府深草遺跡」(『日本農耕文化の生成』本分篇、1961)

- (16) 伊藤康、百瀬正恒「京都市出土弥生時代から古墳時代の土器資料」(財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1984)
- (17) 佐原 真「鳥冠直遺跡」(「東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書」文化財保護委員会、1965)
- (18) 小林行雄「大和唐古弥生式遺跡の研究」(京都帝国大学考古学研究报告16、1943)
- (19) 小竹森直子「近江における弥生前期土器研究の現状」(滋賀県埋蔵文化財センター紀要1)、1986)
- (20) 松浦俊和「鴨田遺跡」(「国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書」II、滋賀県教育委員会、1972)
- (21) 尾崎好則「針江南遺跡の調査」(「高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要」5、滋賀県教育委員会、1985)
- (22) 佐原 真「藤雲出」(院町町文化財保護委員会、1964)
- (23) 井藤曉子「池上遺跡」第二分冊【土器編】(大阪文化財センター、1979)
- (24) 森岡秀人「西ノ辻N式併行土器群の動態—畿内第IV様式の細分作業と関連して—」(森岡次郎博士古稀記念文化論集、1982)
- (25) 岩崎直也「湖東における高地性集落の調査」(「滋賀文化財だより」68、1972)
- (26) 畑本政美「金森東遺跡調査概要報告書」(守山市文化財調査報告書第14冊、守山市教育委員会、1984)
- (27) 青我恭子「忌地遺跡」I【本分編】、III【資料編】(瓜生堂遺跡調査会、1980、1981)
- (28) 佐原 真「琵琶湖地方」(小林行雄・杉原莊介【弥生式土器集成】本編2、1968)
- (29) 谷口 徹「神崎郡能登川町宮ノ前遺跡」(「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」Ⅷ-5、滋賀県教育委員会、1980)
- (30) 葛野春樹「馬場遺跡発掘調査報告書」(滋賀県教育委員会、1984)
- (31) 注(24)と同じ
- (32) 森井貞雄「河内地方の畿内Ⅲ・Ⅳ様式編年の一視点」(「大阪文化誌」15、1962)
- (33) 丸山竜平「大津市堅田真野春日山遺跡調査報告書」(昭和五十年年度 滋賀県文化財調査年報、滋賀県教育委員会、1976)
- (34) 丸山竜平「野洲郡野洲町玉之里遺跡発掘調査報告書」(昭和五十一年年度 滋賀県文化財調査年報、滋賀県教育委員会、1977)
- (35) 尾崎好則「高島郡今津町北仰・桂遺跡」(「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」XⅡ-8、滋賀県教育委員会、1984)
- (36) 山崎秀二「下之郷遺跡発掘調査報告書」(「守山市文化財調査報告書」第20冊、守山市教育委員会、1986) 同「下之郷遺跡発掘調査報告書」(守山市文化財調査報告書第17冊、守山市教育委員会、1986)
- (37) 山崎秀二「吉倉西遺跡発掘調査報告書」(守山市文化財調査報告書第32冊、守山市教育委員会、1987)
- (38) 井藤曉子「入門講座、弥生土器—近畿3—」(『月刊考古学ジャーナル』205、1982)
- (39) 鬼柳彰「長沢遺跡」(「国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書」Ⅲ、滋賀県教育委員会、1972)
- (40) 吉岡博之「乙訓地方中期弥生土器の概観」(「長岡京古文化論叢」、1979)
- (41) 石原道洋「内堀遺跡」(「内堀遺跡・後藤橋遺跡発掘調査報告書」八日市市文化財調査報告2、八日市市教育委員会、1982)
- (42) 三宅 弘「大伴遺跡発掘調査報告書」(滋賀県教育委員会、1983)
- (43) 宇佐晋一、森川保男「伊賀における弥生土器・土師器の集成」(『伊賀郷土史研究』4、1966)
- (44) 新田洋、田中喜久雄「阿山郡大山田村北切遺跡」(「昭和58年度農薬基金整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書」三重県教育委員会、1984)
- (45) 紅村 弘「東海の先史遺跡 総括篇」(1967)
- (46) 今村道雄、阿部幸一「瓜生堂遺跡」Ⅲ(瓜生堂遺跡調査会、1980)、「瓜生堂」(大阪文化財センター、1980)
- (47) 山口順子、兼康保男「高島郡今津町弘川遺跡」(「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書」Ⅷ-3、滋賀県教育委員会、1980)
- (48) 谷本敏次「津市河辺町・亀井遺跡」(「昭和47年度農薬基金整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書」、三重県教育委員会、1973)
- (49) 『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅲ(滋賀県教育委員会、1987)
- (50) 注(18)と同じ
- (51) 注(1)と同じ
- (52) 森岡秀人「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」(「高地性集落と倭国大乱」、1984)ほか
- (53) 大橋信次「近江型壺についての若干の整理」(『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、前掲)
- (54) 山崎秀二「寺中遺跡調査年報」(「守山市文化財調査報告書」第20冊、守山市教育委員会、1986)
- (55) 注(25)と同じ

## V 服部遺跡の方形周溝墓をめぐる問題

—むすびにかえて—

### 1. 形態と規模

服部遺跡で検出をみた方形周溝墓は、約80,000㎡の範囲で、総計360基にのぼるが、弥生中期末の洪水により、周溝墓の分布する微高地中央が大ききえぐられ、多数の周溝墓が削平されており、また調査域の外にも、さらに広がることは明らかであって、これに倍する数値が予想される。

#### (1) 平面形態について

服部遺跡の周溝墓は、一般的に均整な方形ないし長方形を呈するが、かなりいびつな円形に近いものもあり、多様な形態をとることが知られる。周溝については、そのほとんどが共有する形態をとり、深いV字形のものが多く、単独に廻るものや浅い皿状を呈するものも、かなり認められた。いわゆる「陰溝部」はほとんど認められないが、一般的に各コーナーは、浅くなっており、後世の削平の状況によって、「陰溝部」が生じる可能性が考えられる。360基のうちA区に所在するM002は、台状部の一辺20メートルをはかる巨大な周溝墓であるが、周溝の外周は径32メートルの円形を呈しており、例外的な形態を示す。これはM002が、周溝墓群の中で特異な存在であることを予想させよう。

#### (2) 盛土について

周溝墓の大半が本来盛り土をもっていたとみられるが、後世の削平もあって残存するものはきわめて稀であった。微高地の縁辺部や低平地に築造されたM023、M029～M037などでは、盛土の大半が残存しており、盛土が板築的な手法によって、丁寧に積み上げられていることが明らかになった。このうち最も残りのよいM033の場合、厚さ1.2メートルをはかり、一般的には1メートル前後の盛土のあったことが推測される。大半の周溝墓の所在する微高地には、弥生前期と中期初頭の集落があり、青灰色砂質粘土の地山に、黒色粘土からなる遺物包含層が覆っており、盛土もかかる地山と包含層が互層となって形成されているのである。したがって盛土の大半は、周溝掘削時の残土によるもので、新たな運土は少ないと考えられる。盛土は弥生中期の地山である、黒色粘土の遺物包含層直上から積み上げられており、後述するように大半の埋葬主体は、盛土形成後に壙方を掘削していると見られ、主体部のうち浅いものは盛土内に納まり、深いものは地山まで達することになったと考えられる。調査の初期には、黒色粘土の遺物包含層を盛土と誤認していたため盛土の内容が十分に認識できなかったが、残存状況の良好な遺構調査の進展で、その実態が明らかとなり、それと同時に、下層遺構の調査も本格化することになった。

#### (3) 周溝について

周溝は単独にめぐるものは少なく、共有するものが大半をしめる。ただし新しい周溝が掘削される際、既設の周溝を全面的に再掘削することが多く、埋没条件が同一の場合、切り合いや区別はきわめて困難であった。周溝の埋没状況は、一般的に洪水によって一気に埋没しており、洪水堆積土と見られる青灰色泥砂により厚く覆われているが、第一次的な堆積は、青灰色粘土に黒色粘土ブロックが混入したもので、盛土や地山の崩壊土の流入とみられる。なお、周溝の形態には、深いV字状のものと浅い皿状のものがあるが、前者に、より古いものが多く、後者に新しいものが多い傾向が認

められる。中期後葉に位置づけられるM002が、上述のように、方形の台状部に外周が円形を呈する特異な形態を示すのは、周溝の形態の多様化の第一歩を示すものといえよう。なお周溝墓が順次築造されていく場合、後述するように、一列に連結していく場合と、四方に水がくめれるに拡大していく場合があり、後者の場合、周溝の形態が多様化し、いわゆる「残地」との区別を複雑化している。

#### (4) 主体部について

墓である以上埋葬主体があつて当然といえるが、実際に主体部を検出したのは、検出した周溝墓の二割に過ぎず(76基)、大半が後世の削平により消失した可能性が大きい。ただ、盛土や黒色粘土の遺物包含層では、遺構の検出はきわめて困難であり、掘り方が地山に達していない場合には、あつたとしても検出できなかった可能性が大きいと考えられる。したがって、主体部は、検出し得たもので、それが一基のすべての埋葬主体であつたと断定できないわけであるが、一応検出し得たものに限定するなら、一つの墓で2基以上の複数の主体部と検出したものは合計で19基、単数埋葬が57基であつた。複数埋葬のうち、最も多いもので、M167の4基が最高で、3基を確認し得たものは、M319、M343、M406、M357、など10基、2基の埋葬主体をもつものは、M037、M039、M110、M140、M324、M405、M334など、8基であつた。かかる傾向は、愛知県朝日遺跡等でもみられるもので、近畿中心部から離れるほど、単数埋葬が多くなるようである。これが、社会構造上の差異を背景とするものか、単なる伝統、習慣によるものかは、現時点では判断し得ないところである。

内部主体についてはM326で、木棺がほぼ完存していたほか、M426などで棺材の一部が残存しており、各主体部の検出状況からも組合式の木棺を使用していたことが、ほぼ推測される。ただ、主体部とみられる土盛の中には、明らかに木棺の痕跡のない不整形なものもあつて、他の形態も予想されるが、その内部の明らかにできるものはなかつた。

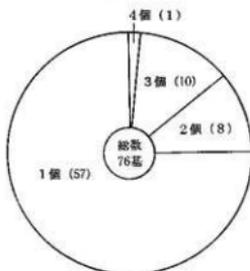
内部主体の構築方法については、M326で詳細に検討されており、ここでは省略したい。主体部の形態や、方位、或いは位置等は、かなり多様であつて、一応中心部に置くことは意識されているようであるが、必ずしも強い規制力あるものとはみなされず、任意に決定された可能性が大きい。(第9表)

#### (5) 規模について

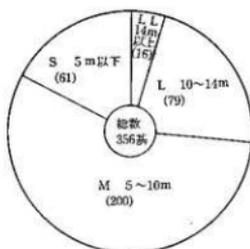
上述したように、総数359基にのぼる周溝墓のうち、最も規模の大きなものは、M002で、東西16.4m、南北18.8mをはかり、これにほぼ比するものが、巨大な木棺を遺存していたM326で、東西13.3m、南北19.7mをはかる。そこで、台状部の大きさで、全体の中での比率を出してみたのが、第10表である。そこでも明らかなように、いづれかの一边が14m以上のものは、わずかに16基、10m～14m未満が79基、5m～10m未満が200基、二辺が5m未満のもの61基となり、5～10mのものが過半を占めることが判明する。そして、抜きんでた大きさを示す17基の分布状況を見てみると、広大な墓域の中に、ほぼ均等に散在する状況をとっており、特に集中する傾向は全くないところから、墓域の中の各ブロックの盟主的位を占めることが推測されてくる。そして、同じように、10～14mのやや大型のものの分布を見てみると、B・Jブロックに、かなり集中するほか、ほぼ平均的に散在するが、C、G、ブロックでは、やや少ない傾向がうかがえる。そして、C、Eブロックでは、小型の5m未満のタイプが、比較的多い傾向がある。(第11表)

以上のように、台状部の規模によって、各ブロック間の差異や、ブロック内の格差が推定されるわけで、後に検討するグルーピングや変遷過程について、重要な示唆を与えると考える。

第9表 埋葬施設数の構成



第10表 台状部規模の比較



第11表 ブロック別規模比較

	L	L	M	S	計
A	3	7	3	0	13
B	0	10	8	4	22
C	0	2	16	9	27
D	0	8	31	7	46
E	1	6	11	9	27
F	3	9	18	8	38
G	1	2	14	4	21
H	0	4	20	9	33
I	4	8	31	3	46
J	2	6	4	0	12
K	0	10	15	5	30
L	2	7	29	3	41
<b>計</b>	<b>16</b>	<b>79</b>	<b>200</b>	<b>61</b>	<b>356</b>

(6) 残地について

本報告では、「残地」という概念を、かなり使用しており、その性格について、若干コメントを加えておく必要があらう。周知のように、服部遺跡では、旧河道等により、後世に削平された部分を除き、調査地のほぼ全域において、方形周溝墓が検出された。しかも上述のように、周溝を連続、或は共有するものが多く、調査域の大半が遺構となっている。周溝墓の調査をすすめる段階では、調査期間に追われていたこともあって、周溝のある部分は基本的には、一応墓と考えて調査を進めた。ところが、最終的に集めた実測図、或は断面図を検討してみると、その中に墓と考えるについては、若干問題のあるものが、多数出現してきた。

これは、墓域の形成や、墓の築造方法にかかわる点でもあ

るが、墓域の形成そのものが、時期に応じて移動したというのではなく、いくつかのブロック内で、順次築造されていった状況がうかがえるのである。このため、各ブロック間に、ほとんど大きな空間を生じることはなく、若干の空地が所在することになるとともに個々の周溝墓を築造するにあたって、やむをえず、活用できない土地が生じてきたとみられるのである。こうして、各周溝墓間のいくつかの箇所、このような遺構でない小さな空間がほぼ異なる二つの原因によって生じたのであるが、実は、この二者を区別するのは、きわめて困難なのである。そこで本書では、これらを「残地」として一括し、調査時では、周溝墓の一部と考えたものも含めて、このような呼称を用いることにしたのである。ただ、かかる残地の検出によって、上にみたような、各ブロックの分離や、それぞれのブロック内における築造過程が、遺構のあり方から推測しうる手がかりとなり、空地とともに、さらに追究していく必要があると考える（なお後述）。

(7) 供献形態について

墓に対する供献、副葬品としては、すべて土器であり、一部を除いて、周溝内において検出したものである。ただ、本来的に溝内に供献されたものでないことは、大半が、溝底より浮いた状態で、しかも転倒して出土していることから明らかであろう。そして、供献土器の出土分布からも、若干示唆が得られる。すなわち、供献土器の出土分布は、かな

りかたよった傾向を示すのである。たとえば、Aブロック、Bブロック、Cブロック、Dブロック、Eブロック、Iブロックでは、比較的供献が認められるのに対し、Fブロック、Gブロック、Hブロックでは、ほとんど供献土器が認められないのである。このF、G、Hの3ブロックは、いずれも、旧河道Cの近辺にあり、その関連で削平の著しい部分であって、洪水の直接的な影響で、流失した可能性が考えられるのである。これに対し、他のブロックでは、洪水の関連による増水により、溝内に転落はしたものの、流失はまぬがれたのではなかろうか。このように考えてくると、供献土器は、本来的には、周溝の内側か外側に供献されていた可能性が高くなるのである。その点で注目されるのは、いくつかの供献土器の出土状況である。

(大橋信弥)

## 2. 群の構成について

グループングにあたっては、次の点に留意した。

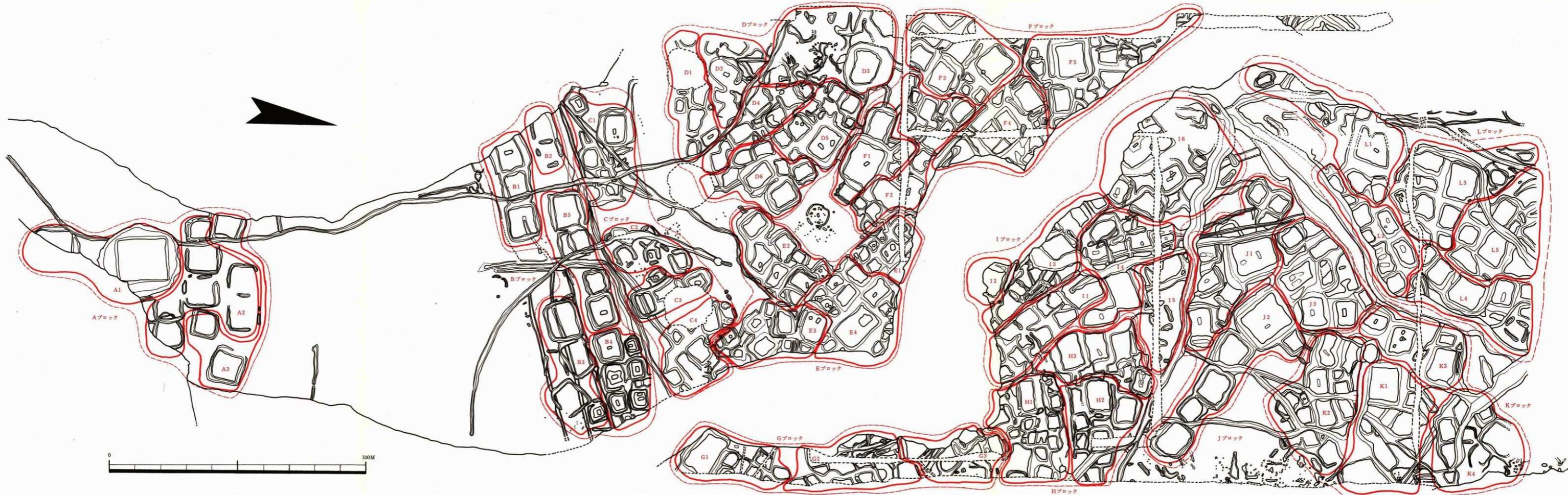
- (1) 連結状態
- (2) 残地の状態・分布
- (3) 中軸線の方向
- (4) 空間地
- (5) 供献土器の時期
- (6) 周溝の形態

### (1) Aブロック

A地区に分布するAブロックの方形周溝墓13基は、B地区以北の多数の方形周溝墓とは地域を変え、独立的に群を構成している。

Aブロックの方形周溝墓13基については、細かくみると大きく2群が判別されよう。その1つは、規模が大きく、周溝の外側線を円形に、内側線を方形に保つM001、M002の特異な形態をもつ周溝墓(南群A1、小群)である。両者とも旧河道Bによって挟られているが、南北方向に2基連なっている。他の方形周溝墓は、現況で南群をL字状に囲む位置関係にあり、南群に比べて規模の小さい、いわゆる通常の方形周溝墓(北群)に相応するものである。もともと、北群も厳密に軸線を分析すると、A1小群と軸線をほぼ同じくするM003～M008・M012・M013の8基(A2小群)と軸線をやや東に振ったM009～M011の3基(A3小群)に細分することが可能となろう。

ここで、類型化した方形周溝墓について、その群構成のあり方に留意しながら、さらに詳しくみてみよう。南群の2基は、南北方向に並存の位置関係にある。A1小群と軸線を同じくするA2小群は、旧河道に挟られているため全容を把握するには至らないものの、A1小群の2基を囲むように存在している。このA2小群8基について、もう少し細かくみていくと、まず、東西方向に直線的に連なる傾向にあることが看取されよう。M004とM005、M006～M008、M012とM013の3連である。さらに、南北に隣接する各連相互の関係をみると、隣どうしが東西方向に半分ずつずれた、いわばちどりの配置関係が意識されていたようである。A1小群及びA2小群の各方形周溝墓の構築順序については、周溝が単独に建ち上がる傾向が強いため、ほとんど不明であり、わずかにM004—M008の切り合い関係が判明しているに過ぎない。ただ、A1小群とA2小群は、軸線を同じくすることからも、相互の強い関連のもとに構築されたことが予想され、弥生時代中期後半の段階で、すでに位置・規模・形態の異なる二者が存在する意義は大きい。



第52図 服部遺跡方形周溝墓の群構成

一方、A3小群の3基は、軸線をやや東に振る一群のものであり、M011の周溝がA2小群のM006の周溝を完全に包括する形で後に掘開されている関係から、A1小群やA2小群よりも後出的と予想される。ただ、A2小群を避けて構築されていることから、いまだ先の方形周溝基群の存在が意識されており、構築された時代も同期の内に収まるものである。

### (3) Bブロック

水田域の北端に位置する群で、東西に長い列をなしているのが一見してわかる。両側の旧河遺により数基が削りとられた可能性があるが、現状では東西に長くのびるものの、大きくは東西の二群、細かくみるとB1～B5の小群が予想される。B1としたのは、M015～M017、B2としたのは、M025、M026、B3としたのは、M019～M021、M023、B4としたのは、M031～M037、B5はM027～M031である。B1、B2については並列した二小支群で、B1が3基、B2が2基連結しており、検出し易い。B3は5基で屈曲しながら連結する。B4は二列に並ぶが、溝がつながり別群にする要素が少ない。B5は、B2とB4の間にあり、4基が並ぶ。本ブロック内ではAブロックのように超大型ではなく、格差は極端ではないが3段階程度のランクがありそうである。またAブロックのように単独化傾向の周溝基が支群に必ずあることもない。各小群はそれぞれ、若干の空地を間にもち、それぞれ小群内は周溝を連結していることが明確である。築造順序は、必ずしも明確にできないが、小群内においてはB1でM015～M016～M017、B4でM023・M029～M033～032～M031、M036～M032、M035～M031、B5でM027～M028、M030～M029の順序が切り合いなどから、一応推定できる。なお、供献土器は古くⅢ様式以前であり、服部遺跡内では最も早い一群である。

### (3) Cブロック

Bブロックの北に接して、Bブロックと同じく東西に長く分布する一群である。Bブロックとの間には、やや広い空地があり、北側には、谷状の低平地が広がり、D、Eブロックとの境界をなしている。ブロック内は大きく、東西の二群に分けられ、或は別ブロックとなる可能性もある。西一群は、大型のM039のまわりに、M038、M060、M040～M044が、大半周溝を共有して群集しておりC1小群とすることができる。東の一群は、空地、残地、或は連結状況からみて、三つの小群にわけられる。C2は、M045～M049、C3はM050～M053、C4はM054～M060でこのうちC4はさらに二つの小群に分離できる可能性がある。

Cブロックの場合、各小群は、Bブロックのように直線的に接続するのではなく、C1では大型のM037を中心に、C3でも、大型のM059を中心に、その周囲に接続する形態をとっており、わずかにC2において、M051～M053がBブロックと同じように、直線的な接続を示している。

築造の順序の判明するものはないが、小群内においても、切り合い関係が不明瞭で、推定することはできなかった。また、供献土器も比較的少なく、時期についても、明確ではないが、Bブロックに併行ないし、後続して築造されているとみられる。

### (4) Dブロック

このブロックは、Cブロックの北に接し、北には若干の空地ををさんでFブロックと、東は、やや広い空地ををさんでEブロックに接している。大半が接続、共有しているため、細かく分類することは不可能に近いが、中型クラスのもの、その内部に散在していることを手がかりに、少し憶測しておきたい。Dブロック内では、いわゆる大型のものはないが、台状部と周溝の規模からみて、M087とM110が、飛びぬけている。これにつづく中型のものとしては、M070、M122、M123、M100などである。これら中規模クラスの分布や、残地、連結方向などを考慮するなら、おおよそ6つの小群が想定できる。D1としたのは、M067、M072～M074、M079、M081などで、直線的な接続方式をとってい

る。D2は、M070を中心に、その周囲に接続するM068、M069、M071、M076、M077などの一群、D3は、M087を中心に、M082～M086、M089～M094などの一群、D4は、M100を中心にM096、M099、M101、M113～M115などの一群、D5はM110を中心に、M098、M104、M105、M109、M111、M112、M120などの一群、D6は、M122、M123を中心に、M119、M121、M116、M118、M124、M125などの一群である。

Dブロック内の変遷過程を考える上で、注目されるのは、やや大型のM110、M122の供献土器が、これらの中でも、最も古く位置づけうることであり、大型のものが、群形成の端緒になるとみられることである。ただし、小群内における、築造順序で推定する手がかりは認められなかった。

#### (5) Eブロック

このブロックは、Dブロックの東に、やや広い空間地をおいて広がるもので、Cブロックとは、一部で接する部分もあるが、やや広い低平地が中間に存在する。またFブロックとも一部で接するが、東と北は、旧河道Cによって削平されている。このブロックの場合も、大半のものが共有、接続関係にあって、細分することは困難であるが、ブロック内の中央付近に、大型のM170があり、中ないし大型とみられる、M142、M167、M158などが散在しているところから、細分を試みてみたい。

E1小群は、M142を中心に、M136～M141からなるとみられ、E2は、M158を中心にM150～M155、E3はM167を中心にM162、M163、M168、M169、E4はM170を中心にM143～M149、M156、M157、M164、M165、M171などからなり、いずれの小群も、比較的直線的な連結形態を示している。

供献土器は、比較的多く、畿内第Ⅲ様式の古い段階に併行するものが多く、それらの中でも、大型のM170、M158などのものがより古い様相をもっており、Dブロックと同じく、大型の周溝墓が、群形成の出発点となっていることが判明している。

#### (6) Fブロック

Fブロックとしたのは、Dブロックの北、Eブロックの西で、旧河道Cより西に分布する一群である。これらは、その軸方向により北群と南群の大きく二群に分かれ、或は別ブロックとすべきかも知れないが、北群が旧河道Cと調査域外によって、その一部の様相しか判明しないので、ここでは一つのブロックとして扱うことにした。

まず南群は、ほぼ東西方向に直線的な配列をとり連結している。そして、その中でも、M126と、M188が突出した規模をもっており、それぞれに隣接するM130、M187、少し離れて、M192が中規模のものである。これらを参考とするなら、F1の小群は、M126を中心として、M108、M109、M127、M128、M131など、F2は、M130を中心にM132～M134、M179～M186、M196などで、F3の小群としては、M192を中心にM172～M177、M191、M194、M195など、F4はM188を中心に、M187、M189、M200、M203などで、小さな残地が、その間に介在することが多い。

北群は、細分は不可能で、F5として一括したい。M207が突出した規模をもっており、その回りに、M198～M216が、ほぼ東西を軸として分布している。北群の配列方向は、比較的直線的であるが、少数で断定は控えておきたい。

このブロックでは、洪水の影響が著しく、供献土器が、きわめて少ない。ただ、少数の土器からも、このブロックが、畿内第Ⅲ様式の前半段階に形成されていることは明らかであり、特に抜きんできた規模をもつ、M126の供献土器は、この群内でも、最も古い様相をもっており、このブロックでも、造墓の起点に大型の周溝墓が推定される。

#### (7) Gブロック

このブロックは、旧河道Cの東、北はHブロックと接する。東側は調査域の外で、南北に、細長いブロックである。中央付近に低平地が広がり、大きく南北二群に分離可能である。

南群には突出した規模のM221に並行するように、M222～M230が連続しており、細分は難しく、G1小群としておきたい。北群の場合は、遺構が重複、縮減して、あまり明確でないが、M231からM238までのG2と、M239からM243のG3の二群に分離できるかも知れない。

ここでは供献土器も少なく、明確に変遷をたどることは難しいが、大型のまわりに、小型の周溝蓋が群集する傾向は、明確に看取されるであろう。

#### (8) Hブロック

このブロックは、Gブロックの東に接して所在し、東は調査外、北はかなり広い空地地をはさんで、Jブロックが存在する。西にはIブロックが、ほとんど空地地なく接している。HブロックとIブロックを分離したのは、それぞれのブロック全体の軸方向が、Hでは東西、Iでは南北であり、全く異なること、ブロックの北端付近に、少し空地地がとれることなどからである。

ブロック内は、一部を除いて、完全に共有しており、細分は困難であるが、M268の南側の残地や、若干の空閑、或はM267の西の残地などを考慮するなら、4つの小群に分類される。H1は、M248～M256で、M256が中型で、これを中心に、小型のものが三列に連結してのびている状況がうかがえる。H2はM259～M268で、中型のM267を中心に東西方向に小型のものが連結しているが、中型に近いM266のみが単独でM267に連結していることは注目される。H3小群は、M271～M277の一群で、基本的には南北方向に連結していることが看取される。それらの中でM276が中型でも大きく、M275、M274と比較的大きいものが、中心部で連結している。この群では、やや軸をかえて連結しているM273の存在が注目される。H4小群は、M307を中心に、その周囲に連結するM305、M306などからなる。中型でも大きいM336を中心に、H3小群とも、やや空地地をおいて、独立しており、Hブロック内では異質であるが、他のブロックとも離れており、中軸方向からHブロックに含めた。なお、このブロックでは、いわゆる抜き出た大型のものではなく、中型でも、比較的大きいものが数基で、5m未満の最小のものが9基と多い点も注目された。

#### (9) Iブロック

このブロックは、南と西が旧河道Cにより画され、東はHブロックと接する。北側はJブロックとの間に、若干の空地地があり、分離することが可能である。

ブロック内については、特に南半分が、複雑に共有しており、細分はむずかしいが、一応、六つの小群に分けることができると考える。まずI1は、大型のM291を起点として、南東方向に、2列でのびる一群で、M278～M284、M288、M287、M292などからなる。I2小群は、M293のみである。M294などとの間に残地があり、中軸も、次のI3小群と異なっており、旧河道Cにより削平された部分に、群の中心があったとみられる。I3小群は中型のM299を中心に、東西に直線的に連なるもので、M286、M294～M297、M322、M323などからなる。I4小群は、大型のM290を起点に、西に連結するもので、中型のM289のみが、東南に単独で連結している。M310～M315の8基で構成される。次にI5小群は、中型のM307を中心に、その周囲に連結するパターンで、M303、M308、M309、M315が西方向に、M332、M333が北に連結していた。最後にI6小群は、AブロックのM002と並び、服部遺跡では一、二の抜き出た規模をもつ、M326を中心とする一群である。西と南が旧河道近くにより削平され、全様は確認できないが、東側にM324、M320が連なり、北にM319、M318、M325、M327と連結している。

## 10 Jブロック

このブロックは、東側が空閑地、南、西、北については、一部、Iブロック、Kブロック、Lブロックと接するが、比較的広い空閑地をもっている。

ブロック内は、比較的明確に細分することができ、三つの小群に分けられる。まずJ1小群としては、大型のM334を中心とし、それに連結する一群である。西北コーナーにM330—M329—M328と連結するほか、西南コーナーにM331のみが連結し、東南コーナーに、M335—M336と連結している。いわゆるコーナー—連接型の典型と言えよう。次にJ2小群としたのは、これも大型のM342を中心に、一部を除き、直列する群構成をとっている。すなわち、M342に連結して南東には、M341—M340—M339—M338が、北西にM343、北東にM352が、それぞれ一基ずつ連結しており、これも典型的な群構成を示すと言えよう。次にJ3群は、これも大型のM347を中心とし、その周りに連結するパターンをとっている。すなわち、東側には、M349—M351の3基が直接M347に接続し、西にはM344—M345と接続しており、北側は後の水路により削平され、明らかでない。

以上Jブロックの三つの小群は、服部遺跡の中でも、比較的群構成の明確な例であるが、この三小群のうち、J1とJ2については、大型のM334とM342の間に、明確な残地があって、ほぼ対照的なあり方を示すが、J3小群のみは、J・J2の小群の中に、割り込む形で群を形成しており、さきの2小群より、おくれで群構成を開始したことが推定されるのである。

## 11 Kブロック

このブロックは、西南部分で一部Jブロックとの接触があるが、他の部分はいずれも比較的広い空閑地で隔てられており、独立したブロックとして扱うことは容易である。ただ、その内部については、おそらくブロック中最大の規模をもっていたとみられるM370を中心に、同心円状に分布しており、細分はむずかしい。ただ、残地や、連結のあり方を細かくみていくと、おおそ四つの小群に細分可能である。まずK1小群は、大型のM370を中心とする一群で、M357—356と、北と東へ、M372、M373、M374が一基ずつ連結していると考えられる。K2小群は、大型の可能性をもつM367から南へのびる一群で、M363、M366、M365、M364、M362、M369などで構成される。K3小群は、中型のM379を中心に、東西に一列に連結する一群で、西へはM378のみが、北へは、M357—M356とつながるとみられる。最後にK4小群は、中型のM387を中核とする一群で、西へはM384—M383とのび、南と東へは、M385、M388、M390が取り囲むように連結している。

## 12 Lブロック

調査区最北端のブロックで、北は調査域外で、西には明確な空閑地、東、南は旧河道により、大きくえぐられており、やや不明確であるが、東のKブロックとの間には、空閑地があり、境界がほぼ推定される。南は一部Jブロックと接触している。

このブロックも、すべて周境を共有しており、細分は困難であるが、中軸方向や残地のあり方から、おおそ五つの小群に分けられる。まずL1小群は、大型のM398を中心に、その周りに数基が連結している。南側には、旧河道の影響で、形状はかなり変形しているが、M379、M394、M395、M393、M392などが連結しており、東にM400、M402が直接連結している。次にL2小群は、中型のM423を中心に、M399、M401、M403、M404、M423、M424、M405、M422が、直線的に一列、一部二列に連結する。L3小群は、大型のM409を中心に、その廻りに連結するもので、南にM408、M407、M406、M416、東にM417、M419、M420、北にM410が連結している。次にL4小群は、中型のM432を中心に、南にM

426—M421、M425、北にM431、M430、M433、M436、M434、などが接続している。L5小群は中型のM428を中心に、南にM421、西にM412、M413、M415、M411、北にM429、M414などが接続している。

このブロックにおいても、大型ないし中型を中心に小群が形成されているが、連結の形式は一様ではなく、多様であるが、大きいものの廻りに接続するタイプと、直線的に連結するタイプの二つが基本的なものであった。

なお、このブロックはAブロックとともに、他のブロックと異なり、明らかに中期後葉に属するものであり、検出段階では必ずしも区別できなかったが、中期中葉の大洪水の後、D地区の東側に形成された集落に伴うもので、やや異質であるが、Aブロックと異なり、造墓形態には大きなちがいはなかった。

(谷口 徹・山崎秀二・大橋信弥)

### 3. 群構成の性格と変遷

前節において、群構成のあり方を、やや詳しく検討してきた。それらをまとめてみると次の通りである。

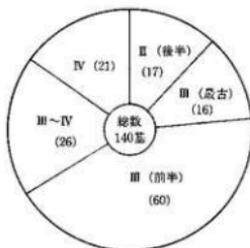
- (1) 360基にのぼる方形周溝墓は、大きくA～Lの12ブロックにグループングされるが、その内部も3～8の小群に細分される。
- (2) 大ブロックは、直列を基本とするタイプと同心円状のタイプの二種に分類されるが、ブロック内においても、同じように直列するタイプと、同心円状に連結するタイプがあり、両者を混成するものも多い。
- (3) 各ブロックには、抜き出た大型のものと、中型のものが、それぞれに散在し群構成の中核を構成しているが、実際に各小群の構成のあり方をみると、大型ないし中型を起点として、それに小型が連結する形態をとっている。
- (4) 小群内における群構成で注目されるのは、H2小群や、J2小群などで、明瞭なように、大型に比較して中型でも大きいものが単独で連結し、小型のものの連結とは異質なあり方を示す点である。
- (5) 12のブロックのうち、南端に独立して存在するAブロックと、北端のLブロックが、中期後葉にその造墓活動の中心的な時期をもつのに対し、他のブロックは中期前葉後半から中期中葉前半の間に築造されたものであるが、Lブロックの群構成が、比較的それ以前のあり方を踏襲するのに対し、Lブロックよりやや新しい傾向をもつAブロックは、周溝墓の形態も含めて、やや異なったあり方を示している。

まず(1)については、(5)とも関連し、まず中期前葉から中葉前半ごろまで、A、Lを除く調査地域の中心部に、墓域が形成され、ほぼ埋めつくす状況にあったとみられる。中期中葉の洪水により、その大半が一時埋没したとみられるが、完全に埋没しなかったため、もとの墓域の外に、新しい墓域が求められたとみられるのである。集落と墓地の関係については、第IV章で出土遺物から検討しているので参照されたい。

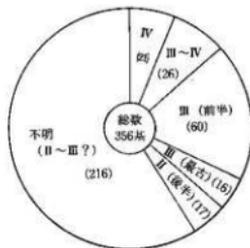
大ブロックの性格については、360基余を12ブロックに分けているように、平均すれば1ブロック30基前後となり、その中に3～8基前後からなる小群が、4～6群存在するという状況がうかがえる。時期幅としては、中期前葉後半から中葉前半までの、実年代にして、およそ100～150年の幅が、一応想定される。仮に一世代20年とみて、およそ5～7世代の幅とみられるから、小群は一系列の小家族による、数世代の墓としてとらえ、ブロックは、それらを含めた大家族として、とらえることも可能かと考える。

さきに指摘したように、一基の方形周溝墓の埋葬主体は、単数埋葬のものが75%を占め、複数のものはきわめて少ない。したがって、家族構成員の墓は、それぞれ単独で築造されるのが、一般的なあり方であったとみられ、かかる想定

第12表 方形周溝墓時期別築造数の比較



第13表 方形周溝墓総数に占める時期別周溝墓築造数の比率



も、必ずしも否定できないと考えられよう。

以上のように、大ブロックを大家族、小群を一系列の小家族とするなら、調査区で検出した、ほぼ並行関係にあったブロックは、10ブロックと2ブロックになるが、中期前半までの墓域は、さらに東西に広がる可能性があり、旧河道Cにより削平されたものも含めるなら、15~16ブロック前後となる可能性はあろう。そうした場合、一応、調査区では検出できなかった、この墓地に対応する集落は、15~16の大家族によって構成されていたことが推測されよう。これに対し、中期中葉末から中期後葉前半の墓域は、一応2ブロックのみの検出であった。このうちAブロックは、さらに東西にのびる可能性はあるが、別ブロックの存在は、その分布状況からみて、ほとんどないように思われる。一方Lブロックでは、さらに北に別ブロックの存在も考えられるが、その分布のあり方、空間地のあり方からみて、その余地は少ないように考えられる。別に検討したように、これらのブロックに対応する集落は、C、D区の東端で、その一部が検出されており、環溝をもつ集落が、しだいに拡大していく状況がうかがえ、墓域が縮小する可能性は少ないと言える。もしそうなら、中期後葉ごろには、その前代と異なり、方形周溝墓を築造する単位集団=大家族が、或は大家族内の特定の小家族に限られるような集落内における変化が起こった可能性が考えられるのである。その点で注目されるのは、Aブロック内における、M002の存在である。これは、服部遺跡で検出した360基にのぼる周溝墓のうち最大のものであるが、大きさでは、IブロックのM326も、これに比肩するが、M002の場合は、その周溝の形態が、外周を円形にし、皿状に掘り込むなど、きわめて特異な形態をとる点である。これは明らかに共同墓地内における個性の新しい展開であった。集落内における特定の大家族、或は小家族の自立化傾向を示すものと言えよう。このような視点でLブロックをみてみると、ブロック内最大のM398が注意される。すなわち旧河道の影響で、その周溝の形態は乱れているが、ややいびつながら、外周を円形にする傾向もうかがえるのである。

以上のような動向は、全く別個のものではなく、やはり集落内、或は集団内における、層層の分化を反映したものとみざるを得ない。ただ、それが具体的にどのように社会のあり方を示すかについては、やはり全国的な視野に立つ検討が必要であろう。

そこで、これらの点と関連して、(4)の問題を取り上げたい。これについては、(3)の小群の群集形態とも関連するが、大ブロック内の小群のあり方は、その比較的明確なものによるなら、大型ないし中型のものに、小型のものが、いろいろな形態で連結していること、そのうちでも、大型ないし中型のものが、群形成の起点となっていること、そして(4)で指摘した、大型ないし中型に連結する中に、単独で、しかも他の小型よりは、やや規模の大きいものが連結して

いることである。小群については、さらに、一応ブロックを構成する大家族内の小家族の一列の墓と仮りに呼称したが、そうした場合、起点となった大型ないし中型のものは、かかる小家族にとつて、直接の祖と考えることができるように思われる。そして、かかる系列内においては、その祖を凌駕する規模の墓は築造できないといった、一種の規制があったとも考えられるのである。そうした場合直、(4)で指摘した特異な墓のあり方は、起点となる祖の配偶者を想定することを許されるのではなからうか。ただ、これらの点を明らかにするためには、土器編年も含め、さらなる検討が必要と考えられよう。

以上、群構成の性格について、仮説を重ねて検討してみたが、次にそれらの変遷過程について、検討を加えてみたい。

360基にのぼる方形周溝墓の変遷については、周溝墓間の切り合い、供献土器の出土が必ずしも一率に明らかになっていないこともあって、具体的にたどることは、ほとんど不可能な状況にあることは、これまでにふれてきた通りである。ただ、上述のように、群構成のあり方を検討することによって、若干の手がかりを得ることができた。

まず、中期中葉後半の洪水を期として、それ以前に属するB~Kブロックと、それ以降に造墓を開始したA、Lブロックの二つに大きく分けることは、さきに指摘した通りである。そして、このうちAブロックとLブロックについては、その供献土器の比較検討、或はそれにかかわるとみられる集落の出土土器との比較によるなら、Lブロックが、やや早く造墓を開始し、ややおくれてAブロックの造墓が始まっていること、それが集落の拡大とかかわるらしいことが推定できる。これらに対し、B~Kブロックについては、供献土器の極端に少ないブロックもあって、全体的な動向を推定することは、やや困難な状況にある。ただ、上述したように、C、D、Iブロックには、本書で後Ⅱ様式後半段階とした一群の土器が確実に含まれており、最も早く群形成を開始したことがうかがえる。そして、同じくⅡ様式後半段階とみられる供献土器は、B、E、F、Hブロックにおいても、一部認められ、ややC、D、Iブロックにおくれないが、一部併行して造墓を開始していることがうかがえる。そして残るG、J、Kブロックにおいては、Ⅱ様式後半段階のものは認められず、本書では一応、Ⅲ様式前半段階とした土器が認められ、一段階おくれて、造墓を始めていることがうかがえる。

ところで、供献土器で、一応時期が推定できる方形周溝墓は、360基中140基であるが、そのうち、Ⅱ様式後半段階に推定できるものは17基で、全体の12.1%を占め、Ⅲ様式の最古段階のものが16基で11.4%、Ⅲ様式前半段階のものが60基で42.8%を占め、Ⅲ~Ⅳ様式としたものが26基で18.5%、Ⅳ様式段階が21基で15%であった(第12表、第13表)。この数値を必ずしも全体に及ぼすことは不可能であるが、Ⅱ様式後半段階からⅢ様式最古段階までは、大きな変化はなく、Ⅲ様式前半段階に爆発的に増加していること、Ⅲ~Ⅳ様式以降Ⅳ様式前半代にかけては、再び減少し、大きな変化のないことがうかがえるのである。このことは、Ⅲ様式前半段階に、服部遺跡では、かなりの人口増加があったか、或は墓を築造できる階層が拡大したか、いずれにしても、何らかの社会変動が若起したことを示しているのではなからうか。そして、Ⅲ~Ⅳ様式段階以降、再び墓が減少しているのは、さきに述べた、墓城の減少という現象に対応するもので、これも一つの社会的な変動を反映したものとと言えるのである。

それでは、かかる変遷を、墓の分布状況から見直してみると、墓城の形成は、その中心部である、C、D、Iの3ブロックで開始され、次にそれに隣接するE、F、Hブロックに造墓が拡大、造墓がピークに達するⅢ様式前半段階には、それらの外縁部であるG、J、Kの3つのブロックが新たに造墓を始めるのである。そして、洪水後に再開された造墓活動は、さらに外側のA、Lの2ブロックで展開していくのであって、墓城が同心円状に拡大調にあることが判明するのである。

(山崎秀二、大橋信弥)

#### 4. 近江における方形周溝墓の発生と展開

以上、服部遺跡の方形周溝墓をめぐる諸問題について、仮説を重ねながら、推測を連ねてきた。そこで最後に、近江における方形周溝墓の発生と展開について、簡単に検討を加え、服部遺跡の方形周溝墓が、新たに提起した問題を整理しておきたい。

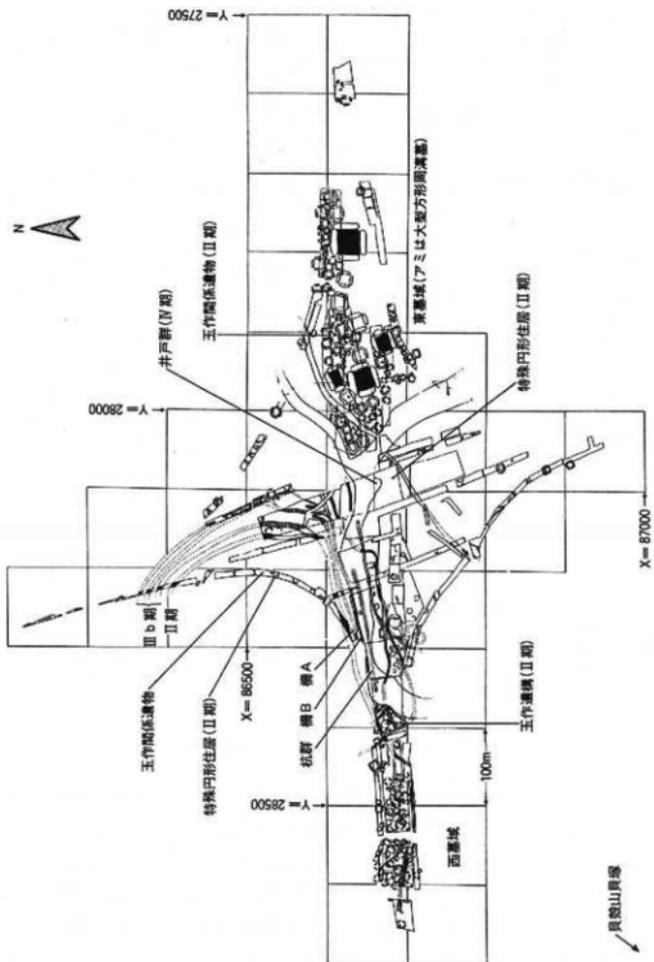
周知のように、近江における方形周溝墓の発見は、1958年の大津市南滋賀遺跡の共同墓地の調査を出発点としている。そして南滋賀遺跡の方形周溝墓（当時は「溝状遺構」と呼称）の発見は、かかる遺構を始めて墓として認識したという大きな学史的な意義をもっていたのである。南滋賀遺跡においては、前期末から中期にかけて継続的に営まれた、土佐墓群からなる共同墓地の中に、中期前半に1基の方形周溝墓が築造されたものであり、その後の弥生墓制研究にあって、方形周溝墓を、共同体の一般成員から抜き出した、家長クラスの墓制とする見解の、根拠ともなっているのである。

その後、1966年～1967年に調査された安土町大中の湖南遺跡で、弥生中期とみられる方形周溝墓3基が検出されたが、住居跡として報告されたこともあって、注目されることにはならなかった。そして、方形周溝墓が、弥生時代の墓制として、ほぼ定着した。1970年代以降は、いわゆる開発の波と呼ぶ形で急激に増加することになる。

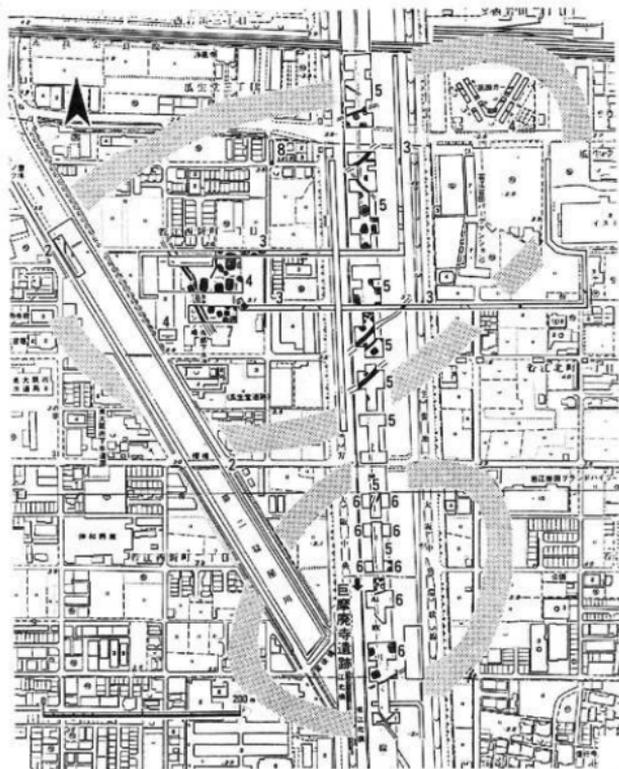
1980年までの、方形周溝墓発見地名表をみると、1969年の集計では、1遺跡1基、1977年の集計では、3遺跡12基となっている。すなわち、1971年の湖西線建設に伴う大津市南滋賀遺跡の発掘調査で、弥生中期の方形周溝墓が5基、古墳時代前期のものが3基発見されたのをはじめ、1974年には、北陸自動車道建設に伴う、長浜市大東遺跡の調査で、弥生後期の方形周溝墓2基が発見され、それに前後して、大津市坂口遺跡では、宅地造成に先立つ調査で、古墳時代前期の方形周溝墓1基が発見されたのである。そしてその後も、方形周溝墓の発見は漸増傾向にあり、余呉町黒田永山遺跡、湖北町丁野遺跡、野洲町五之里遺跡、守山市赤野井遺跡、大津市畑尻遺跡、同錦織遺跡などで調査がなされた。そして、1978年、服部遺跡において、360基にのぼる方形周溝墓の全像が明らかになったのである。ちなみに、1980年の集計表では、5遺跡384基となり、全国集計348遺跡715基の過半を占めるに至ったのである。また、1982年の県内の集計では、40遺跡559基となっており、その分布も、ほぼ県下全域に広がり、近江においても方形周溝墓が、弥生時代、古墳時代前期の普遍的な墓制であることが動かしがたい事実となったのである。

ところで、近江における方形周溝墓の調査は、1980年代以降さらに増加の一途をたどり、1985年現在で、62遺跡688基という、大きな蓄積を示すに至ったのである。このことは、個別近江だけの現象でなく、全国的な傾向であるが、かかる調査例の増加とは反比例に、方形周溝墓研究は、大きく停滞している。これは、かかる資料増加が、一研究者の力量では、その全体像がほとんど確証できないことや、調査の進展に伴って、墓域の広がりが予想以上に広大なものと考えられるようになり、部分的な調査の増加が必ずしも研究の進展につながるということになったとみられるのである。すなわち、服部遺跡の大墓地群の発見につづく、愛知県朝日遺跡における250基以上の墓地群の調査、大阪市瓜生堂遺跡における、東西600m、南北350mにおよぶ墓地群の発見などは、集落と墓地、方形周溝墓の性格に、重要な問題提起をすることになったのである。したがって、ここでは近江の調査例を中心に、かかる視点に焦点を絞って、若干の検討を加えたい。

まず、方形周溝墓の時期については、前期に遡る明確なものは、現在のところ発見されていない。したがって、近江においては、畿内中枢部よりは、一段階おくれ、中期に入って導入されたとみることができる。上述のように、服部遺跡においても、中期前半に属するものはなく、この段階では、能登川町宮ノ前遺跡、安土町大中の湖南遺跡、草津市鳥丸崎遺跡、大津市南滋賀遺跡など、きわめて少なく、上の推定を裏付ける。これに対し、中期中葉になると、高月町高



第53図 朝日遺跡弥生時代中期遺構全区 (1 : 6000)



黒塗り遺構—溝 白抜き遺構—自然河川 濃い網点遺構—方形周溝墓

第54図 瓜生堂遺跡の調査地点

月南遺跡、長浜市鴨田遺跡、近江町狐塚遺跡、近江八幡市観学院遺跡、八日市市内堀遺跡、野洲町市三宅遺跡、守山市寺中遺跡など、増加がみられ、中期後葉になると、さらに県下全域で増加の傾向がうかがえる。ところが、弥生後期に入ると、調査例が大きく減少するのである。特に、それまで順調に増加傾向にあった、湖南、湖東、湖西南部では、八日市市上日吉、守山市益須寺遺跡など、一部でみられるものの、中期と比較して、急速な減少が認められるのである。湖北、湖西北部においては、余呉町黒田永山、長浜市越前塚、近江町狐塚、安曇川町南市東、新旭町正伝寺南遺跡など、比較的多くの調査例があるのとは、かなり対照的な傾向と言えるのであろう。これが、いかなる社会の動向を反映したのかについては、しばらくおとして、これに続く古墳時代前期（いわゆる庄内併行期）には、再び活発な方形周溝墓の築造がすすめられているのである。後期からつづく、湖北、湖西北部だけでなく、近江八幡市榎木立、野洲町富波、久野部、和田、野洲川左岸、守山市小島、金ヶ森西、益須寺、草津市花摘寺、御倉、大津市錦織、榎木原、南滋賀など、数そのものは少ないものの、県下全域にみられるのである。このことは、単なる分布状況だけでなく、量的或は質的な

面からの検討を必要とすることを示している。

そこで次に、墓域と集落の問題を考えてみたい。ここでは、調査の進んでいる湖南地域を中心に検討してみたい。

まず大津市北部では、北から、穴太、滋賀里、南滋賀、錦織と拠点集落が集中してみられる。このうち、穴太で方形周溝墓が未発見のほか、滋賀里、南滋賀、錦織の各遺跡では集落と併行して、弥生中期から古墳前期にかけて墓域が発見されており、両者が一セットで存在していたことが、一応確認される。

草津、栗東では、宅地化の進展もあって、全様は明らかにすべくもないが、方形周溝墓の検出された、栗東町下鉤、野尻、草津市鳥丸崎、花橋寺、上寺などの諸遺跡で、それに対応する集落の存在が、推定される。

野洲、守山、中主など、旧野洲郡域にあっても、方形周溝墓を検出した、野洲町五之里、富波、久野部、市三宅、和田、下々塚、野洲川左岸、中主町木部、守山市服部、小津浜、寺中、吉身西、下之郷、小島、赤野井、金ヶ森西、金ヶ森東、伊勢、益須寺などは、弥生、古墳時代の拠点集落として、明確な対応関係が認められるのである。

かかる傾向は、余呉町桜内遺跡、長浜市鴨田遺跡、近江町狐塚遺跡、高月町高月南遺跡、能登川町宮ノ前遺跡、近江八幡市高木遺跡、高島町鴨遺跡、安曇川町南市東遺跡、今津町弘川遺跡でも同様に確認されることで、服部をはじめ、近年明らかになりつつある。草津市鳥丸崎遺跡や、守山市吉身西遺跡のように、大規模な方形周溝墓群が発見された墓域についても、ほぼそれに対応する一集落に伴うものとする理解が得られる。そして、集落と墓域の実態的なあり方としては、それが重複する例は全く皆無で、両者の間には明確な区別が認められるのである。たとえば、湖辺に立地する、鳥丸崎、小津浜、服部などでは、弥生前期の集落が、洪水で廃絶した後、墓域とされているし、下之郷、鴨田、高木、下鉤などでは、環壕ないし溝によって、区別されているのである。これらの点から、二つの点が確認できよう。一つは、当然のことながら集落と墓域は、一対として、分ち難く結びついていること、二つには、その場合にあっては、集落と墓域は同一時期には、混在することではなく、地域を区別していることである。

そこで問題となるのが、集落の規模、或は存続期間と、墓域の規模、存続期間の関係である。この点については、現時点で検討する良好な調査例は少なく、具体的な検討はできないが、集落規模も大きく、存続期間の長い服部遺跡や鳥丸崎遺跡では墓域も大きい、守山市吉身西遺跡のように、27基の方形周溝墓を発見している場合でも、その時期が現在のところ、弥生中期後葉に絞られることもあって、服部や鳥丸崎のように、大きな墓域を形成していた徴候はないのである。このことは、15基の弥生中期後葉の周溝墓を検出した守山市小島遺跡や、16基の弥生後期の方形周溝墓を検出した、安曇川町南市東遺跡、17基の弥生後期から古墳前期の方形周溝墓を検出した、余呉町黒田水山遺跡などでも、確認されるところである。

以上のように、近江における方形周溝墓は、弥生時代から古墳時代前期の中心的な墓制として、各集落に密着した形で展開していったことが明らかになった。このようにみる時、服部遺跡で発見された大規模な墓域についても、必ずしも特殊なものではなく、ごく一般的なものであって、当然普遍化しうるものであることも明確になった。したがって、服部遺跡の方形周溝墓の検討によって得られた成果を、今後の方形周溝墓の調査研究の中で、さらに検証、確認していくとともに、そこでの成果を服部遺跡の方形周溝墓の再検討に生かしていく作業が、今後とも必要になると考える。特に、服部遺跡の方形周溝墓が、強く提起する、集落と墓地の関係については、弥生時代の社会の具体的な追求とともに、今後さらに重要な問題になると考える。

(大橋信弥)

#### 註

- (1) 佐原 真「弥生時代論」(『日本考古学を学ぶ(3)』(1979))
- (2) 都出比呂志「農耕社会の形成」(『藤原日本歴史』1原史・古代1(1984))

- (3) 『阪道遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、(滋賀県教育委員会、1967)
- (4) 近藤義郎『前方後円墳の時代』(1983)
- (5) 田辺昭三『大津市南志賀遺跡発掘調査概報』(大津市教育委員会、1959)
- (6) 都出比呂志『農業共同体と首長権』、『講座日本史』1古代国家、1970)
- (7) 水野正好『大中の湖南遺跡調査概要』(滋賀県教育委員会、1968)
- (8) 大塚初重、井上幸弘『方形周溝墓の研究』、『駿台史学』24、1969)
- (9) 原史基制研究会『原始基制研究』5 (1977)
- (10) 田辺昭三『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会、1973)
- (11) 別所健二、田中潤弘『大東遺跡』、『北陸経實自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、滋賀県教育委員会、1976)
- (12) 杉 博通『坂口遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会、1974)
- (13) 権蔵文化財研究会『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』(権蔵文化財研究会第11回総会資料、1982)
- (14) 山岸良二『方形周溝墓』(考古学ライブラリー8、1982)
- (15) 注(13)と同じ
- (16) 愛知県教育委員会『朝日遺跡』(1982)
- (17) 田代克己『瓜生堂遺跡』、(瓜生堂遺跡調査会、1980)、今村道雄『瓜生堂』(大阪文化財センター、1980)
- (18) 谷口 徹『神郡郡坐堂川町古前遺跡』、『ほろ整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-5、滋賀県教育委員会、1980)
- (19) 伊底 功『下物その2(鳥丸) 鳥丸崎遺跡』、『昭和62年度発掘調査概要』、滋賀県教育委員会、1988)
- (20) 高津遺跡：黒坂秀樹『高津遺跡調査概要』、『第5回近畿地方権蔵文化財研究会資料』、1987)
- 鴨田遺跡：森口訓男『鴨田遺跡』、『十間川遺跡・鴨田遺跡調査』、長浜市教育委員会、1988)
- 狐塚遺跡：吉田秀則『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書』Ⅴ(滋賀県教育委員会、1988)
- 幼学道遺跡：権吉 正『幼学道遺跡発掘調査報告書』(近江八幡市教育委員会、1985)
- 内堀遺跡：石原淳洋『内堀遺跡・後藤館遺跡発掘調査報告書』(八日市市教育委員会、1982)
- 市三宅遺跡：古川与志雄『古代と現代との同居、玉造りの村ー市三宅遺跡ー』(野洲ローテッククラブ、1984)
- 寺中遺跡：岩崎 茂『寺中遺跡発掘調査報告』、『守山市文化財調査報告書』第12冊、守山市教育委員会、1983.3)
- (21) 上日吉遺跡：松沢 修『八日市市上日吉遺跡』、『ほろ整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-2、滋賀県教育委員会、1979)
- 益須遺跡：山崎秀二『益須寺関連遺跡発掘調査報告書』(守山市教育委員会、1981)
- (22) 黒田長山遺跡：兼康保明『黒田長山墳墓群の調査』、『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』Ⅵ、滋賀県教育委員会、1980)
- 越前線遺跡：菅成良佑『越前線遺跡発掘調査報告書』(長浜市教育委員会、1987)
- 南市東遺跡：中江 彰『南市東遺跡発掘調査概報』(安曇川町教育委員会)
- 正伝寺南遺跡：大沼芳幸『正伝寺南遺跡(北地区)の調査』、『高島バイパス新旭町内遺跡発掘調査概要』4、滋賀県教育委員会、1984)
- (23) 榎木立遺跡：近藤 滋『近江八幡市榎木立遺跡』、『ほろ整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅹ-6、滋賀県教育委員会、1982)
- 富波遺跡：長井秀之『富波遺跡発掘調査概要』(野洲町教育委員会、1983)
- 久野部遺跡：古川与志雄『久野部遺跡発掘調査概要』(野洲町教育委員会、1984)
- 和田遺跡：入江正則『昭和五十一年度和田遺跡発掘調査報告書』(野洲町教育委員会、1976)
- 野洲川左岸遺跡：吉川和則『野洲町内遺跡分布調査報告』(野洲町教育委員会、1983)
- 小島遺跡：山崎秀二『小島遺跡発掘調査報告』、『守山市文化財調査報告書』第8冊、守山市教育委員会、1985)
- 金ヶ森西遺跡：大橋信吉『金ヶ森西遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会、1980)
- 花澤寺遺跡：藤原朝『花澤寺遺跡発掘調査報告書』(草津市教育委員会、1985)
- 船越遺跡：松浦俊和『大津宮関連遺跡(鳥谷)丘地城その1・2』(大津市文化財調査報告書6・7、大津市教育委員会、1976、1977)
- 榎木原遺跡：若野春樹『榎木原遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会、1981)
- 南滋賀遺跡：田辺昭三『大津市南志賀遺跡発掘調査概報』(大津市教育委員会、1959)
- (24) 穴太遺跡：大沼芳幸『彼来系集団の集落跡』、『滋賀文化財だより』73、滋賀県文化財保護協会、1983)
- 滋賀里遺跡：福岡雄男『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会、1973)
- (25) 下駒遺跡、野尻遺跡：大橋信吉『生活と文化のあけぼの』、『関東の歴史』第1巻、東京町、1988)
- 鳥丸崎遺跡：伊底 功『下物その2(鳥丸) 鳥丸崎遺跡』、『昭和62年度発掘調査概要』、滋賀県教育委員会、1988)
- 上寺遺跡：谷口智樹『上寺遺跡発掘調査概要報告書』(草津市教育委員会、1986)
- (26) 五之里遺跡：丸山竜平『野洲郡野洲町五之里遺跡発掘調査報告』、『昭和五十一年度、滋賀県文化財調査年報』、滋賀県教育委員会、1977)
- 下々塚遺跡：森塚次郎『下々塚遺跡発掘調査報告書』(野洲町教育委員会、1981)
- 木部遺跡：堀垣正宏『木部遺跡』、『ほろ整備関係遺跡発掘調査報告書』ⅩⅢ-1、滋賀県教育委員会、1986)
- 小津浜遺跡：岡本武憲『新守山川その1・その2・その2-1 小津浜遺跡』、『昭和62年度発掘調査概要』、滋賀県教育委員会、1987)
- 吉身西遺跡：山崎秀二『吉身西遺跡発掘調査報告書』(守山市文化財調査報告書第32冊、守山市教育委員会、1987)
- 赤野井遺跡：谷口 徹『守山市赤野井遺跡調査報告』、『ほろ整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-5、滋賀県教育委員会、1981)
- 金森東遺跡：須本政美『金森東遺跡調査概要報告書』(守山市文化財調査報告書第14冊、守山市教育委員会、1984)
- 伊勢遺跡：岩崎 茂『伊勢遺跡発掘調査報告書』、『守山市文化財調査報告書』第12冊、守山市教育委員会、1982)
- (27) 桜内遺跡：石原淳洋『古墳時代後期の鹿穴式住居跡一余刈桜内遺跡』、『滋賀文化財だより』24、1979、滋賀県文化財保護協会)
- 高木遺跡：宮崎幹也『黒野干拓地等農地整備事業関係調査報告書-浅小井遺跡-Ⅲ』、滋賀県教育委員会、1986)
- 鴨遺跡：丸山竜平『鴨遺跡』(高島町歴史民俗資料第二輯、高島町教育委員会、1980)
- 弘川遺跡：山口順子、兼康保明『高島郡今津町弘川遺跡』、『ほろ整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅶ-3、滋賀県教育委員会、1980)

出土遺物観察表

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
細頸壺 D	E 0 0 1	口径 4.4 最大直径 12.3	○算盤玉状の体部で平底を有する。 ○内湾気味にのびる口頸部を有するものと思われる。	○外面体部上半は、斜方向のハケ調整を行い、5条単位の直線文・波状文を交互に施す。 ○外面体部下半中位には横位のヘラミガキ、底部に向かって上→下方向の縦位のヘラミガキを行う。 ○頸部内面にしぼり目が残り、体部内面は、ナデ及び指押えを行う	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 0 0 1
壺G 2	E 0 0 2	口径 20.6	○緩やかに外湾して開く太い頸部より口縁部は粗曲して直上に立ち上がる。 ○端部はわずかに内傾する面を成す。 ○長胴の体部を有すると思われる。	○口縁部外面横ナデ調整、2条の浅い凹線文が施す。 ○頸部及び体部外面粗いハケ調整を行い、頸部に巾2cmの凸帯を施し、ハケ状工具による圧痕文を施す。又頸部には丸味のある棒状具により4個の刺突文を縦列に施す。 ○口縁部内面横ナデ調整。 ○頸部及び体部内面指ナデ及び指押え。	色調 淡灰褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 0 0 2
壺G 2	E 0 0 3	口径 15.2	○太い筒状の頸部より口縁部は粗曲して内湾気味に立ち上がる。	○口縁部外面及び頸部外面は、斜方向のハケ調整を施す。 ○口縁部内面横ナデ調整を行う。 ○頸部内面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 0 0 2
壺G 1	E 0 0 4	口径 25.0 頸高 56.2 最大直径 43.8 底径 11.4	○大きく開く頸部より曲折してわずかに内湾気味に立ち上がる口縁部。 ○体部は腹部の張る算盤玉状を呈しやややが底の底部を有す。	○口縁部外面横ナデ調整、4条の浅い凹線文を施し4本単位の棒状浮文を貼り付ける。頸部外面ハケ調整後ナデ。4条の断面三角形を貼り付け凸帯を施す。 ○体部外面に粗いハケ調整を行なうが腹部中位はそれに先立ち細かいハケ調整を行なったようである。体部上半に横直線文と波状文を交互に9帯施す。 ○口縁部内面指押え、頸部及び体部内面に外面同様の粗いハケ調整。底部付近にはナデ及び指押え。	色調 淡褐色 胎土 1~2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M 0 0 2
水差 (ミニチュア)	E 0 0 5	口径 4.2 器高 9.2 底径 4.6	○小型の水差で体部は最大腹形がやや中位下方に位置する算盤玉状を呈し、口縁部は幅広く外反する。 ○頸部に横位の半環状把手を付す。 ○底部は平底を呈す。	○外面ヘラミガキを施し、内面下半ヘラナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 0 0 2
壺G 2	E 0 0 6	口径 20.0	○外開きの頸部より口縁部は曲折して直立する。端部は平指に収める。 ○体部は縦長の卵筒形を呈すると思われる。	○口縁部外面横ナデ調整、3条の浅い凹線文が施す。 ○頸部及び体部外面粗いハケ調整頸部粗曲部には低いハケ圧痕文凸帯を貼り付け。 ○口縁部内面横ナデ調整。 ○頸部内面ハケ調整後指ナデ。 ○体部内面には、縦方向のハケ調	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 0 0 4

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				整を行う。		
甕F1	E007	口径 14.0 最大腹径 23.5 底径 6.0 器高 14.0	○ 体部はやや肩の張る球状を呈する。 ○ 口縁部は外端して広がり、端部をわずかに上方に拡張する。 ○ 底面の器壁は薄く穿孔。	○ 口縁部外面ナデ調整。 ○ 頸部及び体部外面ハケ調整、肩部にナデを施し、7条単位のハケ杖具で2帯の斜線文を施す。 ○ 口縁部内面ハケ調整後横ナデ調整、頸部指ナデ。 ○ 体部内面ハケ調整、底部内面指押え及びナデ。	色調 暗茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M004
高坏B	E008	口径 16.2 底径 11.5 坏部高 6.4 器高 17.8	○ 体部は直線的に斜上方のび、口縁部は屈曲して水平に開く。水平口縁の内側に一条の凸帯を施す。外端はわずかに下方に拡張する。 ○ 脚部は緩やかに「ハ」の字状に開く。	○ 連続成形法。内坂充填により坏部を形成。 ○ 口縁部外面横ナデ調整。 ○ 器体外面ハケ調整。 ○ 体部内面ヘラミガキ。 ○ 脚部内面ハケ調整後ナデ、成形の際のヘラ先痕を残す。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M004
甕F1	E009	口径 15.5 最大腹径 23.3 底径 5.7 器高 25.5	○ 腹部中位の強く張る体部で上半はなだらかに内上方のび、口縁部は不明瞭な頸部より強く屈折して外側に開く。端部わずかに上下に肥厚。 ○ 底面は安定した平底を呈す。	○ 口縁部外面横ナデ調整、3条の凹線文を施す。 ○ 体部ハケ調整後、上半ナデを行い7条単位の櫛指直線文・波状文を交互に施す。体部下半にやや細いハケ調整。 ○ 口縁部内面には、ハケ杖具による羽状列点文を施す。 ○ 体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M005
甕B2	E010	口径 17.2	○ 緩やかに外端して開く口縁部で、端部を上方に拡張。外端面は弱い凸状を呈す。 ○ 腹部の張る体部。	○ 口縁部外面にハケ杖具による羽状列点文を施す。 ○ 体部ハケ調整後上半ナデを施し5条単位の櫛指具により縦位に区画、さらに波状文・直線文を施す。 ○ 体部下半はヘラミガキ。 ○ 口縁部内面横ナデ、体部内面ヘラケズリ。	色調 赤褐色 胎土 1～2mm大の石粒多量含有 焼成 良好	M005
甕J	E011	口径 17.0 最大腹径 31.8 底径 11.0 器高 47.5	○ やや外反斜線状にのびる口縁部で端部は外傾する面を成す。 ○ 上腹部の膨らむ脚長の体部にふ厚い平底の底部を付す。	○ 口縁部外面にハケ調整、端面横ナデ調整、頸部に3条の凹線文を施す。 ○ 体部外面ハケ調整。 ○ 体部内面ハケ調整後下半に指ナデを施す。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M005
細頸甕D2	E012	口径 6.6 最大腹径 16.0	○ 細い筒状の頸部より内湾気味にのびる口縁部で、端部を平担に取る。 ○ 体部は算盤玉状を呈す。	○ 口縁部内外面共横ナデ調整、外面に5条の凹線文を施す。 ○ 頸部付近ハケ調整後ナデ、ハケ杖具による羽状列点文を施しその下方に2条の波状文。 ○ 体部外面ハケ調整、上腹部には櫛指直線文・波状文(3条×2連)を交互に施す。 ○ 頸部内面にしぼり目を残し、指ナデを行う。 ○ 体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M006

器形	土器番号	法量 cm	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
水差し 土器 B	E 013	口径 12.8 最大腹径 35.3 底径 7.0 器高 48.5	○口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部を平坦に収める。 ○肩付近に横位の半環状把手を付す。口縁部把手側に弧状のえぐりを入れる。 ○腹部が膨らむ縦長の体部で安定した平底を有す。 ○体部下平に焼成後外側より穿孔。	○口縁部外面横ナデ調整。8条の凹線文を廻らす。 ○頸部以下にハケ状具による刺突文を4帯廻らしさらに櫛描波状文・直線文(4条単位)を交互に施文する。 ○体部外面ハケ調整後上半にナデ。 ○器体内面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M007
壺H1	E 014	口径 10.1	○細く外湾気味にのびる口縁部で、上方においてわずかに内折する。 ○端部は平坦に収める。	○器体外面粗いハケ調整。口縁部には若干ナデを行なう。 ○頸部より体部上半にかけ櫛描列点文・波状文(8条単位)を廻らす。 ○器体内面ナデ及び指押さえ。	色調 暗茶褐色 胎土 良好 細砂含有 焼成 良好	M008
壺H1	E 015	口径 8.2	○細く外湾気味にのびる口縁部で、上方においてやや内折する。 ○端部は尖り気味。 ○腹部の張る体部。	○外面粗いハケ調整後口縁部にナデ。 ○頸部屈曲部に櫛描列点文・上腹部には、ヘラ描斜格文、櫛描直線文・波状文等を施文。 ○内面ナデ及び指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M008
壺D	E 016	口径 10.3 最大腹径 13.8	○「く」の字に外反する短い口縁部で、上端をわずかにつまむ。 ○体部は算盤玉状に張り、口縁部下の相対位部に2個1組の小孔を穿つ。	○外面ナデ。 ○口縁部内面横ナデ。 ○器体内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	M008
壺底部	E 017	底径 5.2	○平底を呈すが、充填は不十分でやや凹状の底部。体部は直線的に外上方へのびる。	○外面ハケ調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M008
壺E1	E 018	口径 16.0 最大腹径 23.8	○外湾して開く口縁部、端部は上、下方に若干拡張する。 ○下腹部の張る体部を有す。	○端部外面横ナデ調整、3条の凹線文を廻らし、円形浮文を付加。 ○器体外面ハケ調整後ナデを施し、上腹部には、櫛描列点文(3条単位)直線文・波状文(8条単位)等を交互に廻らす。 ○口縁部内面に櫛描列点文(8条単位)。 ○体部内面ハケ調整後上下ナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 良好 細砂含有 焼成 良好	M009
壺H1	E 019	口径 11.0 最大腹径 29.2	○筒状の頸部より屈曲してやや内反気味に立ち上がる口縁部。端部は内傾する凹面を呈す。 ○体部は下腹部の強く張る球状を呈す。	○口縁部ハケ調整後ナデ、体部外面ハケ調整後上半ナデ。端部外面に4個単位の列点文を廻らし上腹部には、櫛描列点文、直線文、波状文(4条単位)、ヘラ状具による山形文(6本単位)等を施文する。 ○内面ナデ及び指押さえ、体部には粘土組織合痕が明確に残存。	色調 淡褐色 胎土 良好 細砂含有 焼成 良好	M010
壺底部	E 022	底径 4.8	○あげ底の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面指押さえ。	色調	M011

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
					淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	
壺I1	E021	口径 9.8 最大腹径 20.2 底径 6.0 器高 25.0	○屈曲して内反気味に短く立ち上がる口縁部で、受口状を呈す。 ○頸部は平坦に取める。 ○体部は腹部が膨らむ卵形を呈す。	○端部外面横ナデ調整により浅く凹む。 ○器体外面ハケ調整。 ○器体内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M010
壺C1	E020	口径 13.2	○筒状の頸部より口縁部は屈折して短く立ち上がる。端部は丸味を有す。	○口縁立ち上がり部外面に波状文 ○口頸部外面ハケ調整か。櫛歯高線文・波状文の痕跡が認められる。 ○口縁部内面指押え頸部内面細いハケ調整を行い、体部にかけてはナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M010
壺H2	E023	口径 11.6 最大腹径 23.0	○外湾気味に開く口縁部で、上方で曲折し、短く内反して立ち上る。端部は内傾。 ○体部は中位の強く張る球状を呈す。	○口縁部外面にヘラ描沈線三本を一単位とする扇状文を施文し、下方に櫛歯列点文(7条)を廻らす。 ○口縁部外面下に2条、又頸部に4条のヘラ描沈線を廻らす。 ○体部外面ナデにより平滑に仕上げ、櫛歯列点文、直線文、波状文等を交互に廻らす。 ○体部外面ナデ。 ○口縁部内面横ナデ、頸部内面指ナデ、体部内面指押え及びナデを行う。	色調 淡茶褐色 胎土 細砂 多量含有 焼成 良好	M011
壺G2	E024	口径 20.6	○外湾してのびる頸部に曲折して直立する口縁部を付す。端部はやや凹状を呈す。	○口縁部外面ハケ調整後横ナデ、2条の凹線文を廻らす。 ○頸部外面ハケ調整。巾1.5cmのハケ圧痕文凸帯を貼り付ける。 ○器体内面ハケ調整、口縁部内面ハケ調整後横ナデを行う。	色調 淡赤褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M011
壺底部	E025	底径 5.6	○安定した平底の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面指押え及びナデ。	色調 暗黒褐色 胎土 良好 焼成 良好	M011
壺G4	E026	口径 16.1 最大腹径 29.6 底径 7.4 器高 38.2	○内湾気味にのびる口縁部で端部は浅い凹面を呈す。 ○体部は中位の膨らむ球状を呈し、安定した平底の底部を有す。	○口縁部外面横ナデ調整、4条の浅い凹線文を廻らす、その下位にハケ用具による羽状列点文を施文。 ○頸部屈曲部には、巾1.5cmの低いハケ圧痕文凸帯を貼り付ける。 ○体部外面ハケ調整、上腹部には櫛歯波状文5帯(6~7条単位)を廻らす。 ○内面ハケ調整後ナデ仕上げ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M012
壺G3	E027	口径 19.0 最大腹径 35.4 底径 8.1 器高 48.8	○外湾して開く頸部より口縁部は屈折して内反気味に立ち上がる。端部は浅い凹面を成す。 ○上腹部が膨らむ縦長の体部。底部焼成後穿孔。	○口縁部外面斜方向のハケ調整後上、下端に太く浅い凹線文を廻らす。 ○頸部屈曲部には、巾1.5cmのハケ圧痕文凸帯を貼り付ける。 ○器体外面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M012

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				○内面ハケ調整、口縁部に横ナデ。		
壺E1	E028	口径 14.9 最大直径 21.3 底径 5.6 器高 22.5	○口縁部は「く」の字形に短く外反して開く。 ○体部は中位上方に最大直径をもつ球状を呈する。 ○底部は平底。	○端面外面横ナデ後横描列点文、(3ヶ単位)を廻らす。器体外面ハケ調整後上半部ナデ。上部部には横描列点文、直線文、波状文、ヘラ斜格文等を施文。 ○口縁部内面に横描列点文を廻らす。 ○内面ナデ仕上げ。	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M013
壺K	E029	口径 9.8 最大直径 23.0 底径 6.2 器高 25.5	○肩の強く張る体部で、口縁部は外反して立ち上がる。端部は外傾する面を残す。 ○底部は平底。	○端面内外面共横ナデ調整。 ○口縁部外面ハケ調整後ナデ。 ○体部外面4-5条の粗目のハケ調整を行い下半には内面と同様の細いハケ調整を行う。 ○体部内面ハケ調整後上半ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M013
細頸壺D1	E030	口径 7.4 最大直径 19.5 底径 5.8 器高 24.9	○筒状の頸部より内湾気味にのびる口縁部で端部はやや丸味のある面をなす。 ○腹部中位の強く張る鼻盤玉状の体部。 ○底部焼成後穿孔。	○口縁部外面横ナデ調整。4条の同線文を廻らし、その下位にハケ状具による羽状列点文を施す。 ○頸部以下ハケ調整を施すが、体部上半は斜格状、後頸腹部にナデ、頸部より上腹部にかけ横描直線文(3条×2連)を廻らす。 ○内面ナデ及び指押え。	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M013
壺C1	E031	口径 13.2 最大直径 22.8 底径 6.2 器高 32.6	○外湾して開く頸部より口縁部は屈曲してやや外反気味に短く立ち上がる。口縁端部の相対する2方に内面より押圧を加え低い波状を呈す。 ○肩の張る体部で上げ底の底部を有す。	○口縁部内面共横ナデ。 ○頸部、体部外面ハケ調整後ナデ ○口縁部外面に横描直線文4帯、波状文2帯(4条単位)を廻らし又、体部中位に直線文4帯、波状文1帯を廻らす。 ○器体内面指押え及びナデ成形。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M015
壺B2	E032	口径 12.6 最大直径 16.9 底径 4.2 器高 21.4	○筒状の頸部より口縁部は外反して広がる。 ○体部は下方が張る下ぶくれの器形で、上げ底の底部を有す。 ○体部下半に穿孔。	○器体外面ハケ調整後ナデにより平滑に仕上げる。 ○口縁部外面に横描直線文3帯、(複帯)波状文1帯、扇形文1帯(各10条)等を廻らす。 ○口縁部内面にハケ状具による羽状列点文を廻らし、2層1組とする瘤状突起を四方に配す。 ○器体内面ハケ調整後ナデ。	色調 赤褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M015
壺B2	E033	口径 11.0 最大直径 17.9 底径 5.1 器高 20.0	○体部よりなだらかな曲線で続く頸部、口縁部は外反して開く。 ○体部はほぼ鼻盤玉状を呈す。 ○底部打欠。	○外面ハケ調整後ナデ。 ○口頸部外面に横描直線文帯(複帯)、波状文1帯(8条単位)を廻らす。 ○体部外面下方にヘラミガキ。 ○口縁部内面に4ヶの瘤状突起。 ○口縁部内面縦方行のナデ、体部内面ハケ調整後上半ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M015
壺B2	E034	口径 11.2 最大直径 17.9 底径 4.2 器高 20.2	○体部よりなだらかな曲線で続く頸部、口縁部は大きく外湾して開く。 ○体部は下方が強く張る下ぶくれで、底部はやや上げ底。	○器体外面ハケ調整後ナデにより平滑に仕上げる。 ○口縁部外面には、横描直線文帯(複帯)、扇形文1帯(5条単位)を廻らす。	色調 赤褐色 胎土 3mm 大の長石粒主体の	M015

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
			○底部付近に焼成前穿孔。	○内面ハケ調整後ナデ及び指押え。	砂粒含有 焼成 良好	
壺B2	E035	口径 13.0	○丸味のある体部に、内反気味にのびる筒状の頸部。口縁部は外反して広がる。	○器体外面ハケ調整後ナデ。 ○口縁部外面に櫛指直線文。体部上半は櫛指直線文により区画されさらに直線文(4条単位)を廻らす。 ○口縁部内面には2ヶ1組の瘤状突起を四方に貼り付ける。 ○内面ナデ及び指押え。	色調 淡褐色 胎土 細砂 多量含有 焼成 良好	M015
細頸壺	E036	底径 4.2 最大腹径 10.6	○体部はほぼ球状を呈し、頸部はすばまって口縁部に到る。 ○突出気味の底部は、やや上げ底を呈する。	○体部外面櫛位のハケ調整。中位に櫛位のハケ調整を施す。 ○頸部と体部の接合付近には指押え。 ○内面ナデ成形。	色調 赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M015
壺体部	E037	底径 5.6 最大腹径 22.7	○下ぶくれの体部、上げ底の底部を有する。	○体部外面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面ナデ及び指押え。	色調 淡褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M017
細頸壺A	E038	口径 6.1 最大腹径 10.3 底径 4.0 器高 15.6	○小型で口縁部はやや外反気味に上方にのびる。 ○肩の張る体部で、平底を有す。	○器体外面磨減が著しい。ハケ調整の痕跡が認められる。 ○口縁部中位に太い沈線1条。 ○口縁部内面指押え及びナデ。 ○体部内面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 2mm程の長石粒含有 焼成 良好	M017
壺底部	E039	底径 6.0	○平底の底部	○外面ハケ調整後一部ヘラミガキ。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 外面一部黒色 胎土 礫石 粒含有 焼成 良好	M018
壺C1	E040	底径 4.4 最大腹径 21.9	○下ぶくれの体部 ○底部は上げ底	○全体的に磨減が著しく調整等不分明であるが、体部外面にハケ調整を施しさらに胴部と底部接合付近には横方向のハケ調整を行なっていると思われる。 ○頸部内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M019
壺C1	E041	底径 5.8 最大腹径 23.0	○下ぶくれの体部。 ○底部は上げ底。	○器体外面ハケ調整、体部と底部の接合付近に横方向のハケ調整を行ないナデを加える。 ○頸部外面に櫛指直線文(復帯)・波状文。 ○体部内面ハケ調整後一部ナデ。 ○頸部及び体部内面粘土紐接合部分に指頭圧痕。	色調 淡褐色 胎土 微砂粒含有 焼成 良好	M019
壺C1	E042	口径 13.0 最大腹径 25.4 底径 5.6 器高 34.2	○筒状の頸部に曲折してやや内反気味に短く立ち上る口縁部。腹部は丸く収める。 ○腹部下方が強く張る下ぶくれの体部で上げ底の底部を有す。	○口縁部外面横ナデ調整後、ヘラ状具による波状文3条を廻らす。 ○頸部外面櫛位のハケ調整後、8条単位の櫛指直線文5帯廻らす。 ○体部外面ハケ調整。 ○中位下半に粘土紐接合痕を残し	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M020

器形	土器番号	法量 <sup>cm</sup>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				指押えを行う。 ○頸部内面横位のハケ調整後ナデ ○体部内面上半指押え及びナデ下半ハケ調整。		
甗C2	E043	口径 7.3 最大腹径 13.6 底径 3.2 器高 17.3	○小型の甗で直立した短い頸部に受口状の口縁部が付く。 ○体部は中位で最大腹径を有し直線的にすばまり平底の底部に到る。	○口縁部内外面共横ナデ調整。外面に縞描波状文、口頸部・体部外面細かいハケ調整。体部と底部の接合付近には横位のハケ調整を行なう。頸部より胴部にかけて縞描直線文、局形文を施せる。 ○体部内面にはハケ調整。上半にナデを施す。	色調 黄灰褐色 胎土 石英 等砂粒含有 焼成 良好	M020
甗D	E044	底径 4.7	○球状の体部で、やや突出した上げ底の底部を有す。 ○外反して開く口縁部を付すと思われる。 ○頸部に2ヶ1組の小孔を穿つ。	○外面ハケ調整。 ○内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M020
甗C1	E045	口径 13.9 最大腹径 20.7 底径 6.2 器高 30.0	○筒状の頸部より外反して開く口縁部が曲折して外反気味に立ち上る。端部は平坦に収める。 ○下ぶくれの体部。 ○底部はややあげ底で、中央部が着地する。	○口縁部外面横位のハケ調整。 ○器体外面6〜7条単位のハケ調整を全面に施す。体部と底部の接合付近には横位のハケ調整。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面指押え及びナデ	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M021
甗C1	E046	口径 15.2 最大腹径 22.5	○筒状の頸部より外反して開く口縁部で、上方で曲折しさらに外反気味に短く立ち上がる。 ○端部は凹状を呈す。 ○胴部下方に最大腹径を有す下ぶくれの体部。	○口縁部内外面共ハケ調整後指ナデを施す。 ○頸部及び体部外面斜方向のハケ調整を全体に施す。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。体部内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M021
甗C1	E047	底径 5.1 最大腹径 19.6	○下ぶくれの体部 ○底部はあげ底で中央部が着地。	○外面磨滅著しく部分的にハケ調整痕残存。 ○内面下半ハケ調整、上半指押え及びナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M021
甗B2-1	E048	口径 22.0 最大腹径 19.7 底径 5.0 器高 27.0	○口縁部は大きく外反して短かく立ち上がる受口状を呈する。 ○体部は縦長の倒錐形で、平底の底部を有す。	○器体外面粗いハケ調整、胴部に直線文、内面指頭圧痕多数、ナデ調整を行なう。 ○器壁は薄く仕上げられており最小1.5mm、最大は底部で7mmを測る。	色調 淡褐色 胎土 1〜2mm大の石粒含有 焼成やや軟 外面煤付着	M021
平底部	E049	底径 4.7 最大腹径 21.4	○下ぶくれの体部。 ○底部はあげ底で中央部が着地。	○外面磨滅著しく部分的にハケ調整を認める。 ○内面下半ハケ調整、上半指押え及びナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M023
甗B2-1	E050	口径 27.6 最大腹径 28.7	○大型の甗で口縁部は大きく外反して開き曲折して短く立ち上がる受口状を呈する。	○口縁部外面斜方向のハケ調整、頸部、体部に縦方向のハケ調整、体部上半に縞描直線文を施す。	色調 淡茶褐色 胎土	M028

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
		底径 7.2 器高 32.1	○ 体部は縦長の倒錐形で平底を有す。	○ 口縁部内面横ナデ調整、頸部に外面と同一の粗いハケ調整を横位に行なう。体部内面ナデ。	胎土 砂粒含 焼成 良好	
壺C1	E051	口径 13.3	○ 体部よりなだらかな曲線を描いてすばまる頸部。口縁部は外反して開く。 ○ 下ぶくれの体部。	○ 口縁部より肩部にかけハケ調整後ナデ、頸部下端にヘラ状具による刻み目を廻らす。口頸部に直線文及びハケ状具による羽状列点文、肩部に櫛描直線文。 ○ 体部下半ハケ調整。 ○ 口縁部内面にハケ状具による羽状列点文、体部内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂多含 焼成 良好	M029
細頸壺 B1	E052	口径 8.7 最大腹径 17.3 底径 4.8 器高 23.9	○ 外反して上方にゆるやかに立ち上がる口縁部で、端部はやや内傾する面をなす。 ○ 球状の体部にややあげ底の底部。	○ 口縁部内外面共横ナデ調整、頸部より肩部にかけ櫛描直線文・列点文を廻らす。 ○ 体部外面はヘラミガキ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M032
細頸壺 B2	E053	口径 6.3 最大腹径 13.9 器高 18.3 底径 4.1	○ やや外反気味に立ち上がる口縁部で、上方でわずかに内反。 ○ 体部はほぼ球状を呈し底部は上げ底気味。	○ 口縁部内外面共横ナデ調整。 ○ 器体外面は、磨滅が著しく調整等は不明であるが、体部にハケ調整後ヘラミガキを行なった痕跡が認められる。肩部に櫛描直線文。 ○ 口縁部内面ハケ調整後ナデ。 ○ 体部内面下半にハケ調整。	色調 赤褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M032
壺C	E054	最大腹径 21.0 底径 5.4	○ 中位下半で最大腹径を計る下ぶくれの体部で、筒状の頸部より外反して開く口縁部を付すと思われる。 ○ 底部は平底。	○ 頸部、体部外面ハケ調整、頸部には櫛描直線文を廻らす。 ○ 体部内面ナデ、下半にはハケ調整痕を残す。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M032
高坏B	E055	口径 19.8 底径 12.2 器高 11.0 坏部高 5.3	○ 内湾気味に斜上方にのびる坏部で屈曲して水平にのびる口縁部を有す。 ○ 筒状で中空の柱状部より裾部は大きく広がる。	○ 口縁部外面ハケ調整後横ナデ ○ 端部下端に刻み目を廻らす。坏部内外面は、磨滅が著しいが、一部ハケ調整痕が残存。 ○ 頸部外面ハケ調整後櫛描直線文、裾部上端に刻み目。 ○ 口縁部内面に櫛描波状文。 ○ 裾部内面にハケ調整を施す。	色調 淡褐色 胎土 1mm 大の砂粒含 焼成 良好	M032
細頸壺 B3	E056	口径 5.5 最大腹径 11.5 底径 3.8 器高 16.0	○ 筒状の頸部より口縁部は短く内折して立ち上がる。 ○ 下腹部の強る昇盤玉状の体部で上げ底の底部を有す。	○ 口縁立ち上がり部外面横ナデ調整。 ○ 器体外面粗いハケ調整、頸部には、櫛描直線文(串帯)を廻らす。 ○ 口頸部内面指押え及びナデ。 ○ 体部内面ナデ。	色調 赤褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M033
壺A	E057	最大腹径 24.5 底径 6.0	○ 下ぶくれの体部で丸味を有する。 ○ 底部は上げ底。	○ 体部外面ハケ調整後上半ナデにより平滑に仕上げる。体部上半に櫛描直線文、波状文等を施文。 ○ 体部内面ハケ調整後ナデ。上半粘土結核合部に指頭圧痕多数。	色調 淡褐色 胎土 1~2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M034
壺C2	E058	口径 8.5 最大腹径	○ 体部はゆるやかな曲線ですばまる頸部。外反して開く口	○ 口縁部及び体部上半ハケ調整後ナデにより平滑に仕上げる、口縁	色調 淡褐色	M035

器形	土器番号	法量 cm	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
		15.4 底径 5.7 器高 21.0	縁部は曲折して内反気味に近く立ち上がる。 ○下ぶくれの体部。 ○底部打欠。	部に纏描波状文1帯、頸部に直線文2帯、肩部に波状文2帯等を廻らせる。体部下半ハケ調整後ナデ、さらにヘラミガキを加える。 ○口縁部内面ハケ調整、頸部ナデ体部内面は、ハケ調整後ナデ。	胎土 5mm 大までの 砂粒多含 焼成 良好	
細頸壺 B3	E 0 5 9	口径 9.8 最大直径 17.7 底径 4.2 器高 23.7	○細い筒状の頸部より口縁部は外反して広がり上方で屈折して短く内反気味に立ち上がる。 ○端部はやや内傾する面をなす。 ○体部は下方で最大直径を有するほぼ算盤玉状を呈し、上げ底の底部を有する。 ○体下部に焼成後穿孔。	○口縁部外面横ナデ調整、体部はナデにより平滑に仕上げ。下半にヘラミガキ。 ○頸部より体部上半にかけて纏描直線文帯を廻らし、さらに縦線文を付加。 ○口頸部内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 0 3 6
細頸壺 A	E 0 6 0	口径 13.3 最大直径 21.6 底径 5.5 器高 35.4	○漏斗状に外反して開く口頸部で、端部は外傾する面を成す。 ○球状の体部で突出した平底の底部を有する。	○口頸部及び体部に細かいハケ調整後ナデ、端部外面に纏描直線文(4条)1帯、口縁部から体部上半にかけて15帯の直線文を廻らせる。底部外面ハケ調整。口縁部内面ハケ調整後ナデ。頸部及び体部内面ナデ。底部内面に細かいハケ調整。	色調 茶褐色 胎土 粒砂含有 焼成 良好	M 0 3 8
壺底部	E 0 6 1	最大直径 26.0	○下ぶくれの体部。	○破損が甚しく割整等不分明。わずかに内外面にハケ調整痕残存。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 不良	M 0 5 1
壺B1	E 0 6 2	最大直径 21.2	○筒状の頸部より口縁部は外反して巻き込むように広がる。 ○下ぶくれの体部を有す。	○外面磨滅が著しく詳細は不明。体部外面にハケ調整痕残存。口縁部外面横ナデ。端部には4個単位の纏描列点文を廻し、頸部外面に纏描直線文帯を施す。 ○内面ハケ調整後全面ナデか。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 0 5 2
細頸壺 B3	E 0 6 3	口径 9.8 最大直径 19.7	○筒状の頸部より口縁部は外反して開き、上方で曲折して短く立ち上がる。端部を丸く収める。 ○胴部下方が強く張る下ぶくれの体部。	○口縁部内外面共横ナデ、器体外面磨滅が著しく調整不明。 ○口縁部外面に纏描直線文3帯(複帯)波状文1帯を施文、体部上半に纏描直線文3帯を2段廻らし、さらに直線文帯上に扇形文を付加。 ○口頸部内面横線のナデ。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M 0 5 2
鉢C1	E 0 6 4	口径 18.6	○半球碗状の体部に外反して開く口縁部を有す。	○端部外面横ナデ調整後ヘラ状具による刻目を廻らす。 ○体部内面ハケ調整、下半ナデ。 ○口縁部内面横ナデ調整。 ○体部内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 0 5 2
壺底部	E 0 6 5	底径 5.2	○凹状の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 3mm 大までの 砂粒含有	M 0 5 2

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sup>ca</sup>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
					焼成 良好	
壺底部	E 066	底径 4.9	○底部は上げ底、中央部着地。	○内外面共ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大の砂粒 含有 焼成 良好	M 052
高坏胴部	E 067	底径 13.1	○柱状の脚部より短く広がる裾部。裾部は面を成す。	○外面ヘラミガキ、裾部調整ナデ。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 精緻 焼成 良好	M 052
壺A1	E 068	口径 18.7 最大腹径 19.7 底径 6.6 器高 28.0	○口頸部は大きく外開して広がりが頸部は面を成す。 ○球状の体部に突出した上げ底の底部を付す。	○口縁部は外面横ナデ調整、端部に刻み目、頸部及び体部外面ハケ調整後ナデ、頸部から体部上半にかけて帯描直線文(5 or 6条)9帯、体部下半にヘラミガキを加える。 ○口縁部内面に帯描直線文。 ○器体内外面共ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 3mm までの砂粒含有 焼成 良好	M 055
細頸壺B3	E 069	口径 9.3 最大腹径 17.6 底径 6.0 器高 25.0	○細い筒状の頸部より曲折して短く外反気味に立ち上がる口縁部。端部を丸く収める。 ○胴部下方が張る下ぶくれの体部で、やや上げ底の底部を有す。	○口頸部外面に帯描直線文(6条単位)4帯、体部上半に11 or 2条単位の羽状列点文3帯、直線文1帯を廻らす。	色調 淡褐色 胎土 礫石 粒含有 焼成 良好	M 063
細頸壺A	E 070	口径 8.1 最大腹径 11.8 底径 4.8 器高 18.7	○小型の壺で破損が著しい。 ○口頸部はやや外反気味に上方に長くのびるものと思われる。裾部は面をもつ。 ○球状の体部で、やや外傾気味の突出した平底を有す。	○器体内外面共、磨滅が著しく施文、調整等不分明であるが、一部ハケ調整痕が残る。裾部外面にヘラ具による刻み目、底部側面指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 3mm までの砂粒多含 焼成 良好	M 064
壺底部	E 071	底径 5.2	○上げ底の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面指押え及びナデ。	色調 淡灰褐色 胎土 細粒含有 焼成 良好	M 065
壺113	E 072	口径 19.5 最大腹径 42.9	○大型の壺で、破損が著しい。 ○傾出して外方に広がる頸部に曲折して短く直立する口縁部で受口状を呈す。端部はやや内傾する面をもつ。 ○体部は腹部の強く張る扁球状を呈する。	○口縁部内外面共横ナデ調整、口縁部外面に帯描列点文(8条)を左下がり廻らし、下端には刻み目を施す。口頸部、頸部外面ハケ調整後ナデ、帯描直線文、列点文、刺突文等を廻らせる。体部外面に粗いハケ調整、腹部中位には帯描直線文、弧状文各1帯を廻らす。 ○内面ナデ仕上げ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 069
壺体部	E 073	最大腹径 21.3	○胴の張らない縦長の体部で直線的にすばまり底部に到る。 ○直立して立ち上がる頸部が付く。	○体部外面ハケ調整後上半にナデを施す。 ○体部内面上半ハケ調整後ナデ。下半ナデアゲ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 083

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
壺底部	E074	底径 6.0 最大口径 21.5	○やや肩の張る縦長の体部で直線的にすばまり平底の底部に到る。	○体部外面磨減しい。上半にハケ調整、下半ヘラケズリ後ナデ。 ○内面指押さえ及びナデ。粘土粒接圧痕残存。	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M083
壺底部	E075	底径 5.0	○胴部の張る体部か。 ○平底の底部。	○外面ハケ調整 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	M083
甕B2 I	E076	口径 19.8	○ゆるやかに湾曲する頸部より口縁部は曲折して外反気味に立ち上る。 ○端部は丸く収める。	○口縁部外面ハケ調整後横ナデ、頸部にヘラ状具による刻目を廻らす。頸部外面ハケ調整。 ○端部内面横ナデ調整。 ○頸部内面横方向のハケ調整。	色調 暗茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M083
高杯A2	E077	口径 14.3	○半球碗状の体、口縁部	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○体部外面ヘラミガキ、下半は指ナデ。 ○内面ナデを行なう。	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	M083
高杯 脚部	E078	柱状部高 9.2	○筒状の柱状部より外反して広がる裾部を付す。 ○柱状部には縦位の4個1列とする円孔を西方に穿つ。	○外面ヘラミガキ。 ○内面ヘラケズリ。	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	M084
水差型 土器 B	E079	口径 9.0 最大口径 14.0 底径 4.2 器高 20.0	○直口の口縁部、端部は丸味を有す。 ○胴の張る体部で、やや上げ底の底部を付す。 ○肩部には半球状把手の痕跡残存。	○器体外面磨減が著しいが、ハケ調整痕残存。 ○内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂 多量含有 焼成 良好	M084
甕A2	E080	口径 20.0 最大口径 12.8	○張りの弱い倒錐形の体部に外湾して広がる口縁部を付す	○端部内外面共横ナデ調整。 ○器体外面縦方向の粗いハケ調整を施し、肩部には直線文の痕跡をとどめる。 ○口縁部内面波状を交えた横方向のハケ調整。体部ハケ調整後ナデ。	色調 暗茶褐色 胎土 1~2mm大の砂粒 焼成 良好	M085
壺	E081	口径 13.0	○筒状の頸部に口縁部は外反して短く直立する。端部は平坦に収める。 ○丸味のある体部。	○口縁部内外面共横ナデ後外面に縦位の直線文を等間隔に施文。下端にはさらに同一施文具による列点文を廻らす。 ○口縁部外面ハケ調整。頸部に櫛描列点文(4ヶ単位)2帯。 ○体部外面ハケ調整。 ○口縁部内面ナデ。 ○体部内面指押さえ及びナデ。粘土粒接合痕残存。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M089
甕底部	E082	底径 3.8	○上げ底の底部で、体部は斜上方にやや内湾気味にのびあがる。	○外面ハケ調整、上方に7条単位の櫛描波状文を廻らす。 ○内面ハケ調整後指押さえ及びナデ。	色調 約茶褐色 例暗褐色 胎土 細砂含有 物成 良好	M089

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
鉢A	E 083	口径 26.1 器高 23.8 底径 8.3	○体部は直線的に斜上方にのびる。口縁部はやや外反気味。 ○端部は外縁する。 ○安定した平底の底部。	○端部外面横ナデ調整、口縁部指押さえ、器体面上半横方向、下半に斜方向のハケ調整(7条/1cm) ○口縁部内面横ナデ、体部内面ハケ調整後ナデ、底部内面指押さえ及びナデ。	色調 暗茶褐色 胎土 良好 焼成 良好 体部外面に煤附着。	M1094
甗底部	E 084	底径 8.0	○ほぼ平底の底部か。	○内外面共ナデか。	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好 砂粒含 煤成	M1000
甗A2	E 085	口径 24.8 最大口径 26.0	○漏斗状に外反して長くのびる頸部より口縁部は巻き込むように湾曲して開く。 ○腹部の強く張る球状の体部か。	○端部外面横ナデ調整後4条単位の櫛描直線文を施す。 ○頸部より体部上半にかけて5条単位の櫛描直線文2帯施す。肩部には縦線文を施文。 ○体部外面ナデ調整。 ○口縁部内面横ナデ調整。 ○体部内面指押さえ及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M1011
甗底部	E 086	底径 10.2	○安定した平底の底部。	○外面ハケ調整、底部側面指押さえ。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 煤成 良好	M1011
甗	E 087	口径 19.8	○体部は内湾気味にすばまり頸部に到る。 ○口縁部は、ゆるやかに外反してのび端部はふ厚くほぼ平坦に収める。	○口縁部外面横方向のハケ調整後横ナデを施す。 ○体部外面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 2~3mm大の砂粒含有 煤成 良好	M1015
甗底部	E 088	底径 4.4	○胴部が張る算盤玉状の体部か。 ○突出した底部で中央がわずかに凹む。	○外面磨減が著しく調整不明。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐白色 胎土 細砂含有 煤成 良好	M1016
甗A3	E 089	口径 17.6	○短い筒状の頸部に外反して広がる口縁部。 ○体部は、ゆるやかな曲線を描いて頸部に到る。	○端部外面に櫛描波状文。 ○口頸部及び体部外面ハケ調整後ナデ。櫛描直線文、波状文等を施らせる。 ○内面ハケ調整後ナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M1017
甗頸部	E 090		○頸部のみ。	○外面にヘラ描沈線及び竹管文。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M1017
甗A1	E 091	口径 20.0 最大口径 28.6 底径 7.9 器高 41.1	○筒状の頸部に口縁部は大きく外反して開き、端部を下方にぞろぞろ拡張する。 ○胴部中位で最大口径を有す丸味のある体部。 ○底部は安定した平底を呈す。	○端部外面横ナデ調整後、櫛描波状文(7条)を施文。 ○胴部及び体部ハケ調整後ナデ。 ○胴部外面に櫛描直線文(3+5条)、体部上半に直線文、波状文を交互に施らせる。 ○胴部中位外面へフミガキ。 ○口頸部内面ハケ調整。 ○体部ナデ上げ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 煤成 良好	M1018

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 cm	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
壺C1	E092	口径 13.1 最大口径 23.3	○筒状の頸部に屈曲し内反して短く立ち上る、いわゆる「受口」状口縁がつく。端部は平坦に収める。 ○下ぶくれの体部で、なだらかに内上方にすぼまり頸部に到る。体部と頸部の境界は不明瞭。	○口縁部外面横方向のハケ調整後横ナデ。頸部及び肩部外面ハケ調整後、縄直線文帯(6条単位)を廻らす。 ○体部外面ハケ調整、磨滅が著しく詳細不明。 ○端部に縄直線文帯を廻らす。 ○口縁部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面ハケ調整後ナデを行っていると思われる。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M108
壺底部	E093	底径 6.0	○上げ底の底部、体部は内湾気味に斜上方にのびる。	○内外面共ハケ調整後ナデか。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大までの 砂粒含有 焼成 良好	M108
鉢A	E094	口径 16.2 底径 6.6 器高 14.8	○斜外方にのびる体・口縁部で端部は平坦に収める。 ○底部は外傾して突出する高台状を呈す。	○器体外面了条単位の粗いハケ調整を横方向に施す。 ○底部削面指押え。 ○体部内面指押え及びナデ成形。	色調 伊黒色 外淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M110
壺A1	E095	口径 20.6	○外方に湾曲して開く口縁部。	○内外面共ナデ。	色調 茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M118
壺底部	E096	底径 9.8	○上げ底の底部か。	○外面ハケ調整。 ○内面ナデ。	色調 外淡茶褐色 内淡灰褐色 胎土 良好 焼成 良好	M114
壺底部	E097	底径 6.5	○平底の底部。	○外面ナデか。 ○内面に細かいハケ調整が認められる。	色調 茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M118
壺底部	E098	底径 7.0	○上げ底の底部で中央部着地。	○外面ハケ調整。	色調 外暗茶褐色 内暗灰褐色 焼成 やや軟	M118
壺底部	E099	底径 6.6	○上げ底の底部で屈曲して体部は斜上方にのびる。	○外面ハケ調整。	色調 褐色 胎土 良好 焼成 やや軟	M113
壺A1	E100	口径 20.0 最大口径 21.3 底径 6.5 器高 31.5	○外反してのびる口頸部で、曲折して水平近くに広がる。端部は面を成す。 ○球状の体部でやや突出気味の上げ底の底部を有す。	○端部外面横ナデ調整後上、下端にヘラ状具による刻み目を廻らす。 ○口頸部及び体部外面粗いハケ調整後ナデ、頸部に縄直線文・波状文(各6条)肩部には同一施文具による縦線文を施文。又胴部中	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M121

器形	土器番号	法量 <sub>ca</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				位に直線文3帯を廻らす。 ○内面ナデ一部ハケ調整痕残存。		
壺底部	E101	底径 7.7	○上げ底の底部。	○内外面共ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 1~2mm大の細砂含有 焼成 良好	M121
鉢C1	E102	口径 25.5	○口縁部は「く」字形にゆるく屈出し、体部は内尚気味にすぼまる。	○端部外面横ナデ調整後、ハケ状具による刺突文を廻らす。 ○体部外面ハケ調整。 ○体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M122
帯体部	E103		○中位で最大直径をとる帯胴部でなだらかにすぼまり頸部に到る。	○外面縦方向のハケ調整を行い、頸部には5条+αのヘラ掻き線を通らす。胴部中位に2帯の凸帯を貼り付け、指頬圧痕を加える。 ○内面指押え及びナデ。	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	M123
壺底部	E104	底径 8.0	○上げ底の底部。	○外面にハケ調整。	色調 茶褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M123
帯体部	E105	最大直径 29.3 底径 7.7	○体部は胴部中位で最大直径を有する算盤玉状を呈し、内上方にすぼまり頸部に到る。太く短い頸部に外反して開く口縁部が付くと思われる。 ○底部は突出気味の安定した平底を呈す。	○頸部外面ハケ調整後ナデ。4条単位の縞描直線文を3帯廻らす。体部外面磨減が著しいがハケ調整後ナデを施していると思われる。 ○頸部内面ハケ調整後ナデ、体部上半ハケ調整。 ○底部内面指押え。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M126
帯体部	E106	底径 9.3	○球状の体部で突出した平底の底部を有する。	○体部外面粗いハケ調整後ナデ、中位に縦方向の指ナデ。 ○体部内面ハケ調整後ナデ。 ○底部内面指押え。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M126
壺A	E107	口径 41.0	○外反して広がる口縁部で曲折して水平にのびる部分。端部を上、下に若干拡張。	○端部外面横ナデ調整後4条の沈線を通らし上、下端にヘラ状具による刻み目、口縁部外面ハケ調整後ナデ、刺突文を廻らせる。 ○内面ハケ調整後ナデ、棒状具により刺突。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M126
壺底部	E108	底径 5.9	○上げ底の底部。	○内外面共ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 1~3mm大までの砂粒含有 焼成 良好	M126
甕A2	E109	口径 19.1 底径 4.9 器高 20.9	○強りの弱い倒錐形の体部に湾曲して開く口縁部を付す。 ○底部は平底。	○端部外面に4或5組1組の刻み目を四方に施し、その間には縞描波状文を施す。体部外面ハケ調整。 ○口縁部内面に波状のハケ調整。 ○体部内面ハケ調整後一部ナデ。	色調 淡褐色 外面 焼付着 胎土 3mm大までの石粒含有	M126

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
					焼成 良好	
鉢B	E 110	口径 14.5 底径 5.4 器高 10.3	○底部より内湾気味に外上方にのびる体・口縁部で、端部を平坦に収める。 ○底部は上げ底で、中央が着地する。	○体部外面叩き後ナデ。 ○体部内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 1～3mm大の細砂含有	M126
壺A1	E 111	口径 21.5 最大腹径 24.8 底径 6.0 器高 35.0	○外湾して大きく広がる口縁部。 ○端部は面を成す。 ○体部は胴下半に最大径を有する下ぶくれを呈す。 ○底部は平底、外縁よりがわずかに凹む。	○端部外面筋ナデ後櫛描波状文(2条×2連)を廻らす。 ○器体外面ハケ調整後上半部ナデ。 ○口縁部より上腹部にかけて櫛描直線文、波状文(2条×2連)を施文。 ○口縁部内面ハケ調整後ナデ、体部内面ハケ調整後上半ナデ、底部指押さえ。	色調 淡赤褐色 胎土 1～2mm大の細砂含有 焼成 良好	M186
壺体部	E 112	最大腹径 14.6 底径 5.0	○卵形の体部に突出した凹底の底部が付く。	○体部外面ナデ、下半に細かいヘラミガキ、底部側面指押さえ、体部上半櫛描波状文、直線文(各5条)等を廻らす。 ○内面巾の狭い板状具によるナデ。	色調 暗褐色 胎土 2～3mm大の細砂含有 焼成 良好	M136
瓶頸壺	E 113	口径 10.7 最大腹径 20.5 底径 7.5 器高 18.6	○内湾する口縁部で、端部を丸く収める。 ○球状の体部で、上げ底の底部を有す。	○体部外面上半ハケ調整後ナデ。 ○口縁部外面には断続的な直線文等を廻らす。外面下半部斜方向のハケ調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。底部内面指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M138
壺底部	E 114	底径 5.6	○突出気味の平底の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 1～2mm大の細砂含有 焼成 良好	M138
壺G1	E 115	口径 20.4	○外開きの頸部に曲折してやや反気味に立ち上がる口縁部。 ○端部は面をもつ。	○口縁部内外面共ナデ調整。口縁部外面に4条の凹線文を廻らし4本の棒状浮文を貼り付ける。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M143
壺B1	E 116	口径 19.8 最大腹径 25.9	○筒状の頸部に外湾して広がる口縁部、端部は面を成す。 ○下腹部の大きく膨らむ体部。	○端部外面に直線文を廻らす。 ○器体外面ハケ調整後下部部に細かいヘラミガキを加える。 ○口頸部には櫛描直線文帯、扇形文1帯を施文。 ○口縁部内面に横方向のハケ調整。 ○体部ナデ仕上げ。	色調 淡褐色 胎土 粒石含有 焼成 良好	M142
壺A1	E 117	口径 26.5 最大腹径 37.5 底径 8.2 器高 54.0	○大きく外湾して広がる口頸部・端部は下方に著しく拡張する。 ○腹部が張る縦長の体部で、上げ底の底部を有す。	○端部外面に櫛描波状文を廻らし下端に刻み目を施す。口頸部外面ハケ調整後ナデ、櫛描直線文7帯を廻らす。頸部には、刻み目凸帯を2段貼り付け、下段には棒状浮文10本、体部外面ハケ調整後上半にナデ、下半ヘラミガキを加える。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M143

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				又、上半には、櫛指直線文、弧状文等を施文。 ○口縁部内面に2ヶ1組の櫛状突起を5方に貼り付ける。内面ハケ調整後ナデ。		
甕A2	E1118	口径 25.2 最大直径 27.5	○大きく外湾気味にのびる口頸部で、水平近くに開くもの。 ○体部はほぼ球状を呈すか。	○端部外面横ナゲ調整。 ○口頸部外面縁位のハケ調整後櫛指直線文(6条単位)6帯、肩部には同一施文具による斜格文、体部外面ハケ調整後ナデ。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ、口縁部に櫛状具(7条)により弧状文を2重に施文。 ○体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 精良 焼成 良好	M142
甕底部	E1119	底径 8.6	○あげ底の底部。	○内外面共ナデ。 ○底部側面指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 1~3mm大の砂粒含有 焼成 良好	M143
甕底部	E1120	底径 7.2	○突出気味の底部で、わずかに上げ底を呈す。	○外面底部側面指押さえ。 ○底部内面指押さえ。	色調 黒灰色 胎土 砂粒少量含有 焼成 良好	M143
甕A1	E121	口径 32.4	○外反気味に大きく開く口縁部で、端部は面をなす。	○端部外面にヘラ状具による斜め目を斬らす。口縁部外面左上→右下方向のハケ調整、内面横方向のハケ調整を施す。	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	M143
細頸壺C1	E122	口径 9.6 最大直径 16.8	○細い筒状の頸部に外反して開く口縁部が付く。端部は外傾する。 ○体部下方で最大直径を有し、肩のやや歪る器形で内湾気味にすぼまり頸部に到る。	○器体内外面共6~7条のハケ調整を行い、口縁部内外面共横ナゲ調整。頸部外面ナゲ調整を施す。 ○頸部外面に櫛指直線文(5or6条)2帯、体部上半に櫛状具による弧状文及び櫛指直線文を交互に施らす。 ○体部外面下半ヘラミガキ。 ○口頸部内面ナゲ調整、内面に粘土接合痕残存。	色調 淡茶褐色 胎土 砂粒少量含有 焼成 良好	M150
細頸壺A	E123	口径 13.8	○漏斗状に外反してのびる口頸部。端部は平坦に収める。	○口頸部内外面共ナデ。 ○口頸部外面に櫛指直線文。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M154
甕A1	E124	口径 19.5	○倒錐形の体部に短く外反して開く口縁部を有す。	○口縁部内外面共横ナゲ調整。口端部外面にヘラ状具による斜め目を斬らす。 ○体部外面ハケ調整後全面丁寧なナデ。内面ナデ。 ○体部外面に粘土細接合痕残存。	色調 淡褐色 胎土 1~2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M154
甕A5	E125	口径 13.8 底径 6.6	○体部はほぼ球形を呈しなだらかに頸部に到る。体部と頸	○外面磨減が著しく詳細は不明であるが下半にハケ調整後、底部側	色調 淡褐色	M152

(※网上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
			部の境界は不明瞭。 ○太く短い筒状の頸部に外反して開く口縁部。 ○突出した平底の底部。	両指押さえ。 ○口縁部内外面共横ナデ調整。 体部内面ナデ。	胎土 良好 焼成 良好	
鉢C1	E126	口径 22.4 底径 12.9 器高 6.8	○半球状の体部に口縁部は大きく外反して広がる。端部はわずかに上方に拡張気味。 ○底部は上げ底。 ○体下部に焼成後穿孔。	○端部外面横方向のハケ調整。 ○口縁部及び体部外面縦方向のハケ調整。 ○内面ハケ調整後体部ナデ。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大の長石 粒多含 焼成 やや軟	M152
壺底部	E127	底径 7.4	○直線的にすぼまる体部で、底部は平底を呈す。	○体部内外面共ナデ。 ○底部側面指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 1~ 2mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M156
甗B1	E128	口径 16.8 最大腹径 22.6	○外開きの頸部に外反して、水平に折れる口縁部で、端部は面を成す。 ○やや下ぶくれの長胴の体部で、ゆるやかにすぼまり、頸部に到る。	○端部外面横ナデ調整。口頸部外面ハケ調整後ナデ、帯描直線文、(12条)3帯を廻らす。 ○体部外面7~8条単位の粗いハケ調整後ナデ。 ○口縁部内面ハケ調整。頸部内面縦方向のナデ。体部内面指押さえ及びナデ上半にはハケ調整痕残存。	色調 淡褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M156
甗A1	E129	口径 18.2	○外湾して開く口縁部。	○内外面共横ナデ調整。	色調 淡茶褐色 胎土 2~ 4mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M156
甗A1	E130	口径 30.0	○外湾して開く口縁部で、端部を丸く収める。	○外面斜・縦方向のハケ調整。 ○内面横方向のハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M156
瓶頸部A	E131	最大腹径 16.7 底径 5.1	○算盤玉状の体部に突出した底部を有す。 ○底部はわずかに上げ底。 ○体下部に焼成後穿孔。	○器体外面ハケ調整後ナデ、上腹部には帯描直線文(6条単位)を廻らすさらにへら描弧線文を付加し類似流水文をなす。 ○内面ハケ調整後ナデを加える。	色調(外面) 淡赤褐色 砂粒含有 胎土 2~ 3mm大の 砂粒多含 焼成 良好 体部中位に黒斑	M156
壺体部	E132	最大腹径 12.6 底径 4.8	○小型の壺で、胴の張らない縦長の体部。 ○上げ底気味の底部。	○外面斜方向の粗いハケ調整。 ○内面ナデ、頸部に指押さえ。	色調 茶褐色 胎土 1~ 3mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M158
壺B3	E133	口径 18.2	○胴部下半で最大腹径を有す	○端部外面横ナデ調整後、帯描波	色調	M158

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 cm	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
		最大腹径 23.6	る下ぶくれの体部と思われる。 ○破損が著しく全形をとどめていないが、太い筒状の頸部から口縁部は外反し水平にのびるもの。	杖文(4条)を削らし、口縁部内面にも同一の波状文を施す。 ○器体内外面共磨減が著しく詳細不明。外面ハケ調整を施すと思われる。	淡褐色 胎土 細砂 多量含有 焼成 良好	
甕A2	E134	口径 19.4	○外湾して開く口縁部。端部を丸く収める。	○端部外面ハケ調整後ナデを加える。器体外面斜方向のハケ調整。 ○口縁部内面に横方向のハケ調整。波状のハケ調整を1帯交える。	色調 暗茶褐色 胎土 1~2mm大の 石粒含有 焼成 良好	M156
壺体部	E135	最大腹径 22.1 底径 5.4	○胴部の張る体部で、凹底の底部を有す。	○内外面共磨減が著しいが、外面にはハケ調整が認められる。 ○内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M162
甕A2	E136	口径 25.5 最大腹径 24.4 底径 7.7 器高 39.0	○筒状の頸部より口縁部は大きく外反して広がり水平近く開く。 ○端部を上下に若干拡張。 ○底部は安定した平底を呈し体部はあまり胴の張らないスマートな球状を呈し、内上方におだやかにすぼまりながら頸部に到る。木葉痕残存。	○端部外面横ナデ調整後、櫛播波状文(3条)を削らし、上、下端にはハケ状具による刻み目を施す。 ○口頸部外面細いハケ調整後ナデ。2条×3連を1単位とする櫛状具による直線文2帯、櫛播波状文(2条)2帯を施す。 ○体部外面ハケ調整後ナデ。上半には、頸部と同一の施文具により櫛播直線文6帯を施す。胴部中位及び底部側面指押さへ。 ○口頸部内面細いハケ調整後ナデ。口縁部内面に5條の櫛状突起を貼り付け、外面と同一の施文具により花卉様の弧線を描く。 ○体部内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M156
甕A3	E137	口径 17.4 最大腹径 21.1 底径 4.5 器径 30.0	○頸部より大きく外湾して開く口縁部。端部は面をもつ。 ○体部は中位の張る縦長の器形で、平底の底部を有す。	○端部外面横ナデ調整後櫛播波状文を削らせ、下端にヘラ状具による刻み目。器体外面粗いハケ調整。後口頸部に横ナデ調整、頸部より何部にかへ櫛播直線文(5条単位) ○口縁部内面に櫛播波状文、口頸部内面ハケ調整、体部内面ナデ。指頭圧痕多数。下半ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 礫石 粒多量 焼成 良好	M163
壺口縁部	E138	口径 14.0	○体部よりやや外反気味に立ち上がる口縁部で端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整。	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	M167
壺口縁部	E139	口径 15.0	○外湾して開く口縁部で端部は面をなす。	○口縁部内外面共横ナデ調整。	色調 赤褐色 胎土 1~2mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M167
壺口縁部	E140	口径 30.2	○外湾して大きく開く口縁部。	○口縁部内外面共横ナデ調整。	色調 淡赤褐色	M167

器形	土器番号	法量 cm	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
					胎土 細砂含有	
鉢C1	E141	口径 27.6 底径 6.9 器高 19.9	○半球碗状の体部に、外湾し て開く口縁部。 ○底面は上げ底。	○口頸部外面指押え及びナデ。 ○体部下半にヘラミガキ。 ○口縁部内面にハケ原体による斜 格文を廻らせる。口縁部にヘラミ ガキ。	色調 淡赤褐色 胎土 2mm 程までの 砂粒含有 焼成 良好	M167
蓋底部	E142	底径 4.7	○上げ底の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面指押え及びナデ。	色調 外暗茶褐色 内淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M167
甕口縁部	E143	口径 10.2	○頸部より丸味のある屈曲を もって外反する口縁部で上方 で短く直立する。	○口縁立ち上がり部外面積ナデ調 整後、6条単位の櫛歯直線文を廻 らす。口頸部外面ハケ調整。 ○内面横方向のハケ調整後ナデ	色調 淡灰色 胎土 良好 焼成 良好	M169
甕A2	E144	口径 15.4	○外方に折れる口縁部で、端 部は面をなす。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○体部外面ハケ調整 ○体部内面ハケ調整後ナデか。	色調 外暗茶褐色 内褐色 胎土 良好 焼成 良好	M169
蓋底部	E145	底径 4.6	○やや突出気味の底部で凹状 を呈す。	○内外面共ハケ調整。	色調 黒褐色 胎土 良好 焼成 良好	M169
細頸甕 A	E146	口径 14.8 最大腹径 21.8 底径 6.3 器高 3.3	○漏斗状に外反してのびる口 頸部。端部は外積する面を成 す。 ○腹部中位の強く張る体部で 平底の底部を付す。	○口頸部及び体部上半はナデによ り平滑に仕上げられており、12帯 の櫛歯直線文を廻らせる。体部下 半ハケ調整。 ○体部内面ナデ	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M170
甕A3	E147	口径 11.0 最大腹径 ※ 17.9 底径 5.0 器高 25.8	○外反して広がる口頸部。端 部は外積する面を成す。 ○体部は中位の張る縦長のス マートな器形。やや上げ底の 底部。	○器体外面ハケ調整後ナデにより 平滑に仕上げる。器部外面に櫛 歯列点文、頸部より体部上半に櫛 歯直線文、波状文を交互に廻らす。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M170
細頸甕 B3	E148	最大腹径 23.2 底径 4.8	○下腹部が張る昇盤玉状の体 部ではほぼ平坦な底部を有す。 ○頸部は筒状に細くのびる。	○器体外面ナデ又はヘラミガキを 施すもの。 ○口頸部及び上腹部に櫛歯直線文 帯を廻らし、その下方に扇形文1 帯を施文。 ○内面ナデ仕上げ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M170
甕A3	E149	口径 14.7	○直線的に外反する口縁部で 端部は外積する面をなす。	○端部外面積ナデ調整、口縁部外 面斜方向の粗いハケ調整後、5条 単位の櫛歯直線文を廻らす。 ○内面横方向のハケ調整。	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M170
甕A1	E150	口径 24.0	○大きく外湾して開く口縁部 で端部はわずかに上方に拡張。	○端部外面積ナデ調整後、2条の ヘラ指沈線を廻らし、上、下端には、	色調 淡褐色	M170

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 cm	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				ハケ状具による刻み目を施文。口縁部外面ハケ調整。 ○口縁部内面ハケ調整後ナデ。 ○底部下方に2箇1組の小孔を7方に穿つ。内面より穿孔。	胎土 砂粒含有 焼成 良好	
鉢A	E151	口径 23.1 底径 6.3 器高 14.3	○体、口縁部は、直線的に斜上方にのび、端部は外傾する面を成す。 ○底部は外面に張り出し上げ底を呈する。	○体部外面5~6条単位の外ハケ調整。底部側面指押え。 ○体部内面粗いハケ調整を横位に施しナデ。 ○底部外面凹部にハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M170
細頸壺A	E152	口径 10.0 最大直径 13.4 底径 6.0 器高 22.4	○外反して斜上方に立ち上がる口頸部、端部は外傾する。 ○体部はほぼ球状を呈し、上げ底の底部を有す。	○端部外面横ナデ調整 ○器体内外面共ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 4mm 大までの砂粒含有 焼成 良好	M179
ミニチュア土器	E153	口径 3.7 最大直径 5.2 底径 2.2 器高 4.0	○ミニチュアの壺で、口縁部は短く外湾して折れる。 ○体部は算盤玉状を呈し平底を有す。 ○頸部に2ヶ1組の内孔を2方に穿つ。	○外面ヘラミガキ。 ○内面指押え。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M182
甗A1	E154	口径 19.4	○外湾して広がる口縁部、端部下端を下方に拡張し折り曲げる。	○端部外面横ナデ調整。 ○口縁部外面ハケ調整。	色調 茶褐色 衝灰色 胎土 礫石粒含有 焼成 良好	M188
甗A2	E155	口径 23.4	○倒鐘形の体部に大きく外反して広がる口縁部	○外面粗いハケ調整、端部外面にヘラ状具により刻み目。体部上半に横描直線文、波状文等を施す。 ○口縁部内面に波状文を交えた横方向の外ハケ調整。 ○体部内面ハケ調整後ナデ仕上げ	色調 淡褐色 色 内煤 附着 胎土 2mm 大の砂粒 多重含有 焼成 良好	M191
壺	E156	口径 14.7	○やや外開きの筒状の頸部に屈折して短く直立する口縁部。 ○端部は鋭く内傾する。 ○球状の体部。	○口縁部外面ハケ調整後横ナデ、ハケ状具による左下がりの列点文を施す。口縁部外面巾約1cm程度の板状具による横位のナデつけ、頸部には低いハケ状復文凸帯を2帯貼付する。体部外面ナデ、一部ヘラケズリ、肩部に体部中位に横描直線文、弧状文を施文。 ○体部両面指押え及びナデ。	色調 茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M192
細頸壺B2	E157	口径 6.6 最大直径 15.5 底径 5.6 器高 22.5	○細い筒状の頸部に外反して短く内反気味に立ち上がる口縁部。 ○端部は尖り気味に収める。 ○胴部中位の張る縦長の体部。 ○底部は上げ底を呈する。	○外面磨減が著しく施文、調整等不分明。一部ハケ調整痕が認められ、ハケ調整後ナデを行なっていると思われる。口頸部、肩部に横描直線文、波状文(各4条)等を施文。	色調 淡赤褐色 胎土 細砂 多重含有 焼成 良好 体下部に黒班	M192

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
壺底部	E158	底径 5.3	○凹状の底部。	○内外面共ナデ調整。 ○底部側面指押さえ。	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M192
壺底部	E159	底径 6.4	○平底の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 1～3mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M192
壺A1	E160	口径 19.9	○大きく外高して広がる口頸部。端部は面を成す。	○端部外面横ナデ調整後5条単位の縞描波状文を施す。 ○口頸部外面ハケ調整後ナデ。頸部より胴部にかけて2条×2連を1単位とする縞描直線文3帯、波状文1帯を施す。 ○端部内面横ナデ調整後7条単位の縞描波状文を施す。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ	色調 淡赤褐色 胎土 1～3mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M199
壺底部	E161	底径 6.2	○安定した平底の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 1～2mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M199
細頸壺C3	E162	口径 6.5 最大直径 17.7	○外反して開く口縁部。端部は丸く収める。 ○胴部中位が強く張る体部。	○端部にヘラ圧痕文を施す。 ○器体外面にヘラミガキを施すか ○口頸部外面に縞描直線文帯(9～10条単位)を施し、その下方に縞状文1帯を施文、又、腹直線文帯上には、縞線文を付加。 ○口頸部内面ナデ、体部内面ハケ調整。	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好 体部に黒斑	M200
壺A1	E163	口径 23.5 最大直径 22.2 底径 6.4 器高 27.7	○やや腹部の張る倒錐形の体部に口縁部は緩やかに外高して広がる。 ○端部は丸味を有す。 ○底部は平底。	○端部外面横ナデ後ヘラ圧痕文を施す。 ○器体外面縁又は斜方向のハケ調整。 ○口頸部内面横方向のハケ調整。 ○体部内面ナデ仕上げ。	色調 暗赤褐色 胎土 含有 焼成 良好	M222
壺A1	E164	最大直径 25.0 底径 5.6	○外高して広がる口頸部。 ○腹部の強く張る体部で、平底の底部を有す。	○頸部外面細いハケ調整後ナデを施し、13条単位の縞描直線文を2帯施す。体部上半もハケ調整後丁寧なナデを施し、胴部に縞描直線文2帯、波状文1帯を施す。 ○体部下半外面は、粗いハケ調整後ナデ。又底部側面にはさらに細いハケ調整を行なう。 ○頸部及び体部上半ナデ。下半はハケ調整後ナデを行なう。	色調 淡赤褐色 胎土 砂粒少量含有 焼成 良好	M223
壺底部	E165	底径 6.8	○安定した平底の底部。	○底部側面ヘラケズリ。 ○底部内面指押さえ。	色調 淡褐色	M223

器形	土器番号	法量 <sup>cm</sup>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				○底面ヘラケズリ。	胎土 1～3mm大の砂粒含有 焼成 良好	
壺底部	E 166	底径 7.1	○やや上げ底気味の底部	○外面細いハケ調整。	焼成 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	M231
帯口縁部	E 167	口径 19.7	○直口する口縁部。端部を平坦に収める。	○口縁部外面横ナデ、ヘラ圧痕文凸帯を3帯貼付る。 ○内面ハケ調整後ナデ	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M238
壺G2	E 168	口径 20.3	○太い外開きの頸部に曲折して内反気味に立ち上がる口縁部、端部は平坦に収める。	○口縁部外面左下りのハケ調整後横ナデ、上端には浅い凹線文1条。 ○頸部及び体部外面粗いハケ調整を施す。頸部に巾1.5cmの凸帯を貼り付けハケ具による左下りの圧痕文を廻らす。 ○口縁部内面横方向のハケ調整後横ナデ調整。 ○頸部及び体部内面斜方向のハケ調整。	色調 淡灰褐色 胎土 良好 焼成 良好	M238
壺G1	E 169	口径 34.9	○外開きの頸部に曲折してやや外反気味に立ち上る口縁部 ○端部は平坦に収める。 ○胴長の体部を有すと思われる。	○口縁部外面左下りのハケ調整後上端に太く浅い凹線文1条。 ○頸部及び体部外面粗いハケ調整。頸部には巾2.5cmの凸帯を貼り付けハケ具による左下りの圧痕文を廻らす。 ○口縁部内面横ナデ調整。頸部内面横方向、体部斜方向のハケ調整を行う。	色調 茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M238
壺G1	E 170	口径 18.7	○外開きの頸部に、曲折して直立する口縁部が付く。 ○端部は平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整、外面3条の凹線文を廻らす。 ○頸部内外面共ナデ。	色調 淡白灰色 胎土 1～2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M238
壺体部	E 171		○頸部よりなだらかな曲線で描く体部。	○外面ナデ後、頸部にハケ具による列点文、肩部には櫛描直線文及び波状文を廻らす。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M238
甕B2-II	E 172	口径 21.0	○大きく外湾して開く頸部に曲折して短く直立する口縁部が付く。 ○端部は浅く内傾する凹面を成す。	○口縁部内外面共ハケ調整後横ナデを施す。内面に2条単位の櫛状具による櫛歯文を廻らす。 ○頸部外面縦方向のハケ調整。 ○頸部内面横方向のハケ調整。	色調 淡白褐色 胎土 1～2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M238
甕B2-II	E 173	口径 27.0	○大きく外湾して開く頸部に曲折して短く内反気味に立ち上る口縁部で、端部を平坦に	○口縁部外面ハケ調整後横ナデ。 ○頸部外面ハケ調整後、ハケ具による左下りの列点文、及び櫛	色調 淡赤褐色 胎土 良好	M238

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
			収める。	直線文を廻らす。 ○頸部内面横方向の粗いハケ調整。	焼成 良好	
磯B2II	E174	口径 16.5	○外湾して開く頸部に曲折して短かく直立する口縁部がく。 ○端部は外傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整。外縁縞波状文を廻らす。 ○頸部内面ハケ調整後横ナデ、指頭圧痕残。	色調 淡褐色 胎土 1~2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M238
甕G1	E175	口径 17.2	○直口の口縁部、端部は、やや内傾する浅い凹面を呈す。	○口縁部内外面共横ナデ調整。外面に4条の凹線文が廻る。 ○外面ハケ調整。 ○内面ナデを行なう。	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	M238
高环B	E176	口径 13.5	○环部より屈曲して水平に開く口縁部で、やや下降気味。外端を若干肥厚させる。 ○水平口縁の内側に一本の凸帯を廻らす。	○口縁部内外面共横ナデ調整。外面水平口縁に粘土粒接合痕認められ、端部も横ナデを行なう。	色調 淡灰褐色 胎土 良好 焼成 良好	M238
高环脚部	E177	底径 10.8	○「ハ」字状に開く脚部で端部上下端を拡張する。 ○脚部下端に円孔を穿つ。	○内外面共横ナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M238
壺底部	E178	底径 7.7	○安定した平底の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。 ○底面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M240
壺	E179	口径 21.5	○やや外反気味にのびる口縁部で外開きの頸部が付くと思われる。端部は平坦に収める。	○口縁部内外面共横ナデ調整、外面に2条の凹線文を廻らす。	色調 淡赤褐色 胎土 1~2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M243
壺底部	E180	底径 7.9	○安定した平底の底部。	○外面ハケ調整。 ○内面ナデ。 ○底面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M243
壺底部	E181	底径 6.8	○安定した平底の底部。	○内面指押さえ。 ○外面刷毛。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M243
細頸壺A	E182	口径 11.7 最大口径 19.6 底径 ※ 7.0 器高 ※ 30.1	○漏斗状に外反してのびる口縁部。端部は外傾する面を成す。 ○体部は中位の膨らむ球状を呈す。	○器体外面ナデ調整。口縁部より体部上半にかけて縞縞直線文(6条)を14帯廻らす。 ○内面横ナデ調整。一部板状工具によるナデつけ、頸部にしぼり目残存。	色調 淡褐色 胎土 2~3mm大の砂粒含有 焼成 良好	M256
壺底部	E183	最大口径 20.6 底径 6.2	○胴の膨る体部で上げ底の底部を有す。	○外面ハケ調整後上半ナデ、縞縞直線文を施す。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 2~3mm大の	M256

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
鉢B	E184	口径 18.2 底径 5.2 器高 12.5	○直線的に斜上方にのびる体部で口縁部は、外反気味に直立する。 ○端部は肥厚して丸く収める。 ○底部は上げ底。	○外面縦方行のハケ調整。 ○口縁部内面横方行のハケ調整後ナデ。体部内面指押さえ及びナデ。	砂粒含有 焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 1~3mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M263
甕G2	E185	口径 21.0	○外開きの太い頸部に曲折して上方にのびる口縁部。端部は平坦に収める。	○口縁部内外面共ハケ調整後横ナデ。外面に3条の凹線文を廻らす。 ○頸部内外面共ハケ調整。	色調 淡赤褐色 胎土 1~2mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M259
甕B2-1	E186	口径 15.1 最大腹径 14.3 底径 4.8 器高 15.8	○小型の甕。胴の張る体部より口縁部は屈曲して開き、上方において弱く外反気味に立ち上がる。 ○底部は平底。	○口縁部上端横ナデ調整。 ○口頸部及び体部外面ハケ調整、体部上半には直線文を廻らす。 ○口縁部内面横位のハケ調整、体部内面ハケ調整後ナデを行う。	色調 暗茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M259
甕	E187	口径 7.9 最大腹径 15.1 底径 4.8 器高 24.0	○頸部屈曲後口縁部は内湾気味に立ち上がる受口状を呈す。 ○胴部上方に最大径を有する体部で、下方に直線的にすばまり平底の底部に到る。	○器体外面ハケ調整後上半ナデ調整 口縁部外面に羽状列点文、頸部にヘラ描沈線1条・2条以上の輪描直線文を廻らす。肩部に櫛描波状文(5条)を線線状に施文。 ○端部に櫛描波状文。 ○口縁部内面横ナデ調整、体部ハケ調整後ナデ。	色調 淡赤褐色 (一部黒斑) 胎土 砂粒含有 焼成 やや軟	M263
甕I2	E188	口径 10.4 底径 5.8 器高 27.4	○細長の体部に、ほぼ直口にのびる口縁部を有す。端部は外傾する面を成す。 ○底部はやや上げ底。 ○端部は外傾する。	○端部外面にハケ状具による刻み目を廻らす。口縁部外面粗いハケ調整。 ○体部外面縦横方向の粗いハケ調整。 ○底部側面付近には叩き目残存。 ○体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 外淡褐色 内黒灰色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M263
甕A4	E189	口径 12.2 最大腹径 16.5 底径 5.0 器高 21.2	○ゆるく外湾してのびる口縁部。端部は面をもつ。 ○下ぶくれの体部。底部は凹底をなすが、非常に不安定な甕である。	○磨減が著しく施文、調整等やや不明。頸部外面に櫛描直線文、波状文を廻らす。体部にはハケ調整後残存。 ○内面ナデ調整。	色調 赤褐色 胎土 1~3mm大の 砂粒含有 焼成 やや軟	M266
甕	E190	口径 13.4	○外反して開く口縁部で上方で緩く受口状に立ち上がる。	○外面ハケ調整後ナデ。 ○内面指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 精良 焼成 良好	M267
鉢C1	E191		○半球碗状の体部より口縁部は外反して開く。	○内外面共磨減が著しく調整等の観察はやや不明であるが、外面ハケ調整後、櫛描波状文を廻らす。内面にもハケ調整及び波状文が認められる。	色調 淡暗褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M267
甕A1	E192	口径 21.5	○大きく外湾して広がる口頸部	○端部外面横ナデ調整後櫛描波状		M273

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
		最大腹径 24.6 底径 6.3 器高 36.4	部、端部は下方に著しく拡張する。 ○胴部下方で最大径を有する下ぶくれの体部。 ○底部は平底。	文、下端にヘラ状具による刻み目を施す。口頸部及び肩部は、ハケ調整後ナデ。櫛指直線文、波状文等を施す。体部上半は、磨方向下半には斜方向のハケ調整を行い、胴部と底部の接合付近には2次調整のハケ目を認める。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部ナデ仕上げ。		
壺B3	E193	口径 17.7 最大腹径 21.2 底径 5.6 器高 30.0	○太い筒状の頸部に大きく外反して広がり、さらに曲折して外方にのびる口縁部、端部は面をもつ。 ○胴下方において強く張り、稜を形成する下ぶくれの体部。 ○底部は平底。	○端部外面に櫛指波状文、器体外面ハケ調整、胴部と底部の接合付近に横位の二次調整を行なう。口頸部及び肩部には、櫛指直線文、波状文(3条×2連)を施す。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 1~2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M263
壺G2	E194	口径 19.9	○外開きの頸部に屈曲して立ち上がる口縁部。 ○端部は平坦に収める。	○口縁部外面横ナデ調整、2条の凹線文を施す。 ○頸部外面粗いハケ調整。 ○口縁部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M274
鉢A	E195	口径 19.0 底径 7.4 器高 11.6	○体、口縁部は、直線的に斜上方に開く。端部は外傾する面を成す。 ○底部は突出気味で上げ底を呈す。	○外面は、縦・斜方向のハケ調整後一部にナデを施す。 ○内面は横方向のハケ調整後、一部ナデを行う。	色調 淡褐色 胎土 2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M275
壺底部	E196	底径 4.4	○わずかに上げ底を呈す。	○底部外面指ナデ。 ○底部内面指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M276
粗頸壺A	E197	口径 15.5	○斜上方に大きくのびる口頸部。 ○端部は外傾する。 ○漏斗上に外反してのびる口頸部。 ○端部はやや外傾する面をなす。	○外面ナデ調整後櫛指直線文(7条)5帯を施す。 ○内面指押さえ及びナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M276
壺G1	E198	口径 22.0	○外開きの頸部より屈曲して立ち上がる口縁部。 ○端部は浅い凹面をなす。	○口縁部外面横ナデ調整、上端に1条の凹線文、口頸部外面ハケ調整。 ○内面ハケ調整。	色調 褐色 胎土 良好 焼成 良好	M290
壺H1	E199	口径 8.2	○細く外反してのびる頸部に口縁部は弱く内折して立ち上がる。	○口縁部内面横ナデ調整後ハケ仕上げ文を施す。頸部ハケ調整。 ○口頸部内面ナデ及び指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M290
壺底部	E200	底径 6.0	○凹状の底部。	○内外面共ハケ調整。	色調 内黒色 外淡褐色 胎土	M290

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>容</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
					細砂含有 焼成 良好	
壺底部	E 2 0 1	底径 5.0	○上げ底気味の底部。	○外面ハケ調整。	色調 暗灰褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 2 9 0
壺底部	E 2 0 2	底径 6.5	○上げ底気味の底部。	○外面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 2 9 0
壺A1	E 2 0 3	口径 26.1	○外湾して開く口縁部。端部は下方に著しく拡張する。	○端部外面横ナデ調整。4条の沈線を廻らし上端にはヘラ庄復文を廻らす。 ○内面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 1~2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M 2 9 1
壺E1	E 2 0 4	口径 20.2	○外湾して広く口縁部で端部を下方にわずかに拡張する。	○端部外面横ナデ調整後、ハケ状具による列点文を右下がりに廻らす。口縁部外面ハケ調整。 ○頸部外面に櫛描直線文。 ○口縁部内面ハケ調整後横ナデ。	色調 淡褐色 胎土 1mm大の砂粒含有 焼成 良好	M 2 9 1
壺底部	E 2 0 5	底径 5.2	○底部中央部が凹む上げ底を呈す。	○底部裏面指押さえ。 ○内面ハケ目痕残存。	色調 灰灰色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M 2 9 1
壺C1	E 2 0 6		○下ぶくれの体部。	○外面ハケ調整後、頸部にはナデを施し櫛描直線文、波状文を廻らす。 ○内面指押さえ及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 1 0
壺体部	E 2 0 7	最大腹径 38.1	○腹部の大きく膨らむ体部。	○体部外面中位以上はハケ調整後了平なナデを施し直線文、流水文を交互に4帯廻らす。 ○体部下半ハケ調整。 ○体部内面指押さえ及びナデ。	色調 暗茶褐色 胎土 1~2mm大の砂粒多量に含有 焼成 良好	M 3 0 1
壺底部	E 2 0 8	底径 10.0	○やや外方に張り出す安定した平底。	○体部外面ハケ調整。 ○底部裏面指押さえ。 ○内面磨減しており調整不明。	色調 淡茶褐色 胎土 1~2mm大の細砂含有 焼成 良好	M 3 0 1
壺A1	E 2 0 9	口径 32.8	○大きく外湾して広がる口縁部。 ○端部は面をなす。	○端部外面横ナデ調整。2条の沈線を廻らす。口縁部外面ハケ調整後ナデ、櫛描直線文(4条)施文。	色調 淡褐色 胎土	M 3 1 4

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				○内面ハケ調整後ナデか。	細砂含有 焼成 良好	
壺F1	E 2 1 0	口径 15.3 底径 6.6	○外湾して広がる口頸部で、 端部は上、下方に著しく拡張 する。 ○腹部が膨らむ体部。	○端部内外面共横ナデ。外面に3 条の凹線文を施す。 ○器体外面縦又は斜方向のハケ調 整、肩部には横方向のハケ調整 を重ねる。 ○器体内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂 多量含有 焼成 良好	M 3 1 7
壺A 2	E 2 1 1	口径 19.8 最大直径 ※ 19.8	○外湾して大きく広がる口頸 部。 ○端部は若干肥厚気味。 ○体部は球状を呈す。	○端部外面横ナデ調整後、上、下 端にへら状具による冴目を通らす。 頸部より体部中位にかけて6条単 位の縞直線文12帯施す。 ○口頸部内面ナデ。 ○体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M 3 2 0
壺B3	E 2 1 2	口径 18.0 最大直径 ※ 23.9 底径 6.6 器高 31.5	○外湾して広がる口頸部。 ○端部は面をなす。 ○下腹部の張る球状の体部で 平底の底部を有する。	○端部外面ハケ調整後横ナデ、下 端に冴目を通らす。 ○頸部より体部中位まで轡状具に よる直線文を施すと思われるが 磨滅が著しく詳細不明。 ○体部下半ハケ調整。 ○口縁部内面ハケ調整痕残存。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 2 0
細頸壺 C 1	E 2 1 3	口径 8.2 最大直径 16.3 底径 5.0 器高 19.5	○細い筒状の頸部に口縁部は 外反して開く。端部を丸く取 める。 ○算盤玉状の体部、内部はや やあげ底。	○外沿磨滅が著しく調整等不明。 ○口頸部より体部上半に縞直線 文、体部上半の直線文帯上には5 本1組のへら描状線を縦位に施文。 ○体部内面ハケ調整後ナデか。	色調 淡褐色 胎土 3mm 大の砂粒 含有 焼成 良好	M 3 2 2
細頸壺 B 2	E 2 1 4	口径 7.5 最大直径 17.8 底径 5.1 器高 24.5	○口縁部はやや内湾気味に立 ち上がる。 ○下腹部の張る体部で、上げ 底の底部を有す。	○外面ハケ調整後ナデにより平滑 に仕上げる。底部より体部上半に 縞直線文。 ○口縁部内面に横方向のハケ調整 後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 2 4
壺C 1	E 2 1 5	口径 13.5	○外湾して開き、受口状に短 く立ち上る口縁部。 ○端部は平型に取める。 ○下ぶくれの体部と思われる。 体部より頸部にかけてなだら かな曲線を描いてすばます。	○口縁部外面に縞波状文(8条) を施す。 ○口頸部、体部外面ハケ調整、後 口頸部に縞直線文。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 3 2 9
壺F 2	E 2 1 6	口径 12.8 最大直径 16.3 底径 6.0 器高 22.1	○外反してのびる口縁部で曲 折して水平に開く。 ○胴長の体部で平底の底部を 有する。	○端部内面共横ナデ調整 ○器体外面ハケ調整。 ○内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 2 9
壺底部	E 2 1 7	底径 6.1	○突出気味の底部で、上げ底 を呈す。	○外面ハケ調整。 ○内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 3 2 9
鉢D	E 2 1 8	口径 15.0 底径 6.1 器高 8.5	○安定した平底の底部より体 部は内湾して外方向にのび、 口縁部は短くやや外反する。	○口縁部内外面横ナデ。 ○体部外面ハケ調整。 ○体部内面ナデ。	色調 暗褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 3 0

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
壺C1	E219	口径 12.2 最大腹径 22.6 底径 6.0 器高 34.6	○筒状の頸部に外反して受口状に立ち上る口縁部。端部を平坦に収める。 ○胴部下方で最大腹径を有する下ぶくれの体部で、なだらかに内上方にすばまり筒状の頸部に来る。 ○底部は凹底。	○口縁部外面横ナデ調整、櫛描波状文を廻らす。 ○口頸部外面ハケ調整後ナデ。櫛描直線文4帯(複帯)波状文1帯を廻らす。 ○体部外面ハケ調整、磨減が著しい。 ○体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M334
壺C1	E220	口径 15.3 最大腹径 24.6	○筒状の頸部より口縁部は外反して開き、さらに受口状に立ち上がる。端部は平坦に収める。 ○下ぶくれの体部。	○口縁部外面横方向のハケ調整後横ナデ調整。頸部及び体部外面ハケ調整。口頸部には櫛描直線文帯を施文。 ○体部上半に指押さえ。 ○口縁部内面横ナデ調整。頸部ナデ調整。 ○体部内面ハケ調整後ナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M334
鉢C2	E221	口径 26.0 底径 7.0 器高 21.0	○深い倒錐形体部に、口縁部は緩やかに湾曲して広がる。 ○胴部に瘤状突起(4ヶ)。	○外面ハケ調整後上半ナデ、肩部に櫛描直線文(9条)2帯。 ○口縁部内面に瘤状突起(4ヶ)。 ○内面ナデ。	色調 暗茶褐色 胎土 1~2mm 大の石粒 含有 焼成 良好 体部外面に灰付着	M334
壺底部	E222	底径 8.0	○底部より直線的に斜上方にのびる体部。	○外面ハケ調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M337
壺C1	E223	最大腹径 23.1	○下腹部の張る下ぶくれの体部。	○頸部外面ハケ調整後ナデ、櫛描直線文、波状文を廻らす。 ○体部外面ハケ調整、胴部と底部の境付近に横方向のハケメ ○体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M340
壺C1	E224	口径 12.2	○筒状の頸部に外反して受口状に短く立ち上る口縁部。端部は内傾する。	○口縁部外面横ナデ調整後櫛描波状文を廻らす。口頸部ハケ調整後櫛描直線文帯(複帯)を廻らす。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M341
壺I1	E225	口径 11.2	○緩やかに屈曲してのびる口縁部で、上方において内折して短く立ち上がる。端部は凹面を成す。	○口縁立ち上がり部内外面共横ナデ調整。 ○口頸部外面横方向のハケ調整。 ○口頸部内面ハケ調整後口縁部ナデを行なう。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M341
壺底部	E226	底径 4.0	○平底の底部で、体部は斜上方にのびる。開きの小さい底面。	○外面ハケ調整、底部側面指押さえ。 ○内面指押さえ及びナデ。	色調 暗褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M341
壺C1	E227	口径 12.6	○体部は下ぶくれを呈すと思われる。体部より頸部はなだらかな曲線を描きすばまる。 ○口縁部はやや内湾気味に立ち上がり端部を平坦に収める。	○内外面共磨減著しく調整、施文等は不明であるが、外面はハケ調整後ナデを施していると思われる。 ○頸部に櫛描直線文か。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M342
壺底部	E228	底径 4.8	○底部は上げ底を呈し、木葉痕残存。体部は底部より斜方向に直線的に開く。	○内外面共ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M342

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
赤底部	E 2 2 9	底径 5.5	○突出気味の底部で上げ底を呈す。	○外面ハケ調整。 ○内面指押さえ。	色調 赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 4 2
赤底部	E 2 3 0	底径 6.4	○底部はわずかに上げ底を呈し中央が接地する。	○外面ハケ調整。 ○内面磨滅しており調整不明。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 4 2
赤C1	E 2 3 1	口径 12.0 最大直径 22.2 底径 6.5 器高 29.5	○筒状の頸部に短く外反気味に立ち上がる口縁物。端部は外傾する。 ○胴部下方が大きく張る下ぶくれの体部。 ○上げ底の底部。	○口縁立ち上がり部内外面共横ナデ調整。 ○口縁部及び体部外面ハケ調整後一部ナデ、口縁部に磨指直線文帯(複帯)を廻らす。 ○口縁部内面ハケ調整後ナデ。体部内面ハケ調整後上半に草状の植物を束ねてナデを施すか?	色調 黄灰褐色 胎土 石粒多含 焼成 軟	M 3 4 3
細頸壺 B2	E 2 3 2	口径 8.4 最大直径 18.3 底径 4.8 器高 23.5	○短い筒状の頸部に外反して開き、上方で内傾して短く立ち上がる口縁部。端部を丸く収める。 ○胴部下方が大きく張る下ぶくれの体部。 ○底部は上げ底。	○口縁立ち上がり部外面に磨指波状文(2条×2連)、口縁部に磨指直線文帯(複帯)を廻らし、屈曲部には低い磨指直線文帯を2帯貼り付ける。胴部外面に磨指直線文、波状文(2条×2連)を廻らし、直線文帯上には花卉様の弧状文を付加。 ○器体外面ハケ調整後上半ナデにより平滑に仕上げる。 ○内面ハケ調整、上半ナデ。	色調 淡褐色 体下部黒斑 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 4 3
赤D	E 2 3 3	口径 11.5 最大直径 19.2 底径 5.5 器高 19.7	○口縁部は「く」字形に屈曲し外滴してのびる。端部は丸く収める。 ○胴部下方で最大直径を有する下ぶくれの体部で、上げ底の底部を有す。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○頸部外面に磨指直線文(6条単位)を廻らす。 ○体部外面へラミガキ。 ○体部内面指押さえ及びナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 4 2
赤体部	E 2 3 4	最大直径 41.6 底径 8.8	○胴部の膨らむ縦長の体部。 ○安定した平底の底径。	○器体外面粗いハケ調整後上半ナデ調整か。上半に磨指直線文、波状文(各7条)を交互に廻らす。 ○体下部にヘラケズリ。 ○内面に外面と同一の粗いハケ調整。	色調 乳褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M 3 4 3
赤底部	E 2 3 5	底径 6.6	○上げ底の底部。	○内外面共指押さえ及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 1mm 大の細砂含有 焼成 良好	M 3 4 2
赤底部	E 2 3 6	最大直径 16.9 底径 5.1	○下ぶくれの体部を有すと思われ底部は、わずかに上げ底を呈す。	○体部外面ハケ調整。 ○体部内面ハケ調整後ナデ。 ○底部内面クモの果状のハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 3 4 5

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>ca.</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
甕A1	E237	口径 31.5	○外反気味に立ち上がる口縁部で、端部を丸く収める。	○内外面共横ナデ調整。	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M347
壺	E238	口径 13.7	○短く外湾してのびる口縁部。	○内外面共横ナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M347
壺体部	E239	最大腹径 25.9 底径 6.1	○凹状の底部。下ぶくれの体部か。	○内外面共磨減が著しく詳細不明ハケ調整痕が認められる。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大までの 砂粒含有 焼成 良好	M347
壺C1	E240	口径 14.3 最大腹径 25.8 底径 5.7 器高 33.0	○筒状の頸部に外反して、受口状に立ち上がる口縁部。端部は丸く収める。 ○下ぶくれの体部で、なだらかな曲線を描いて頸部に到る。 ○凹状の底部。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○口頸部及び体部外面ハケ調整を施すか。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M349
細頸壺A	E241	口径 12.7	○外反して漏斗状にのびる口縁部。端部は外傾する。 ○胴の張る体部か。	○口頸部外面ハケ調整後横ナデ、口頸部より頸部に横線直線文(5条)7帯を廻らす。体部外面粗いハケ調整。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部にもハケ調整痕残。	色調 淡褐色 胎土 1mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M349
甕A2	E242	口径 22.4	○外反して開く口縁部。 ○部が張る倒錐形の体部か。腹径が口径を上まわる。	○器部外面横ナデ調整。 ○器体外面縦方向の粗いハケ調整後胴部に直線文を廻らす。 ○口縁部内面には波状を交えた横方向のハケ調整を施す。 ○体部内面指押え及びナデ。	色調 内淡褐色 外褐色 胎土 1~2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M349
脚部	E243	底径 9.5	○付根より「ハ」字状に緩やかに開く脚部、裾輪部をわずかに上方に拡張する。	○外面ナデ。 ○内面ヘラケズリ、下方にハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 細砂 多量含有 焼成 良好	M349
壺底部	E244	底径 6.9	○平底の底部。	○内外面共ハケ調整。 ○底面ヘラケズリ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M349
壺底部	E245	底径 8.3	○平底の底部か?	○外面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M349
壺A5	E246	口径 20.6	○大きく外湾して広がる口頸	○端部外面横ナデ		M350

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
			部、端部は面をもつ。 ○球状の体部	○口頸部及び肩部に縦位のハケ調整、体部下斜方行のハケ調整 ○口縁部内面横ナデ ○内面ハケ調整		
空体部	E 2 4 7	最大腹径 46.0 底径 9.0	○大型で球状の体部。 ○底部は凹状を呈す。	○外面ハケ調整後一部ナデ、腹部と底部の接合付近ヘラミガキ。 ○内面ナデ、底部内面ハケ調整。	色調 淡褐色 均黒色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 5 0
遊口頸部	E 2 4 8	口径 11.5	○外反気味にのびる口縁部で端部を丸く収める。	○内外面共ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 5 2
壺A3	E 2 4 9	口径 11.4 最大腹径 22.2 底径 6.0 器高 29.0	○外反して開く口縁部で、上方において短く内折する。 ○下ぶくれの体部。 ○底部は凹状を呈す。	○器体外面磨減が著しく調整、施文等は不分明、口縁部、肩部にハケ調整痕、頸部より体部上半に横描直線文5帯。 ○体部内面下半ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 1~ 3mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M 3 5 4
壺底部	E 2 5 0	底径 4.6	○平底の底部より内湾気味に斜上方にのびる体部。	○外面ハケ調整。 ○内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 3 6 3
壺C1	E 2 5 1	口径 13.1 底径 5.5	○外反気味にのびる頸部に屈曲して短く立ち上がる口縁部を有す。 ○下ぶくれの体部。 ○底部は平底を呈す。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○口頸部外前縦方向のハケ調整を行い、頸部に横描直線文(3条)とハケ伏具による庄痕文を施らす。 ○体部外面粗い縦方向のハケ調整後肩部には粗目のハケ調整を横方向に重ねる。 ○口頸部内面横方向のハケ調整後ナデを行う。 ○底部外面縦方向のハケ調整、内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 3 5 6
壺C1	E 2 5 2	最大腹径 25.0	○下ぶくれの体部で、なだらかにすばまり頸部に到る。 ○体部と頸部の境界は不明瞭であるが、内反して立ち上がる頸部より口縁部は、大きく外反してのびると思われる。	○口頸部外面ハケ調整後、頸部に横描直線文及び波状文を施らす。 ○体部外面ハケ調整。 ○頸部内面ハケ調整。 ○体部内面は磨減しており調整不明。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 3 5 6
細頸壺 H1	E 2 5 3	口径 12.4	○外反気味に直立してのびる口縁部。端部は外傾する。	○外面ハケ調整後口縁部横ナデ、以下ナデを行なう。口縁部より体部上半に横描直線文(7条)。 ○内面細かいハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 7mm までの砂 粒含有 焼成 良好	M 3 6 3
壺B1	E 2 5 4	口径 13.2	○外反して受口状に立ち上がる口縁部。波状口縁を呈す。	○口縁部外面に断続的な横方向のハケ調整、体部に縦方向のハケ調	色調 暗茶褐色	M 3 6 3

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
			<ul style="list-style-type: none"> <li>○肩の張らない体部。</li> <li>○口縁部下に2ヶ1組の小孔を穿つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>整後、胴部に藤状文様の直線文帯を施文、又口縁部内面にも同様の施文を行なう。体部内面ナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>胎土</li> <li>石粒含有</li> <li>焼付 良好</li> </ul>	
壺I 2	E 2 5 5	口径 9.1	<ul style="list-style-type: none"> <li>○直口の口縁部、端部はやや内傾する面をなす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部内外面共横ナデ調整、外面に凹線文1条、体部外面ハケ調整。</li> <li>○体部内面指押さえ及びナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色調</li> <li>淡褐色</li> <li>胎土 1mm</li> <li>大の砂粒含有</li> <li>焼成 良好</li> </ul>	M 3 6 4
壺D	E 2 5 6	口径 14.8 最大直径 17.4 底径 5.0 器高 16.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「く」字形に短かく外反する口縁部。端部は面をもつ。</li> <li>○胴の張る球状の体部で、上げ底を有す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部外面横ナデ調整、体部ハケ調整後ナデ。</li> <li>○内面ハケ調整後ナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色調</li> <li>淡褐色</li> <li>胎土 1mm</li> <li>大までの砂粒含有</li> <li>焼成 良好</li> </ul>	M 3 6 6
壺頸部	E 2 5 7		<ul style="list-style-type: none"> <li>○筒状の頸部に比較的張りの強い体部を有すと思われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○頸部より体部外面ナデ調整を行い、5条単位の直線文、波状文を廻らせる。</li> <li>○内面ナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色調</li> <li>淡茶褐色</li> <li>胎土 細砂</li> <li>多量含有</li> <li>焼成 良好</li> </ul>	M 3 6 6
壺G	E 2 5 8		<ul style="list-style-type: none"> <li>○大きく外湾する頸部で曲折して立ち上がる口縁部を有すと思われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部外面は、縦方向後斜方向にハケ調整を行う。</li> <li>○肩外面は縦方向後斜方向にハケ調整。</li> <li>○頸部屈曲部に巾1.8cmの低いハケ圧痕文凸帯を貼り付る。</li> <li>○口頸部内面斜方向のハケ調整で肩部内面には横方向にハケ調整を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色調</li> <li>淡褐色</li> <li>胎土 良好</li> <li>焼成 良好</li> </ul>	M 3 6 6
壺C 1	E 2 5 9	口径 13.4 最大直径 23.7 底径 5.5 器高 30.4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○短い筒状の頸部に外反してさらに受口状に立ち上がる口縁部。端部は丸味をもつ。</li> <li>○胴部下方が強く張る下ぶくれの体部。</li> <li>○底部は凹状を呈す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○端面及び口縁部外面に縞描波状文。口頸部及び体部外面磨減が著しく施文、調整等不分明。ハケ調整後ナデを施すか、頸部より肩部にかけて縞描直線文帯を廻らす。</li> <li>○口縁部内面横ナデ調整、頸部に指押さえ、体部ナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色調</li> <li>淡褐色</li> <li>胎土 微砂</li> <li>粒含有</li> <li>焼成 良好</li> </ul>	M 3 6 7
壺A 2	E 2 6 0	口径 32.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大きく外方に開く口縁部で端部下端を外方に拡張する。</li> <li>○腹部が大きく膨らむ体部を有すと思われる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○端面外面横ナデ後下端にハケ器具による刻み目を廻らす。</li> <li>○口頸部外面右下がりのハケ調整後、2条単位の沈線2帯また3個単位の縞描列点文2帯を廻らす。</li> <li>○口縁部内面横ナデ後3条単位の波状文を2帯廻らせる。</li> <li>○頸部内面指押さえ及びナデ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色調</li> <li>灰褐色</li> <li>胎土</li> <li>細砂含有</li> <li>焼成 良好</li> </ul>	M 3 6 6
壺B2-II	E 2 6 1	口径 19.1 最大直径 18.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○湾曲して開く頸部より口縁部は鋭く内反して立ち上がる。端部は内傾する浅い凹面を呈す。</li> <li>○腹部の張る体部。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○口縁部外面は右下りのハケ調整。端部は強い横ナデ調整を行い後15個一単位とする刻み目を等間隔に廻らす。</li> <li>○頸部外面より体部にかけて右下がりのハケ調整、体部上半には縞描直線文を廻しその上に縞描列点文(ハケ)を4帯左下がりに施文。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色調</li> <li>淡茶褐色</li> <li>胎土 良好</li> <li>焼成 良好</li> <li>外面焼付著</li> </ul>	M 3 6 6

器形	土器番号	法量 cm	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				○内面口縁部及び体部は、横方向のハケ調整、後下半はナデを行なう。		
鉢C1	E 262	口径 23.4 底径 8.3 器高 11.4	○半球碗状の体部にやや上げ底の安定した底部。 ○外湾して広がる口縁部でややふ厚い。	○端部外面横ナデ調整、体部外面ハケ調整後下半の一部ナデ。 ○口縁部内面に櫛描波状文を施らす。体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 2mm 大までの砂粒含有焼成 良好	M 366
細頸壺 B2	E 263	口径 8.6 最大直径 17.0	○胴部下方で最大直径を有する下ぶくれの器形と考えられる。頸部に向って内湾してなだらかにすぼまる。 ○細い筒状の頸部より口縁部は外反して開き、短く内方に立ち上る。 ○端部先端は、尖り気味に収める。	○端部内外面共横ナデ調整 ○口縁部外面ナデ調整後櫛描直線文(5条)を7帯、刺突文1帯、肩部にかけて櫛描直線文、ヘラ描波状文等を施らす。 ○内面はナデ調整。頸部にはしほり目を残す。	色調 肉灰褐色 内暗灰色 胎土 石英等砂粒含有 焼成 軟	M 367
壺底部	E 264	底径 8.2	○平底の底部。体部は内湾気味に斜上方にのびる。	○外面ハケ調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 367
壺底部	E 265	底径 6.6	○平底の底部。体部は直線的に斜上方にのびる。	○底部外面ハケ調整。 ○底部内面指押さえ及びナデ。	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 367
甕B2-II	E 266	口径 20.5	○湾曲してのびる頸部より口縁部は受口状に立ち上る。 ○端部を平坦に収める。	○口縁部外面ハケ調整後上方に枳ナデを施す。 ○頸部外面縦方向のハケ。内面には、横方向のハケ調整を行なう。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 367
壺G2	E 267	口径 30.3	○外開きの頸部に大きく外反して、ゆるく巾広に立ちあがる。立ち上がり部は、非常に甘い。 ○端部は外傾し凹状を呈す。	○口縁部外面ハケ調整後櫛描列点文を施らす。口頸部に縦位のハケ調整。 ○内面横位のハケ調整後口縁部横ナデ。	色調 淡褐色 外面に黒点を有す 胎土 1~2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M 375
壺日1	E 268	口径 9.8	○外開きの口縁部で、上方において甘く内折する。 ○端部は内傾する。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○口縁部外面縦位のハケ調整。 ○口頸部内面指押さえ及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 375
細頸壺 B3	E 269	口径 12.0 最大直径 21.6 底径 5.4 器高 31.6	○短い筒状の頸部に外反して受口状に立ち上る口縁部。立ち上りは非常に甘く丸味を有す。 ○端部はふ厚く平坦に収める。 ○下ぶくれで丸味のある体部。 ○凹状の底部。	○口縁部外面に櫛描波状文を施らす。頸部ハケ調整後ナデ。櫛描直線文を施らす。 ○体部下半ハケ調整。胴部と底部の接合付近に指押さえ。 ○口頸部内面横ナデ調整。 ○体部内面下半に粗いハケ調整。	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 386

(※同上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
高坏A	E 270	口径 34.7 底径 16.0 器高 23.3 坏部高 10.1	○坏部部は大きく筒筒して広 り口縁部は内湾気味に立ち上 る。端部は肥厚し凹状を呈す。 ○脚部は筒状の柱状部からゆ るやかに「ハ」字状に開く裾 部。裾端部を上下にわずかに 拡張する。	○口縁部外面横位のヘラミガキ。 1条の凹線が廻る。 ○体部及び頸部外面ハケ調整。端 部横ナデ調整 ○体部内面ハケ調整後ナデ。 ○脚部内面ヘラケズリ。 ○円板充填により坏部形成。	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 386
甕C1	E 271	口径 12.4 最大腹径 22.9 底径 6.0 器高 32.8	○筒状の頸部に外反して受口 状に立ち上る口縁部。 ○下ぶくれの体部で、上げ底 の底部を有す。	○口頸部外面に櫛描直線文帯 ○体部外面ハケ調整後上半ナデ、 胴部と底部の接合付近に二次調整 の筋位のハケメ。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部下半ハケ調整後ナデ、上半 にナデ。	色調 淡褐色 胎土 1～ 3mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M 387
細頸甕 C2	E 272	口径 9.0 最大腹径 17.0 底径 5.4 器高 22.5	○下腹部の張る体部より細く 外湾気味にのびる口頸部。端 部は面をなす。 ○底部は平底。	○端部外面に2本1組の棒状浮文 を4方に貼り付ける。 ○器体外面ハケ調整後ヘラミガキ。 頸部より上腹部にかけ櫛描直線文 を廻らす。器体内面ハケ調整後上 半ナデ。	色調 淡褐色 胎土 1～ 2mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M 387
逆頸部	E 273	頸部径 26.3	○頸部のみ。形状不明。	○頸部屈曲部に巾3.0cmの低い指 頭圧痕文凸帯を貼付する。 ○体部外面ハケ調整。 ○頸部内面ハケ調整後ナデ、体部 横方向のハケ調整。	色調 淡赤褐色 胎土 2～ 3mm大の 砂粒含有 焼成 良好	M 388
甕A1	E 274	口径 24.8	○大きく外湾して広がる口頸 部。 ○脛部を下方にぎしく拡張す る。	○端部内外面共横ナデ後、外面に 櫛描波状文(5条)、内面には列 点文(9ヶ)を羽状に廻らし、さ らに瘤状の小突起を貼り付ける。 ○口縁部外面ハケ調整(6条)を 行い、頸部には巾5mmの断面三角 形貼り付け凸帯3本、その間に2 条単位の櫛描波状文を廻らす。 ○口頸部内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 391
甕E1	E 275	口径 14.4	○外湾して開く口頸部で、端 部を下方にぎしく拡張する。	○口縁部内外面共横ナデ調整、外 面に3条の凹線文を廻らし、下端 にはヘラ具による割目目を廻ら す。 ○頸部外面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M 391
甕G2	E 276	口径 25.0	○直立してのびる口縁部で、 外開きの太い筒状の頸部が付 くと思われる。端部内面に肥 厚させ平坦に収める。	○口縁部外面ハケ調整後ナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 391
甕底部	E 277	底径 5.0	○平底の底部。	○外面ヘラケズリ。 ○内面指押さえ。	色調 淡黒褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M 391
高坏A1	E 278	口径 31.2	○内湾気味に斜上方にのびる 坏部で、端部は内方に肥厚し	○口縁部内外面共横ナデ調整。外 面に1条の凹線文を廻らす。	色調 淡赤褐色	M 391

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
			平坦面に収める。	○坯部内外面共ヘラミガキ。	胎土 砂粒含有 焼成 良好	
甕B2-II	E 279	口径 17.4 最大直径 19.3	○腹部の張る体部より頸部は大きく高曲して開き、口縁部は強く屈曲して内方に立ち上がる。 ○底部は内傾する浅い凹面を呈す。	○口縁部外面ハケ調整後横ナデ。 ○体部外面ハケ調整上半にナデ。 ○縞描列点文、直線文、弧状文等を施文。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 外面煤付着 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M 392
甕A4	E 280	口径 13.4 最大直径 22.8 底径 4.8 器高 24.7	○鋭く屈曲する頸部に短く外反して開く口縁部で、底部は外傾する。 ○体部はほぼ球状を呈し、ゆるやかにすばまり平底の底部に到る。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○体部内外面共ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 396
壺I 2	E 281	口径 10.2 最大直径 22.8 底径 5.3 器高 29.2	○口縁部は直口して立ち上がり端部を平坦に収める。 ○体部は、卵倒形を呈し直線的にすばまり平底の底部に到る。	○端部内外面共横ナデ調整、外面に1条の凹線文を彫らす。 ○口縁部外面左下がりの粗いハケ調整、体部外面上半に叩きを施した後全体ハケ調整。 ○内面指押さえ及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 396
甕底部	E 282	底径 4.6	○平底の底部で、体部はやや内湾気味に斜上方にのびる。	○内外面共ハケ調整。	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 396
甕C 1	E 283	口径 19.1 最大直径 32.1 底径 8.5 器高 42.2	○外開きの頸部に曲折して立ち上がる口頸部。 ○底部はやや内傾する。 ○胴部中位で最大径を有する体部。 ○底部は上げ底。	○口縁部外面横ナデ調整。5条の浅い凹線文を彫らし、直線文(3条×2連)を縦位に等間隔に施文。 ○口頸部及び体部上半ハケ調整後ナデ、縞描直線文、波状文(9条)を交互に施らす。体部中位にハケ調整、下半にはヘラミガキ。 ○口縁部内面横ナデ調整、頸部及び体部上半ハケ調整後ナデ、下半ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M 398
甕D2-II	E 284	口径 23.5 最大直径 22.0 底径 5.0 器高 33.8	○やや腹部が膨らむ倒鐘形の体部より口縁部は外湾して広がりがり上方でやや外反気味に短く立ち上がる。 ○底部は尖り気味。 ○底部は平底を呈す。	○口縁部外面に横位のハケ調整。 ○器体外面縦位のハケ調整を施す。胴部には、縞描列点文、直線文を施らす。 ○口頸部内面横位のハケ調整。体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 外面煤付着 体部下半にベルト状(8cm巾)に煤付着なし、対応する内面の同位置に煤付着 胎土 良好 焼成 良好	M 398
甕H3	E 285	口径 15.0	○受口状の口縁部。	○口縁部外面横ナデ調整後上端にヘラ具による刻目を施らす。 ○頸部にハケ調整。 ○内面横位のハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 3mm までの砂	M 398

(※同上:復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
					粒含有 焼成 良好	
壺D1	E286	口径 13.6 最大腹径 22.3 底径 5.6 器高 30.0	○口縁部は頸部より湾曲して立ち上り、さらに外方にのびる。 ○頸部は上方に拡張する。 ○やや肩の張る胴長の体部。 ○安定した平底を有す。	○端部内外面共横ナデ調整。 ○口縁部、体部外面相いハケ調整。 ○口縁部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面ハケ調整、底部内面指押さえ及びナデ、底部側面指押さえ。	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好	M400
壺I1	E287	口径 9.1 最大腹径 20.0 底径 4.4 器高 25.5	○口縁部は外反して開き上方で短く内反する。端部を平坦に収める。 ○胴長の体部で底部は平底。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○体部外面叩きによる成形後ハケ調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 赤褐色 胎土 2mm 含有 焼成 良好	M400
壺I2	E288	口径 9.6 最大腹径 19.2 底径 6.2 器高 27.1	○直口する口縁部。上端は凹状を呈す。端面はやや外傾。 ○胴長の体部で上げ底の底部を有す。底部は焼成後穿孔。	○口縁部上端強い横ナデ。 ○口頸部、体部外面縦位のハケ調整。体部には先行する横位のハケメが認められる。体部下半ヘラケズリ。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 2~3mm大の砂粒含有 焼成 良好	M400
甕C1	E289	口径 19.9 最大腹径 26.2 底径 6.1 器高 29.5	○外反してのびる口縁部、端面は外傾する。 ○球状の体部で平底を有す。	○端部外面横ナデ調整。下端にヘラ状具による刻み目を廻らす。口頸部及び体部外面ハケ調整、頸部に櫛指列点文1帯、肩部に櫛指直線文(7条)3帯、胴部と底部の接合付近には、ハケメによる横位の二次調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好 体下部に煤付着	M400
甕B2-II	E290	口径 17.2 最大腹径 17.7	○大きく外湾して開く口縁部で上方においてやや内反気味に立ち上がる。 ○端部は内傾する面をなす。 ○腹部の張る縦長の体部。	○口縁部外面ハケ調整後上端に強い横ナデ調整を施す。 ○口頸部及び体部外面ハケ調整、肩部に櫛指列点文、直線文を交互に廻らす。 ○口頸部内面ハケ調整、体部はハケ調整後ナデか。	色調 暗茶褐色 胎土 良好 焼成 良好 体部外面煤付着	M400
甕A1	E291	口径 14.6 最大腹径 4.5 底径 23.2 器高 17.2	○口縁部は「ハ」字状に短く外反する。 ○端部は外傾する。 ○倒錐形の体部にやや上げ底の底部。	○端部外面ヘラ状具による刻み目を廻らす。 ○口縁部外面左下りのハケ調整、頸部外面接合点に指押さえ。 ○体部外面縦方向のハケ調整、下半にはより細いハケ調整を行う。 ○口縁部内面縦方向のハケ調整。 ○体部内面ナデにより平滑に仕上げる。	色調 淡褐色 (外面スス付着) 胎土 細砂含有 焼成 良好	M400
壺A3	E292	口径 10.4 最大腹径 20.0	○ゆるやかに屈曲する頸部に外反する口縁部がつく。 ○下ぶくれの体部。	○端部内外面共横ナデ調整。 ○口縁部、体部外面ハケ調整。肩部外面に櫛指直線文(8条)2帯を廻らす。 ○口縁部内面横ナデ調整。 ○体部内面指押さえ及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M403
細頸壺	E293	最大腹径 17.9	○算盤玉状の体部で上げ底の底部を有す。	○体部外面ハケ調整後上半ナデ、櫛指直線文(10条)を廻らしさら	色調 淡褐色	M404

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
		底径 5.0		に直線上に縦位に施文。 ○下半にヘラミガキ。 ○体部内面ハケ調整。	内暗灰色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
甗G1	E294	口径 21.5 最大直径 37.2 底径 7.5 器高 51.8	○外開きの頸部に曲折して直立する口縁部、端部を平坦に収める。 ○上腹部が膨らむ縦長の体部で、平底の底部を有す。	○口縁部外面横ナデ調整、3条の凹線文を廻らし、ヘラ状具による刻み目を施文。頸部横ナデ調整後横描直線文4帯。体部外面ハケ調整後上半ナデ、横描波状文、直線文(5条)を交互に廻らす。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大までの砂粒含有 焼成 良好	M405
網頸壺C3	E295	口径 14.1	○細い筒状の頸部より口縁部は外反して広がり、上端は短く内折して立ち上がる。 ○大きく膨らむ球状の体部か。	○端部内外面共横ナデ調整。 ○口縁部及び体部外面ハケ調整後ナデを行う。 ○頸部外面に7条単位の横描直線文を3帯、体部上半に8条単位の横描直線文を4帯廻らす。 ○体部外面中位は、ハケ調整後ヘラミガキを施す。 ○口縁部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 1~2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M405
網頸壺D	E296	最大直径 18.5 底径 5.4	○口頸部は細く外反気味にのびる。 ○ほぼ算盤玉状の体部で上げ底の底部を有す。	○外面磨滅が著しく調整、施文等不分明。口頸部及び体部上半に横描直線文、波状文、体部下半にハケ調整痕が認められる。 ○体部内面上半にハケ調整、下半にナデ。	色調 内淡赤褐色内薄褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M405
壺I1	E297	口径 12.1 最大直径 19.8 底径 4.0 器高 25.3	○受口状の口縁部 ○胴部上方が張る体部で、直線的にすばまり平底の底部に到る。	○内外面共磨滅が著しく詳細不明。 ○口縁部外面横ナデ調整、体部外面ハケ調整を施す。肩には、ハケ状具による汗假文が認められる。 ○内面ハケ調整。	色調 赤褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M405
壺体部	E298	最大直径 18.0 底径 3.8	○胴部中位に最大直径を有す壺でゆるやかに内上方にすばまり頸部に到る。 ○底部は平底を呈す。	○体部外面上半は、縦方向に下半は左下がりハケ調整を行う。 ○上半には横描直線文及び弧状文を廻らす。 ○内面ナデ調整及び指押さえ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M405
水差型土器B	E299	口径 8.4 最大直径 18.0 底径 5.3 器高 23.0	○水差型土器で胴部中位で最大径を有し直口する口縁部が付く。端部を平坦に収める。 ○肩付近に横位の半環状把手が付く。口縁部把手側に弧状のえぐりを入れる。 ○底部は平底を呈す。	○口縁部外面ハケ調整後横ナデを施す。1条の凹線文を廻らしその下位に横描点文を施文。 ○頸部より体部上半外面にかけて横描直線文、波状文を廻らす。 ○体部外面ハケ調整後上半ナデ。 ○口縁部内面ハケ調整。 ○体部内面ハケ調整後ナデを行っていると思われる。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M405
壺A1	E300	口径 17.3 最大直径 24.2 器高 34.0	○短く「く」字形に外反する。口縁部、端面は外積する。 ○胴部上方の張る縦長の体部が直線的にすばまり底部に至	○端部にヘラ状具による刻み目。 ○口縁部外面指押え及びナデ。 ○体部外面粗いハケ調整。 ○口縁部内面横方向のハケ調整。	色調 淡赤褐色 外面縦付着 胎土 2mm	M405

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
			る。	○ 体部内面ハケ調整痕残存。	大の石粒含有 焼成 良好	
高坏B	E 3 0 1	口径 16.5 底径 13.2 器高 17.3 坏部高 7.4	○ 坏部は直線的に斜上方のび、口縁部は屈曲して水平に開く。水平口縁の内側に1本の凸帯を廻らせる。 ○ 脚部は大きく「ハ」字状に開き裾端部を上方に拡張する。	○ 連続成形法。内板充填法により坏部を形成。 ○ 口縁部外面横ナデ調整。 ○ 器体外面ハケ調整、裾部下端横ナデ調整。 ○ 坏部内面ナデ及び指押え。 ○ 脚部内面ナデ及び指押え。しぼり目残存。	色調 褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 4 0 5
甕J	E 3 0 2	口径 18.6	○ やや外反気味に長くのびる口縁部。	○ 外面横ナデ調整、太く浅い凹線文4条を廻らす。 ○ 内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 粒砂含有 焼成 良好	M 4 0 6
甕A5	E 3 0 3	口径 11.7 最大口径 17.2	○ 「J」字形に外反してのびる口縁部、頸部は外傾する。 ○ 球状の体部か。	○ 口縁部外面横ナデ調整。 ○ 体部外面磨減が著しいが、ハケ調整痕残存。 ○ 内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 4 0 6
蓋状部	E 3 0 4	底径 8.3	○ 安定した平底の底部。	○ 外面粗いハケ調整。 ○ 内面指押え及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 4 0 7
細頸壺D	E 3 0 5	口径 5.0 最大口径 16.3 底径 4.3 器高 18.9	○ 細い筒状の頸部にやや内湾気味にのびる口縁部、端部は強く内傾する。 ○ 算盤玉状の体部にややあげ底の底部。	○ 口縁部外面横ナデ調整。口縁部及び体部上半ハケ調整後ナデを施すが、下半に縦位のハケ調整。 ○ 口頸部から体部上半にかけ細指直線文、波状文を廻らす。 ○ 口頸部内面指押え及びナデ。 ○ 頸部にしぼり目残存。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M 4 0 2
壺G2	E 3 0 6	口径 24.2	○ 太い外開きの頸部に曲折してやや内反気味に直立する口縁部。 ○ 端部は平坦に収める。	○ 端部内外面共横ナデ調整。外面に1条の凹線文を廻らす。 ○ 口縁部外面左下りの粗いハケ調整後横ナデ調整。 ○ 頸部外面縦方向、体部外面斜方向のハケ調整。 ○ 頸部外面に巾2cmのハケ仕置文凸帯を貼り付る。 ○ 口頸部外面及び体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡茶褐色 胎刀 粒砂含有 焼成 良好	M 4 0 7
蓋底部	E 3 0 7	底径 9.0	○ 安定した平底の底部。体部は直線的に斜上方のびる。	○ 体部外面粗いハケ調整、下半にはより細いハケ状具により調整を施す。 ○ 体部内面粗いハケ調整。 ○ 底部外面ヘラケズリ。	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 4 0 7
高坏B	E 3 0 8	口径 18.0 底径 13.2 器高 17.6 坏部高 7.0	○ 坏部はやや内湾気味に斜上方のび、口縁部は屈曲して水平に開き、端部下端を下方にわずかに拡張。 ○ 水平口縁の内側に1本の凸帯を廻らせる。	○ 連続成形法。内板充填により坏部を形成。 ○ 器体内外面共磨減が著しく調整等については不分明。 ○ 口縁部外面横ナデ、裾部外面にハケ調整痕残存。また、口部内面は	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 4 0 7

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
			○脚部は比較的短く「ハ」字状にゆるやかに開き、裾端部を上方にわずかに拡張。	ヘラミガキか。		
釜F1	E309	口径 13.1 最大直径 24.5 底径 5.1 器高 30.5	○口縁部は外高して大きく広がる。端部上、下端をわずかに拡張。 ○腹部の張る縦長の体部で、平底の底部を有す。	○端部内外面共横ナデ調整。 ○口縁部外面ナデ。 ○体部外面縦方向のハケ調整後上半ナデを行う。体部上半に櫛歯直線文・波状文、(3条×2連)を交互に施文。 ○口縁部内面横ナデ調整。 ○体部内面指押さえ及びナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 粒砂含有 焼成 良好 体下部に煤の痕跡	M409
甗H1	E310	口径 10.5	○細く外反気味にのびる口縁部で、上方においてやや内折する。 ○端部は浅い凹面を成す。	○口縁立ち上がり部内外面共横ナデ調整、端部にヘラ直線文を施らす。 ○器体外面粗いハケ調整、頸部より体部上半にかけて櫛歯列点文・直線文・波状文を施文。 ○内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M409
甗G2	E311	口径 21.6 最大直径 38.8 底径 8.0 器高 54.2	○外開きの頸部に曲折して上方に立ち上がる口縁部で、端部を平坦に収める。 ○帯彫形の縦長の体部に、やや上げ底の底部。	○口縁部外面斜方向のハケ調整、上端に浅い1条の凹線文を施らす。 ○器体外面粗いハケ調整、頸部屈曲部に低い巾2cmのハケ匠直文凸帯を貼り付ける。 ○器体内面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M409
甗I2	E312	口径 9.5 最大直径 18.5 底径 5.4 器高 24.3	○直口気味にのびる口縁部。端部は内傾する面をなす。 ○腹の張る縦長の体部。 ○底部は平底。	○口縁部外面上端横ナデ調整、2条の浅い凹線を施らす。 ○口縁部外面ハケ調整、体部外面叩き後ハケ調整。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面ハケ調整。	色調 赤褐色 胎土 2mm 大の砂粒多量含有 焼成 良好	M409
細頸甗D	E313	底径 3.5 最大直径 9.0	○小型の細頸甗。体部は算盤玉状を呈し、頸部は細く上方にのびる。 ○底部は上げ底気味。	○頸部外面横ナデ調整、7条単位の櫛歯直線文を施らす。 ○体部外面上半ナデ、巾5mmの櫛状具を縦位に施文し6区劃に分割。その間に上→下に櫛状具により流水文を描く。 ○体部外面下半ハケ調整、中位に粘土紐接合痕跡存。指押さえを行。○体部内面指押さえ及びナデ。	色調 淡白褐色 胎土 粒砂含有 焼成 良好	M409
細頸甗D	E314	口径 5.4	○細い筒状の頸部に内湾して立ち上がる口縁部。 ○端部は平坦に収める。	○口縁部外面横ナデ調整後櫛歯列点文を斜状に施らす。 ○頸部外面に櫛歯直線文。 ○内面ナデ。	色調 赤褐色 胎土 3mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M409
甗C2	E315	口径 15.8 最大直径 18.8 底径 4.8 器高 24.8	○「く」字形に外反して開く口縁部で、端部下端をわずかに拡張する。 ○腹部の張る縦長の体部で、平底の底部を有す。	○端部外面斜方向のハケ調整後横ナデ、上・下端にヘラ状具による刻目を施らす。 ○口縁部外面ハケ調整後ナデ。 ○体部外面ハケ調整後上半ナデ、上半に櫛歯列点文、直線文、波状文等を施らす。 ○口縁部内面ハケ調整。 ○体部内面ナデにより平滑に仕上げる。	色調 淡茶褐色 胎土 良好 焼成 良好 体下部煤付着	M409

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
迦那壺 D	E 316	口径 19.7 最大腹径 26.5 底径 7.2 器高 35.5	○算盤玉状の体部に緩やかに内湾してのびる口縁部。 ○肩部は内傾する面をなす。 ○底部は平底。 ○体下部焼成後穿孔。	○口縁部外面に4条の浅い凹線文を廻らす。 ○口縁部より体部上半にかけ細描唐文10帯を廻らす。 ○器体外面へハケ調整後ナデ。 ○内面ナデ仕上げ。	色調 淡赤褐色 胎土 石粒含有 焼成 やや軟	M 410
合付鉢	E 317	口径 15.9 最大腹径 14.5 底径 8.2 器高 12.8	○口縁部は「く」字状に鋭く屈曲して開き、端部を上方に若干拡張する。 ○半球状の体部に「ハ」字状に開く脚部。	○端部外面横ナデ調整。 ○体部外面磨滅が著しかへハケ調整後ナデ調整か。体部下半及び脚部外面へラミガキ。脚部横ナデ調整。 ○口縁部内面横ナデ調整。 ○体部内面ハケ調整後ナデ調整。 ○脚部内面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 3mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M 410
甕A3	E 318	口径 18.9 最大腹径 27.2 底径 6.4 器高 29.5	○短く「く」字形に外反する口縁部、端部は上方に拡張し外傾する面をなす。 ○胴部上方が張る縦長の体部直線的にすばまり平底の底部に至る。	○端部外面横ナデ調整、体部外面粗いハケ調整。 ○口縁部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面は粗いハケ調整の上に細かいハケメを重ねて調整を行なう。下半へラ具によるナデつけ。	色調 淡褐色 体下半部煤付着 胎土 4mm 大までの砂粒含有 焼成 良好	M 410
壺H1	E 319	口径 9.5 最大腹径 22.1	○細く外湾気味にのびる口縁部で上方において弱く屈曲して短く直立する。 ○腹部の張る体部	○端部内外面共横ナデ調整 ○口頸部外面ハケ調整後頸部に細描直線文を廻らす。 ○体部外面ハケ調整、磨滅が著しい。 ○体部内面指さえ及びナデを行う。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 411
壺底部	E 320	底径	○平底の底部。体部は内湾気味に外上方にのびる。	○器体外面ハケ調整。 ○内面ナデ、下半へラケズリ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 412
壺I2	E 321	口径 10.2	○口縁部は直口にのびる。 ○縦長の体部か。	○端部内外面共横ナデ調整。外面に1条の凹線を廻らす。 ○口縁部外面左下がりのハケ調整。 ○体部叩き後ハケ調整を行う。	色調 赤褐色 胎土 細砂多量含有 焼成 良好	M 413
壺B2-II	E 322	口径 22.4	○口縁部は短かく直上に立ち上がる受口状を呈する。	○口縁部外面斜方向のハケ調整。 ○頸部外面ハケ調整。 ○口縁部内面横方向のハケ調整。	色調 暗茶褐色 胎土 1~2mm 大の砂粒含有 焼成 良好	M 413
壺I1	E 323	口径 9.8 最大腹径 21.6 底径 5.2 器高 28.0	○頸部で屈曲し短く外反して立ち上がる口縁部で、上方で曲折して内反する。端部は内傾する面を有す。 ○肩の張りの弱い比較的縦長の体部で、直線的にすばまり平底の底部に致る。	○端部内外面共横ナデ調整。 ○口縁部及び体部外面ハケ調整。 ○口縁部内面横ナデ調整。 ○体部内面ハケ調整後下半ナデを施す。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好 体下部に煤付着	M 413
壺体部	E 324	最大腹径 20.0 底径 5.4	○ほぼ球状の体部。 ○平底の底部。	○体部外面ハケ調整。 ○体部内面ハケ調整後ナデにより平滑に仕上げる。	色調 赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 やや不良	M 415

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
甌A4	E325	口径 6.6 最大直径 12.6 底径 4.4 器高 15.2	○小型の甌で球状の体部より口縁部はやや外反してのび、端部をわずかに外方に拡張、外積する面をなす。 ○底部はわずかに上げ底を呈す。	○端部内外面共横ナデ調整。 ○口縁部、体部外面8条単位の粗いハケ調整を施す。 ○内面指押さえ及びナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M415
細頸甌D	E326	口径 7.4	○細く外反気味にのびる頸部に内湾して立ち上がる口縁部。 ○端部を平坦に収める。	○外面横ナデ調整、口縁部に4条の浅い凹線、頸部には(4条×2連)1組の直線文3帯。 ○口頸部内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M416
甌B2-II	E327	口径 13.2	○いわゆる「受口」状口縁で、頸部より丸味のある垂折をもつて短く内反して立ち上がる。端部は内積する。 ○比較的肩の張りの弱い体部を有するとと思われる。	○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○頸部外面ハケ調整後指押さえ。 ○肩部外面縦方向のハケ調整後飾部波状文を施す。 ○頸部内面ハケ調整、体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 茶褐色 (外面スチ付着) 胎土 細砂含有 焼成 良好	M416
古付甌	E328	口径 14.9 最大直径 14.0 底径 7.8 器高 18.0 脚高 5.6	○口縁部は短かく「く」字形に外反して開く。端部は外積する。 ○球状の体部 ○脚部は短い筒状の柱状部に「へ」字状に開く裾部が付く。	○端部外面横ナデ調整、以下器体外面縦位のハケ調整。 ○口縁部内面は横位に、体部は斜方向のハケ調整を行い、体部下半ナデ、腹部内面ナデ、円板充填により鉢部を形成。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M416
甌I2	E329	口径 10.2 最大直径 21.9	○球状の体部。 ○口縁部はやや外反気味に直立して立ち上り、上端はすばまる。 ○端部は内積する面をなす。	○端部内外面共横ナデ調整。 ○口縁部は左下りのハケ調整。 ○体部上半叩きの上に縦方向のハケ調整。 ○体部下半ハケ調整、叩きは認められない。 ○体部内面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M420
甌A5	E330	口径 14.0 最大直径 24.4	○ほぼ球状の体部で口縁部は短く外反して開く。端部は面をもつ。	○端部内外面共横ナデ調整。 ○器体外面ハケ調整。 ○内面磨減により詳細不明。ハケ調整後ナデを施すか。	色調 淡褐色 胎土 細砂多量含有 焼成 良好	M420
細頸甌D	E331	底径 4.6	○算盤玉状の体部に凹状の底部。	○外面ハケ調整後ナデか。体部上半に飾部直線文。 ○内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M421
高杯B	E332	口径 22.9 杯部高 7.9	○直線的に斜上方にのびる杯部。口縁部は曲折して水平に開く。 ○水平口縁の内側に1本の凸帯を貼り付ける。	○連続成形法、円板充填により杯部を形成。 ○口縁部内外面共横ナデ調整。 ○体部内外面共ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 砂粒含有 焼成 良好	M421
甌G1	E333 336	口径 23.4 底径 8.9	○外開きの頸部に曲折して直上にのびる口縁部。端部は鋭く内積する。 ○頸部中位の張る筒長の体部 ○底部はわずかに上げ底を呈	○口縁部外面横ナデ調整。5条の凹線文を施す。 ○頸部及び体部外面粗いハケ調整。 ○底部側面には細いハケ調整。 ○頸部外面に巾1.3cmのハケ仕痕	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M422

(※図上復元)

器形	上器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
			す。	文凸帯を貼り付ける。 ○口縁部内面横ナゲ調整。 ○頸部内面ナデ。 ○体部内面ハケ調整。 ○底部内面指押さえ。		
細頸壺 D	E 3334	口径 6.0 最大腹径 15.5 底径 5.0 器高 20.1	○算盤玉状の体部で、細い筒状の頸部より口縁部は内湾して立る上る。 ○腹部はやや内傾する。 ○底部は平底を呈す。	○端部内外面共横ナゲ調整、外面に1条の凹線文を廻らす。口縁部に羽状列点文、以下口縁部に櫛描直線文、列点文等(8条単位)を施文。 ○体部外面ハケ調整後上半ナゲ、櫛描直線文を廻らし、さらに縦線文を付加する。文線帯最下段に櫛描波状文1帯を廻らす。 ○口頸部内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂多量含有 焼成 良好	M 4 2 2
甕 A 1	E 3335	口径 22.3 最大腹径 23.4 底径 5.3 器高 28.6	○大きく外反して広がる口縁部。 ○頸部は面をもつ。 ○胴部が張る縦長の体部で、中央部がやや膨らむ不安定な底部を有す。	○端部外面にヘラ状による刻み目。 ○器体外面縦位のハケ調整、体部には、先行する横位のハケ調整が認められる。体部下半には、やや細かいハケ調整を施すか。 ○口頸部内面横位のハケ調整、体部には斜方行に施す。	色調 淡赤褐色 胎土 1mm 大の砂粒含有 焼成 良好 外周縁付着	M 4 2 2
細頸壺 D	E 3337	口径 6.5 最大腹径 18.1 底径 5.5 器高 22.2	○内湾してのび上がる口頸部。 ○端部は平均に収める。 ○算盤玉状の体部に、わずかに上げ底気味の底部を有す。	○端部内外面共横ナゲ調整、外面に1条の凹線文を廻らす。 ○口頸部外面に羽状列点文、櫛描直線文(3条×2連)を施文。 ○体部外面ハケ調整後上半ナゲ櫛描直線文、波状文(3条×2連)を交互に廻らす。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。体部内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 4 2 3
細頸壺 B 3	E 3338	口径 8.3 最大腹径 18.7 底径 4.8 器高 25.1	○外反してのびる口縁部で、上方で短く内反して立ち上がる。 ○頸部を実り気味に収める。 ○下ぶくれの体部で全体に丸味がある。 ○底部は平底。	○口縁部上端内外面共横ナゲ調整。 ○口頸部及び体部外面ハケ調整、頸部に竹管文、胴部には櫛描直線文を廻らす。 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ、体部内面ナデ、下半にハケ調整痕。	色調 淡褐色 体部外面に黒斑 胎土 2mm 大の細砂含有 焼成 良好	M 4 2 4
甕 I 2	E 3339	口径 9.7 最大腹径 ※19.7 底径 6.0 器高 25.7	○頸部よりやや外反気味にのびる口縁部で、上方で短く立ち上がる。 ○体部は倒筒形を呈す。 ○底部は平底。	○端部内外面共横ナゲ調整。 ○口頸部及び体部外面ハケ調整。 ○内面ナゲ仕上げ。	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 4 2 4
甕 C 2	E 3340	口径 23.5	○大きく外湾して開く口縁部。端部は面をもつ。	○端部外面横ナゲ、下端にはハケ状具による刻み目を廻らす。 ○口縁部外面ハケ調整、頸部には6個単位の櫛描列点文を左下りに施す。 ○口頸部内面横方向のハケ調整後口縁部には横ナゲを施す。	色調 暗褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 4 2 4
壺体部	E 3341		○胴部の張る体部か。	○外面磨減が著しい。ハケ調整痕	色調	M 4 2 6

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
				残存、体部に縞指直線文。 ○内面ナデ。	淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	
水差形 土器A	E 3 4 2	口径 9.8	○内湾気味に立ち上る口縁部。 ○肩部は平坦に収める。 ○肩部には横位に半環状把手の痕跡残存。	○口縁部内外面共横ナデ調整、外面には7条の凹線文を廻らす。 ○体部外面上半には縞指直線文(11条単位)と左下りの縞指列点文(6ヶ単位)等を交互に施文。 ○体部内面ナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 4 2 6
水差形 土器A	E 3 4 3	口径 9.5	○内湾気味に立ち上る口縁部。肩部はやや内傾する。 ○肩付近に横位の半環状把手が付く。	○口縁部外面横ナデ調整、6条の浅い凹線文を廻らす。体部上半に縞指直線文、列点文を交互に施文 ○口縁部内面横ナデ調整存体部内面ナデ。	色調 淡赤褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 4 2 6
甕B2-II	E 3 4 4	口径 20.2	○大きく湾曲して広がる口縁部で組曲して短く直立する。 ○肩部は内傾する面を成す。	○外面ハケ調整、体部上半に縞指列点文、直線文を廻らす。 ○口縁部内面ハケ調整後ナデ、列点文を施す。体部内面ハケ調整後ナデ。	色調 暗灰色 胎土 細砂含有 焼成 良好 外面焼付着	M 4 2 6
壺底部	E 3 4 5	底径 4.6	○平底の底部で、体部はやや内湾気味に斜上方にのびる。	○体部外面ハケ調整、底部側面ヘラケズリ。 ○体部内面ハケ調整。底部内面にはクモの巣状にハケ調整を行う。	色調 褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 4 2 6
壺底部	E 3 4 6	底径 3.8	○小さな平底の底部。	○外面ヘラケズリ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 4 2 6
壺A1	E 3 4 7	口径 15.2	○筒状の頸部に外反して開く口縁部、肩部は外傾する面をなす。	○肩部外面横ナデ調整後下端にヘラ状具による刻目を廻らす。 ○口縁部外面ハケ調整後ナデ ○口縁部内面ハケ調整、頸部ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M 4 2 7
高环脚 部	E 3 4 8	底径 11.4	○「ハ」字状に開く脚部。裾端部をわずかに拡張。	○外面縦方向のハケ調整。底部下端部ナデ調整。 ○脚部内面には、巻き上げ痕及びしぼり目痕残存。指押え及びナデにより成形。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M 4 3 0
甕C2	E 3 4 9	口径 18.6 最大腹径 22.1 底径 5.0 器高 26.4	○腹部の強く張る体部より口縁部は緩やかに外方に広がる。 ○肩部は外傾する面を成す。 ○底部は平底。	○肩部外面横ナデ調整後上・下端にヘラ圧痕文を廻らす。 ○外面粗いハケ調整、上腹部に列点文及び直線文を施文。 ○口縁部内面に横方向のハケ調整。 ○体部内面ナデ仕上げ。	色調 淡褐色 外面焼付着 胎土 良好 器高 良好	M 4 3 6
甕C1	E 3 5 0	口径 17.5 最大腹径 27.5 底径 5.6	○太く短い筒状の頸部に、受口状に立ち上る口縁部、肩部は内傾する面を成す。 ○腹部下方で最大径を有する	○口縁部外面ハケ調整後ナデ。 ○口頸部及び体部外面ハケ調整。肩部と底部の接合付近には、二次調整。頸部より体部上半に縞指直	色調 淡褐色 胎土 微砂 粒含有	M 4 3 2

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 <sub>cm</sub>	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
		器高 33.6	下ぶくれの体部で、底部は上げ底。	縄文6帯を廻らす。 ○内面ハケ調整後ナデ。	焼成 良好	
甕H1	E351	最大直径 22.1	○胴部下方で最大径を有する下ぶくれの体部。体部はなだらかにすばまり筒状の頸部に到る。	○口縁部外面ハケ調整後ナデ、纏描列点文、直線文(5条)等を廻らす。体部外面ハケ調整、胴部と底部の接合付近に横位の二次調整 ○内面ナデ及び指押さえ。下半にハケ調整痕。	色調 淡褐色 胎土 1~2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M432
甕A1	E352	口径 16.2 最大直径 17.0	○上腹部が膨らむ体部に口縁部は「く」字状に開く。	○口縁部外面横ナデ調整、端部にヘラ圧痕文を廻らす。 ○体部外面ハケ調整。 ○口縁部内面横方向、体部に斜方向のハケ調整、体下部ナデ。	色調 淡褐色 体部下半縁 附着 胎土 2mm大の砂粒含有 焼成 良好	M432
甕A1	E353	口径 15.4	○「く」字状に外反して開く口縁部。	○口縁部外面横ナデ調整、端部にヘラ圧痕文を廻らす。 ○体部外面ハケ調整。 ○内面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M432
高坏御部	E354		○開きの少ない短い胴部。	○胴部外面ハケ調整。 ○坏部内面ハケ調整。 ○胴部内面巻き上げ痕及びしぼり目残存、ナデにより成形。	色調 淡赤褐色 胎土 良好 焼成 良好	M432
甕I2	E355	口径 10.6 最大直径 22.8	○直口の口縁部、端部は平坦に収める。 ○胴長の体部。	○口縁部外面ハケ調整後上方にナデを施す。体部外面叩き後ハケ調整。 ○内面ハケ調整後ナデ。	色調 淡褐色 胎土 良好 焼成 良好	M433
甕G1	E356	口径 16.6 最大直径 29.2 底径 6.7 器高 40.0	○筒状の頸部より口縁部は外湾して開き、曲折して内湾気味に立ち上る。 ○体部は中位で最大直径を有すやや胴長を呈し、直線的にすばまり安定した平底の底部に到る。	○口縁部内外面共横ナデ調整、外面に4条の凹線文を廻らす。 ○口頸部外面縦方向のハケ調整。 頸部に纏描直線文(5条)2帯、列点文(6ヶ)1帯を廻らす。 ○体部外面縦方向のハケ調整を丁寧に施す。上半には纏描直線文(15条)6帯 ○口頸部内面ハケ調整後ナデ。 ○体部内面ハケ調整後ナデを行うと思われる。	色調 茶褐色 胎土 細砂多量含有 焼成 良好	M435
水差型土器B	E357	口径 9.5 最大直径 19.4 底径 10.8 器高 25.3 脚台高 5.4	○内湾して立ち上がる口縁部、端部は平坦に収める。 ○肩付近に横位の半環状把手を付け、把手側口縁部に扶きを入れる。 ○胴部下方が強く張る。体部脚台は「ハ」字状に開き下端を上方に拡張する。	○口縁部外面横ナデ調整、凹線文1条、羽状の纏描列点文、直線文等を廻らせる。体部外面ハケ調整後ナデ。纏描列点文、直線文、斜格文等を体部上半に施し、胴部の最も張った部分には、波状文、直線文を廻らせる。下半にはヘラミガキ、脚柱部にヘラ指沈線5条、脚部ハケ調整及びヘラミガキ、端部横ナデ調整。 ○口縁部内面横ナデ調整。体部内面ハケ調整後ナデ、脚部内面ナデ。	色調 淡褐色 胎土 細砂含有 焼成 良好	M435

(※図上復元)

器形	土器番号	法量 cm	形態の特徴	成形の特徴	備考	出土地点
甕A3	E358	口径 15.3 最大胴径 ※ 25.0 底径 29.0 器高 ※ 5.6	○口縁部は「く」字状に強く 外反して開き、端部を上方に 拡張し鋭く内傾する。 ○上腹部が膨らむ体部か。 ○底部は上げ底を呈す。	○端部外面横ナデ調整、2条の凹 線文を刻らす。体部外面粗いハケ 調整。肩部に叩きの痕跡。 ○口縁部内面横ナデ調整。 ○体部ハケ調整後下半ナデ。 ○底面ハケ調整。	色調 淡褐色 胎土 2mm 大の石粒 含有 焼成 良好	M435

昭和61年3月

服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ

——滋賀県守山市服部町所在——

編集・発行

滋賀県教育委員会

守山市教育委員会

朝滋賀県文化財保護協会

印刷

株式会社 中村太古舎

大津市京町3丁目4-32